

2023年 日本聖公会 宣教協議会 報告書 WEB版

いのち、尊厳限りないもの
～となりびととなるために～

2023年11月10日(金)～13日(月)

於 清泉寮(山梨県北杜市高根町清里)



2023年 日本聖公会 宣教協議会 報告書

いのち、尊厳限りないもの
～となりびととなるために～

2023年11月10日(金)～13日(月)

於 清泉寮(山梨県北杜市高根町清里)

[主題聖句]

私はぶどうの木、
あなたがたはその枝である。

人が私につながっており、
私もその人につながっていれば、
その人は豊かに実を結ぶ。

私を離れては、
あなたがたは何もできないからである。

ヨハネによる福音書15章5節
(聖書協会共同訳)



2023年日本聖公会宣教協議会のための祈り

信頼と和解、平和と正義の源である主よ、人間の愚かさと誤りにより、今なお戦争、弾圧、差別、分裂の絶えないわたしたちの世界を顧みてください。日本聖公会宣教協議会を祝福し、わたしたちがこれまでの歩みを振り返り、その実りを感謝することができますようにお導きください。そして、新たな歩みの出発点とすることができますように、わたしたちの足もとを照らし、知恵と力をお与えください。

あなたは、み子主イエス・キリストを通して、すべてのいのち、とくに小さくされている人々と共に生きることの大切さを示してくださいました。どうかかぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの「となりびと」となる道を歩むことができますように、わたしたちをお導きください。主イエス・キリストによってお願ひいたします。 アーメン

祈り（こどものいのり）

すべてのものの つくりぬしなるかみさま
あなたのめには、わたしたちはみな、おなじようにとうといものです
どうかわたしたちが、あなたのあわせてくださったひと すべてを
イエスさまがなさったように、たいせつにすることができますように
また、あなたが おつくりになった ものすべてを
かけがえのないものとして、だいじにしてゆくことができますように
そして、わたしたちを
ほんとうの平和がやってくるために、はたらくものとしてください
イエスさまのみなによって おいのりいたします アーメン



「2023年日本聖公会 宣教協議会からの呼びかけ」のお願い

日本聖公会首座主教　主教　ルカ　武藤謙一

2023年11月10日（金）～13日（月）、山梨県清里・清泉寮で開催された日本聖公会宣教協議会は、「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマに、各教区代表者、管区諸委員会代表者など信徒・教役者132名が参加して開催されました。今回の宣教協議会の主なプログラムはオンライン配信され、全国各地でオンラインで参加してくださった方も多くおられました。またウェブサイトでは今でも宣教協議会の内容を視聴することができます。オンラインでの参加やウェブサイトの活用は今までにない新しい取り組みでした。改めて、今回の宣教協議会にオンラインも含めて参加してくださった皆さん、実行委員会の皆さん、お祈りくださった多くの皆さんに感謝いたします。

最終日に出される予定の「清里からの呼びかけ」は、多くの意見が出されまとめることができず、ドラフトコミッティに委ね、実行委員会とともに再検討することになりました。その原案が参加者に報告されて2024年2月2日付けで「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」として各教区、教会に届けられました。2012年宣教協議会の「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」に比べるとA4版2頁の短い文章です。

その冒頭には「ここからまた歩きはじめよう～いのちに仕え、となりびととなるために～」と記され、1. 神のみ声に耳を傾けよう 2. 人々の声に耳を傾けよう 3. 世界の声に耳を傾けよう と三つの声に耳を傾けることを呼びかけています。そして、三つの項目別に、具体的な取り組みのヒントが掲げられています。

この呼びかけは、1995年、2012年に開催された日本聖公会宣教協議会で出された文書、提言を受け継ぐもので、これからの日本聖公会の宣教の指針となるものです。

各教区参加者の皆さんを中心となってこの「呼びかけ」について説明し、各教会において信徒・教役者が自分のこととして受け止めてくださるようお願いいたします。神のみ声を聴くために、人々の声を聴くために、また世界、自然の声を聴くために、それぞれの教区・教会でできることは何か、欠けているものは何か、必要なことは何かを、この「呼びかけ」をもとに考え、取り組んでまいりましょう。

1月31日の朝日新聞の「折々のことば」欄に、「声っていうのはね、耳にとどくじゃないんですよ。肌から心に滲み込むんです」というNHKの元アナウンサーの山根基世さんの言葉が紹介されていました。そして「人との語らいの中で大切なのは聴きあうことだと。主張をぶつけ合うだけだと、相手に触れることなく終わる。聴く側の「聴こう」という姿勢があつてはじめて、相手の言葉が零れ落ちてくる。言葉の肌理（きめ）がこちらの『肚（はら）の底』に沈む。」とも記されていました。

肌から心に滲み込むように聴く姿勢を大切にしたいものです。

聖職の減少、信徒の高齢化と信徒数の減少、財政の逼迫は、どの教区にも共通の課題であり、今後ますます厳しくなっていくことが予想されます。他教区との宣教協働、また教区再編を志向しつつ、日本社会のなかにあって、痛み、苦しむ人びとのとなりびととなり、いのちに仕える共同体となるために、耳を傾け、聴くことを一人ひとりが心掛けたいものです。何故ならわたしたち一人ひとりがこの世に働くキリストの宣教の器なのですから。

（発行日時点では前首座主教）



聴くこと→祈ること→そして、行動へ

2023年日本聖公会宣教協議会実行委員長 主教 アンデレ 磯晴久

2023年11月10～13日清里・清泉寮を会場に、日本聖公会宣教協議会が開催されました。神様と、皆様に心から感謝申し上げます。前回2012年と同じ「いのち、尊厳限りないもの」という大きなテーマのもと、そこに「一となりびととなるために」という副題をつけて、すべての教区から教区主教、代表信徒・教役者、また管区の諸委員会や関係団体代表者と実行委員等、総勢132名の参加者が集ってくださいました。

実行委員会では、宣教協議会は清里・清泉寮での開催期間だけではなく、準備に入りました3年前から、宣教協議会は始まっていると捉え、そして宣教協議会後も続くと考えて参りました。まず、皆様からアンケートを取り、またぶどうの枝分科会と称して、日本聖公会に関係するできるだけ多くの方々のお話を「聴く」ということ、「お互いに聴き合い、語り合う」ということを大切に進めて参りました。今後も宣教協議会は続いていきます。

〈まず、聴くことから〉

宣教協議会の前半は、しっかり耳を傾けるプログラムでした。1日目は各教区に実り持ち寄りブースを用意して頂き、各教区10年の歩みを語って頂き、私たちは耳を傾けました。続いてリモート配信や録画によって、3つの小さな教会に聴く（沖縄教区屋我地聖ルカ教会、九州教区対馬にある厳原聖ヨハネ教会、東北教区大館聖パウロ教会の皆さん）時間を持ちました。とてもいい時間でした。

たとえば、秋田の大館の教会、幼稚園があるのですが、幼稚園のこと、こどもたちのことを大切に祈っておられること、東京教区の聖マーガレット教会と繋がっておられることは大変心に残りました。大きな教会と小さな教会がよき交流をしておられる姿が印象的でした。

2日目には、「いのちの現場から聴く」というテーマの下、5人の方からお話を伺いました。「保育園 こどもたちとのかかわりを通して、神様が語っておられること」、「チャプレンと言う立場から臨床の現場で寄り添うこと（英国での第2次世界大戦中、日本の捕虜となったイギリス人元兵士の方々との和解の経験）」「ホームレス支援活動から 貧困問題」、「性の多様性」、「カルト問題 カルトは呪いをかける。教会は祝福する。キリスト教会

は健全な宗教とは何かをもっと明らかにしていく必要があること。」など貴重なお話を聴く機会となりました。

〈聴くことから祈りへ〉

さて「聴くこと」は、見つめること、深く知ること、心で感じること、考え自分なりの言葉にしていくこと、互いの思いを分かち合うこと（グループシェアリング・バイブルシェアリング）となり、そして、神様への祈りとなっていました。特に、青年たちによる「分かち合いの礼拝」は心に響く礼拝でした。今世界を覆っている暗闇を見つめ、私は心が震える経験をしました。そこから、テゼの贊美を歌いながら、祈りながら、み言葉に聴きながら、希望へと導かれました。

〈聴くことから祈りへ、そして奉仕・実践・行動へ

— 主イエスに従う道へ

宣教協議会は、主教たちからのメッセージ、宣教協働区アワーへと進み、まとめへと入っていました。宣教協議会の呼びかけ「（仮称）清里コール」を会議の間に出す予定でしたが、残念ながら叶いませんでした。皆様からの意見・提案が大変多く、多岐に及んでいたからです。（今、お手元に届いている「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」をご覧ください。）

最終日の意見交換でも様々な発言がありました。その中で、私が一番印象に残った発言は、歴史をしっかりと振り返ることと具体的な奉仕活動・行動や実践を求めるものでした。それは、今後の管区や教区、教会、そして私たちの課題になりますが、私は、宣教協議会を通して、特に、「聴くこと」が「神様への祈り」となり、そして「神様への祈り」が、私たちの「奉仕・行動・実践」につながっていくことの大切さを教えられました。そのことは、世界と人々のことをよく見つめ、知り、声なき声を聴かれ、慈しみの心をもって祈り、深く神様とつながる祈りの場から、実践・行動へ向かった主イエスに従うことでした。

私は、宣教協議会から数か月がたった今、「聴くこと」から「神様への祈り」そして、「主イエスと共に歩む私たちの奉仕・行動・実践」、この流れを大切に歩みたいと考えています。



主題聖句	002
2023年日本聖公会宣教協議会のための祈り、子どものいのり	003
報告書の発行に寄せて	004
日本聖公会 首座主教 ルカ 武藤謙一	
実行委員長 主教 アンデレ 磯晴久	

1. 2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ

1-1. 「呼びかけ」本文	010
1-2. 「呼びかけ」カード	012
1-3. 「呼びかけ」に関する小解説	013
1-4. 「呼びかけ」完成までの歩み	017

2. プログラム

2-1. タイムテーブル	024
2-2. 参加者名簿	026
2-3. 実り持ち寄りブース	030
2-4. 私たちのあゆみ～物語を聴く	038
2-5. テーマ・聖句・思いの共有	057
2-6. いのちの現場から聴く	061
2-7. 分科会	090
2-8. グループシェアリング（1）	095
2-9. バイブルシェアリング	114
2-10. 主教会からのメッセージ	116
2-11. 宣教協働区アワー	127
2-12. グループシェアリング（2）	135
2-13. 「宣教協議会からの呼びかけ」作成・意見交換	144
2-14. コミッティの記録	146

2023年 日本聖公会 宣教協議会 報告書

目次

3. 礼拝

3-1.	礼拝説教・メッセージ	150
	11/10 開会礼拝 主教 アンデレ 磯晴久	
	11/10 開会礼拝 主教 ルカ 武藤謙一	
	11/11 朝の祈り 主教 マリア・グレイス 笹森田鶴	
	11/12 主日聖餐式 主教 マリア・グレイス 笹森田鶴	
	11/13 閉会聖餐式 主教 ルカ 武藤謙一	
3-2.	様々な礼拝・祈り	160
3-3.	礼拝奉仕者一覧	161
3-4.	礼拝式文	162

4. 資料

4-1.	関連資料	190
4-2.	「2022年日本聖公会宣教協議会」開催に向けたアンケート	200
4-3.	広報記録	210
	ぶどうの枝だより（管区事務所だより・各教区教区報掲載記事）	
	SNS・オンライン配信	
4-4.	ごあいさつ（ハンドブックより転載）	234
	日本聖公会 首座主教 ルカ 武藤謙一	
	実行委員長 主教 アンデレ 磯晴久	
	副実行委員長 司祭 ステパノ 越山哲也	
	副実行委員長 司祭 サムエル 北澤洋	
4-5.	大切にしていただきたいこと（ハンドブックより転載）	238

5. 収支報告



1. 2023年日本聖公会 宣教協議会からの呼びかけ

- 1-1. 「呼びかけ」本文
- 1-2. 「呼びかけ」カード
- 1-3. 「呼びかけ」に関する小解説
- 1-4. 「呼びかけ」完成までの歩み



2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ

ここからまた歩きはじめよう
～いのちに仕え、となりびととなるために～

1. 神のみ声に耳を傾けよう
2. 人々の声に耳を傾けよう
3. 世界の声に耳を傾けよう

※それぞれの項目の例案は細目紹介をご覧ください

主題「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」

2023年11月10日（金）から13日（月）の日程で、山梨県清里・清泉寮に、すべての教区主教をはじめ各教区代表、管区諸委員会など信徒・教役者132名が集い、「2023年日本聖公会宣教協議会」が開催されました。今回の宣教協議会は「2012年日本聖公会宣教協議会」から十年後に＜宣教・牧会＞の実りを持ち寄るとしていた約束を受けて開かれました。

実り持ち寄りブースでは各教区・各委員会の豊かなはたらきの実りが示されました。そして、「私たちのあゆみ～物語を聞く」では少人数でありながらも積極的にはたらく三つの教会が紹介され、また、「いのちの現場から聞く」では当事者および当事者と常に「となりびと」の関係にある五人の語り手をお迎えして「となりびと」とは誰かということを深く学ぶ機会となりました（当日の詳細は宣教協議会ウェブサイトをご覧ください URL: <https://2023-missionconference-nskk.blogspot.com/>）。

実りを分かち合い、現場に生きる人々の声を聞く中、わたしたちはその豊かさに感謝するとともに、実現できなかったことや課題が多くあることもあらためて知ることとなりました。そのため、グループシェアリングにおいては、それまでに様々な耳を傾けた結果として、2012年の提言を参照しつつ、できなかったことと今後の展望は何かという主題とを分かち合うこととなりました。このことは、日本聖公会の歩みの継続という視点で避けて通ることのできないものでした。その分かち合いでは事実、多くの有意義な声が集まりました。

「実り」の中には決して良い実ばかりでなく、むしろ、失敗・挫折・苦悩の実が数多くありました。しかし、わたしたちはそれらをも「実り」としてあえて受け入れ、反省と検証を重ねて、真に多くの人々と「となりびと」であるべく歩みを進めなければならないという想いを新たにしました。その文脈をふまえ、今後の日本聖公会における喫緊の課題である宣教協働区について主教会メッセージと協働区アワーで論じられ、また、世界の聖公会で中心的な主題となっている「セーフチャーチ（安心安全な場である教会）」の理念も紹介されました。

2023年宣教協議会閉会に際し、協議会に参加した人々がそれぞれの共同体に戻る際に持ち帰る「清里からの呼びかけ」が発出され、長く継続的に検討されてゆくものとなるはずがありました。しかし、わずか四日間で数々の重要な課題が話し合われ、それぞれの大切にしている想いが熱く語られ、その結果、限られた時間で完成させることは困難であることが最後の全体会で明確になりました。そこで、異例の展開として、協議会中に「呼びかけ文」を完成することは断念し、ドラフトコミッティが持ち帰って協議会中に出された意見を改めて確認し、実行委員会とともに再検討することになりました。

そのような状況を経て作成されたこの「呼びかけ」は、ドラフトコミッティがその骨子を引き受けつつ、協議会に参加した全員がかかわったものです。日本聖公会がこれから目指すはたらき、教会共同体が向かい合うすべてに対して「となりびと」としてともに歩むものとなることへの指針として、この「呼びかけ」が多くの人の心に留められ続けることを願います。

2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ 細目紹介

1. 神のみ声に耳を傾けよう <祈り・み言葉・礼拝>

- ・イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに？
- ・進むべき道を問い合わせ続ける…聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう
- ・変化を恐れない…宣教協働区、新しい祈祷書、生き生きとした「今」の礼拝！

2. 人々の声に耳を傾けよう <教会・地域・となりびと>

- ・セーフチャーチにしよう…開かれた教会、すべての人が安心できる居場所に
- ・小さな声を大切にしよう…多彩性を輝かせ、ともに生きる
- ・地域の必要に応える…関連施設とも協働し、課題に取り組もう

3. 世界の声に耳を傾けよう <神が創られた自然・世界・社会>

- ・地球のいのちに仕える…教会ができるSDGsは？
- ・平和をつくりだそう…いのちを脅かすすべての暴力に「NO」！
- ・世界のうめきや叫びに向き合おう…世界の聖公会とつながりながら
アングリカンコミュニオン

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである」（ヨハネによる福音書15章5節）

2024年2月2日

2023年日本聖公会宣教協議会

※宣教協議会の報告書と分かち合われた多くの「声」は、日本聖公会宣教協議会

ウェブサイト・ブログで公開されています、併せてご覧ください。

URL: <https://2023-missionconference-nskk.blogspot.com/>



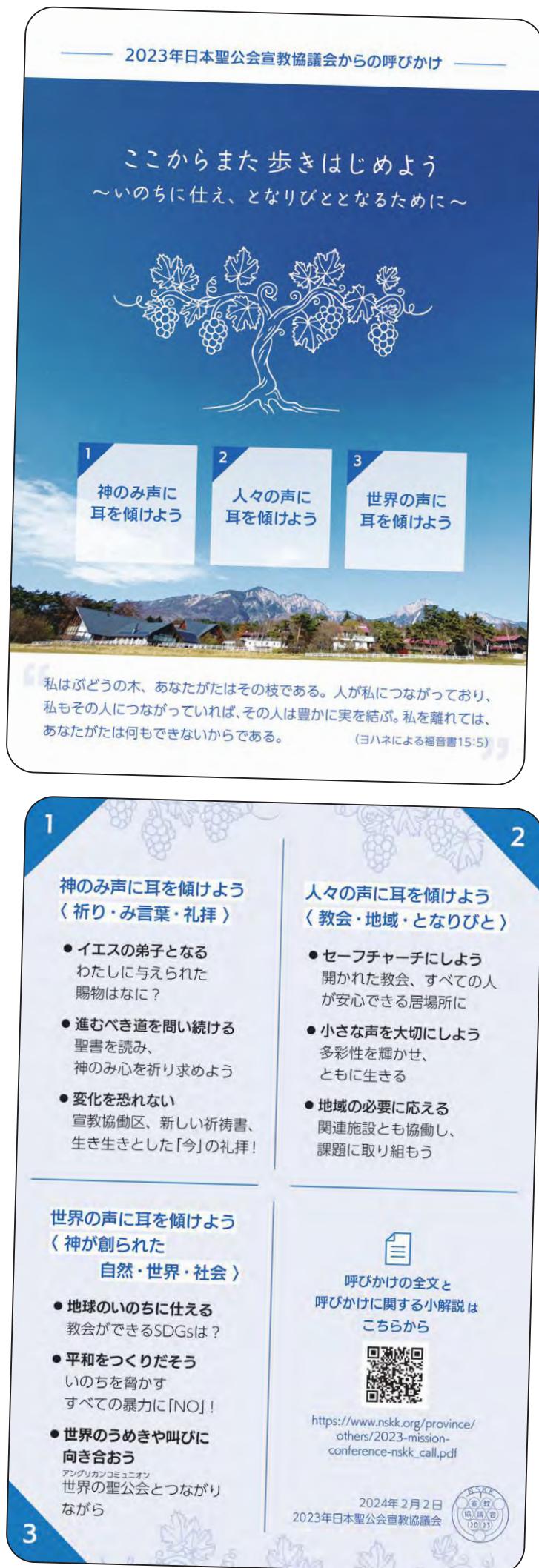
※協議会もこの呼びかけ文も「これで終わり」ではありません。わたしたちが日々の教会生活の中で、できることに取り組んでゆくかたちで清里の物語は続いてゆきます。その物語の続きを、どうかともに歩み、ひき続き様々な「声」をかわしてください。

「2023年日本聖公会 宣教協議会からの呼びかけ」 カード

「呼びかけ」を日々身近に感じられるように、3つの項目とそれに含まれる9つの提案をカードにまとめました。祈祷書に挟み込める大きさです。

2024年5月に完成し、全国の教会を通して信徒、教役者へ配布しました。

- 画像上：カード表面
- 画像下：カード裏面
- 100mm×148mm
- 15,000部作成



「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」に関する小解説

2024年3月31日 復活日
コールコミッティ一同

2024年2月1-2日、宣教協議会実行委員会とコールコミッティは共同で、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」について、各項目の説明会を開催しました。その際の質疑応答で、「その説明を文章化したものもあってはよいのではないか」というご意見がありました。これを受け、コールコミッティは「呼びかけ」の各項目について詳しく説明を記すことといたしました。もちろん、ここに記されているのは絶対の基準というものではありません。本解説は「呼びかけ」について考察する際の一つの材料となることを願って表されたものという位置づけになります。

ここからまた歩きはじめよう ～いのちに仕え、となりびととなるために～

「ここからまた歩きはじめよう」は、2012年宣教協議会以降、全体的に見れば明らかに教勢を落としている日本聖公会が11年ぶりの協議会を経て、再び歩み出すことが呼びかけられています。「いのちに仕え、となりびととなるために」の「いのちに仕え」は前協議会を踏襲したもので、この世界の一つ一つのいのちに向かい合い仕えることを志すものです。「となりびととなるために」は、「困っている人たちのとなりびとになってやろう」という高慢な意味ではなく、いのちに仕える中で与えられた出会いに自らもまた応答することを指すものです。

1. 神のみ声に耳を傾けよう <祈り・み言葉・礼拝>

神の宣教（ミッシオン・ディ）を重視する聖公会の立場において、神のみ声に耳を傾けることは原則と言つてよいでしょう。その際に重視されるのは「祈り」であり「み言葉」であり、それが集約する「礼拝」であると言えます。この項目には以下の三つの提案が示されています：

- ・イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに？
- ・進むべき道を問い合わせ続ける…聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう
- ・変化を恐れない…宣教協働区、新しい祈祷書、生き生きとした「今」の礼拝！

1.1. イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに？

イエスを救い主と信じて洗礼を受けた私たちは、一人一人、イエスの弟子として歩んでいます。世界の聖公会においても「弟子であること」（Discipleship）は重要な鍵語として認識されています。それぞれの「わたし」に与えられた賜物は様々であり、その賜物は「活かさなければいけないもの」というのではなく、既に神から、主イエス・キリストから、先行して与えられているものです。そのみ恵みを日常の中で、また、礼拝の中で感じられるようにすることは、より心豊かな生活につながります。なおこの賜物は、何かを完全に達成しなければ活かしたことにならない、という類のものではありません。たとえば、身動きの取れない状態にあっても、教会や地域の人たちを想って一

生懸命に祈ることなどもまた、賜物の証しであると言えます。

1.2. 進むべき道を問い合わせる … 聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう

キリストを信じるわたしたちにとって、進むべき道の指針となるのは当然ながら聖書です。その聖書を通して神のみ心を祈り求めようということは大切であります。聖書は日課として礼拝で読まれていますが、主日礼拝以外で聖書を読む機会がある聖公会信徒は多くない、とはよく言われるところです。礼拝で読まれているにしても、研究会に出席していたとしても、聖書全体どころかいくつかの文書だけでも通読したことがある、ということをあまり聞かれません。

聖書のみ言葉の一節一句からでも様々な学びが得られるのはたしかです。しかし、様々な物語や教訓、詩歌や祈祷を備えた各文書は、その前後関係も含めて通読することでさらにその豊かさを増します。創世記からヨハネの黙示録までの聖書全体を味わうことで、一人一人が様々な想いを得られることが期待されます。

1.3. 変化を恐れない … 宣教協働区、新しい祈祷書、生き生きとした「今」の礼拝！

変化を受け入れるのは難しく、苦しいこともあるかもしれません。ただ、世の中は移り変わりゆくものであり、現代では価値観の多種多様さもますます明らかになっています。日本聖公会の枠組みの中でも、宣教協働区という新たな動きがあり、わたしたちが用いる祈祷書にも改訂が予定されており、その文言や用いる言葉、日課などに変化が生じることは確実となっているところです。礼拝もコロナ禍によって必然的に変化せざるを得なかった部分もありますし、これから宣教のために変えていかなければならない部分もあるでしょう。故きを温ねて新しきを知り、礼拝の形を学び探究してゆくときを迎えています。

そもそも、恐れる・恐れないにかかわらず、変化は生じてしまうものです。重要なのは、生じてゆく変化を教会共同体の一人一人が分かち合い支え合い、安心してその変化を迎える、また、変化してゆく中でも守るべきことは守ってゆく、ということでありましょう。聖公会神学の核心の一つである「中道（ヴィア・メディア）」の伝統も、常に変化してゆく時代状況や価値観にあって、主に信頼して自分たちが歩む道筋を探求するためのものであり続けてきました。

2. 人々の声に耳を傾けよう <教会・地域・となりびと>

「神を愛し、隣人を愛する」（マルコ12:28-34）ことこそ最大の戒めであるとイエスに教えられているわたしたちの次なる焦点は「人々」に向けられます。そのため、呼びかけの第二の項目には人々の声に耳を傾けるということが挙げられています。この世界で、聖霊のまじわりにあって形成される教会共同体、その教会共同体が仕える地域、そしてとなりびとが、この項目で考えられることとなります。この項目では以下の三つが示されています：

- ・セーフチャーチにしよう … 開かれた教会、すべての人が安心できる居場所に
- ・小さな声を大切にしよう … 多彩性を輝かせ、ともに生きる
- ・地域の必要に応える … 関連施設とも協働し、課題に取り組もう

2.1. セーフチャーチにしよう … 開かれた教会、すべての人が安心できる居場所に

セーフチャーチの概念は、日本聖公会を含むすべての聖公会における重要な課題と考えられ、話し合われています。日本以上にきわめて明確で具体的な人権侵害が蔓延している国々もあり、この言葉の意味合いは各国において、それが生じうるものであります。ただ、セーフチャーチの意味が、開かれた教会、すべての人が安心できる安全な居場所であると定義されるとき、日本においてもその精神は重要なものと理解されることでしょう。英語やそれを音写したカタカナ語表記は、日々政治や

社会に関する報道で濫用されていることもあるって辞易する、というかたもおられるかもしれません。しかしながら、世界の聖公会で大切に分かち合われており、何より、色々な意味で「セーフ」である教会は、元々教会が目指していることであるため、この用語は日本聖公会でもそのまま用いられることになっています。

本当にあらゆる人にとって「セーフ」であるのか、本当に困っている人がたどり着ける教会であるのか、この問い合わせについて皆で分かち合いながら考え、その実現を祈ることは日本聖公会においても間違いなく重要と言えます。目下、ガイドラインも策定中です。

2.2. 小さな声を大切にしよう … 多彩性を輝かせ、ともに生きる

セーフチャーチの考え方と同様に、小さな声に耳を傾けること、多彩な個性の色を持った人たちがありのままに輝ける場になるよう努めることは、教会が本来的に有するはたらきの特性と言えます。

そもそもわたしたち一人一人、まったく同じということはありません。どこかの誰かが多彩なのではなく、わたしたち皆が多彩なのです。その「多彩性 (Colorful Diversity)」を認め合い、ともに歩み、共同体に属する者たちが輝ける場を目指すことは今後ますます求められましょう。

2.3. 地域の必要に応える … 関連施設とも協働し、課題に取り組もう

教会は、建物そのものがただちに主体になるのではなく、神、イエス・キリスト、聖霊から呼ばれた人々の織り成す共同体がまず重要な主体となります。

その共同体には、この世界において必ず、集う地域というものがあります。その地域には、何らかの固有の課題があることでしょう。それは「教会外の浮世事」ではありません。教会共同体もまぎれもなくその地域に在るのであり、教会共同体にとって自分事であるはずです。仮に教会ひとつではその課題に取り組むことが困難であっても、聖公会内外の様々な関連施設があります。力を合わせることで、人々が、また、自分が、豊かなみ恵みの中にあるのをあらためて確認できることが期待されます。

3. 世界の声に耳を傾けよう <神が創られた自然・世界・社会>

- ・地球のいのちに仕える … 教会ができるSDGsは？
- ・平和をつくりだそう … いのちを脅かすすべての暴力に「NO」！
- ・世界のうめきや叫びに向き合おう … 世界の聖公会とつながりながら

3.1. 地球のいのちに仕える … 教会ができるSDGsは？

「地球のいのち」にはむろん人間も含めた被造物全体、この自然すべてがかかわります。SDGsの理念は国連を通して発出されましたが、国内外の多くの場で単なるビジネス化・ラベル化によるうわべだけの運動になっている面が否めません。

SDGsの中で提唱されている事柄に本当に真剣に取り組んでいる人々は——どの宗教や倫理体系であれ——、「自分ではない圧倒的な存在のもとにある自分」を認識しているからこそ、それを真に意味ある行動にできていると思われます。

聖書の宗教はこの点で、単なるビジネスや単なるラベルでない理念を本当に追い求める最有力な共同体の一つをつくりだす、そのような可能性を有していると言えます。SDGsの真髄を追いかける姿勢は、ランベス会議でも話し合われたことありました。

3.2. 平和をつくりだそう … いのちを脅かすすべての暴力に「NO」！

世界中の戦争・紛争を見れば、この呼びかけの必然性は明らかであり、なかなか実現できないで

いる「平和」を訴えることは、力を合わせて唱え続けられるほかありません。また、様々な現場を知る者たちが発信して情報や手立てを分かち合い、いのちを脅かす暴力のすべてに対して否を突き続ける、それらをひたすら積み重ね、平和の実現に一歩でも迫るための道が示されることを祈りましょう。

3.3. 世界のうめきや叫びに向き合おう … アングリカンコミュニケーション 世界の聖公会とつながりながら

宣教協議会では今年40周年を迎える大韓聖公会との関係性を示すブースも見られましたし、実際、これまでにもたいへん密接な関係を築き上げてきました。また、フィリピン聖公会とのかかわりを見つめ直し、そのまじわりを深めるべきであるという提案も寄せられたご意見の中にありました。1995年および2012年の宣教協議会においても挙げられたこれらの主題が継承され、しっかりと理解される営みが求められます。それを通して近隣諸国との眞の友人関係もまた、可能性が開かれるこことになりましょう。

また、アングリカンコミュニケーションを見渡すと、英国、米国、カナダ、エルサレム／中東、オーストラリア、オセアニア、東南アジア等々、様々なつながりが日本聖公会には元々あります。そうした様々な聖公会の仲間たちと、様々な事柄を分かち合うことで、新たな発見の楽しみ、新たなまじわりの楽しみ、新たな体験が期待されます。

他方で、日本聖公会にも他の聖公会にも、様々なうめきや叫びとなる苦境も存在します。それらも分かち合えるとなりびとであるのは望ましいことです。月並みな言い方でいえば、「喜びは倍に、苦しみは半減に」の関係を、海を隔てても、聖なる公会のまじわりによって実現することを目指しましょう。

「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」は宣教協議会の後、比較的短期間で発出に至りました。その軸となったのは、宣教協議会参加者各位の声、2012年宣教協議会の提言、また、宣教協議会実行委員長磯晴久主教の開会演説で語られた「神と人」「人と人」「人と被造物世界」。それは聖公会が大切にしている神学の一つである創造論にかかわるものでした。また、コミッティの各人のはたらきの場でも常に意識されてきたことでもあります。そのため——もちろん、もっと長い議論の時間があることが望ましかったのは言うまでもありませんが——、必要な主題が盛り込まれることは適ったと思われます。

表現については抽象的な文言が並んでいるように受け止められるかもしれません。それは、日本聖公会には様々な教会、学校、施設があり「あまりに具体的にすれば、どこか特定の場においては有効であっても、他の場においてはあまり関連しない」ということがありうる、換言すれば、「呼びかけ」として広く用いることができないという可能性があったためあります。そこでこの「呼びかけ」は、わたしたち個々人の日々のはたらきや生活において必要な事柄を考える際のきっかけとして用いられてゆくことを目指すものとなりました。各人がこの呼びかけを自分事として捉え、主から先行して与えられている恵みやまじわりを通して、自分もとなりびともともに安心してみ恵みに感謝し、いのちを大切にして歩む。「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が、そのための指針の一つになれば幸いです。

「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」完成までの歩み

2012年宣教協議会から「呼びかけ」完成までの過程と、プログラムの概要をまとめました。本協議会では「協議会当日に至るプロセス全体が宣教協議会であること」を大切にし、アンケートの実施や様々な方、会議体との対話を続けてきました。

2012年

9月

▪ 2012年日本聖公会宣教協議会 開催

2012年9月14日～17日、「いのち、尊厳限らないもの～宣教する共同体のありようを求めて～」というテーマのもと、静岡県浜名湖畔の研修施設「カリック」に140余名が集った。

2011年に東日本大震災と福島第一原子力発電所事故が発生したことを受け、それまでに計画していたプログラムがすべて見直され、「私たちの教会の在り方」を問うプログラムが作成された。

特別講演では、カトリック正義と平和協議会発行のリーフレット『原子力発電は“温暖化”防止の切り札ではない！ 地球上の生命環境にとって最悪の選択…』の作成チームリーダーの1人である清水靖子シスターをお招きし、「主イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」をテーマに、原子力発電と放射能の危険性から「宣教の原点とは何か?」「本物の生き方とは?」という問い合わせをして、私たちをキリスト者の原点へと導いてくれるお話を伺った。

また、東日本大震災の被災者支援活動として立ち上げられた「いっしょに歩こう！プロジェクト」から、長谷川清純司祭（当時）と越山健蔵司祭に登壇いただき、被災地の現状報告と放射能汚染の危険性、支援活動を通して出会った主の福音、それらが私たちの宣教とどのような結びつきにあるかをご紹介いただいた。

基調講演では、西原廉太司祭（当時）より日本聖公会が抱える様々な宣教課題に対して「5つの宣教指針」をどのように表現するか、世界の聖公会の活動も紹介されながらお話ししてくださいと共に、続くグループディスカッションへの議論のテーマを投げかけていただいた。

これらの講演とバイブル・シェアリング、グループディスカッション、そして礼拝を通じて、最終日には「日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言」が出された。

2020年

10月

▪ 新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の流行

2019年末頃より感染例が確認された新型コロナウイルス感染症は、瞬く間に世界中で流行し、日本でも2020年1月に国内での初感染者が確認されると、急速にまん延した。この影響により、多くの教会で公祷や愛餐会を休止、一種陪餐への変更などを余儀なくされた。

12月

▪ 日本聖公会第65（定期）総会にて2022年日本聖公会宣教協議会開催決定

新型コロナウイルスの影響により延期されていた2020年日本聖公会第65（定期）総会は、10月27～29日、史上初のオンライン開催となり、議員・代議員はそれぞれの所属教区を会場に出席した。この総会において2022年11月に山梨県・清里を会場に宣教協議会を開催すること、そのため実行委員会を組織することが決議された。

▪ 宣教協議会実行委員会発足

総会での決議を受け、「2022年宣教協議会実行委員会」が組織された。2020年12月8日に第1回実行委員会がオンラインで開催され、現状では一堂に会して対面の会議を行う見通しが立たないものの、2022年の開催を目指して準備を進めていくことが共有された。

ほとんどの委員が2012年宣教協議会に未参加であったため、1995年宣教協議会、2012年宣教協議会報告書を読み込むとともに、「今の時代にどのような宣教協議会が望まれているのか」を協議していくこととした。

2021年

4月～6月

■ アンケート実施

前回宣教協議会から10年の歩みを振り返るため、教会、施設・団体、教区、教役者、管区委員会それぞれを対象にアンケートを実施。2012年宣教協議会と提言の認知度を計るとともに、提言の「5つの宣教指針」に基づき、どのような取り組みが行われてきたか、また課題が残ったかを伺った。

アンケートの回答から、教会・施設・団体の半数以上が2012年宣教協議会について認知していない（よく知らない・まったく知らない）ことがわかり、提言の実践や振り返り以前の状態であることが判明した。当日参加される一部の方だけでなく、聖公会に連なる1人でも多くの方とつながる宣教協議会にすることが、まず初めの課題であることを認識した。

一方で、どの対象者からも「あまり提言を意識してこなかった」との回答がある中で、寄せられたそれぞれの取り組みの内容には、提言に通じるものがあった。意識的であるかどうかは別として、「<宣教・牧会>の十年提言」が実践され、皆で歩んできたことも、回答結果から見出すことができた。

9月～10月

■ 各教区宣教担当者の集い 開催

各教区の宣教担当者を対象に、2021年9月9～10日、10月7～8日の4日間「各教区宣教担当者の集い」を開催した。各教区からのアンケート回答を共有した上で、各教区の10年の歩みの中でいただいた恵みと課題を、より詳しく分かち合った。また、コロナ禍における宣教活動の工夫や課題も共有し、宣教協議会をどのような形で開催するのが望ましいのか、意見交換も行った。

12月

■ 2022年宣教協議会延期の決定

宣教協議会の準備を進める中で、新型コロナウイルスの影響が依然収まらず、実行委員会が組織されてから1年間一度も対面会議を持つことができていない現状、それによる準備の遅れや先の見通しが立たないことなどから、実行委員会は宣教協議会の1年延期を提案した。主教会と常議員会の承認を受け、2021年12月15日付で各教会へ延期をお知らせした。

同時に、延期した2023年11月宣教協議会までの、歩みのすべてを「プレ宣教協議会」と位置付け、様々な会議体と対話するための分科会や拡大実行委員会を行っていくことを、実行委員会で決定した。

併せて、アンケート結果から課題となっていた「1人でも多くの方とつながる宣教協議会」を目指すため、各教区教区報と『管区事務所だより』の紙面をお借りし、報告「ぶどうの枝だより」を発行、ブログ・SNSも活用し、広報活動を行うことも確認した。

2022年

2月

■ 第1回ぶどうの枝分科会

2022年2月25日、3月4日の2日間に渡り、管区諸委員会の代表者にご参加いただき、アンケート回答の読み込みと課題の掲示を目的に「第1回ぶどうの枝分科会」をオンラインで開催した。

それぞれの委員会のミッションと、今抱えている課題を伺った後、グループシェアリングを通してどのような宣教協議会を目指すかを話し合った。それぞれの働きは異なるものの、共通して「いのち」「つながる・つなげる」などの宣教協議会へ向けたキーワードが浮かび上がってきた。

5月

■ 第2回ぶどうの枝分科会

2022年5月9日、15日に青年委員会と各教区青年担当者を対象に、「第2回ぶどうの枝分科会」をオンラインにて開催した。事前に行っていたアンケートの回答において、実行委員会はすでに多くの気づきを与えられていた。青年と近い距離で関わる方々から、より詳しい話や、宣教協議会への要望を伺った。

青年は教会の中で「未来の担い手」「若い働き手」と捉えられてしまうことが多いが、すでに共同体の一員としてともに歩んでいることを認識することが必要である、と確認した。

6月

▪ 第3回ぶどうの枝分科会

「原発のない世界を求める週間」中の2022年6月9日に、正義と平和委員会・原発問題プロジェクトの委員とともに「第3回ぶどうの枝分科会」をオンラインで開催した。

同週間に開催されたオンラインフォーラム「原発はやめようよ」の講演にも参加させていただき、2012年宣教協議会でも大きな議題となった原子力発電と放射能の問題、そこから「いのちの大切さ」や「いのちを守る権利」についても問題提起をいただいた。

▪ 2023年日本聖公会宣教協議会テーマ、主題聖句決定

実行委員会が組織されてから、メンバーは継続的にテーマ・主題聖句に関する協議を行ってきた。

最初に行ったアンケートの結果からキーワードを抽出し、「あなたのとなりびとは誰ですか?」というテーマが候補として挙がっていたが、その後の宣教担当者会や分科会を経る中で繰り返し意見交換をしていく中で、それが抱える課題、使命の中には、「いのち」という共通のキーワードがあることを見出した。

その結果、2012年宣教協議会のテーマ「いのち、尊厳限らないもの」が今回も通じるテーマであると確認し、改めて同じテーマを据え、イエス様が私たちの「となりびと」になってくれたからこそ、私たちもイエス様の愛に立ち返るため誰かのとなりびとになる、誰かの苦悩を他人事ではなく自分事として捉えていく、そしてその「誰か」は私たちが決めるものではなく神様がお与えくださる、などの思いから、「となりびととなるために」という副題をつけた。

平行して、主題聖句についても様々な方向から検討していたが、すべてのいのちはつながっていること、私と誰か（となりびと）は、誰もがイエス様に連なるぶどうの枝であることから、「ヨハネによる福音書」第15章5節「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」とした。

あわせて「宣教協議会のための祈り」と「こどものいのり」を整え、宣教協議会当日までの歩みを、祈りのうちに皆でお支えいただきたいと、呼びかけることを決めた。

8月

▪ ぶどうの枝協議会 開催

2022年8月22～23日、インマヌエル新生教会（東京）を会場に「ぶどうの枝協議会」を開催した。各教区宣教担当者、諸委員会代表者等にご参加いただいた。宣教協議会の歩みの中で行ってきた分科会、担当者会の中でも、初めての対面での会議となった。

同月に開催されたランベス会議の報告と、そこで提示された「ランベス・コール」が聖公会のこれから宣教指針となることなどを、会議に参加された西原廉太主教からうかがった。

また、原発問題プロジェクトリーダーの長谷川清純司祭（当時）からは、東日本大震災以降の歩みと、2018年に開催された「原発のない世界を求める国際協議会」の紹介、その後始まった「原発のない世界を求める週間」の報告と、現在直面している様々な課題についてうかがった。

その後宣教協議会実行委員会からの報告を行った。続けて、教区の再編が求められる中で、どの教区も直面している「教会合併」というテーマに取り組んだ事例として、（今回会場となった）インマヌエル新生教会の誕生に至る話をうかがった。3つの教会が合併するにあたり、どのような苦労や恵みがあったのか、それぞれの教会の信徒であった3名の方と、現牧師の卓志雄司祭からお話をいただいた。

発題ごとにグループシェアリングの時間を持ち、翌年の宣教協議会へ向けて意識すべきこと、取り上げていきたいこと、各委員会や教区で始められることなど、実りの多い話し合いが行われた。

2023年

3月

▪ 第4回ぶどうの枝分科会

礼拝委員会、祈祷書改正委員会の皆さんとともに2023年3月16日に「第4回ぶどうの枝分科会」をオンラインで開催した。

作業が進められている祈祷書改正について、掲げられたミッション・ステートメントのもと、どのような点に配慮されているのか、改正のプロセスと課題を伺った。現行祈祷書が発行された1992年から約30年が経っている現在、大きく変化している世の中にあわせた祈祷書の必要性についてうかがった。言葉遣いを時代に沿って変えていかなければならない一方で、根本的に変わらないキリストの福音をより豊かに表現していくため、苦労されているお話をうかがった。

4月

▪ 協議会参加者オリエンテーション～清里への道

宣教協議会当日の参加予定者が2つのグループに分かれ、4月23日と27日にオリエンテーションを開催。これまで話されてきたテーマや主題聖句、当日のプログラムについて共有。当日までどのような気持ちで歩んでいただきたいかお伝えするとともに、当日設けるルール「大切にしていただきたいこと～みんなが安心して気持ちよく過ごすため～」を紹介した。

5月

▪ 第5回ぶどうの枝分科会

2023年5月1日には女性に関する課題の担当者（女性デスク）と正義と平和委員会・ジェンダープロジェクトにご参加いただき、「第5回ぶどうの枝分科会」を開催した。前回協議会の会期中に起きた差別の事例の再確認とともに、「すべての人が安心して過ごすため」にはどういった工夫が必要か、これまでの取り組みとあわせて紹介いただいた。

▪ 第6回ぶどうの枝分科会

前回宣教協議会以来の10年間で大きく変化したことのひとつとして、「宣教協働区、伝道教区制の設置」が提案されたことが挙げられる。協議会のプログラムを相談する中で、参加者が宣教協働区ごとに顔を合わせ、相互に思いを聞き合う時間を設定する案が出ていた。そこで、2023年5月15日に「第6回ぶどうの枝分科会」を開催した。日本聖公会の全主教にオンラインでお集まりいただき、各宣教協働区で持たれている話し合いの状況や、今後の動きについてうかがった。

11月

▪ 2023年日本聖公会宣教協議会 開催

2023年11月10日～13日の4日間、山梨県清里・清泉寮を会場に「2023年日本聖公会宣教協議会」を開催した。

❖ プログラムの概要

会場内には「実り持ち寄りブース」が設置された。2012年宣教協議会終了時に約束した「10年の実りを持ち寄る」ことを果たすべく、各教区と、希望のあった管区委員会がそれぞれにブースを設け、10年の歩みの中でいただいた恵みや検討してきた課題、成果物などを展示し紹介した。またミニバザーも併せて行い、実りの共有も行った。長引くコロナ禍でなかなか一堂に会す機会がなかったため、参加者は久しぶりの再会を果たすと共に、新たな出会いの恵みと喜びも分かち合うことができた。

初日のプログラム「私たちのあゆみ～物語を聴く」では、沖縄教区・屋我地聖ルカ教会、九州教区・厳原聖ヨハネ教会、東北教区・大館聖パウロ教会からお話をうかがった。

どの教会も大勢の信徒を抱える大規模な教会ではないが、それぞれが祈り、支え合って教会生活を送られている様子が紹介された。信徒の減少や高齢化、財政の逼迫など、どの教会でも悩みの多い中にあっても、それぞれにできることを、喜びを持って実践されている教会からのお話は、希望に満ちたものであった。

2日目の朝の礼拝では、笹森田鶴担当主教より、祈祷書改正委員会の働きと現在の状況をご報告いただくとともに、改訂中の祈祷書案から、詩編を先行して試用した。

続けて「いのちの現場から聴く」プログラムでは、それぞれがいのちに関わる大切な働きをされている5人の語り手から、「こども・キリスト教保育」「性の多様性」「カルト・人権」「傾聴（お話を聴く）」ということ、スピリチュアルケア」「貧困」の5つのテーマでお話をうかがった。それぞれのお働きは違うものの、その働きの中には共通に大切にする「いのち」があること、またキリスト者としての思いがあることをうかがった。続けて参加者は希望するテーマに分かれ、語り手と共に分科会を行った。

夜にはバイブル・シェアリングを実施。2つの聖書箇所をグループごとに割り振り、夕食後に聖書に思いを傾け、またそれぞれが感じた思いに耳を傾ける時間となった。

翌日の「主教会からのメッセージ」では、10名の教区主教全員に登壇いただき、「宣教協働区・伝道教区制」が決議されるに至った経緯を伺った後、「この世界の中でとなりびととなるために大切にしたいこと」、「この世界における宣教、牧会で大切にしたいこと」、「宣教協働、教区再編において大切にしたいこと」の3つのテーマでお話しいただいた。各教区主教から、その後のグループシェアリングにつながるだけでなく、今後の信仰生活を送る上で希望となるような、熱い思いを、直接伺うことができた。

続く「宣教協働区アワー」では、すでに始められている宣教協働の歩みを、各宣教協働委員より伺い、実際に宣教協働区ごとに分かれ、昼食をとりながら親睦を深めた。過密なスケジュールのため、参加者はなかなか清里の自然を感じる時間を取りができなかったが、この時間には、外に足を運ぶ方やソフトクリームを手にする方が多く見られ、憩いのひとときとなった。

❖ 多様な礼拝

宣教協議会会期中には、主日を含む2回の聖餐式をはじめ、多様な礼拝がささげられた（資料編参照）。その一部を紹介すると、前述の通り2日目の「朝の祈り」では、礼拝の中で改正祈祷書案に収録される予定の「詩編」を試用した。同日夜の「分かち合いの礼拝」と題された礼拝は、信徒の主導によりささげられた。また3日目の「夕の祈り」は、セーフチャーチ・ガイドラインワーキンググループの発案によるものであり、暗闇の中で「創世記」の物語の朗読とともに火を灯し、「反創世記」の朗読とともに消していく黙想的な礼拝であった。すべての礼拝において奏楽にも工夫がなされ、オルガンだけでなくリコーダーやギターを用いるなど、豊かな時間となった。

❖ オンライン配信の実施

事前のアンケートでは、宣教協議会について「実際に参加した人としていない人との間に熱量の違いがある」や「『参加した人だけの宣教協議会』で終わっているのではないか」などの指摘があった。このことの反省から、会期中のプログラムや礼拝は、一部を除きリアルタイムでオンライン配信した。

これまでの宣教協議会は予算や会場、また日程的な都合もあり、限られた人数しか参加することができなかった。そのため、どうしても参加者とそれ以外の方々とで、情報量に開きができてしまっていた。

本協議会では、配信を觀ることによって、多くの方が、実際に会場にいなくとも同じ話を聴き、会場の熱気を少しでも感じることができたのではないか（協議会後の2024年5月の時点で、再生回数は延べ2,881回に達している）。各教区や教会にて振り返りや分かち合いを行う際にも、保存された配信映像を役立てていただけたら幸いである。

❖ グループシェアリング、協議会終了と「コールコミッティ」による協議の継続

会期中に参加者は、2回のグループシェアリングを行った。プログラムの中で感じたこと、2012年の宣教協議会とおよび提言への応答や、神様からの招きについて、わたしたちはこれから「となりびと」としてどう歩むか、など、限られた時間の中でグループごとに様々な思いや意見が交わされた。そして、参加者の中から組織された「ドラフトコミッティ」が話し合われた内容や思いを集約し、最終日に「清里コール」を作成、宣教協議会からの呼びかけが全国に向けて発信されることが予定されていた。

しかし、3日間の参加者全員の思いを、限られた時間の中でまとめることは困難を極めた。最終日に行われた全体会において、全会一致のもと呼びかけを出すには至らなかった。そのため、ドラフトコミッティは引き続き「コールコミッティ」として、呼びかけの作成を託され、全体会で交わされた様々な意見も含めて、改めて協議・検討が続けることとなった。

協議会後

2024年

2月

▪ コールコミッティが「呼びかけ」の起草を進めた

詳細はP146「コミッティの記録」参照。

▪ 「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」完成

宣教協議会直後から幾度も重ねられてきたコールコミッティでの協議により、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ（案）」がまとめられた。

そして2024年2月1日、2日の2日間、実行委員会及びコールコミッティは、宣教協議会の全参加者を対象とした「宣教協議会からの呼びかけ報告会」をオンライン開催した。この報告会にて参加者の同意をいただき、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が完成した。突然の依頼にもかかわらず、務めをお引き受けくださり、この「呼びかけ」完成のために尽力された、コールコミッティの皆様に、心より感謝申し上げたい。

本「呼びかけ」は、2012年の宣教協議会以来続けられた、10年以上に及ぶ祈りと協議、「ぶどうの枝分科会」や「ぶどうの枝協議会」、そして2023年日本聖公会宣教協議会、コールコミッティの起草と協議、完成に至るまでの、プロセス全体の実りであるとわたしたちは考える。「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が、日本聖公会のこれから歩みの一つの指針として、また教区・教会・諸施設・諸委員会の皆さんと、となりびとと出会い、互いの声を聴き、応答し行動していくためのツールとして、様々な機会で用いられていくことを願ってやまない。

（文責：2023年日本聖公会宣教協議会実行委員会 報告書作成チーム）

2. プログラム

- 2-1. タイムテーブル
- 2-2. 参加者名簿
- 2-3. 実り持ち寄りブース
- 2-4. 私たちのあゆみ～物語を聞く
- 2-5. テーマ・聖句・思いの共有
- 2-6. いのちの現場から聞く
- 2-7. 分科会
- 2-8. グループシェアリング（1）
- 2-9. バイブルシェアリング
- 2-10. 主教会からのメッセージ
- 2-11. 宣教協働区アワー
- 2-12. グループシェアリング（2）
- 2-13. 「宣教協議会からの呼びかけ」
作成・意見交換
- 2-14. コミッティの記録



タイムテーブル

11月10日 (金)			11月11日 (土)		
13:00	受付・ブース準備		7:30	朝食	新館ホール・ レストラン
15:00	実り持ち寄りブースの紹介	新館ホール	9:00	朝の礼拝	新館ホール
17:00	オリエンテーション	新館ホール	9:45	2023年宣教協議会について	新館ホール
17:30	休憩		10:10	いのちの現場から聴く ①安達美樹 ②堀江有里 ③竹迫之 ④半田ウィリアムズ郁子 ⑤柴本孝夫	新館ホール
18:00	夕食	新館ホール	12:50	昼の祈り	15分程度
19:00	私たちのあゆみ～物語を聴く ①沖縄・屋我地聖ルカ教会 ②九州・厳原聖ヨハネ教会 ③東北・大館聖パウロ教会	新館ホール	13:10	昼食	※各自好きな場所で
21:00	開会礼拝	新館ホール	14:00	分科会	・新館ホール ・本館ホール ・アンデレ ホール ・黙想館 ・ハンター ホール
21:45	フリータイム		16:00	休憩	
			16:30	グループシェアリング	
			18:30	夕食	新館ホール
			20:00	バイブルシェアリング	・新館ホール ・黙想館
			21:00	分かち合いの礼拝	新館ホール
			21:30	写真撮影	
			21:40	フリータイム	

11月12日 (日)		
7:30	朝食	新館ホール・ レストラン
9:00	聖餐式 司式：主教 入江修 説教：主教 笹森田鶴	新館ホール
10:30	主教会からのメッセージ	新館ホール
12:00	宣教協働区アワー（昼食） 新館ホール…東日本 本館ホール…中日本 アンデレホール…西日本	
14:15	グループシェアリング	
16:00	休憩	
16:30	グループシェアリングの分か ち合い	新館ホール
18:30	夕の祈り	新館ホール
19:30	夕食	新館ホール
21:00	フリータイム	新館ホール

11月13日 (月)		
7:30	朝食	新館ホール・ レストラン
9:00	宣教協議会からの呼びかけ 意見交換	新館ホール
11:40	閉会聖餐式 司式：主教 磯晴久 説教：主教 武藤謙一	新館ホール
13:00	解散	

今回の協議会では、プログラムや礼拝をリアル
タイムでオンライン配信しました。その映像を
YouTubeで公開しています。



1日目



2日目



3日目



4日目

参加者名簿

〈WEB版のため不掲載〉

実り持ち寄りブース

2012年の宣教協議会で「今後の10年の間どのように<宣教・牧会>に取り組むことができたのか、10年後の協議会で分かち合う」ことが提案されていたことを受け、その<宣教・牧会>への取り組みを目に見えるかたちで分かち合うことを目的に「実り持ち寄りブース」を準備していただきました。

ブースは11教区に加え管区の9つの委員会・プロジェクト、4つの関連団体からも出店していただき、多種多様な飾り付け・展示品が並びました。ブースは初日から3日目最後まで設置され、お披露目プログラム中はもちろん、プログラムの合間や夜の時間も多く人の目に触れ、分かち合われていました。

また展示の他「ミニバザー」も並行して行われ、それぞれの実りの“お裾分け”もなされました。



新館ホール

① 北海道教区

京都教区 ⑦

② 東北教区

大阪教区 ⑧

③ 北関東教区

神戸教区 ⑨

④ 東京教区

九州教区 ⑩

⑤ 横浜教区

沖縄教区 ⑪

⑥ 中部教区

日本聖公会婦人会 ⑯

⑯ 聖公会生野センター
日韓協働委員会

BSA ⑯

⑯

⑯

⑯

⑯

⑯

⑯

⑯

原
發
問
題
PJ

祈
禱
委
員
會

神
學
教
理
委
員
會

ジ
エ
ン
ダ
ー
PJ

青
年
委
員
會

G
F
S

沖
縄
PJ

各ブースと展示品

1. 北海道教区

展示物

[記念誌]

- ・札幌キリスト教会創立130年記念誌
- ・函館聖ヨハネ教会沿革史
- ・北の忠別から 旭川聖公会宣教120年史（旭川聖マルコ教会）
- ・聖マーガレット教会創立50周年記念誌後10年間の記録
- ・帯広聖公会創立120年記念誌
- ・釧路聖パウロ教会宣教130周年、厚岸聖オーガスチヌ教会宣教125周年記念誌

[CAFÉ・つながる 10年の実りを資料を用いながら対話形式でお伝えするコーナー]

- ・メニュー表
- ・それぞれのメニューの紹介資料
 - 私たちの教会の夢（ミッションステートメント）
 - クラスターミーティング
 - 北海道教区の「脱原発」の活動
 - 保育園・幼稚園

- 信仰のデザインノート

- 北海道教区宣教150年
- 出会いと交わりの日
- 北海道教区における新型コロナウイルス感染症対策のふり返り
- 婦人会・青年会・GFS
- 主教交代
- チーム北国
- 教会の再編と伝道所設立
- 多様性へのチャレンジ

配布物

- ・信仰のデザインノート
- ・葬儀への備え

ミニバザー販売品

[150年記念グッズ]

- ・缶バッジ
- ・ボールペン
- ・マルシェバッグ
- ・150年記念缶バッジガチャガチャ

2. 東北教区

展示物

- ・東北教区成立100年の歩み
- ・東日本大震災 震災証言集
- ・東日本大震災被災者支援プロジェクト パンフレット
- ・せみなりお青葉シリーズ1 「み言葉の礼拝」等での信徒の勧説についての13話
- ・せみなりお青葉シリーズ2 「み言葉の礼拝」を献げる礼拝奉仕者と会衆のための手引き
- ・せみなりお青葉シリーズ3 礼拝と祈祷書
- ・奉仕職に召される人が与えられるため（祈りのカード）
- ・ハラスメントで苦しんでいませんか（ハラスメント防止・対策委員会発行リーフレット）
- ・ヴァイアル山荘改築募金のお願い
- ・ヴァイアル山荘利用案内

- ・東北教区宣教方針（ミッション・ステートメント）
- ・東北教区宣教方針（ミッション・ステートメント）カード
- ・教区展望会議ニュースレター
- ・聖保連通信（東北教区保育連盟発行）
- ・東北教区教区会決議録
- ・じゅびらてV（盛岡聖公会記念誌）

ミニバザー販売品

- ・主の祈りカード
- ・チャーチカード
- ・せみなりお青葉シリーズ

3. 北関東教区

展示物

- ・『北関東教区時報』バックナンバー展示
 - 「2013年第300号～339号」ファイル
 - 「2020年第340号～360号」ファイル
(閲覧用)
- ・『日本聖公会 北関東教区 目で見る教区の歩み 1859～2013』2014年11月23日発行 書籍展示
- ・「教育・保育事業の変遷 認定こども園への移行～早蕨幼稚園、聖愛幼稚園の園舎写真、設計などに関する展示用資料」(クリアファイル1冊に取り纏め、ノートパソコンで画像閲覧)
- ・北関東教区「草津委員会」より関連書籍・グッズ販売、閲覧展示
- ・閲覧展示：『草津』ニュースレターバックナンバー(閲覧用、各教区に在庫分を2部ずつ進呈)

ミニバザー販売品

- [書籍販売]
 - ・『写真集 コンウォール リー女史物語』
 - ・『リー教母喜寿記念録 かあさま・注釈付復刻版』
 - ・『コンウォール・リー女史の生涯と偉業』貫民之助著 復刻版
 - ・『草津「喜びの谷」の物語』中村茂著 教文館
 - ・『リーかあさまのはなし』ポプラ社の絵本
 - ・『ハンセン病最初の女性医師 服部ケサ』武田房子著 幻戯書房
- [グッズ販売]
 - ・水彩絵画絵葉書全4巻各12枚セット
 - ・(全体で4種類、世界旅行版2セット、日本の風景1セット、草津を中心に1セット、)
 - ・プリントエコバッグ
 - ・リー女史スケッチ入りマグネット5個セット

4. 東京教区

展示物

- ・東京教区紹介のための小冊子 3冊 「いのり」「まなび」「はたらき」
- ・東京教区 ポスター
- ・礼拝音楽委員会ニュースレター
- ・礼拝音楽委員会カード
- ・音のでるクリスマスカード データ
- ・東京教区11年間のあゆみ 年表

- ・「きょうどう通信」 発行：宣教協働特別委員会・広報小委員会
- ・北関東・東京教区共通資料 宣教協働と新教区設立「Q&A」(発行：日本聖公会 北関東教区・東京教区)
- ・今こそ知りたい教区の成り立ちとこれから 北関東・東京編 The Spirit of Mission (発行：日本聖公会 北関東教区・東京教区)

5. 横浜教区

展示物

- ・各教会の周年記念誌
 - 長坂50周年 (2012年)、横ア130周年 (2015年)、松戸40周年 (2015年)、秦野120周年 (2017年)、千葉120周年 (2020年)、林間56周年 (2020年)、柏30周年 (2021年)、藤沢70周年 (2022年)、横ク30周年 (2023年)、逗子110周年 (2023年)、伊豆70周年 (2019年)、茂原125周年 (2023年)
- ・各教会の教会報
- ・ファミリーツリー
- A2サイズ (教区内教会の系図)

- ・横浜教区宣教委員会ニュースレター「みっしょん通信」バックナンバー数冊
- ・横浜教区社会委員会ニュースレター「ちいさな手」バックナンバー数冊
- ・信徒神学校テキスト (複数)
- ・「日比米三教区青年交流プロジェクト」報告書
- ・教区内の諸施設の資料 (九十九里ホーム機関誌、聖ヒルダ会40周年記念誌など)
- ・大家族キャンプポスター (A4)、しおり
- ・神奈川県／千葉県サマーキャンプしおり
- ・教区婦人会大会しおり
- ・各教会の紹介ムービー (PC再生による)

- ・「み言葉カレンダー」
- ・平和宣教月間のポスター (A4)
- ・MTSへの帽子奉仕のポスター (A4)
- ・教父母の証 (見本)
- ・幼稚園、保育園、認定こども園の実り冊子
- ・祈りのしおり

ミニバザー販売品

- ・祈りのしおり (教区)
- ・クイリング絵はがき (藤沢)
- ・絵はがき (清里)
- ・絵がはき (長坂)
- ・ロザリオ (林間)

6. 中部教区

展示物

- ・10年の実りスライドショー (pptx) 教区全教会・関連施設 2023
- ・イースターウィービング (式服・ストール) フィリピン聖公会北中央教区
- ・NPO法人ルカ子ども発達支援ルーム (2022)
 - 後援会パンフレット
 - 児童発達支援事業所そらのとりチラシ
 - 保護者支援プログラムカルディアチラシ
- ・歩こう！文化のみち2023・パンフレット (マルコ教会聖堂のおはなし) 「歩こう！文化のみち」実行委員会
- ・柳城学院入学案内パンフレット2024 柳城学院 2023

- ・長岡聖ルカ教会活動記録2018～2021年度 長岡聖ルカ教会 2021
- ・教区のあゆみⅡ～中部教区成立100周年記念～中部教区 2019
- ・KURA No.222 (長野県の教会特集) 株式会社まちなみカントリープレス 2020
- ・私たちの教会自慢 中部教区宣教会議 2017
- ・中部教区ヴィジョン2017 中部教区宣教会議 2017
- ・日曜学校礼拝式文 三条聖母マリア教会
- ・ドミナント (No.1～7) 中部教区・宣教局礼拝音楽部 展示物

7. 京都教区

展示物

- ・「H元牧師性暴力事件における京都教区による二次加害検証報告書」
- ・教区の関係諸施設における実りと課題 (ダウンロード用QRコードと印刷資料)

- ・教育部による活動 (YouTube限定動画視聴用QRコード)

8. 大阪教区

展示物

- ・教区成立100周年関連
 - 日本聖公会大阪教区 教区成立100周年の祈り (カード)
 - 「日本聖公会大阪教区100年の歩み」 (記念冊子)
 - 記念ポスター
 - キッズバナー (キッズフェスティバルで製作)
- ・キッズフェスティバル
 - パネル

- かみさまトーク
- しあわせって、どんな味？ 第1号～第4号 (大阪・京都教区協働子どもプログラム冊子)
- キッズフェスティバル2017～でい・愛・！～ (動画)
- ・京都教区との協働～合併案否決まで (パネル)
- ・日本聖公会大阪教区婦人会成立100周年
 - ポスター

- 日本聖公会 大阪教区婦人会 成立100周年の祈り（カード）
- ・東日本大震災を覚えて（パネル）
- ・東日本大震災支援 絵はがき（高橋敏子さん制作）

- ・豊中2教会先行合併資料（ファイル）
- ・大阪教区台湾交流委員会パネル
- ・各教会記念誌・礼拝式文

9. 神戸教区

展示物

- ・140周年アクションプラン活動報告
- ・神戸教区宣教140年史
- ・宣教140年記念トートバッグ
- ・教区年表
- ・バジル書簡集 第3巻
- ・教会問答に学ぶ
- ・聖職の姿 わたしの父
- ・教区中高生大会報告号2015
- ・死に備える
- ・堅信50年記念品
- ・福山諸聖徒教会の動静（1880～2014）
- ・信仰の履歴
- ・教父母の証

- ・神戸聖保連の幼児用音楽の楽譜集
- ・宣教140周年時の各教会の案内動画
- ・パイプオルガンの動画
- ・徳山聖マリア教会70年史
- ・松江キリスト教会130年史
- ・姫路顯栄教会50周年史
- ・神戸国際大学30周年史
- ・松蔭学院120年史
- ・神戸国際学校卒業アルバム（1983年）
- ・八代斌助 物語1・2・3
- ・広島平和礼拝グッズ（うちわ）配布用
- ・広島平和礼拝グッズ（折り紙）配布用
- ・浜田基督教会（木製十字架販売）
- ・神戸教区各教会地図

10. 九州教区

展示物

[小倉インマヌエル教会]

- ・ロザリオ、宣教130周年記念式文

[福岡聖パウロ教会]

- ・平チャリTシャツ、バザーポスター、クリアファイル、ホールディングクロス（バザー販売）、アルファコーステキスト

[八幡聖オーガスチン教会]

- ・クリアファイル（お持ち帰り可）

[厳原聖ヨハネ教会]

- ・宣教110周年記念誌

[宮崎聖三一教会、延岡聖ステパノ教会]

- ・教会カレンダー、映画鑑賞会の案内、説教集

[鹿児島復活教会]

- ・星塚敬愛園恵生教会創立80周年記念誌
- ・鹿児島復活教会ステンドグラスパンフレット

[九州教区]

- ・南の島で夏休みパンフレット、九州教区記念誌、フィリピンワーク資料
- ・教区センター建設趣意書及び振込用紙
- ・各教会10年の実りスライドショー

11. 沖縄教区

展示物

- ・「教区の10年の取り組み」紹介ファイル
- ・「各教会の10年のあゆみ」紹介ファイル
- ・「宣教70周年記念行事の取り組み」紹介ファイル
- ・宣教70周年記念誌

- ・宣教70周年記念礼拝集合写真

- ・沖縄教区マップ

- ・小禄聖マタイ教会・聖マタイ幼稚園50周年記念誌

- ・「主教座聖堂三原聖ペテロ聖パウロ教会献堂に関する取り組み」ファイル
- ・教区内教会の製作物（トラクト・Tシャツ写真・エコバック・ローソク・カード・ボールペン・口ザリオ・しおり等）

- ・動画「沖縄教区のあゆみ」

配布物

- ・新城喬司祭「沖縄戦体験記」（琉球新報掲載）
- ・聖マタイ幼稚園「不発弾爆発事故」に関する資料
- ・川平朝清氏「沖縄を語る～次代への伝言」

12. 神学教理委員会

展示・配布物

- ・『米国聖公会第78回総会 結婚の研究に関する作業部会 報告書』（2018年4月神学教理委員会）

実施事項

[きよさと神学教理アンケート]

- ・<結婚に関する質問>
 - Q あなたの教会で同性カップルを祝福するの？ YESかNOか。
 - Q 「法規第183条 結婚の解消 結婚は配偶者の死別により解消する。」法規にこの項目があるのを知っている？ YESかNOか。

- Q 聖職が離婚したら退職しなければならない？ YESかNOか。

・<信徒奉事者に関する質問>

- Q 信徒奉事者の働きは「礼拝において司祭に協力する」ことに限定されるべきである。YESかNOか。
- Q 信徒奉事者の働きは所属教会に限定されるべきである。YESかNOか。
- Q 教会の宣教の働きのために信徒奉事者は必要である。YESかNOか。

13. 礼拝委員会・祈祷書改正委員会

展示物

- ・改正祈祷書の理念（ミッション・ビジョン・バリュー）パネル展示
- ・改正祈祷書の書籍・電子版の展開 パネル展示
- ・改正祈祷書「教会問答」ドラフト
- ・改正祈祷書「詩編」試用版小冊子

- ・改正祈祷書電子版イメージ（Kindle）

- ・現行祈祷書本文検索システム

実物展示

- ・改正祈祷書判型見本（模型）とアンケート

配布物

- ・「祈祷書改正ニュース」バックナンバー
- ・改正祈祷書「聖餐式聖書日課」試用版
- ・礼拝委員会ホームページ・祈祷書改正委員会QRコード

14. 青年委員会

展示物

[日本聖公会全国青年大会]

- ・2012年 in 仙台 報告書
- ・2016年 in 北海道 報告書
- ・2023年 in 東京 しおり、カード、参加者の声・祈り（模造紙）

- ・2017年8月 in 広島

- ・2018年8月 in 韓国 忠南天安・竜川

- ・2019年2月 in 東京・川崎

[青年活動グループ「U26（ゆーじろー）」 報告書]

[日韓聖公会青年セミナー 報告書]

- ・2013年8月 in 韓国 慶州
- ・2014年8月 in 仙台
- ・2015年8月 in 中国 延辺

- ・第一回U26全国集会（2012/2）、2012年度（2012/4～2013/3、第二回U26全国集会）、2013年度（2013/4～2014/3、第三回U26全国集会）、2014年度（2014/4～2015/3、第四回U26全国集会）、2015年度（2015/4～2016/3、第五回U26全国集会）、2018年度

(2018/4～2019/3、第七回U26全国集会)、
2019年度 (2019/4～2020/3、第八回U26
全国集会)、2020年度 (2020/4～2021/3)、

2021年度 (2021/4～2022/3)、2022年度
(2022/4～2023/3、第九回U26全国集会 ※オ
ンライン)

15. 正義と平和委員会 ジェンダープロジェクト・女性デスク

展示物

- ・『タリタ・クム』バックナンバー
- ・ちらし (『タリタ・クム』の巻頭言一覧・すべてのバックナンバーを閲覧できるQRコード付き)
- ・女性の司祭按手20年の記念誌
- ・オリジナルデザインの一口チョコレートとドリップバッグコーヒー

ミニバザー販売品

- ・オリジナルグッズ (レインバー付箋付きスマホスタンド)
- ・聖公会カレンダーノート「虹色のはこぶね」応援版

16. 正義と平和委員会 原発問題プロジェクト

展示物

- ・原発のない世界を求めて 3年間の歩み (2013年6月～2016年5月) 原発と放射能に関する特別問題プロジェクト 発行: 2016年11月1日
- ・原発のない世界を求める国際協議会 報告書 発行: 2020年3月31日
- ・オンラインフォーラム 「原発はやめようよ」 報告書 発行: 2021年7月
- ・「原発はやめようよ」 抜粋
- ・パンフレット 私たちが共有してきたこと (抜粋版) 尾関作成 200部印刷

- ・「核のゴミと謂れなき犠牲の押し付け」小出裕章さん講演資料 50部
- ・原発のない世界を求める祈り 地球環境のための祈り (ハガキ版カード)
- ・ニュースレター これまでに発行された28号までのコピーファイル「いのちの川」含む
- ・QRコードカード (主として原発問題プロジェクトのホームページ閲覧用)

17. 正義と平和委員会 沖縄プロジェクト

展示物

- ・2013年～2023年までの「沖縄週間／沖縄の旅」の案内書

同 概略動画

- ・2023年「沖縄週間／沖縄の旅」ダイジェスト動画

18. 聖徒アンデレ同胞会 (BSA)

展示物

- ・BSA信徒叢書1～23 (全23巻)
 - 聖公会という名の教会 (一) 竹内寛
 - 奇跡は語る 竹内寛
 - 聖書に聴く (一) 速水敏彦
 - 聖書に聴く (二) 速水敏彦

- 古代教会—キリスト教史 (一) 菊地栄三
- 中世—現代—キリスト教史 (二) 菊地栄三
- 聖公会という名の教会 (二) 今井烝治
- 聖公会という名の教会 (三) 今井烝治
- 聖公会という名の教会 (四) 今井烝治
- 復活 竹内寛

- 十字架 竹田眞
- 聖書に聞く（三） 速水敏彦
- サクラメント 竹田眞
- 礼拝一口メモ（一） 竹内謙太郎
- 礼拝一口メモ（二） 竹内謙太郎
- わたしたちの『祈祷書』 森紀旦
- 米国聖公会—植民地時代から現代（一） 飯田徳昭
- 米国聖公会—開拓時代から現代（二） 飯田徳昭
- 聖書の心と茶の心 高橋宏幸

- ウィリアムズ主教に学ぶ 松平信久
- 神の教会・わたしたちの教会 加藤博道
- 聖公会 はじめの一歩 市原信太郎
- キリスト教と科学 西原廉太
- ・日本聖徒アンデレ同胞会 BSAの紹介 パンフレット
- ・機関紙「VISION」
- ・聖徒アンデレ同胞会事典
- ・聖徒アンデレ同胞会史 70年史
- ・BSA創立90周年記念誌 希望のBSAをめざして

19. 日本聖公会婦人会

展示物

- ・「感謝箱献金の130年のあゆみ」ポスター
- ・2023年度感謝箱献金お献げ先紹介パネル
- ・感謝箱

配布物

- ・日本聖公会婦人会「ニュースレター76号」

- ・感謝箱献金「ガリラヤのほとり40号」
- ・感謝箱献金2023年ハンドブック
- ・感謝箱

20. GFS

展示物

- ・日本聖公会 GFS100年誌
- ・日本聖公会 GFS新聞10年間分
- ・GFS World Newsletter10年間分
- ・GFS世界会議報告 in 南アフリカ 2023年8月3日～11日
- ・日本聖公会 GFS全国研修会報告 in 清里 2023年10月6日～8日
- ・北海道教区 GFSキャンプ報告 in 有珠 2023年7月28日～29日
- ・北海道教区 GFS秋のデイキャンプ in 北海道教区会館 2023年9月9日

- ・タンザニアタボラ州支援報告 in タボラ 2021年11月～2022年1月

ミニバザー販売品

日本聖公会GFS事業部ハンドメイド作品をバザーとして出品。

- ・祈祷書カバー
- ・聖歌集カバー
- ・GFS刺繡クロス
- ・ポーチ等

21. 聖公会生野センター・日韓協働委員会

私たちのあゆみ～物語を聴く

屋我地聖ルカ教会、厳原聖ヨハネ教会、大館聖パウロ教会

越山哲也司祭 ただ今より、「私たちのあゆみ～物語を聴く」のプログラムに入ってまいりたいと思います。この担当は、私、越山と卓志雄司祭、島優子司祭の実行委員3名が担当いたします。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは初めに、卓司祭にお祈りをしていただきます。

卓志雄司祭 祈りを献げましょう。神様、私たちをここに集めてくださったことを感謝いたします。私たちは神様からいただいた実りを持ち寄って、ここで分かち合っています。神様から与えられた実りは、喜びでもあり、また悲しみもあります。また、切なさもあります。また、叫びもあります。しかし全ては神のみ国を実現していくため、共に歩んでいくための神様の賜物であることを、私たちに悟らせてください。

信仰の仲間がそれぞれの置かれた場所で励んでいく、その姿、物語を、これから私たちは分かち合います。主よ共にいてください。今日、この時間を通して神様から与えられた恵みを分かち合い、私たちが派遣されていくそれぞれの所で主を信じ、仲間を信じて、共に歩んでいくことができるようにしてください。今日、語り手の一人ひとりに、神様からの励ましがありますように。この祈りを主イエス・キリストのみ名によってみ前にお献げいたします。アーメン

越山 ハンドブックをご覧いただき、それぞれの教会にて事前に録画をしたものを作成してスクリーンに上映しながら、この会場で話を来ていただくことになっておりますので、早速始めさせていただきたいと思います。沖縄教区の屋我地聖ルカ教会です。どうぞよろしくお願ひいたします。

1 沖縄・屋我地聖ルカ教会の やがじ 小さな働き (→ 資料 P52)

卓 私は東京教区司祭であり、管区事務所の宣教主事の卓志雄と申します。よろしくお願ひします。

玉城淳光 沖縄教区屋我地聖ルカ教会から来ました玉城淳光です。よろしくお願ひします。

卓 先ほど申し上げましたように、「私たちのあゆみ～物語を聴く」というとき、「物語」は、出来上がった素晴らしいものだけではありません。現在進行形の物語です。(中には) さまざまな感情があります。悲しみもあるし、挫折もあるかもしれない。また、苦しみもあるかもしれない。しかし、神様からいただいた喜びを分かち合うために、3つの教会は頑張って用意をしました。皆さんでぜひ参考にしてください、また温かい気持ちで応援をお願いいたします。

沖縄教区屋我地聖ルカ教会は、私が神学生の時、1ヶ月間、沖縄教区で実習をさせていただいた際、1週間お世話になりました。その縁もありましたので、今日担当をさせていただくことになりました。

まず屋我地聖ルカ教会は、鹿児島から700キロ、東京から2,000キロ、札幌から3,200キロ、那覇から80キロ離れています。そういう所にある教会です。これからは少し画面を見ていただきながら説明をお願いします。

玉城 こちらが屋我地聖ルカの教会の中(の画像)です。小さいテーブルがあります。隣に聖ルカ保育園がありまして、園児たちが水曜日に(礼拝を)行う時に座って話を聞く場所です。今(のこの画像で)は床は白色なのですが、茶色に、新しくフローリングに変えました。こち

らが聖ルカ保育園です。左側の写真は何年か前のものです。私の弟は2人いるんですけど、弟がクラス中の同級生を「来て」って連れてきて、みんなで華やかにクリスマス会をしました。保育園も今はきれいな感じになっています。

これが済井出の浜です。^{すい いで}聖ルカ教会から100メートル先ぐらいにあります。真ん中にある島は、潮が引くと歩いていくことができます。歩いていってこの中で散策していると、波が上がって帰れなくなることもあります。すごくきれいで素晴らしいのですが、ウミヘビが多くいます。屋我地の人は、ウミヘビがいたらすぐにしつぽをつかんで投げるので、大丈夫です。

こちら（の画像）が愛楽園です。ハンセン病の回復者の方々がいます。今、施設にいるおばあちゃんたちも少なくなっていますが、聖ルカ教会とよく合同礼拝をして、みんな仲良くやっております。祈りの家は、見てのとおり2階建で、1階が礼拝堂で2階が小部屋になっています。青木恵哉先生はよく2階に上って、屋根に登って、屋我地の海と古宇利島を見て楽しんでいたそうです。こちら（の画像）はおばあちゃんたちが集まって、いつも礼拝している所です。

卓 今、説明をしていただきましたが、屋我地聖ルカ教会の管理牧師、また祈りの家教会牧師、聖ルカ保育園チャプレンの高英敦司祭と、Zoomで座談会を行いました。どのような思いで牧会をなさっているか、お話を伺いたいと思います。また、玉城さんからは座談会が終ってから、またお話を少し伺いたいと思います。



※録画

卓 屋我地教会と保育園との関係や、どういう牧会の働きをされているのかについて、お聞かせください。

高英敦司祭 この聖ルカ保育園は、屋我地島の中で唯一の子どもの施設です。この保育園がどのように始まったのかというと、最初（の園児）はほとんど愛楽園の職員の子どもたちでした。でも今は、この保育園はとても評判がよく、名護市からも周りの村からも子どもが来ています。私はチャプレンとして保育園に勤めていきます。

この保育園は宣教の施設です。私が子どもに、「神様について何を教えるのか、どのように子どもたちに宣教をするのか」考えて行ったことは、歌をつくって、本当の神様が誰なのかを教える（ことでした）。それが一番大事なことではないかと思って、「インマヌエル」という歌をつくりました。毎週の礼拝の時、子どもたちに聞くのは、「今、神様がどこにおられるのか」ということです。「インマヌエル（編集部注：「神ともにいます」）」。「イエス様の他のお名前は何でしょうか」というと、子どもたちは「インマヌエル」と答えます。また、「『インマヌエル』とは、私たちと共におられる神様（のことです）」と答えます。そして（私が）「今どこにおられるんですか」と問うと、「心の中」と答えます。

このように、信仰とは、ただ知識ではなく、生活だということです。「いつも一緒におられる、神様と一緒に生活することだ」ということを考えるように、意識するように活動しています。

卓 ありがとうございます。お話の中で、愛楽園の職員の子どもたちを預かっていたという話を伺いましたが、教会と保育園から近い所に愛楽園があり、その中に祈りの家の教会があるとお聞きしました。私も訪問したことがあります、聖ルカ教会、また聖ルカ保育園、そして祈りの家の教会との関係、そして高先生の牧会活動についてお話を聞かせてください。

高 沖縄教区自体が、この愛楽園祈りの家教会がなければ、できませんでした。愛楽園に聖公会の信徒がいるので、「宣教師を送ってください」とアメリカ聖公会に要請して始まったのが沖縄教区です。だから祈りの家教会は、沖縄教区の母教会といっても過言ではありません。そして、最初は愛楽園の信徒たち（全員が丈夫ではありませんでした）が、沖縄教区を支えたといっても過言ではありません。一番、信徒が多い場所が、祈りの家教会だったのです。

最初はもちろん、現職の司祭が来たはずです。その後愛楽園で暮らしている方の中で、青木恵哉先生をはじめ、徳田祐弼先生とか松岡和夫執事とか、入所者の中で司祭ができましたし、執事ができました。そして、この司祭、

執事によって、祈りの家教会の活動ができてきました。そうするうちに、長い間、沖縄教区が現職を派遣するのが難しくなり、嘱託として、昔からこのハンセン病者宣教に関心があった鬼本照男先生が長い間、嘱託として務めたのです。そして私は、主教さんにも「信徒も多いし、ちゃんと牧会ができるようにしたほうがいいのではないか」と頼みました。そして「私が行きます」と言って愛樂園に来ました。この愛樂園が國のものになってからは、村の人を職員として受け入れました。それで村の人の子どもたちの面倒を見ないといけないといって、この聖ルカ教会ができました。そして聖ルカの教会に保育園をつくり、保育園ができました。

昔は祈りの家教会に現職司祭がいない時は、聖ルカ教会の牧師が、祈りの家教会の管理牧師として一緒に務めました。保育園の園長も務めました。今は保育園の園長は、信徒の岸本美恵子さんです。そんな形で、この聖ルカ教会と祈りの家教会と聖ルカ保育園はつながっています。

卓 ありがとうございます。聖ルカ教会の役割も大事だと思いますが、先生が前もって送ってくださった資料を見ると、玉城家3人兄弟の活躍や存在は本当に大事だと感じました。もう少し玉城家3人兄弟のお話をお願いしてよろしいですか。

高 私は2017年に聖ルカ教会の管理牧師になりましたが、その前は、島袋諸聖徒教会の金汀洙司祭が管理牧師でした。金汀洙司祭は名護聖ヨハネ教会と、屋我地聖ルカ教会の管理牧師でした。

3人兄弟のお母さんが聖ルカ保育園の職員になってから、「月1回は教会に通ってほしい、1回は教会に出てほしい」と（伝えた）ことを聞いて、教会に来始めました。その時、3兄弟も来始めました。もちろん末っ子は後から来ました。彼らは2年間、教会に通っていました。そうするうちに、人事のため私が聖ルカ教会も管理するようになりましたが、私が赴任する直前に、金司祭へ「今まであなたが勉強をさせたのだから、洗礼を授けてから離れて（ほしい）」と頼みました。淳光君と、次男の圭大君が洗礼を受けました。

私が2017年4月に屋我地聖ルカ教会に行った後、末っ子も「自分も教会に行きたい」といって来始めました。いつからサーバー（の奉仕）をやり始めたのかは分からぬのですが、私がいないうちに、祈りの家教会で、今は退職された高良孝誠先生が、「あなたたちはサーバーやってもいいんじゃないか」と言って、サーバーの奉仕

をさせました。その時彼らはサーバーの勉強中でした。でも、私がいないうちに高良先生によってサーバー役をするようになりました。そうするうちに、この末っ子も洗礼を受けて、3人兄弟が一緒にサーバー役をするようになりました。その時は淳光君が中学生で、次男と三男は小学生でした。

このクリスマス礼拝の写真は（何かというと）、次男の友達が「あなたが教会でサーバーをしている所が見たい」といったので、次男は約30名の友達を連れてきました。そのおかげで、クリスマスイブ礼拝がにぎやかになりました。今も教会のサーバーはもちろん、教区行事がある時は、3人兄弟がサーバーをやっています。悲しいことに、教会の中はどんどん若い人たちが少なくなつて、礼拝にも参加しない状態になってしまいましたが、この3兄弟は一生懸命教会に来て、自分がやるべきことを見つけ、喜んで務めています。

卓 ありがとうございます。最後の質問です。屋我地という所は日本の本土からも遠く離れている沖縄、また沖縄の中心地である那覇からも遠く離れている所です。愛樂園の方々が神様にもうすぐ呼ばれるのは確実であって、また高先生も定年退職が近くなります。これから屋我地、また聖ルカ教会、保育園、愛樂園のことを考えると、教会の祈りも大事であるし、また、信徒が支えるということも大事であると思いますけれども、玉城家の3兄弟、そして皆さんに（高先生が）伝えたい思いを、聞かせていただけますでしょうか。

高 私が愛樂園、祈りの家教会に赴任した時は、信徒が70名ぐらいいました。今は24人しか残っていません。教会へ自分の足で歩いて来られる方は5人しかいません。ほとんどが車椅子で、コロナ禍以降、もう教会に来るのがとても難しくなってしまいました。これから何十年か経つと、教会へ出てこられる方は1人も残らないと思います。しかし、信徒が1人でも来るのだったら、ちゃんとこの教会の礼拝は守らないといけないと思っています。信徒たちにもそのように伝えています。

私は2年後、退職ですが、私がいなくても、信徒たちができるだけこの教会を守っていくように話をしています。聖ルカ教会は、幸せなことに、玉城家のおかげで活動が活発になっています。玉城家ではない信徒の方が、「今年はみんなが一人ずつ誰かを教会へ連れてきましょう」と言わされました。玉城家はお父さんを連れてきています。他の家庭も他の信徒も「自分の連れ合いを教会へ連れてきたい」と言っています。私は玉城家のお母さん

であるサラさんが、ずっとこの聖ルカ教会を守っていらっしゃるといつて思っています。そうするためには健康も大事なことですので、「自分の体を大事にして、できるだけしんどいこと、きついことはしないでください」と言っています。サラさんはとても活発な人です。でも、病気を持っていますので心配しています。お祈りをしながら教会を守るように今、少しずつ励ましていくかと思っています。

そして私は今、宣教協議会に集まっている人に伝えたいのは、「できるだけ各教会に司祭がいてほしい」(ということ)です。でも、全国的に司祭不足です。これが問題です。でも、励まして(志願者が)司祭になるように(してほしい)。司祭がいたら教会はなくなりません。司祭がいたら、活かされます。もちろん司祭一人の力ではありませんが、司祭がいたら、神様が信徒を送ってくださるのです。だからできるだけ各教会の礼拝をちゃんと守って、できるだけ司祭をつくって派遣するのが、今、現職の司祭たちの一番大事な務めではないかなと思います。

卓 ありがとうございました。沖縄にいらっしゃる高英敦先生からお話を伺いました。玉城淳光さんがこの宣教協議会に参加されていますので、玉城淳光さんから、その思いを伺いたいと思います。そして、後ほど、沖縄教区の皆さんのお話を聞きながら、今後、私たちの宣教の歩みについて共に考えてみたいと思います。ありがとうございました。

※録画終了

玉城 これ(映像)が祈りの家です。自分と弟2人で礼拝しています。今はこんな形で礼拝しています。ここは祈りの家なので、おばあちゃんたちがいつも朝早く来ます。自分たちも負けないように来ていますが、やっぱり早いです。いつも準備を手伝ってもらいながら、祈りの家ではこんな感じで礼拝をしています。

卓 それで、寂しそうに見えても決して寂しくないので。皆さんと一緒に喜びを分かち合いながら教会を支えて、また地域の方々、愛樂園の方々と豊かな地域、教会をつくっていく、玉城家の3人兄弟と家族です。もっと話をしたかったのですが、時間が足りないので、(みなさん、玉城さんを)つかまえて、話しかけてください。お願ひいたします。お母さんであるサラさんの思いを、ご長男の淳光さんが読み上げて、今日の沖縄の話を終わりにしたいと思います。

玉城 3兄弟の母であるサラからのお話。「わたしたちが教会に通えるのは、教会が一番落ち着く場所であるからです。そして、少しずつ役割が増えたからです。掃除や片付け、聖書を読むこと、奉獻。今は、子どもたちはサーバーとして、司祭の側で礼拝に参加しています。役割が増えたことで子どもたちに、責任と自覚が芽生えたと思います。うれしいことに、次男は『司祭になりたい』と言ってくれました。教会は、私たちが楽しく元気に成長できる、素敵なお場所です」。

いづはら 2 九州・厳原聖ヨハネ教会の物語 (→ 資料 P54)

島優子司祭 皆さん、こんばんは。九州教区の厳原聖ヨハネ教会です。管理牧師は、武藤謙一主教です。私は副牧師の島優子と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

今日は残念ながら、信徒の方がこの清里に来ていただくのが難しいということで、代表でZoomにて参加をしてくださることになっています。最後に一言、お言葉をいただきたいと思います。

厳原の教会は今年、120年というお祝いの年になりました。全盛期には40人、50人という時代もありましたが、今は実質3人の方で教会を守っておられます。教役者が行けない時は1人で「み言葉の礼拝」をしてくださっております。お一人で全てを整えて、そして誰かが来た時のために勧説も準備して、そして必ず日曜日には教会を開けて礼拝を守るというのを大事にしています。当たり前のことですが、その当たり前のことを1人や2人の人にお願いするというのは、とても大変なことだと思います。けれども、この3人の方々は、決して心がマイナスになっているわけではなく、「人がいないなら自分たちがやるしかないんだ」という心を、特に今年に入ってとても強くされているなというふうに、私は近くで見ながら、そんな印象を持っております。今日はこれから写真と動画を用いて、信徒の方々の思いなどを皆さんにお伝えしていこうと思います。

初めに、対馬とか厳原という地名をご存じない方もいらっしゃるかと思いましたので、地図をご用意しました(画像を映す)。右下が九州です。左上が韓国です。ちょうどその真ん中に位置しておりますが、距離は博多から約130キロ、そして韓国釜山からは50キロという位置に

あります。こういう地理的な条件から、昔から韓国と日本の文化、あるいは貿易の中継地として大事な役割を果たしてきたのが対馬です。

厳原は対馬の南部に位置しております。この島の中では一番大きな町になります。こちら（の画像）が教会の外観です。右側に石壙が見えております。厳原は昔の対馬藩の城下町でした。この教会があるエリアは、その城下町の雰囲気をとてもよく残している所です。このように、教会全体が昔ながらの石壙に囲まれております。

これが教会の建物です。昔の学校みたいな、そんな雰囲気があります。このようにいろんな木とか植物が植わっていて、これは柿の木ですけれども、定住が誰もいないということでもう、実がなっても落ちるしかないという状態です。

これが教会の中にある中門です。このように昔のまま使われていて、ちょっと見にくいけれど、牧師館は昔の武家屋敷を修理しながら使っております。

これは冬の風景ですね。雪もかなり降ります。教会には小さい日本庭園がありまして、時々観光客の方が見学に入ってこられたりすることもあるようです。

これが東門になります。ちょっと古いです。「厳原聖ヨハネ教会」と書いてあります。これはミカンの木ですね。落ち放題になっています。でも地域の方に差し上げたり、あるいはカトリックが月に一度、ここの礼拝堂でミサをささげておられるので、その信者さんに持てかえっていただくこともあります。

これが東門全体を写したもので。これが教会の前の通りです。このように、非常に風情豊かな地域に教会は建っております。では3人の信徒さんをインタビューさせていただいたので、その時の模様をどうぞご覧ください。

※録画

島 今日はよろしくお願ひします。今年の日本聖公会宣教協議会では、いわゆる「たくさん的人がいて、多くの活動をしている（ような）大きな教会」ではなくて、「地方にある小さな教会」の中で、一生懸命頑張っている人たちの声を聞きましょう」というのが、実行委員会が立ち上がった当初からの（委員の）声でした。それで、この九州教区にある厳原聖ヨハネ教会の皆さんのお声を聞きたいということで、今日は皆さんに集まっていただきました。

まず、会場にいらっしゃる方々に、3人の方をご紹介したいと思います。阿比留秀子さん、黒田このみさん、木寺由美さんです。今、教会はこの3人の方が教会委員として本当に一生懸命、全てにおいて支えてくださっ

ております。3人の方それぞれ、教会生活を長く送っておられますけれども、この対馬、厳原の地で、厳原聖ヨハネ教会というのはどのような役割を果たしてきたのか、特にこの10年の間の教会の姿などを中心に、少しお話を聞きします。

木寺由美 この10年は特に大きな変化があったと思います。特にこの3年はコロナ禍の中で、高齢者の方々が礼拝に来ることができなくなりました。昨年は90代後半の方がお二人亡くなられて、本当に寂しい教会になりました。しかし、少ないながらにそれぞれが自分の力を発揮して、自分ができることを一生懸命やっております。この3年はなかなか厳しい状況です。

阿比留秀子 木寺さんが言われるように、高齢者の方が亡くなられたりして、毎月お見えになった方がほとんどいなくなって、現在も少人数も少人数で頑張っています。

黒田このみ もともとここは若い方があまりいません。年配の方ばかりですが、1人減り、2人減りということで、この10年、すごく寂しい教会になってしまいました。でもやっぱり苦しい中でも毎月、礼拝を守れるように司祭さんがいらしてくださるし、扉を閉めなくて済むということが、この教会としてはすごくよかったと思っています。

島 ありがとうございます。この教会は、定住の教役者がもちろんいらっしゃった時期もありましたが、やはり不在の時がとても長いという教会です。それだけに、信徒さんの力というものがとても求められます。教役者も比較的経験の浅い人がここに派遣されて、私も実はそうなのですが、ここに派遣された後、執事になり、そして司祭になります。ということで、どちらかというと「新米の教役者がベテランの信徒さんにいろいろなことを教わっていく」という印象を私自身は持っています。皆さんたちはいかがでしょうか。この教会のそういう関わりを見てきて、感じられることなどありますか。

木寺 ここは離島ですので、神学校を卒業されて赴任してこられ、執事になられて、司祭になられて、転勤されるということもあります。離島ですので、他の教会に助けを求めることができません。もちろん電話とか相談はできると思いますが、信徒と相談しながら、自分の持てる力を出されているそういう聖職者の方の姿を見て、私たちも励まされるな、という思いがあります。また、聖

職の方が成長されている姿を身近で見ることができます。そういうところが、この教会のいいところじゃないかなというふうに思います。

島 ありがとうございます。皆さんはどうでしょう、長い信仰生活を送ってこられておりますけれども、その中で「どういった喜びが与えられているか」とか、あるいは、「こういう時は本当にきつかった」とか、何かそういうお話を伺えたらいいなと思います。

阿比留 長年、信徒として（礼拝に）出席させていただきました中で、途中で身体的に病気などしました。私がすごく感動したのは、病院などに入院している時に、牧師さんがわざわざ、本当は面会できないのに、「身内だ」と言って来てくださったりして、いろいろ心遣いをしてもらったことです。長い入院でしたが、私が昼寝をしていたら、眠っている上の病床のほうでゴソゴソと音がしたので、目を開けたら、白髪混じりの牧師さんが見えました。「起こしたね」と言われました。その時も神様が私のそばにいらっしゃるような感じを受けたことがあります。

それから長い間、教会などにも行ったり来たりして、勉強をしましたが、聖書のお話を聞いたりしているうちに、少しはそういうお話を理解できたような気がしています。今も感謝をしています。ありがとうございます。

島 すてきなお話をありがとうございます。黒田さんはいかがでしょうか。

黒田 私が来始めたのは高校生のころでした。そのころはベテランの信徒さんたちがたくさんいらっしゃいました。高校を卒業してから、しばらく対馬を離れましたので、その間はここがどういうふうに変わっていたのかは分かりません。

帰ってきて30年が過ぎました。私は一度教会を離れましたので、対馬に帰ってきて、本当に「帰ってきた」という感じで、割とすっと教会に受け入れてもらいました。しばらく信仰生活を離れていたのにもかかわらず、自然と帰ってくることができました。

この30年の間にベテランの信徒さんたちもたくさんいなくなつて、自分もそういう年になってきて、信徒はすごく減りましたが、「自分も神様に導かれて教会の担い手、力になれているかな」という気が今はしています。小さい力だと思いますけれども、小さい教会で、よその教会を知らない信徒ばかりなので、ここの教会は独特だ

とは思いますが、やはり対馬の教会に帰ってこられたのは、私としてはうれしい、というところです。

島 ありがとうございます。今、「小さい力」とおっしゃいましたけれども、決して小さいとは私は思っていません。皆さん、本当にそれぞれが大きな支えになってくださっています。木寺さんも、この教会では教役者が来ない時、「み言葉の礼拝」をほぼお一人で守ってくださっています。どのような思いで礼拝をしてくださっているのでしょうか。

木寺 「み言葉の礼拝」の時は、去年の3月までは退職司祭さんが一緒に礼拝に出席されて、勧話をした後に、お茶を飲みながら感想を話し合うような時間を持っておりました。その中で本当に気付かされることはたくさんあって、いい学びの時間になっておりました。その後（退職司祭さんが）体調不良になられてしまい、今は1人で守っております。しかし、決して1人じゃなくて、イエス様がいつも一緒にいらっしゃいます。教会に来る時は、いつもここで窓を開けて電気をつけて（います）。庭の果樹、今はビワとかカキとか夏ミカンとかいろいろありますが、その実りも楽しみです。庭の小さな花や草が花を付けたりするのも楽しみです。教会はそれこそ、「毎主日いつも電気がついて、聖歌が歌われている、扉は開かれている」ということを大事にしたいなと思っています。それこそ小さな力だと思いますけれども、そんなふうに思っています。

島 ありがとうございます。「日曜日に教会が開いている」ということは本当に大事です。一生懸命守ってください、みんな感謝しています。阿比留さんも、お聞きするところによると、ずっと教会委員を続けてください、会計も30年ぐらいしてくださっているとお聞きしました。その間、いろいろな思いがおありじゃないかと思いますが、いかがですか。

阿比留 若い時というか、もうずっと前には、補助してくださる高齢のおばあちゃんたちがいました。その後、私が受け持つてから、もう14～15年経ちます。会計をしていると、分担金を納めるのがやっと、という時が何回もありました。でもその時に、ぎりぎりで、「もしかしたらクリスマス献金で補助できるかな」というような思いをしていましたら、やっぱり12月の最後に締める時になると、ちゃんと神様が助けてくださったと思います。そういう経験が何回もあり、「やっぱり助けてくだ

さったのだな」と思っています。別に「ください、ください」と言ったわけじゃありませんが、献金が集まることがあって、すごく感謝しています。神様のおかげということが、ほとんど毎年のようにありました。何となく集まります。それで「やっぱり神様だね」と思っています。

島 ありがとうございます。黒田さんもずっと教会委員をしてくださっていますけれども、お連れ合いのお力がとても大きくて、私から見ると第4の教会委員ではないかと思えるぐらいです。私たちの力が及ばない部分、例えば教会の營繕、あるいは庭木の剪定ですか、そういうところで本当に大きなご協力をいただいていますが、いかがでしょうか。

黒田 (わたしは) 本人ではないのでよく分かりませんが、ここの教会はとにかく信徒が少ないということを、主人は分かっています。何かあるとか、何かしなくちゃいけないという時は、結局私たちだけではできないから、「手伝ってやらないかんかな」と思っているらしくて、ここ何年かは庭木の剪定ですか、いろんな箇所の修理というのを結構してくれています。私が頼む時もありますが、自分で気を付けて、「ここをこうしたほうがいいぞ」とか、「こうしようか」とか、「今度こうしつくぞ」とか、言ってくれるようになりました。本人は「とにかく自分は無神論者」と言っていますので、あまり神様のことをどうのこうの思っていないとは思います。もしかしたら、神様がこそっと後ろから引っ張ってくれているのではないか、という気はしています。

島 木寺さんも阿比留さんも、ご家族がこうやって教会のことを常に気にかけてくださって、必要な時は本当に協力してくださっていますよね。ありがとうございます。宣教協議会の開催される目的の一つに、「この10年の実りを持ち寄ろう」ということがあります。この教会の10年、表だけ見ると、今おっしゃったように人も減ってしまいましたし、財政的にも大変苦しい状況ではあります。そういう中で、やはり「こういう実りがあった」という何か実感がありましたら、ぜひ披露してください。

木寺 信徒数（について）は、高齢になられて礼拝に来られなくなったり、亡くなられたりします。意外と30代、40代、50代の方が教会から離れているところがあります。先ほど黒田さんが言われましたけれども、少なくなったら、信徒の家族などが応援団になって、信徒自身も「一人ひとりが少ない人数だからこそ強められる。家族も巻

き込んで強められる、この教会を支える」という感じがあります。特にこの3年ぐらいは、そんなふうに感じます。

島 つらい3年が、なおさらそんなふうに感じられるということですね。阿比留さんはいかがですか。

阿比留 私自身は協力というか、自分でやれることをやっていると思います。私自身も体があまり動かないから、何かあっても座ってばかりで、何の手助けもできていないので、ちょっと気の毒で、2人の方に支えられています。また、「やっぱり神様が本当に助けてくださっているのだな」と思うことは多々あります。ありがとうございます。

島 黒田さん、いかがでしょうか。

黒田 7月に、120周年の行事をいたしました。その10年前には、記念誌を発行するということで、今まで関わったいろいろな方々に原稿をいただいて、それこそ薄い記念誌ではありますが、発行できました。10年たって、120周年の記念行事ということで、たくさんの方々に来ていただきました。

こういうことを一つひとつ見ると、とても私たちだけではできなかったこと、次から次に新しい困難に見えることを、克服するというか達成できているので、「ここにいつもやっぱり神様がいてくださるのだな」という気はしますね。

もちろん、今まで関わってくださった司祭の先生方とか主教さまとか、たくさんの力がありました。近ごろは特に、自分たちも年を取りました。来てくださる司祭の方々も、もちろん主教さまも、お若い世代になってしまったので、若いパワーに引っ張られて、私たちも今までできなかった新しいことにチャレンジができる、すごくこの10年は、小さい教会なのにできたことがたくさんあって、自分としては不思議な気はしています。それはやっぱり、この小さな教会にいつも神様がいてくださっている（からだ）という気はします。

島 ありがとうございます。最後になりますけれども、（黒田さんが）今おっしゃったように、わたしたちは、120年という一つの区切りのお祝いをしました。今この状況にあって、この先の教会を見つめてどんなふうに思われているか、また、ご自分たちの信仰生活をこの先、どんなふうに進めていきたいかなど、メッセージをいただけたらと思います。

木寺 信徒数は少なくて、若い方がいらっしゃらない。信徒の子どもたち、孫たちもいますが、信仰の継承ができていません。例えば、クリスマスとかイースターの時とか、イベントがある時には教会に来るけれど、その他の時にはなかなか（来ない）という状況です。

この教会が今後どんなふうになっていくかというは、正直なところ不透明というか、よく分かりません。しかし、可能性としては、この教会でカトリックの教会のミサを月1回されたり、近くに福音教会があり、その教会の方との交流もあったりします。（対馬は）お隣が韓国という近い距離にあるので、韓国からの観光客の方もいらっしゃるし、一時、その方々が礼拝に出られたりすることもありました。海外に向けて、島内に向けて、どんなふうにしたらいいのか正直よく分かりません。ですが、できたら10年後もこの教会があってほしいなと思っています。

阿比留 数十年前に、（ある教会に）信者さんが1人おられて、とても不便な所でしたが、そこに司祭さまが来られたので、とても感動した、という文章を読みました。私たちの教会もそれに近づいています。司祭さまが、遠路はるばる来てくださっています。これからも、一人でも訪ねる信者がある限り、120年後も続きますように。「人にはできないことも、神にはできる」（ルカによる福音書18章27節）を私は枕元に置いて、「私は人間でできないけど神様にはできる、これからもそうじゃないかな」と言って祈っています。

黒田 ここはとにかく、礼拝堂も牧師館も古い建物です。だいぶ老朽化して、それこそ礼拝堂がもつか、それとも少なくなった信徒がこのまま守っていけるかどうか、どちらが先か今、分からぬ状態です。でもやっぱり、たとえ一人になっても、この教会があって、日曜日には戸を開いて誰かが訪ねられるような、そんな教会がずっと続くように願っています。私にとってここは原点で、自分がここから一步を始めたので、やはりずっと続いてほしいなと思います。「ここから始まって、ここに終わるのだろう」と思っています。私が経験したように、誰かがずっと同じような経験をして、そして最後もやっぱり、「小さくても続いてほしい」と思う人が出てくるように祈りたいです。

島 今日はそれぞれの思いを聞かせてくださって、ありがとうございました。本当に、今お話をあったように、5年後、10年後、この教会がどうなっているかは私たち

には分かりません。でもきっと神様のご計画があって、きちんと道を備えてくださっていると思いますので、どうぞ皆さま、これから先も引き続き、賜物を生かしたご奉仕をよろしくお願ひいたします。

今日はこうやって宣教協議会を通して、九州教区以外の方々も、この厳原聖ヨハネ教会について知っていました。こうやってまた新しいつながりが生まれましたし、またオンライン配信を通して見てくださっている方もいらっしゃいます。私たちは長崎県の小さな島にある教会ですが、こうやってこれだけ多くの人につながっているということを知ることができて、本当にうれしいなと思います。本当にどうもありがとうございました。

※録画終了

島 ありがとうございました。今、登場してくださった木寺さんとZoomがつながっています。もしよかつたら短くお言葉をいただきたいのですが映りますでしょうか。よろしければ会場の皆さんに、短くて結構ですので一言お話しいただけないでしょうか。

木寺 今日はこのような機会を与えていただき、ありがとうございました。本当に私たち、小さな教会ですが、自分たちができるだけ、できる力を発揮して、また神様にお願いしながら歩んでいきたいと思います。今日はありがとうございました。

島 木寺さん、どうもありがとうございました。最後に武藤主教から一言。

武藤謙一主教：皆さん、なんで私がここにいるか不思議だと思います。私一応、管理牧師なのです。私も今日、初めてこの録画を見ました。普段こんなにおしゃべりするような人たちじゃありません。その人たちの本音を聞



くことができて、私も感動しています。実は、これを見ながら思ったことの一つは、どれだけ聖職が誠実に信徒と向かい合って牧会していくか、そういう聖職の姿勢、そういったものが大事だなということを私は今、思わされました。もちろん、副牧師の島司祭、それからここには映っていませんが、録画していたのは牛島幹夫司祭です。彼も月に1回、訪ねてくださっています。そういうふうに、聖職が聖職として信徒と誠実に、また丁寧に関わっていくこと、そういうことがあって厳原の皆さんのお話を聞けたな、と思いました。自分のことの反省もありますが、本当にそういうことが大事だということ。本当に小さな教会で、立派なことをやっているのではありません。ですが、信仰の喜びというものが皆さんにも伝わっていただけたかなと思っています。ありがとうございました。

島 ありがとうございます。少々持ち時間をオーバーしてしまいましたが、最後までお聞きくださいありがとうございました。厳原聖ヨハネ教会でした。

3 東北・大館聖パウロ教会の あゆみ (→ 資料 P55)

渡部拓司祭 大館聖パウロ教会です。私は大館聖パウロ教会、管理牧師の渡部拓と申します。私はこれ以降一切しゃべりませんし、何もしません。といいますのも、今回この宣教協議会のお話が大館の教会に来た時に、もちろん私も管理牧師ですので「どうしましょうか」と投げかけたところ、今、隣にいる中村久美子さんが中心になって、信徒の皆さんが「率先して協力して、やります」と言ってくださり、準備をしていただきました。ほとんど私がノータッチの状態でまとめてくださいました。定住牧師がいない環境で、決して大きくもない群れです。しかし、本当に信徒の皆さん一人ひとりが、力を発揮しているすてきな教会ですので、ぜひその姿を見ていただければと思います。よろしくお願ひいたします。

中村久美子 大館聖パウロ教会の中村久美子と申します。私は同じ敷地内にあります大館幼稚園の園長として勤務させていただいております。私から、大館聖パウロ教会の歩みについてお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

はじめに大館市についてお話をします。秋田県大館市は、秋田市よりも青森県に近い、県の北部に位置しております。十和田湖の鉛山にあります鉛山聖救主礼拝堂と、皆さまのおかげで新しくなりましたヴァイアル山荘までは、車で約1時間ほどですので、2022年にはヴァイアル山荘で幼稚園のお泊り会をしました。

大館は四方が山に囲まれている盆地です。そのため夏は大変暑く、今年は特に園庭で遊ぶには危険な暑さが続きました。また冬はその年によって違いがありますが、多い年は排雪した雪と、屋根から落ちた雪で、園舎に明かりが入らないほど積もる年もあります。

人口は2022年4月現在で68,782人、出生数は300人前後で推移しております、老人人口がどんどんと増えている状況です。教会は、歩いて5分圏内に市役所や裁判所、郵便局がある町の中心部にあります。かつては賑わっていました、大館幼稚園の卒園生も多い商店街は、そのほとんどがシャッターを下ろしてしまいました。スライドは10月4日の午前11時ごろの写真になります。とてもよい天気でしたので、教会の前の通りを少し撮影してみましたが、この日も、道ゆく人にまず出会うことがなく、車が通り過ぎるばかりでした。この住所は裏町と言いますが、裏町という雰囲気が出ています。

続いて、大館聖パウロ教会についてお話をさせていただきます。大館聖パウロ教会は1903年に伝道が始まりまして、1906年に現在の場所に礼拝堂兼牧師館が建てられました。伝道開始から今年で117年になります。1918年に同じ敷地内に大館幼稚園が開設され、この時から教会と幼稚園は歩みを共にしてきました。スライドの教会は1933年10月に落成した、かつての教会です。落成から23年後の大館の大火により、この教会は焼失してしまいました。大火から6年後の1962年に建てられたのが現在の大館聖パウロ教会になります。

隣接する大館幼稚園は耐震診断の結果を受けまして、2022年度に改築を行い、皆さまからのお祈りとお支えをいただきながら、2023年度4月から新園舎での保育をスタートさせました。かつて、牧師館があった場所は園庭になりました、ここに映っているのが教会になります。この教会の裏に小さな山がありますが、こどもたちの遊び場に変わりました。牧師館の役割は、新園舎のチャップレン室を設けまして、今もその役割を引き継いでおります。

こちらの写真は、今年のイースターに撮影した写真です。当教会は堅信受領者23名、うち現在堅信受領者は16名、受洗者5名です。40代が3名、50代が2名、70代が7名、80代が1名、90代が1名です。写真には洗礼を受けられていませんが、体調のよい時に礼拝に出席されてい



る方（がおられます）。イースターの写真です。幼稚園の教職員も写っています。写真中央の司祭さまのお隣にお座りの小野俊作司祭さまは、2023年9月28日、89歳で神様のみ元へ行かれました。生まれ育った地で私たちを導いてくださった司祭さまです。私事ですが、ここへと導いてくださったのも司祭さまだと思っております。魂の平安をお祈りいたします。そしてこの写真に写っているメンバーが、今回のインタビューに答えてくださった方々です。

大館聖パウロ教会の小さな働きの一つとして、東日本大震災後、釜石の仮設住宅へ座布団の配布を行いました。小野司祭さまご夫妻が釜石神愛教会で牧会したことがきっかけで、釜石での冬、また仮設住宅という住環境の中で、少しでも温かく過ごしていただきたいという思いから、大館の信徒以外の方にもご協力いただいて、座布団を手作りして、2011年から2013年の夏まで、合計で1,646枚もの座布団を、仮設住宅へお住まいの方々へ届ける活動をしてきました。この活動は、既に交流が始まっていた東京聖マーガレット教会の皆さんと一緒に行いました。「釜石の支援を一緒にできたことは、自分たちの教会ではできなかったことで、素晴らしいことだった」と、東京聖マーガレット教会の海宝良子さんからも声が届いております。また、釜石支援センター望のボランティア活動の一つ、「きりたんぽを食べる会」にも参加しており、現在も交わりを続けております。

ここから資料に沿って、大館聖パウロ教会のメンバーの思いを紹介させていただきます。「元気になる教会」と題しまして、この映像はインタビューの前におやつをいただいている時の映像になります。礼拝後、聖堂の掃除をして、たまには、「いつ見てもきれい」という柔軟さを持って座ることがありますが、こうしてお茶を飲みながらおしゃべりをしています。この時の話題は、こちらにいらっしゃる93歳の木村アヤさんが、骨折をした

時の状況についてでした。木村さんは1人暮らしです。骨折をした時に電話をしたのが、教会の信徒であります小田切光子さんという方です。この時は、「慰めてほしくて電話した」と笑いながらおっしゃっていました。このお二人の関係はすごくすてきだと思っています。その木村さんが、こうお話ししていました。

※録画

木村アヤ みんなに言いたいことは、この人たち全員に、私は感謝感謝なのです。本当に皆さんにありがたいと思っています。この年でしても、みんなに迎えられて、本当に感謝のみです。まして送り迎えもしていただいています。

※録画終了

中村 字幕を付けていただいてありがとうございます。私は、このおしゃべりも、元気になれる一つだと思っています。普段は1人で暮らしている方も、ここで何げないおしゃべりをして、笑って。ですが、このおしゃべりの中に、自分の昔のこと、今のこと、将来のことを話して、それを聴く。それが特定の誰かではなくて、みんなと共有する。自分の信仰についても話すことができる場で、「ここは職場にもない、家庭にもない雰囲気がある」と答えられた方もいらっしゃいました。ここでお話をされている方は、本当に毎週、礼拝にいらっしゃいます。「なぜ礼拝に毎週いらっしゃるのか」ということを聞いてみました。藤田志保さん、原欣子さんの声です。

※録画

藤田志保 でもうちのお父さんも、来ないと、「どうだった？誰来てたの？」とか。今までまずお母さんと入れ替わりっていうか、つながれるように引き継ぎのように来ている感じだけど、お父さんも来ない日も多いけど、「今日どうだった？」とか言うし。「あした行くか？」って。「すごい疲れてる、遅番で帰ってきて疲れて、起きられたら行く」。それか「俺行ってくる」とか。

原欣子 今年もほんとに休むことが多いけれど、来てお祈りして、すごくすがすがしい気持ちでみんなに会えて、家に帰るうれしくて、「やったじゃないのっ」てガツツポーズする。玄関で、「行ってきた」「やった」って。そんな感じでおります。

※録画終了

中村 私は教会のメンバーとして、一人ひとりがさまざ

まなことを抱えていらっしゃることを、ほんの少しですが知っています。その皆さんに、いろいろな思いを抱えながらも、礼拝で神様と自分と静かに向き合う祈りの時を過ごすことができること、おしゃべりでいろんなことを共有して、また次の週の力にする、礼拝に行けることへの、感謝と喜びがあると感じました。

大館聖パウロ教会は2004年3月から定住の牧師が不在となり、管理牧師の下、礼拝を守り続け、約19年になります。朝の礼拝から「み言葉の礼拝」になり、以前は信徒奉事者が中心というより、任せていた部分が多かったように思います。ですが、2019年に「東北教区宣教方針ミッション・ステートメント」が制定されまして、宣教の方針の柱である、「聞く」「ささげる」を実現するために、またこれからのために何ができるだろうか、何をすべきだろうかということを堅信受領者総会で共有しまして、「少人数を生かして、一人一役」を合い言葉に、奏楽、聖書朗読、み言葉の司式、代祷、月報の作成、祭壇のお花当番など、1人が多くの役割を持たず、でも1人が何でもできる、教会のことなら「あれがどこにある」までみんなが分かること、一人ひとりが役割を持って礼拝の準備をすることから、礼拝を守り、教会の維持管理までみんなが一緒になって関わり、いろんなことを共有し、励まし合って乗り越える。言葉にすると、大館聖パウロ教会には、こんな雰囲気があると思っております。

一人ひとりができることをささげる(ということ)、「どんな思いを持って実践していますか」と聞いてみました。田畠瑠美子さん、小田切光子さん、武田紘子さんが思いを語ってくださいました。

※録画

田畠瑠美子 ここ2、3年、奉事者だけでなく、みんなでやるというのは、珍しいことではないかと思う。

小田切光子 それが今まで、聖職候補生の戸枝正樹さんや司祭さまに頼っていたのです。「委員さんが何とかしてくれるだろう」とか。「教会はみんなが一緒に歩むところ」っていう自覚もなく、出席していた。しかし、「自分の役割をそこで一つ持つて一緒にささげるっていうのがうれしい」というのを聞いた時に、「よかった、私もそうです」と言いました。特に東京から来た人は、東京の教会とまた違う感じを持たれたと思います。

武田紘子 まさにそうですね。私は特に毎週行けたわけではないので、いつもお客様のように、「いつもすみません」と言ふのが多くて。そういうふうな会話が多く

て、「申し訳ない」という思いがすごく強かったです。だけど、こちらへ戻ってお役をいただき、それがすごく神様に向かう気持ちを、いつも押していただいている気がします。それがだんだん喜びに変わっている自分がいるって、この頃気がつきました。

※録画終了

中村 当教会は2007年から東京聖マーガレット教会と、祈りのパートナーシップ教会として、今年で16年になる交流が続いております。祈り合うことから始まった大きな教会と小さな教会のつながりには、大きな恵みがあり、時には励みになり、学ぶ機会を与えていただき、人とのつながりは力にもなり、何よりも毎主日、祈り合うことで信仰生活が豊かになることを実感しています。それはお互いの教会で感じていることです。次のスライドは、聖マーガレット教会の皆さんからいただいた声です。思い出とともにお話をくださいましたが、少し割愛させていただきました。

※録画

Iさん パートナーシップができあがったことで、「代祷って、こういう意味合いがあるのだな」ということをあらためて感じることができました。

福永典子 こうしてパートナーの方が、離れた場所でもいてくださって一緒に祈ることができるということが、すごくつながりとしてうれしいことだなというふうに思っています。

海宝良子 大きいとか小さいとか、信徒がたくさんいるからとか少ないからとかっていうのは、本当にそうではないっていうのを、大館の方々との交流をしている中で感じています。大館の方と一緒に礼拝をするたびに、そのお一人おひとりの信仰っていうのもじかに感じる、そういう機会が何度か与えられてきました。私が今、このマーガレット教会で信仰生活を送る中で、とてもそれが励み(となり)、強められています。それが恵みなのかな、というふうに感じています。

齋藤潤子 (大館聖パウロ教会に)伺った時に、やっぱり教会が大きいとか小さいとかっていう、そういう観点から見たときには、「やっぱり私たちマーガレット教会は大きい教会にいるんだ」ということ自体をもう少し考え直さなきゃいけないなっていうことを感じました。お一人おひとりの大館の皆さまの、教会の働きの姿勢と

いうのは、私たちが持っていないものです。自分の家庭を守るような教会の守り方、そういうのをきっと皆さんに示して礼拝していらっしゃるというのは、すごく感動的でした。

松村福司郎 交流を途切れることなく続けていけば、またそれに伴って人も流れてくるのではないかという気がするので、続けていきたいなと思っています。

海宝歩 「若者たちが、どう大館聖パウロ教会と交流できるか」っていうことを主軸に、僕は考えていきたいなと思っております。かなり直近の話にはなるかもしませんけれども、例えば若者を引き連れて雪かきに向かうだとか、そういうことでもすごい彼らは楽しんでくれると思いますし、もしそちらが嫌でなければ、嫌ってことはないと思うんですけども、全然、そういう働くことに関しては「嫌だ、面倒だ」と言うような子たちではないので、そういうことから、若者ができることを主体に交流できればと思っています。

海宝晋一 苦しみや難題に出会うたびに、私たちはこの交流を通して励まされ、支えられてきました。互いの祈りの上に神様は全てを包み、道を示してくださいます。聖書では、「互いに～しなさい」との教えが繰り返されます。「互いに愛し合いなさい」との新しい掟、「愛によつて互いに仕えなさい」「互いに重荷を担いなさい」「励まし合い、お互いの向上に心がけなさい」など。そして、「互いのために祈りなさい」。これからも両教会が祈り合うことで、その輪が教会の中に、地域の中に、愛し合う心となって広がり、その上に神様の祝福が与えられることを願っています。

※録画終了

中村 次のスライドでは、植松功さんと足立征三郎さんが、大館の日曜学校についてお話ししてくださいました。

※録画

植松功 大館の教会の祈りの生活は、このマーガレット教会とは全く規模の異なる教会の中で、非常に誠実に心を込めて祈りがささげられていて、特に私の場合は、大館の日曜学校にとても感動して、その時のことこの教会に戻ってきて、日曜学校の皆さんに報告しました。

足立征三郎 こどもたちが礼拝堂に入ってくる時、「イエス様おはようございます」って声かけて入ってくるん

ですよね。献金もみんな一緒にするし。こどもたちは黙ってその礼拝の支度をする。黙って、ろうそくに火を付けたり、式文を用意したり。そういうようなこと、同じようなことをマーガレットのとある人に、個別ですけど、お話ししたことがあります、涙を流して感動されていましたね。

※録画終了

中村 ありがとうございます。このお話を聞きまして、当時の大館の日曜学校は担当する教師も少ないという現状にありまして、「礼拝のいろいろな役割をこどもたちに担ってもらおう」と始めました。こどもたちは、喜んでやりたいことを自ら行い、それでも人手が足りない時は一緒に来た保護者の方に司式をお願いしたり、聖書を読んでもらったりという時もありました。

現在、この日曜学校は、教師と、欠かさず来てくれるたった1人の小学生とで続けています。1人でもいる限り、可能性はあると信じて日曜学校を続けていきたいと思いました。次のスライドでは、祈りのパートナーシップによって生まれた新しい視点について、またどのように教会生活に生かしているかということを、大館の小野静子さん、戸枝忍さんがお話ししてくださいました。

※録画

小野静子 分かりやすい言葉で知らされる、それから写真や何かをくださる。足立征三郎さんが、高橋宏幸主教さんの、茶道を通してのいろんな思い（を送ってください）、それから海宝良子さんがくださったナザレ修道会の講話の印刷物とか、ああいうものを具体的に送っていただくことで、面倒くさい教会のことの本当に何千分の一かもしれないけど、「そういうことなのか」と知らされることが、私は一番うれしいことでした。

なかなか聖書の勉強会も、あればみんな分かるわけでもないし、本当に教会のことって面倒くさい言い回しが多くて、じれったいほど分からなければ、ああやって知らされることで、少しでも私たち、教会のことが分かるっていうチャンスを与えられたな、って思っています。

戸枝忍 マーガレット教会との交流は、全然違うっていうか、「マーガレット教会に行っていろんなものを実際に聞いて、分かる部分と、今まで他のところに行ってきて、ただ交流した部分とでは、全然違うな」って最近、思い始めています。なので、単に交流するだけでないっていうところは、いいところだなって思いますね。

※録画終了

中村 主日礼拝でお互いを覚えて祈り合う、教会報や月報を送り合う、時には近況報告の文書を送る、メールのやりとりをする、バザー等の行事を共有する、東京聖マーガレット教会からの印刷物を通して学びの機会をいただく、聖歌番号を送っていただく、可能な時は人との交流をする。この交流から、お互いに賜物を与えられただけでなく、自分たちでは気付かなかったことへの気付きが与えられました。神様につながる両教会が祈りのパートナーシップによって心を開いて、祈り合って、支え合い、成長し合うことができた16年でした。この先も、「おかえり」、「ただいま」と言い合える交流を続けていけたらなと思っております。

続いて、「幼稚園と共に」です。教会と共に歩んできた大館幼稚園のことについて、少しお話しさせていただきます。

教会に隣接する大館幼稚園は105年もの間、教会と共に歩んできました。教会の皆さんからお話を伺うと、「『大館幼稚園の教会』といつても良いと思う」という声があり、信徒の皆さんも幼稚園との関わりが深い方々がほとんどです。このたびの大館幼稚園の改築も、新園舎を改築する決断を後押ししてくださったのも、教会に関わるたくさんの方々、そして大館の信徒の皆さんです。規模をそのままに、園舎跡地に新園舎を建て、定住牧師が不在になり、築60年以上経過し老朽化が進み、管理が難しくなった牧師館を解体すること。しかしその役割を引き継ぐために、新園舎にチャプレン室を設け、牧師館があった場所を園庭にするなど、信徒の皆さんと話し合い、園舎内の内装に至るまで共有し改築を進め、2023年4月から新園舎での保育をスタートさせました。

大館幼稚園は大館に初めてできた幼稚園であり、今は大館にたった一つだけ残った、定員25名の小さな幼稚園です。開設当初から、幼子キリストへの使命を果たすべく保育をしてきました。神様の愛を、愛を持ってこどもたちへ伝え、こどもたちが愛されている中で自分らしく育つ、心を育てる保育を実践してきたつもりです。ここに未来を託してくださっている、小野静子さんの声です。

※録画

小野 心を育てる姿勢を磨いていってほしい。磨いてもらう、それが希望ですね。そのために私たちは幼稚園のために何ができるか考えなければいけないと思いますけど。本当に、幼稚園があって（こそ）の教会のような感じもします。

※録画終了

中村 教会も、一緒になって地域のこどもたちを育てる、そのために「自分たちは何ができるだろうか」と考えてくださっていることは、幼稚園の園長として本当にうれしい言葉でした。最後に、今の不安とこれからの希望について、お話をいただきました。

※録画

小田切 自分自身の健康への不安、それと牧師が忙し過ぎて、牧師の健康も不安。それが即、教会の動きとか内容に関わってくる。牧師への不安は、こういうこと聞いてもいいのかな、「忙しいから今日はさようなら」というか。そうすると、しゃべりたいこともしゃべれないで終わる。そして今はみんなメールとかそれだけで解決して、その裏にある司祭さんの思いとか何も分からぬところもあります。やっぱりそれぞれの人柄にもよりますけど、そこが不安ですよね。

あと教会全体の不安のことも、教会全体のこの先10年。

小野 1年も2年も。今、心配。

木村 去年までに比べたらはるかに多いわけでしょ、逝去者数は。

小田切 残念ですけど、大館も4~5人が召されていった。でも、たくさんお働きをいただいた、その人たちが残した笑顔なり触れ合いなり、そういうのを私たちがバトンを受けて、若い人たちに繋げていきたいと思いますけれども。不安ですね。

田畠 司祭さまとの接点が1年に1回でも、こうやって食べながらでも（あれば）。何気ないことよ。「今こうだ」とかね。

小野 むしろそのほうが大事よね。

田畠 聖書勉強会とかそういうことじゃなくて、ごく普通の会話の中で。司祭さまたちのことを考えると、とてもとても時間的にも（難しい）。

小野 私自身は、地域との関わりや、ボランティアを何もしたこともなかったし、教会を出たところでのつながりが持てたらとってもいいなって思いました。その時もすごく感じていたんですけど、今、初めて名前を出しましたけど、田畠さんの地域とのつながりがなかったら、座布団のプログラムは、2年間は続かなかったでしょう。

教会だけだったら本当に限りがあるし、教会で（人の）絶対数が少ないのであるから、それでも一生懸命させてもらつたけど、それ以外の応援のほうがとっても多かったです。

そういう意味では、難しいけど地域との、具体的にどうしたらいかっていうところも分からぬが、例えばマーガレット教会なんかは、教会のそばで夜店や何かある。そのところに参加なさる。それも1回（限り）ほつんとじゃなくて続ける、っていうことがすごいことだなって感じていました。この辺は、同じことは無理だし、いろいろ難しいけど、それでもそういう何か、地域との関わりを持ち続けられればね。

一つ、これはとてもマイナスな思考かもしれないけど、長い歴史を考えた時に、「大館聖保羅教会」っていわれるような、あの時代から考えただけでも、いい時ばかりじゃなかったの。すごく大変な、お一人おひとりだけの時もあったの。それを私たちは忘れないようにしなければ。

その時にご苦労があって、そのご苦労を私たちができるわけじゃないけど、ほんとに私は、「今これで住まいを変えれば、施設に入れば、教会に来ることもできなくなる」っていうことを聞かされて、今、一番ショックを受けています。

そういう状態があることも現実だし、それを受け止めながらも、やっぱり「長い歴史の間、いいことばかりじゃなかった」っていうことを少し思って、あんまり悲壮な思いしないで、来年心配だし、その次ももっと心配だけど、今やれることを一生懸命やって過ごしたほうがいいのかなって、思い始めています。

※録画終了

中村 大館聖パウロ教会は小さな教会です。スライドでは割愛させていただきましたが、不安の一つに、小さな町の小さな教会ゆえに、新宗教との違いが伝わっておらず、教会の扉が開いていても入ってくることができない状況があることも、話題として出ました。東北教区の宣教方針にあります、「教会を地域に開く」を実践していきたいという思いがあるのですが、このことから難しさが先に立っています。

ですが、教会の働きにも、座布団の活動など、地域の力を貸していただいたからこそ、できた活動もあります。そして、スライドの中には「今のままでいい」という言葉がありました。今のままに加えて、「学びたい」という希望もありました。学びの時をもって知るということ。また「知ったことをみんなで共有することでさらに強められ、立ち止まっていることへの先へと進んでみようという力になるかもしれない」、そういうお話をしています。

した。

東京聖マーガレット教会の塚田重太郎司祭さまが大館へのメッセージで、「礼拝や教会が信徒の賜物を見いだし、引き出し、用いることで、教会が元気になる」とおっしゃっていました。私たちの側から見ると、「神様が私たちに与えてくださった賜物である、私のできることを、喜びをもってささげることで、また学んで新たに与えられた賜物を生かすことで、教会が元気になる」ということだと思いました。先人たちが今以上の困難を乗り越え、私たちに歩むべき道を残してくださいました。この道を時々は振り返りながら、元気になる教会が元気なままであり続けられるよう、一人ひとり力を合わせて祈りつつ、これからも歩みを進めてまいりたいと思います。

大館の小さな教会の物語をお聞きくださいり、また、この場を与えてくださいましたことを、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

■ 質疑

越山 ありがとうございました。屋我地聖ルカ教会、巖原聖ヨハネ教会、大館聖パウロ教会の皆さん、それぞれこの宣教協議会のために、ほんとに長い間準備をして、このようにすてきな物語を伝えてくださいましたことを、心より感謝申し上げます。予定していた時間が9時まででございますけれども、せっかくですのでほんの数分、会場の皆さんから、3つの教会の物語を聞いて、感想とか、少しこメントが1人、2人あると、とてもうれしいと思います。ぜひ拳手をしてご発言いただければと思いますがが、いかがでしょうか。

片山修 横浜教区の林間聖バルナバ教会から来ました片山修です。3つの教会のお話を聞いて、それぞれすごく、それぞれの教会によって工夫があり、頑張っているというのがすごく伝わりました。特に屋我地聖ルカ教会の兄弟の話を聞いた時に、自分も兄弟でサーバーを小学生からずっとみんなやっているので、すごく親近感が湧いて。なので、同じサーバー仲間として頑張っていきたいなと思いました。以上です。

越山 ありがとうございます。せっかく3つの教会が丁寧に物語を届けてくださいましたので、後ろのホワイトボードの所に、3つの教会の皆さんへ付箋を用意してあ

りますので、この協議会が月曜日までありますので、お時間のある時にコメントを書いて、そのところに貼っていただければ、それをそれぞれの3つの教会の皆さんに協議会からのレスポンスとして私たちの思いをお届けすることを、皆さんにご協力いただければと思いますので、ぜひ後ろの付箋に時間のある時にコメントをたくさん貼って、お届けしてあげたいなと思っております。

それでは、「私たちのあゆみ～物語を聴く」はこれで終わりとなります。あらためまして、3つの教会の皆さんに拍手をしていただいて。この物語を終えるに当たりまして、終わりの祈りとして島司祭より祈っていただいて終わりたいと思います。

島 お祈りをいたします。

憐れみ深い父なる神様、今日私たちは全国各地からこの清里に集められ、今、宣教協議会「物語を聴く」のプログラムの時間を共に過ごすことができましたお恵みを、心から感謝いたします。日本聖公会の全ての教会は、どの地にあろうと、人が多かろうと少なかろうと、また歴史が長かろうと短かろうと、あなたによって必要とされ、あなたによって立てられたものであるということを、今、

新たに心に刻むことができました。どうか日本聖公会の全ての教会の働きを、ますます祝し用いてください。そしてそこに集う一人ひとり、私たちに与えてくださった賜物を存分に生かして、あなたの心が表される世界をつくり上げるために、私たちが小さな働きでもお手伝いをなすことができますように導いてください。

今日、物語を聞かせてくださった屋我地聖ルカ教会、厳原聖ヨハネ教会、大館聖パウロ教会を、ますます祝してください。そして、こうしてたくさんの教会とつながっているということに励まれ、強められ、どうかますますこの教会の方々が信仰の喜びが増し加えられ、よりよき教会生活をこの先も送ることができますように、常に恵みをお与えください。このプログラムを終えるに当たり、このお祈りを主イエス・キリストのみ名を通してみ前におささげいたします。アーメン

ハンドブック掲載資料 ❶ 沖縄・屋我地聖ルカ教会

や が じ 屋我地聖ルカ教会の小さな動き

私が聖ルカ教会の管理牧師として仕え始めたのは2017年4月からです。当時の信徒は5人、訪問陪餐している95才の高齢者1人、仕事の為たまに出席する信徒1人、赴任前月受洗したばかりの小学生と中学生各1人、そしてまだ洗礼を受けていない中学生信徒のお母さんだけでした。だから毎主日礼拝もまともにできない状態でした。特に午前中は愛樂園祈りの家教会の礼拝と、月1回4つのセンター（愛樂園の入所者は4つのセンターに分かれて暮らしています。）を廻る家庭聖餐のため、午前中の礼拝は無理であり、前の牧師がしてきた通り、午後8時に礼拝を献げました。陪餐は、受洗している小中学生の2人しかできない状態でしたが、出来るだけ聖餐

式を行いました。そうするうちにお母さんも洗礼を受け、兄たちと一緒に洗礼を受けることを断った息子さんも洗礼を受けました。それからお母さんと一緒に3兄弟の活動が活発になりました。祈りの家教会の信徒は皆お年寄りで、子供たちに会うことをとても喜ばれました。そこでクリスマスイヴには、教会が用意したプレゼントを持って各センターを訪問し、キャロルを歌ってキリスト誕生の喜びのお知らせを伝えました。主イエス命名の日（元旦）の礼拝は祈りの家教会と合同で献げ、愛樂園のおばあ、おじいちゃんからいただくお年玉も1つの楽しみでした。

祈りの家教会は外部からの訪問客が多く、歓迎会の時には3兄弟も参加し、長い間練習してきた空手を披露するように頼むと、ちゅうちょなく喜んで技量を発揮してくれました。もちろんお母さんも積極的にサポートしてくれました。洗礼後2年目からは、礼拝のサーバー役を

担うようになり、特に祈りの家教会の復活前夜やクリスマスイヴ礼拝では、なくてはならない存在になりました。

そして教会とは「お父様の家」であるという意識を持ち、全信徒に役割を与え、「教会に行けば何かことがある」と意識するようになり、「教会のことは司祭1人で担うことではなく自分たちも一緒に担うべきことだ」と認識するようになりました。

2019年末から始まったコロナ禍は、教会まで影響を及ぼし、祈りの家教会の状況はさらに厳しくなり、家庭聖餐が中止となり、いまだできない状態が続いています。しかし神さまは、またほかの道を開いてくださいました。それは、屋我地聖ルカ教会の礼拝時間の変更でした。祈りの家教会の礼拝は朝9時、家庭聖餐はできない状態となつたため、聖ルカ教会の礼拝は午前11時から可能になりました。緊急事態宣言の時にはZOOM礼拝をしましたが、それ以外は対面礼拝をして、礼拝の後には教会でやるべきことを自ら探して行いました。例えば、掃除や草刈りなどをし、隣のハンバーガー屋さんのものを一緒に食べることも、楽しいことでした。

そうするうちに、仕事の為にたまに出席していた信徒も定年退職し、教会のことを頑張ってやっている新しい信徒の姿を見て、「自分も頑張ってする」と言い表し、みんな教会のことを熱心にしています。また屋我地出身で、他県で洗礼を受けた信徒が故郷に戻ることによって、20歳以上の信徒数が3人になり、教会委員会が構成できるようになりましたり、2022年からは教会委員会を開くことになりました。

3兄弟は高校生・大学生になり、教区の合同礼拝の時はサーバー役の担当、大学生になった長男（ヤコブ）は教区の青年代表として活躍しており、今回の宣教協議会にも参加する予定です。また、嬉しいことに、3兄弟の父親も洗礼を受けるために準備中です。

信徒数が少ない教会では「教会の5要素」と「宣教の5指標」について、1つずつ認識して計画を立てて実行することは出来ませんが、信徒たちが自ら神の国を広げるべき働き手だと自覚して、生活の現場で少しでも実践してみようと誓うのが、まさにそれにあたると思います。

最後に3兄弟の母親であるサラさんのお話を紹介します。

「私たちが、教会に通えるのは、教会が一番落ち着く場所であるからです。そして、少しずつ役割が増えたからです。掃除や片付け、聖書を読むこと、奉獻、今は、子どもたちはサーバーとして司祭様の側で礼拝に参加しています。役割が増えた事で子どもたちに、責任と自覚が芽生えたと思います。うれしいことに、次男は「司祭になりたい」と話してくれました。教会は、私たちが、楽しく元気に成長できる素敵なか所です。」

(管理牧師 司祭 ベネディクト高英敦)



いづはら
厳原聖ヨハネ教会の物語

1. 概要

厳原聖ヨハネ教会は、長崎県の離島にあります。対馬は九州本土と朝鮮半島の間、博多から130キロ、韓国釜山から50キロの位置にあり「国境の島」と呼ばれます。その地理的条件から、長く日韓外交、貿易の中継地としての役割を果たしてきました。九州教区においても、2018年に、大韓聖公会釜山教区との協働関係締結を前に、両教区の代表者がこの対馬に集まり準備会を開催しました。教会は城下町厳原の武家屋敷通りにあり、美しい石壠や武家門、日本庭園を有する珍しいキリスト教会です。牧師館は家老の屋敷であった建物を修理しながら、今でも使用しています。

2. 地域との関わり

以前は、AA（アルコール依存症者の自助グループ）に会場を提供したり、伝道コンサート、チャリティー・バザーを開催し、地域に幅広く参加を呼び掛けていました。今は近隣の障がい者作業所、NPO法人と、助け合い協力し合う関係を大切にしています。またカトリックやプロテスタントの他教派とも交流を持っています。現在、電話もFAXもメールもない当教会において、外部への唯一の情報発信手段は掲示板ですが、それを見て礼拝に来て下さる近隣の方がいるのは嬉しいことです。

3. 現状

聖公会の対馬伝道は1903年頃に開始されました。最も教勢が伸びた時は信徒数40～60名という時代もありましたが、現在は現在堅信受領者6名、主日礼拝出席者は1～3名という状況で、人員的にも経済的にも存続が危ぶまれています。しかし現在、柱となっている信徒3名は「ピンチをチャンスに」をモットーに、自分たちにできることを分担しながら教会を支えています。

阿比留秀子さん…最年長85歳。交代要員がおらず30年近く会計を担当しています。窮状にある教会財政を任せ、精神的、経済的な苦労が尽きませんが、頑張り続けています。

木寺由美さん…教役者がいない主日は、祭壇を整え、花を飾り、司式・勧説を準備して、み言葉の礼拝を行います。毎主日に教会を開けて、1人でも礼拝を守ります。週報印刷、郵便物整理、掲示板更新、信徒の情報収集など、総務関係全てを担っています。家族の協力なしには教会の奉仕はできないと感じています。

黒田このみさん…営繕と涉外を担当しています。教会内外の環境整備や無人の教会・牧師館の見回りは、お連れ合い（未信徒）の力が大きな助けとなっています。

宣教協議会当日は、上記3名の方々に信仰の喜びや大変さを語っていただきます（録画予定）。



4. 10年の実り

信徒数が激減し、全てが衰退している中でも、同時に神様は恵みを与えて下さっています。「誰にも頼ることができないから自分がしなくては」と、信徒の意識は間違いなく高められ、強められました。家族も少しづつ教会の働き人として変えられており、必要な時に惜しまず協力してくれます。一人ひとりの祈りと熱意により、本年7月、当教会は宣教120周年を祝いました。私たちにとって奇跡の物語は、教区内から多くの仲間が船や飛行

機で駆けつけてくれたこと、他教派の方も参加して下さったこと、そしてこの5月に執事の訪問で20年ぶりに聖餐に与かった信徒が、病気で不自由な体ながら、転びつともバスで教会までやって来て共に祝ったことです。この教会の将来の姿は不透明ですが、私たちはエキュメニカルな協働も視野に、主の備えられる道を受け入れ、対馬の地で地道に歩む者でありたいと願います。

ハンドブック掲載資料 □ 東北・大館聖パウロ教会

おおだて 大館聖パウロ教会のあゆみ

秋田県大館市概要

秋田県大館市は県北に位置し、人口68,782人（2022年4月現在）四方が山に囲まれている盆地で山、川、田んぼがあり、田園風景が広がる。年少人口が減る一方で老人人口が徐々に増えており、2040年には老人人口が生産人口を上回ると予想されている。

大館聖パウロ教会のこと

教会は市の中心部にあり、かつては交通の便もよく商店街も活気がありにぎわっていたが現在はシャッター通りとなりバスステーションも閉鎖され、日中は道行く人もまばらとなった。

現在堅信受領者数16名、堅信受領者23名、受洗者5名。現在堅信受領者の年代別は40代3名、50代2名、60代2名、70代7名、80代1名、90代1名。2004年3月から定住牧師が不在となり、管理牧師のもと礼拝を守ってきた。主日礼拝は、第2・第4日曜日に聖餐式。第1・第3日曜日はみ言葉の礼拝。

元気になる教会

2019年に東北教区宣教方針（ミッション・ステートメント）が採択された。宣教方針の柱は「開く」「ささ

げる」この方針を実現するため「ひとりひとりができる事をささげる」を実践。信徒奉事者を決めず、だれもが教会・教区のことに関心をもち、かかわり、主日礼拝は「一人一つ」を合言葉に奉仕している。

礼拝を守り、教会のために自分にもできることがあることに喜びを感じ、元気になれる場所。日曜日の午後にぎやかな笑い声が響く。

「ひと」「祈り」がつなぐ、恵み

2007年「祈りのパートナーシップ教会」として加藤博道主教の紹介で東京聖マーガレット教会との交流が始まった。大きな教会と小さな教会とのつながりは両教会の恵みであり、励みにもなり、学びにもなっている。人のつながりが力になり、祈りでつながることで信仰生活が豊かになることを実感している。

幼稚園と共に

敷地内に大館幼稚園もあり、1918年からあゆみを共にしてきた。耐震診断の結果を受け、園舎改築を決意し、同時に定住牧師不在が続き、築60年以上経過し老朽化が進む牧師館を解体することにした。これまでの牧師館の役割を新園舎の一室に引き継ぎ、牧師館があった場所は園庭に変更。2022年着工、2023年4月から新園舎での保育をスタートさせた。大館聖パウロ教会と協働し未来へとつないでいく使命をより一層強めた。

希望をもって祈りつつあゆむ

現在堅信受領者のうち半数以上は70歳以上であり、新しく教会を訪ねてくる人もなくこのままでは信徒減少、超高齢化が目に見えている。今ある問題を皆で共有し、信徒一人ひとり力を合わせることで乗り越えることができたこともある。今まで内に「ひらき」「ささげて」きたことをこれからは積極的に外に向け、幼稚園のこどもたち、保護者、卒園生、地域と教会とのつながりを強め、深めていくために動きだしている。

（パウリナ 中村久美子）
なかむら くみこ



テーマ・聖句・思いの共有

このスライドは、11月11日（月）9時45分からのプログラム「2023年宣教協議会について」にて、本協議会のテーマや趣旨に関する説明のため、実行委員会より参加者に提示した資料です。

1

テーマ・聖句・ 思いの共有

—宣教協議会の導入として—

2

1. 宣教協議会とは何か

宣教 = 神様が主体となってなされる「神の国への招き」のこと。
また、神の国へ招かれた私たちが、
今度は神様に派遣され、他の人々を
神の国へ招くこと（=ミッション）。

3

もう少しあみ砕くと――

- ・私たちは神様によって「神の国」に招かれ、洗礼を受け、「神の民」の一員になって、神様との交わりのうちに信仰生活を送ることができるようになった。
- ・「神の国に招かれた」ということは、同時に、「他の人々を神の国へ招く」者として立てられたということ。
- ・今度は私たち自身が、神様によって「他の人々を神の国へ招く」使命を与えられ、派遣される。神様の働きの担い手となる。
- ・「ミッション」＝「宣教」「伝道」「使命」「派遣」

4

宣教（神の国への招き）の二つのあり方

- ①福音を宣べ伝えること。
イエス様の救いの出来事、イエス様の教えと行いを宣べ伝えること。
- ②イエス様の生き方を自らの生き方として生きること。
イエス様の生き方に従い、これを模範として生きること、生きようすること。

私たちは、「言葉」でなされる宣教と、「行い」（生き方）でなされる宣教、二つの宣教のあり方を通して、他の人々を神の国へ招く。

5

協議会 = 参加者がプログラムを通して、ともに学び、気づき、語り合い、新しい宣教（神の国への招き）のかたちを発見していく場。

宣教協議会とは――

- ・宣教（神の国への招き）とは、福音を宣べ伝えることと、イエス様の生き方を生きることの二つとして捉えることができる。
- ・新しい時代に向け、私たちはどのような姿勢・歩み方でこの宣教を実現していくのか、実現していきたいのか。また、そのためには何が必要なのか。
- ・これらのことと、参加者がプログラムを通して学び、気づき、語り合い、最終的に言葉のかたちにしてまとめ、**これから私たちの歩みのための、一つの大変な指針を生み出す会議**。それが宣教協議会。

2. テーマと主題聖句

2023年日本聖公会宣教協議会のテーマ

「いのち、尊厳限りないもの
～となりびととなるために～」

主題聖句

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである」（ヨハネによる福音書第15章5節、聖書協会共同訳）

「まことのぶどうの木」であるイエス様とつながり、力をいただいてそこから伸びていく、そのようなさまざまな枝の集まりが、今回の宣教協議会全体のイメージ。



いのちの現場から聴く

【語り手プロフィール】

あだち みき

— 安達美樹さん

大阪府豊中市出身。1992年より幼児教育に携わる。1999年公益財団法人KEEP協会清里聖ヨハネ保育園入職（～2008年）、2010年大阪教区聖ミカエル保育園（～2022年3月）、2022年4月より再び清里へ。豊かな自然環境の中でこどもたちとともに毎日森に出かけ、神さまのすばらしさや愛を分かち合いながら歩む日々を過ごしている。

ほりえ ゆり

— 堀江有里さん

信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）代表、日本基督教団牧師（京都教区巡回教師）、公益財団法人世界人権問題研究センター専任研究員。関西学院大学ほか非常勤講師。専門領域は社会学、ジェンダー論、クィア神学。1994年より性的マイノリティの相談業務に従事。

たけさこいたる

— 竹迫之さん

日本基督教団・白河教会牧師、1967年秋田市生まれ。高校3年生時に、いわゆる統一協会に知らずに勧誘され入会、活動中の負傷を機に19歳で脱会。統一協会をはじめとする「カルト」の問題に関わる中で牧師となり、現在、主に脱会当事者や2世脱会者の精神的ケアに関して研究中。

はんだ

いくこ

— 半田ウィリアムズ郁子さん

英國国教会リーズ教区司祭。元英國リーズ大学病院チャプレン。現在聖路加国際病院にて非常勤チャプレンを勤め、ICU（国際基督教大学）では、大学教会の説教を定期的に担当するほか、教職員及び学生達と「和解」について学ぶ読書会や、学生のために安全に不安を話せる「てばなすペーす」を開催している。また、英國での第2次世界大戦における元捕虜の方々や家族との和解の働きにも長年取り組んでいる。

しばもとたか お

— 柴本孝夫さん

現在、福岡聖パウロ教会、久留米聖公教会牧師。九州教区宣教局長、ほか。1965年福岡県久留米市生まれ。聖公会付属幼稚園への入園をきっかけに教会活動に関わり入信。大学卒業後福祉関係へ進むことも考えるが、勧めを受け聖公会神学院へ。卒業後、九州教区の教会を転々とする。1994年司祭按手。長らく管区の日本聖公会正義と平和委員会委員・協力委員、災害支援やホームレス支援活動に携わる。動くことは苦にならないが、机の前にいることは苦手。

■ いのちの現場から聴く：はじめに

卓志雄司祭 神様、今日この素晴らしい一日を感謝いたします。私たちの全ての思いと心と働き、また全ての賛美が主のみ旨にかなうものとなりますように。この祈りを主イエス・キリストのみ名によってみ前におさげいたします。アーメン

あらためておはようございます。このセクションの司会をさせていただきます卓志雄と申します。今回は管区事務所の宣教主事という立場で参加させていただきましたが、私は東京教区の司祭で、地域の教会はインマヌエル新生教会の牧師、そして阿佐ヶ谷聖ペテロ教会の管理牧師を担っています。どうぞよろしくお願ひします。

今から28年前の1995年8月、日本聖公会はこの清里に集まりました。本当にリアルでここに集まってさまざまな議論をしてくださった方も今、会場に何人かいらっしゃるのですけれども、報告書を通して皆さん、目を通してしたこともあるかと思います。私たちは集まって、「歴史への責任と21世紀への展望」というテーマで話し合いました。今まで日本聖公会がおろそかにしていた、いのちに対する尊い思いを、あらためて考えました。その当時の、先ほど申し上げた歴史への責任と応答、そして21世紀への展望ということで、完全とはいえないのですけれども、しうがい者と共に歩むこと、また環境問題、またパートナーシップについて話し合って、その翌年、総会で戦争責任を告白する、そういう運びとなりました。やっと日本聖公会はいのちを大事にして、となりびとどのように共に歩んでいくかについて悩み始めた、そういう歩みでした。

そして16年後の2012年に、宣教協議会が再び開かれました。先ほど話がありましたように、「いのち、尊厳限りないもの」というテーマで、宣教協議会で話し合い

ました。東日本大震災という出来事がありまして、また原発に対して、また私たちがやるべき、「いのちを尊いものとして考えて、となりびとどのように歩んでいくか」ということを、私たちは再確認をしました。そして最後の聖餐式の時、「10年間それぞれの所で頑張りましょう」と。何を頑張るかというと、丁寧な牧会を通してどのように、私たちが置かれた場でいのちを大事にしていくか。そして10年後はその収穫の祭りを行いましょうと確認をしました。

それで昨日私たちは、その収穫の祭りの一部のスタートを、共に分かち合いました。昨日、感動しました。さまざまな現場で、限られた環境の中で私たちは実りを持ち寄って分かち合いました。昨日申し上げました、実りというのは必ずしも完成したもの、あるいは喜ばしいもの、あるいはいいものばかりではないと。悩んでいることもあるし、悲しみ、また叫びなどなど、これから私たちが神様に求めていく、また「神様から声を聞いて、私たちも共に力を合わせて歩んでいきます」というその決心というのも、豊かな実りだと思います。そういう実りを、昨日私たちは聞きました、またその前に「実り持ち寄りブース」を通して、私たちの祈りの仲間がどのようにそれぞれの現場でこの宣教の働きを励んできたか、確認できました。

この時間は、先ほど笛森主教から話がありましたように、祈祷書改正に関する、キーワードとして「多彩なこと」、多彩な賜物ですね。でも私たちは聖公会という、私たちが属しているそういう枠に慣れていることもあります。昨日は私たちの聖公会という枠の中で収穫と実りを確認しましたけれども、また主を信じている、また聖公会の中の枠、また聖公会の外の枠といわれている

ところで励んでおられる方々の話を伺いたいと思います。それで先ほど話がありましたように5名の方です。それぞれの多彩な現場において、どのようにいのちを大切にして、隣人と歩んでこられ、今も歩んでいらっしゃるか、その話を伺いながら、自分自身のこと、私たちはどのように歩んでいるか、またはどのように歩んでいくか確認しましょう。これから5人の方にお話を伺いますけれども、皆さんもそれぞれキーワードを確認しながら思い巡らせていただく時間となればと思います。





こどもたちとの関わりを通して～神さまが語っておられること～

安達美樹

公益財団法人キープ協会 清里聖ヨハネ保育所

こんにちは、安達美樹と申します。キープ協会内にあります、清里聖ヨハネ保育所で、保育士をしております。このたび、「こどもたちと共に生きること」というテーマでお話をさせていただくということになりました。このような場所で私が何をお話できるかといろいろ考えたんですけども、「保育の現場でどんなことを大切にしているか」。あと、「こどもと大人がどんなふうに共に過ごしたら喜びで満たされるのか」。そして「そこに神さまはどういうふうにいてくださるのか」。そんなことを。こどもたちの映像を挟みながらお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。

これ（画像）は保育室にありますステンドグラスです。保護者の方が制作してくださったものなんですけども、イエスさまがこどもたちを祝福してくださった聖書の箇所は、私たちの保育理念にもなっています。この聖書の箇所をいつも心に留めて、こどもたち一人ひとりのあるがままの姿を受け入れることを大切に、保育をしています。保育所はここから1キロほど下った所の、清里聖アンデレ教会の隣にあります。森と直接つながっており、門とか塀などはなくて、時々、シカとかリスとかが入ってくるような感じです。朝早くリスに会えたり、夜遅くシカに会えたりする時は、すごいラッキーっていう感じなんですけども、「動物が入ってくる」というより、「私たちが動物の住んでいる所にお邪魔させていただいている」というような、そんな気持ちになるくらい自然豊かな所です。園庭というものはありませんので、こどもたちは雨の日も雪の日も、毎日森で遊んでいます。本当は皆さんに、この実際の森を歩いていただけたらと思ったのですけども、ちょっと難しそうなので、こどもたちの姿を見てご覧くださいって、感じただけたらなというふうに思います。

私のとなりびとであるこどもたちは、今はまだ大人の助けを必要として、1人で生きていくことはできませんけれども、自分の心で感じて考えて自分の世界をつくっ

て、自分で育っていく力をたくさん持っています。どんなときも四六時中一緒に居ると、「人はこんなふうに壁を乗り越えていくんだな」とか、「こんな時に心が痛むんだな」とか、「こんな時一人ひとり輝くんだな」とか、人への興味がどんどん湧いてきて深まっていきます。そしてそのことを、一緒に保育している同僚とか保護者の方たちと一緒に分かち合えるということが、とても面白くて、喜びを感じます。「私のとなりびとはこどもたちと、こどもたちにつながる全ての人々」と思っています。

そんなこどもたちと気持ちをやりとりする時に、場合によっては、こどもイコール幼い、可愛い、可愛いんですけども、「大人が教えてあげなければならない人」というような捉え方をしてしまうと、少しこの本当の気持ちや行動から遠ざかってしまうようなことがあるかもしれません。また、大人とこどもという観点から上下関係ができてしまうということもあるので、状況によって、どのようなスタンスで接するかを考えることを、とても大切にしています。一人ひとりのいのちには上下関係はないですし、完全にこどもと同じ目線で見るということは不可能かもしれませんけれども、フラットな関係はお互いが心地よいですし、そして喜びを分かち合うやりとりが豊かに生まれます。

私が保育士になったころは、もう30年ほど前ですけれども、伸び伸びと遊ぶことは大切とされながらも、保育者が指導して、保育者主体の一斉保育というものが、主だっていました。要は、「今日はリズム遊びをしましょう」とか、「今日は工作をしましょう」とかいうのを、保育士が指導するわけですね。もっと遡って私のこども時代を思い出しますと、「合わせる」とか、「そろう」とかいうことがとても大切にされていて、そういうことも大事な場合もあるのですけれども、「一人ひとりの考え方や個性が生かされる」ということよりも、「集団生活をきちんと送る」というようなことが。大切にされていたのかなというふうに思います。

近年は、こどもたちがやりたいことを、「誰とどこで

するか」、そして「準備はどのようにするか」、そんなことをこどもたちが考える、こどもの主体性ということがとても大切にされています。私たちは、こどもたちがしたいことのお手伝いをして、一緒に楽しんだり、一緒に感じたり、大人がまとめるようなことをせず、こどものその時の発見とか偶然とか、そういったものを大切にするという感覚で、一緒に過ごしています。そうするとこどもたちは、失敗しても自分のやりたいことなので、何とか工夫して、その壁を乗り越えていったり、協力したり、「今は好き勝手する時じゃないな」というのを、大人から言われなくても、自分の小さな心で感じているような気がします。結局、大人に言われてもなかなか聞いてくれないものを、何か自分の心で感じた時に、きっとこどもって、「今どんなことをする時か」って感じるのだなという、私たちのアプローチの方法を少し変えるだけで、こどもの姿がどんどん違ってくるという経験をしています。こどもの、やりたい気持ちと、それから「できた」という、どんな結果でも失敗で終わることもあるのですけれども、でも「自分なりに納得できた」という、そういう姿を喜び合って、困った時にはいつでもそばに居るよっていうような、大人の行動や関係性が大切なふうに思いながら、保育をしております。

時代が変わってきた中で、これまでと変わらず大切にしていくことと、それから今までの方法や形などにこだわらず、こどもたちにとってよい経験になるように、私たちの価値観や保育や教育も、常に見直していくということが必要だと思います。一人ひとりの違いをお互いに認め合い、一人ひとりの思いや考えが生かされる社会にしていくには、こどもたちの心や体が育まれる環境も、変わっていかなければならないというふうに思っています。

先日、1歳の子が絵本の部屋から、「絶対読めないよ」というような厚い本を持ってきて「部屋に持っていく」と言うんですけど、そばに居た保育士が、それはきっと読めないから、もっと絵がいっぱいある楽しい本を渡したんですね。そしたらその1歳の男の子はすごく怒って、これは「絶対持っていく」って言うんです。一緒に持っていたところ、すごくうれしそうにその本を読んでいたと。文字がたくさんあったのだけれども、表紙の形が良かったのか、年上の子が読んでいたのを見たのか。「でもやっぱり自分で選ぶっていうことが大事だね」というふうにお話しをしました。本当に保育士の思いに流されず、その本を、自分で部屋でうれしそうに読んでいるのを見て、「こどもたちが自分で大切にしたいことを安心して周りの人たちに表現できる、そして周りに流されることなく自分の価値観を大切にできるという環境をつ

くっていくこと」が大切だとあらためて気付かされました。

今、森に山ぶどうが豊かに実っているんですけども、よくお散歩で、みんなで探しに行くんですが、同じ境遇でも本当に姿や楽しみ方が一人ひとり違います。見つけてすぐ食べる子とか、慎重に、「これはほんとに食べても大丈夫なのか」ってじっと見ている子とか、とにかく自分のかごに、ものすごい量の山ぶどうを集めたい子とか、友達に食べさせてあげることが喜び、自分は食べなくても、みんなの口にどんどん入れていくんですね。そんな小さなそれぞれの持ち味を出して生きている姿を見て、「みんな違っていていいな」っていうふうに思います。「おいしいね」「種があるね」って言い合ったり、かごいっぱい集めた子には「いっぱい集まったね」って共感したり、自分でぶどうを取りたいっていう子もいるので、一緒に木にしがみついて取ったりとか、みんな違っているからこそ、気持ちを伝え合うっていう、そういうことも大事にしながら、共に過ごしています。

このようにこどもたちが、自然の中で遊び楽しんで、恵みをいただいているうちに触ることは、神さまと出会う一番近い場所だと思います。神さまがおつくりになった世界を、こどもは理屈ではなく肌で感じていると思います。この（映像）Iちゃんは、散歩に出かけてすぐアオムシさんに会って、この日はもう20分くらいここから動かなくて、みんなはどんどん先に行っちゃうんですけど、今日Iちゃんは、アオムシさんとお友達になる日だったんですね。それでこどもたちがこういう時間がじっくり過ごせるように保障してあげたいなっていう、他の子はいっぱい行っちゃうので、私たちはばたばたなんですが、でもIちゃんのアオムシさんと触れ合った時間は、きっと心に残るかな、というふうに思います。まだ一言二言ぐらいしかしゃべれないんですけども。でも「マンマ、マンマ」と後で言っていたので、「『アオムシさんご飯食べてる』って思っていたのかな」というふうに思いました。

今、自然っていうのは都会を離れた田舎にしかないという思いがありますけれども、でも公園の自然でも一輪の花でもいのちに触れ、自然に触れるができると思いますので、私もこどもたちと一緒に神さまに出会い、その自然の中で「神さま、豊かないのち、お恵みをありがとうございます」と喜び合いたいなというふうに思っています。

これ（映像）は森で大きなキノコを見つけたんですけども、初めて見たのか、こどもって初めて見たものって止まるんですよね。「わっ」とかじゃなくて、しばらく止まっていました。でもそのうち、ちょっと「安全なものかな」ってたぶん思ったのか、興味を持ちはじめて、もうあとはその興味があふれてしまって、このキノコさんは跡形もなくなりました。ごめんなさいキノコさん、という感じです。

これ（画像）は礼拝の様子です。直接、聖書のお話を聞くことが難しくても、生活や遊びの中に、神さまが居てくださって、目には見えませんけれども私たちを守ってくださるし、愛してくださっているということを、こどもと大人が一緒になって感謝していきたいと思います。礼拝が保育とつながるように、こどもたちの生活や遊びを見ながら、毎月の礼拝のテーマを司祭と相談して決めています。8月は、こどもたちと平和について考える時を持ちました。私の教母になってくださった方が、「こどもを育てることと、料理をすることは、似ているところがあるのよ」って話してくださったことがあります。「本来の持ち味を大切にして、一番いい時に一番いい形でその味を引き出すと輝くから、そのために心と手を丁寧にかけて、あとは神さまに委ねるの、待つだけなのよ」っておっしゃっていて。一緒にお料理をさせていただいたことがあるんですけど、ほうれん草をゆでたんですね。そしたら、「ほら、今葉っぱが透き通っているでしょ。いのちが移り変わる瞬間なのよ」って言われました。その時私はまだ20代で、いまいち意味が分からなくて、

お鍋の中を見たら確かにほうれん草が鮮やかなんですけど、どういうことだろうと思っていました。でもそれは、「ほうれん草という素材が私たちの体の中に入って、いのちに移り変わる瞬間」というようなことだったんだと、後から知りました。カイコがサナギになる時とか、土が焼き物に変わる瞬間も、そんなふうに透明になる瞬間があるそうです。「人間も、心が揺れて成長する時にそんな時があるのよ」と言っていたお話を、私は忘れられません。こどもたちの、柔らかくみずみずしい心は、生きる本能でいろいろなことを吸収していくので、毎日成長し、輝いたり、透き通ったりしていると思います。そのいのちといのちがつながって喜びを分かち合う時に、相手のいのちも自分のいのちと同じような大切なのち、存在になるのだと思います。これからこどもたちが歩んでいく社会は厳しい環境かもしれないけれど、今までと変わらず、一人ひとりのいのちに神さまとイエスさまの愛が注がれて、「あなたはあなたのままでいいですよ」「ありのままのあなたの存在が大切です」って言ってくださっていると思います。そのことを心の土台にして、大きくなってほしいなというふうに願います。神さまや人とのつながりの中で、自分が自分でいいと、お互いに大切にする喜びを分かち合って、自分の人生の物語をこれからつくっていってほしいなと思っています。

これ（画像）は山ぶどうのつるです。いつもブランコにして遊んでいるのですけれども、「ぶどうの枝につながるって、いいね」ということで、お話を終わらせていただきます。ありがとうございました。



こどもたちとの関わりを通して ～神さまが語っておられること～

安達美樹

（公益財団法人キープ協会 清里聖ヨハネ保育所）

1. はじめに

幼児教育に携わり30年という月日が経ち、こどもたち一人ひとりの尊いのちが育まれている現場で、こどもたちとともに歩みながらたくさんの恵みと喜びをいただいています。

今回「いのちの尊厳」というテーマに向き合い、「こどもたちとともに生きること」の大切さを分かち合い、皆様との交わりの機会を与えられましたことを心より感謝いたします。

2. こどもたちとともに生きること

- ・こどもは一人の人として
- ・こどもたちから教えられること、学ぶこと ～こどもはあそびの世界に生きる～
- ・こどもが持っている自ら育つ力

目に見えないものを大切にする

- ・人と人 自然と人 そして神さまと人との関係を豊かに体験していく
- ・神さまとのあい
- ・ありのままの自分を愛してくださる神さま

神さまから与えられたいのち

- ・ひとりひとりが他の誰とも同じではないかけがえのない与えられたいのち
- ・多くのいのちに出会って心が揺れる体験
- ・ひとりひとりに与えられたいのちが輝くとき

3. 心にあるキーワード

～みなさんと分かち合いたいこと～



一人ひとりの異なるところを
互いに認めあう
一人ひとりがかけがえのない
自分で受け入れられる

神さまが一人ひとりを愛して
くださっているように、こどもたち
(大人たちも)一人ひとりが愛され
大切に生かされる喜びを分かち合う
「あなたはたいせつな人」

礼拝で 生活の中で
賛美♪感謝 祈りを大切に
すぐに芽生えることはなくても
心に生き続ける

自分が自分であって良い
という感覚

神さまから与えられた
かけがえのない
いのち

自然に触れ、
遊び楽しむことを通して
すべての創り主である
神さまのすばらしさを知り、
自然(地球)を大切にする心
いのちを尊ぶ心
隣人を愛する心が
育まれる

「生きるってすばらしい！」
豊かな可能性
希望

つながって
助け合って 支えあって
喜びあって
お互い いのちの
大切さを認めあう

神さまの望まれる平和を
創り出していく

いのちを育かすもの

これからの時代を
生きるこどもたち

こどもの権利を守る

こどもの貧困

情報過多

孤 立

SDGsへの取り組み

(子育て)支援

地域のコミュニティとしての教会
～こどもが集う場所～

みんな神さまに愛されている
こども、神の家族、誰一人
置き去りにされない



性の多様性 — “となりびとと出会い、共に歩み始めた物語”とは？ —

堀江有里

日本基督教団京都教区巡回教師、信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会(ECQA)代表
同志社女子大学ほか非常勤講師

こんにちは、よろしくお願ひいたします。堀江有里申します。私は日本基督教団の京都教区という、滋賀県と京都府の教会共同体の地域で牧師をしております。1980年代終盤から90年代にかけて、大学生、大学院生をしていました。同志社大学の神学部の出身です。そのころにNCC関西青年協議会という、エキュメニカルな運動体で活動し、後に専従にもなりまして、そのころにお出会いした当時の青年たちの方々にも久々にお会いできることになります。本当に感謝しております。本来ならば日本聖公会の中に既に「性の多様性」に関わる活動を積み重ねてこられる方々やグループがいらっしゃいますよね。それにもかかわらず、他教派からお話をさせていただくこと、本当に僭越だなというふうに思っております。

少し自己紹介を別紙のほうで入れておりますけれども、いろいろやっております。日本基督教団は、日本聖公会さんと異なりまして、巡回教師という牧師の役割なんですけれども、経済保障は一切ないという状態です。ただ、京都府と滋賀県の無牧の教会に呼んでいただいて説教したり、あと性的マイノリティに関わる活動を94年からしておりますので、その活動に関わったりする牧師ということになっております。普段は、民間や行政、行政は匿名なのであまり大きな声でいえないんですが、関西の幾つかの行政の性的マイノリティ相談や、生活困窮の方々の電話相談や対面相談に、相談員として入り、研究は自己紹介の時に、「公益財団法人世界人権問題研究センター」という、すごく名前は大きいんですけど、ただ単に京都にある研究所ということです。そこで研究活動をした、幾つかの大学で、後期は関西学院大学の社会学部で非常勤講師をしております。実は私、専門が社会学でして、ジェンダー論や社会学の授業を担当しているところです。

先ほど、1994年からというふうにお伝えをしたので

すが、1994年というのは私自身が日本基督教団で牧師になった歳です。牧師になって、そのころから、20代終盤ぐらいだったんですけども、いろいろ葛藤を抱えながら、自分が同性愛者であるということを受け入れ始め、そしてレズビアンとして、レズビアンというのは女性同性愛者のことです。時々勘違いをされるんですが、私は、性自認は女性です。生まれた時に女性として生まれまして、自分自身の性別の認識は女性なんです。ここが一致しているタイプなので、トランスジェンダーではなく、シスジェンダーです。片仮名がいっぱい出てきてよく分からなくなると思われるかもしれないんですけど。いつもマイノリティにだけ名前が付いていて、マジョリティには名前が付いていないというのは気になるので、マジョリティの側のシスジェンダーですということをお伝えしておきます。かつ、同性愛者なんですね。

ただ、その94年から表明し始めたんですけども、なかなか葛藤がずっと続いてきたようなタイプです。牧師になった当時、表明を始めまして、さらに先輩の、この方は別に同性愛者ではないんですけども、榎本てる子さんという日本基督教団の牧師が晩年、関西学院大学神学部の教員をやってらっしゃいましたけれども、エイズに関わる活動をしてらっしゃったんです。94年代の初頭といえば、日本でも同性愛者に関わる人権の問題で裁判が起こったり、これは勝訴していますけれども、裁判が起こったり、少しずつ人権問題として認識され始めた時だったんです。

でも、同性愛者が集まって人権問題を考えようとする空間やグループは、東京や大阪にはあったとしても、なかなかこれがキリスト教の中で考えようというのは難しい。榎本てる子さんが出会ったエイズ問題に関わる活動をしている人の中に、同性愛者やトランスジェンダーの人たちで、クリスチャンの人たちがいたんですね。その中で、「これは何とかつなぐことができないか」と思わ

れたらしくて、たまたま私が1人目か2人目ぐらいに、榎本さんには、「自分はレズビアンでこれからもそうやって生きていこうと思う、これは仕方がないことだ」という。「仕方がない」と当時思っていたんですね。そんなことでお伝えしたところ、「ぜひ集まろう」ということで、大きな声ではいえないんですけども、京都YWCAの会議室をお借りしまして、そこで東は東京、西は広島から6人ほどの性的マイノリティの人たちが集まって話し合いをしたことを覚えています。そこから、「信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会」という、長たらしい名前なのでECQAと省略しているんですけども、この会が始まっていくこととなりました。

私は今、資格はなく、例えばカウンセラーとか心理学の勉強をしたわけでもないんですけども、積み重ねの中で相談業務に従事しているのですが、当時94年のころ、カミングアウト、表明を始めたら、いろんな方からご連絡をいただくようになったんですね。怖いですね、牧師って。『日本基督教団年鑑』というのがありますし、そこに住所とか電話番号が書いてあるんです。今は「出さなくてもいいよ」ということもいわれているんですけども、でもなるべく何らかの連絡がつくようにという形で、連絡先は載せています。「実は自分も同性愛者です」とか、「性別に違和感があるんです」という方から、いろいろご連絡をいたしました。なかば相談業務といいますか、もともとピアサポートなんですねけれども、放り込まれた形ですね。本人が自覚なくです。恐ろしいですね。葛藤している人が、話を聞くわけです。

いろんな経験をさせていただきましたが、時にオーバードーズで大量に薬を飲んで病院に運ばれる方、パートナーの方から連絡があって病院に慌てて付き添いに行くこともありました。今はかなり難しくなっているんですけども、慌てて呼ばれて病院に入っていって、「どういうご関係ですか」と。ご本人の意識がなくなっている時に「どういうご関係ですか」。「牧師です、呼ばれて来ました」っていって入っていくと、「支援者の方なんですね」って、入れてもらえることが結構あったんですね。同性パートナーの人はかなりパニック状態になっているので、家族を呼ぶべきかどうかということを医療従事者の人たちが相談している時に、多くの、90年代なんかは特に親御さんたち、法的な家族の人たちと断絶している人たちが多くだったので、今、「法的家族を呼ばれると大変なことになる」ということで、「この人のパートナーでずっと一緒に連れ添っているので、この人を家族として扱ってください」という交渉をしたりもしました。今、病院

のリスク管理がかなり高くなっているので、これがなかなか介入できなくなっているというのが、私自身もですし、あと相談業務をやっている友人たちにも聞くことです。

ピアサポートではなく相談業務というふうに書いているのは、いろいろお話を聞く中で、信徒の方々からご連絡をいただくことが多いからです。問われるごとに、「牧師としてどう聖書を読みますか、牧師としてお祈りをしてほしい」と、牧師としての役割を求められるんですね。「これは本当にピア、対等なんだろうか」ということを自問しまして、やっぱりここに権力構造が非常に強くあるということを自覚したので、相談業務という表現を用いるようになりました。

さて、性の多様性の問題なんですけれども、2010年代以降、日本ではかなり性の多様性、「性には多様性があるんだ、一人ひとり違うんだ」ということが自覚されてきている、認識は広がっているのではないか。これは恐らく、たびたび普段の活動や日常でも伺うことが多いのですが、私は、NCC関西青年協議会の活動をしていた京都の東九条という街に、学生時代に入って勉強させていただいたんですけども、当時、先輩に、聖公会の亡くなりました八幡明彦さんらがいらっしゃって、本当に多くのことを教えていただきました。私が最初に出会った差別問題は在日外国人の差別問題だったのです。東九条の川の向こう側、京都の東山区で生まれていますので、「川の向こう側」と「こっち側」という自分の意識もありましたし、自分自身が日本人として特権を持っていることをすごく問われたという経験がありました。

そんな中で2010年代以降、なぜ性的マイノリティがこれだけメディアで持ち上げられるようになったのかというのを、やっぱり問わざるを得ない。長年、活動してきた差別問題と本当に必死に戦ってきた先輩たち、仲間たち、そして友人たちが、外国人差別の問題もいまだに参政権もないような状態で、税金ばっかり払わされて、しかもヘイトスピーチが非常にひどくなっている状況がある。確かにヘイトスピーチの解消法はできたかもしれないんですけども、理念法ですね。差別はどんどん激化している。部落差別の問題もそうです。また障害者差別に関してもさまざまな差別の問題がある中で、なぜ性的マイノリティが持ち上げられるようになったのだろう。ここは一つクエスチョンマークを置いておくところだと

私は思っています。

日本は差別禁止法が存在しない国ですけれども、他の差別問題と比べて、「LGBT」や「性的マイノリティ」という言葉も、「マイノリティ」という言葉が否定的に響くので、「性的マイノリティ」ではなく「LGBT」という言葉が使われたりしますね。片仮名とかアルファベットが多くて意味が分からずと思われる方もいらっしゃるかもしれません。とにかく何でこんなに広がっていったんだろう。実は「LGBT」とか「性的多様性」という言葉は、日本では経営学が出発点なんですね。何でしょう、マーケット戦略です。「なんかLGBTフレンドリーにすると物が売れるらしいぜ」と、消費促進のために使われていったのが非常に大きかったので、その後に行政も乗ってきたということです。つまり、差別問題、人権問題ではなくて、「いかに消費を促進していくか」という市場の論理で動いていく。これはあえて表現すると、教会、キリスト教の論理とはちょっと違うところで推移しているのではないかというふうに思うわけです。そんなことを考えさせられます。

そして、持ち上げられると同時に、バックラッシュが非常に広がってきているのも事実です。今年6月には、「LGBT理解増進法」という法律が、略称ですけど、作られました。これは、紆余曲折しつつ、もともとは10年近く前に超党派で作られたものがいったんおじやんになって、廃棄になりました。その後にまた、10年近く前にオリンピックを招致するのが決まった時に、「性的多様性というのを日本もやっているよ」というのを宣伝していかなければならぬという。馳浩さんという自民党の議員の方が、それを明確におっしゃっていました。今度はG7でしたね。G7広島サミットの直前に、「LGBT理解増進法」という法律ができました。正式名称は書いておきましたが、長いんですね。「性的指向及びジェンダー・アイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律」という、「ジェンダー・アイデンティティ」というあまり使われてない言葉が出てきたということです。これは理解増進法なのかというと、できた途端に、ご存じの方はいらっしゃると思うんですけども、「差別増進法だ」とか「理解減退法だ」とか、ちょっとややゆされたことがありました。といいますのも、理念法という限界がある。理念法でも、あるだけでまだまだという意見ももちろんありますので、それはメリットとしてあると思うんですけども、なぜ「理解増進法」ではなく「差別増進法だ」なんていうふうにややゆされた

のかと申しますと、「不当な差別をなくす」という目的が入れられたことです。差別に不当なものと不当じゃないものがあるのかな、と思ったりするんですけども、差別はみんな不当ですよね。この背景は、文言だけ見ると非常にきれいなんですねけれども、「全ての国民が安心して生活することができるよう」というふうな文言が出てくる。この法律の「国民」という言葉は、国籍を持つものだけではなくて、いわゆる「市民」ですね。シチズンですけれども。こういう文言が出てくる。つまりは、この前後にいろいろ出てきましたけれども、「性的マイノリティの人たちが近所に居たら気持ちが悪い」だとか、これは菅義偉元首相の書記官の方がおっしゃったことですね。幾つかの議員たちの、議員だけじゃないですけれども、公人の発言があったので、ああいう人たちの人権も守らなければならぬのだ、つまり「差別発言を公言する人たちも裁いてはいけないのだ」ということで、「全ての国民」というのが入っていた、という経緯があるという現実があります。

同時に、「ジェンダー・アイデンティティ」、時間がありませんので詳細は述べませんが、同性愛者よりも今、かなりターゲットになっているのはトランスジェンダーの女性たちです。かなりフェイクニュースが広がっているという状態です。これらにキリスト教は無縁なのかと申しますと、決して無縁ではないというのも現実ですね。理解増進法が通った途端に、相談業務をやっている、全国いろんな所の人たちとつながっているので、すぐにメールやLINEグループなどで声が上がり始めて、「これやばいぞ」と、「かなり疲弊する人が来るぞ」ということで。ちょっとまだデータは取ってないんですけども、6月可決された瞬間から、「オンラインで集まりましょう」という会を何回か行ったのと、あとやっぱり相談件数は確実に上がりました。「不安である」ということでした。特に自民党の強い地域に住んでいらっしゃる、自民党を別に敵視しているわけではないんですけども、自民党の議員の人たちの差別発言が多かったので、そういう地域に住んでいる人たちからの相談が、「このままもし身バレ（注：匿名の人物が実は誰なのか特定されてしまうこと）してしまったら、自分はどんなことになるか分からない、という恐怖がある」というお電話とか、チャットの相談なんかもかなり件数が増えた状態でした。残念ながら、このバックラッシュは、一足先に宗教の業界では広がっています。例えば、神道政治連盟の国会議員懇談会で、冊子が配布されたのが、キリスト教の牧師の人（の文章）であったり、あと主にアメリカ合衆国で活動

している、「性の聖書的理義ネットワーク」というグループが行っている活動を輸入してきたり、ということがありました。教会は何をすべきか、どのように働くことができるかという問い合わせをいただいたので、簡単に2ページ目の最後のところだけお伝えしておきます。

しばしば、同性愛、あるいはトランスジェンダーに対して、「聖書はその人たちを受け入れていないのだ」というふうにおっしゃる方々がいらっしゃいます。私、必ず、「聖書のどこに書いてありますか」と伺うようにしてくるんですけれども、もしそういう方がいらっしゃったら、聖書のどこに書いてあるか教えてください。聖書というのは、古代ユダヤ世界の背景や歴史などという文脈がある。特に性に関わることでは、現代とは相容れない事柄が結構出てきていますね。かつ、食物規定や生活の諸習慣に関しては、かなり規定があるにもかかわらず、それらを私たちはスルーしているという現状があります。なぜ性に関わることだけ断罪したくなるのかというと、やはり私たちのまさに生活の座ですよね。読み手の視点というものが、非常に大きく影響しているのではないかと思います。「教会は性的マイノリティを認めるべきか否か」というディベートは、だいぶ今、減退してきているのですが、私は数年前から、「聖書のどこに書いてありますか」というふうに伺う時に、「聖書に書いてあるから、この人たちは受け入れられないのだ」とする人たちを、「性的マイノリティを排除する欲望を持つ人々」というふうに表現しようという、キャンペーンをしています。これは明らかに「排除したい」という欲望があるはずです。なぜならば、しつこいですが食物規定や生活の諸習慣に関しては、スルーしているからです。

ただ、良いこともお伝えしておきたいのは、特に聖公会の方々はだいぶいろんな取り組みを進められているということで、北海道教区の「虹色のはこぶね」の働きですね。私は、「となりびと」と出会うということに関して、この「虹色のはこぶね」の働きと出会う、この人たちの働きと出会うというのが「となりびと」でした。つまりは性的マジョリティの、そういうふうに表現していいのかどうか分かりませんが、マジョリティの人たちも含めた形での、性的マイノリティを、一人ひとり与えられたいのちなのだと表現されていくことです。これが聖公会を超えて、他のキリスト者たちに、あるいは教会を離れた人たちにどんなに力を与えてくれているか。私はやっぱりそれを非常に強く痛感しています。

差別を問題化することということで、同性間の結婚の祝福というのも、やっぱり教会の中でやっていこうという動きがあります。大いにしていただきたいのですが、私個人としては、「婚姻の祝福というのはもうなくすべきなんじゃないか。人間は一人ひとり神様にかたち取られたものなのだ。個人を祝福してほしい」というふうに思っています。そうすべきではないか。なぜか。つがいを祝福することによって、離婚、男女の離婚もそうですね。「離婚に対してマイナスのレッテルを貼る」ということに間接的につながってきたのではないか。もちろん、大学生の人たちと接していると、離婚というのは子どもにとってはつらいことなんだということを聞きます。じゃあつらい人たちはどうしたらいいんでしょうか。教会があるじゃないですか。教会が共同体として、いろんな人たちを本来受け入れるはずなのです。理想を語っています。だから、そういう共同体としての教会というのを模索していきたいというふうに私は思っています。

あと、日本基督教団では幾つかの教区で、今、「性別統計をなくそう」という決議がなされています。恐らく、この中でも良心的な方々には、性別統計をなくそうとされている方々がいらっしゃるのではないかでしょう。もちろん教会の中では、例えば週報などで報告されるにはそれでよろしいかと思うんですけども、「全体を見渡した時に、性別統計というのは必要なのだ」ということを最後にお伝えしておきたいです。やっぱり、これをなくすことによって、「女性差別の問題がいかにないがしろにってきたか」ということが不可視化されてしまうからです。

社会学の人間としては社会学の調査は今、「男」「女」「その他」という第3項を作っています。ただ、ちょっとぶちまけてしまうと、「その他」で自由回答欄を作っているんですけども、ちょっと残念なんですねけれども、その他は非常に数が少ないので、数千という回答がくる大規模調査をする時には、「欠損値」として外してしまうんですね。ただ、そこから少し、「自由回答欄から拾っていく」という調査ももちろんしているんですけども、性別統計というのはやっぱり、女性差別の問題を考える時には、むやみやたらに「なくそう」という考え方は、一歩留まっていただきたいな、というふうに思っています。ありがとうございました。

性の多様性

—— “となりびとと出会い、共に歩み始めた物語”とは?——

堀江有里¹

ecqa_yh@yahoo.co.jp

分からぬこと。分かってはならないこと。消費するのではなく受容しなければならないこと。それは語る私に、聞く我々に、居心地の悪さを残す。外部からはどう解釈してもいい。だが、いったん枠に入った瞬間からは、解釈することを拒否しなくてはならない。それが生きる場だから。 (李静和、1998、『つぶやきの政治思想』青土社)

与えられた2つの問い：

- ① 現代社会において「いのちの尊厳」が守られるために、何が必要か
- ② それに対して、教会はどのように働くことができるのか

◆自己紹介から：歩み始めた物語

- ・信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会 (Ecumenical Community for Queer Activism)
 - －1994年からセクシュアル・マイノリティをめぐる課題へ：相談業務の開始
 - －活動の柱：①同性愛者をはじめとする性的少数者が安心して集まることの出来る場づくり
 - ②同性愛者差別と闘う力を育む場づくり／ネットワークの拡充
- 課題：①性的マイノリティの置かれている状況にどのように寄り添うことができるのか
- ②性規範を維持・再生産する社会・教会の状況をどのように「改善」することができるのか

◆性の多様性？——「LGBT ブーム」

- ・日本社会におけるマーケット戦略としての「多様性」強調
- 資本主義（＝消費社会）の生き残りのための SDGs（斎藤幸平）
- ・バックラッシュの可視化
 - －「LGBT 理解増進法」（2023年6月）がもたらしたもの
 - ＝正式名称：性的指向及びジェンダー・アイデンティティの多様性に関する国民の理解の増進に関する法律
→性自認／性同一性

問題点：①理念法という限界：日本には「差別禁止法」がない

－罰則規定を持たないことの限界、たとえ理念法でも明示されることの意義

②「不当な差別をなくす」という目的

第12条 この法律に定める措置の実施等に当たっては、性的指向又はジェンダー・アイデンティティにかかわらず、全ての国民が安心して生活することとなるよう、留意するものとする。

¹ 日本基督教団京都教区巡回教師、信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）代表
同志社女子大学ほか非常勤講師

- ③「ジェンダー・アイデンティティ」という言葉の採用
 - 「性自認」という言葉をめぐってフェイクニュースの広がり
 - 2018年2月 お茶の水女子大学のトランス女性の入学資格の受け入れ・報道
 - 女性スペースへを守る会の活動など、トランス女性への差別や攻撃の激化

– 宗教と政治の連関

神道政治連盟国会議員懇談会での冊子配布問題：2022年6月 〈資料参照〉

性の聖書的理解ネットワーク（NBUS）の活動開始：2022年

=「転向療法」を是とする活動

→問題視し、「NBUSを憂慮するキリスト者連絡会」の立ち上げ、署名活動

<https://against-nbus.org/>

◆ 相談業務の現場から

- ・ ECQA（信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会）の事例から [堀江 2015：第III部]
 - ①孤立：「周囲に相談する人／大人がいない」
 - ②身体的・精神的暴力：「カミングアウトしたことにより、親からの暴力を受けることになった」、「家から出て行けと言われた」
 - ③信仰的葛藤：「なぜ生きなければならないのか」、「神はわたしに生きろと命じているのか」
 - * 「聖書に同性愛は罪だと書いてある」というのは本当なのか？
 - * キリスト教の“もっとも大切なこと”は何か？：信仰理解のちがいのなかで
 - ④宗教という場への期待：「真面目な話をする場所がほしい」
- 孤立、重複した生活困難（精神的な病・障害、貧困、家族関係、など）

◆ 明示的な差別が増幅する中で教会のなすべきこと

- ・「聖書は断罪している」？
 - 古代ユダヤ世界の背景、歴史などの文脈は、なぜ、性に関わることでは 食物規定や生活の諸習慣については克服しているにもかかわらず…
- ・“教会は性的マイノリティを認めるべきか否か”というディベートの減退へ
 - むしろ、“性的マイノリティを排除する欲望を持つ人びと”という認識が必要ではないか 差別を問題化することの必要性
- ・性の多様性への寛容をめぐる誤解：性別統計の問題（むやみにくくすることで性差別の不可視化）

* * * * *

【文 献】

LGBT法連合会（編）、2023、『SOGIをめぐる法整備はいま』かもがわ出版。

神谷悠一、2022、『差別は思いやりでは解決しない——ジェンダーやLGBTQから考える』集英社新書。

富坂キリスト教センター編、2023、『日本におけるキリスト教フェミニスト運動史——1970年から2022年まで』新教出版社。

堀江有里、2006、『「レズビアン」という生き方——キリスト教の異性愛主義を問う』新教出版社。

———、2015、『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版。

———、2019、「キリスト教における『家族主義』——クィア神学からの批判的考察」日本宗教学会『宗教研究』第395号、163-189頁。



「旧統一協会問題」の論点整理

竹迫之

日本基督教団 白河教会 牧師（統一協会脱会者）

竹迫之と申します。福島県にあります、日本基督教団の白河教会の牧師をしております。「旧統一協会問題の論点整理」というレジュメを参考に聞いていただきたいと思います。私は今年56歳ですが、はるか昔17歳の時に、「映画を安く見られるサークルがある」ということで紹介されて、統一協会に入っちゃったんですね。これが偽装勧誘というやつですけれども。そこを結局19歳で脱会しまして、以来40年近くにわたってこの問題に取り組んできました。

私が牧師になったのは1992年です。思えば、統一協会に入った1985年というのは、日航ジャンボジェット機の墜落事故があった年。そして脱会したのは1986年でしたが、これは切尔ノブイリ原発事故の年なんですね。牧師になった1992年は、桜田淳子が参加したこと非常に話題になった、統一協会の合同結婚式の年でした。私、牧師になると同時に、高校で非常勤講師をすることになりました。学校教師になる準備なんか全然してなかったもんですから、高校生たちに対して語っていたのは、私の統一協会体験ばかり。本当は聖書を教える授業なんですけれども。でもその授業があるクリスチャンが聞いていました、後日言わされました。「竹迫さんの話を聞いていると、まるで悪の秘密組織『ショッカー』が実在するかのようですね」と。これが結構ぐさっときました。ある時、礼拝で説教をして、最後に祝祷をするわけですね。祝祷をしようと思って手を上げかけたところで、「まるで『ショッカー』みたいですね」と言った信徒さんと、目が合っちゃったわけです。そしたらつい力が入って「主イエス・キリストの恵み」（身振りに笑いが起きる）。その場に居た高校生たちは、「竹迫が変身しました」と非常に驚いたそうですけれども。そのぐらいカルト問題というのは、なかなか理解されませんでした。要するに、「竹迫がそれだけぼーっとした人間だから、そんなものに入ったんだろう」とずっと言われて続けたんですね。

それがちょっとずつ変わってきたのは、あのオウム真

理教事件があったからです。特に1995年の地下鉄サリン事件、そこからオウム真理教のいろいろな実態が暴かれて、それで「竹迫が言っているのはこういうことじゃないのか」というふうに、だんだん聞いてくれる人が増えました。けれども何だか、カルト問題が、オウム事件が収束することによって終わったというふうにみなされちゃったんですね。それ以降、去年の安倍晋三元首相銃撃事件が起こるまで、「空白の30年」といわれていましたが、私はずっとカルトの話ばっかりしてきたんですけども。一応牧師なんですけどね。福音を語るよりはカルトの脅威を語ってきた。でも誰からも耳を傾けてもらえなかった。誤解と無理解との戦いを、30年間やってきたと思います。だけれども去年の銃撃事件で急にまた注目されて、それでテレビに呼ばれたり、新聞でインタビューをされたり、この一年、本当に忙しい思いをすることになりました。ついでに宣伝しておきますと、今年の6月に、日本基督教団出版局から本を出しました。『わたしが「カルト」に？』という本です。1,600円ぐらいしますけれども、よろしかったらお読みいただきたいと思います。

今までこの一年で、目まぐるしく状況が変わってきていますので、「統一協会問題は何が問題なのか」ということをざっと整理しておきたいと思います。まず、一番問題になるのは、私も被害に遭った偽装勧誘の問題ですね。統一協会であるということを隠して勧誘をする。私も統一協会なんていう宗教団体に関わるとは全然思っていないまま巻き込まれていったわけです。それから、この偽装勧誘にだいぶ重なるような形で、靈感商法の問題があります。「今のままだとあなたは不幸になりますよ」と。「あなたの家族から自殺者が出来ますよ」というような話を、密室に閉じ込められて何時間も聞かされて、それで気が付いたら200万円の壺を買っていたとかですね、あるいは1,000万円の多宝塔を買っていた、そんなような被害。いわゆる靈感グッズだけじゃなくて、絵画とか着物とかアクセサリーとか、いろんな商品に及んで

いきます。最近では物品を販売するということは少なくなってきていて、高額献金、韓国のチョンピョンというところに出かけていって、お金を直接渡す等、物を介在しない靈感商法のスタイルというのも増えてきています。「相続した遺産をつぎ込んで、結果的に1億円を超えるような被害に遭ってしまった」という例が多々ありますね。さらに、そこからベルトコンベア式に運ばれていって、合同結婚式に参加してしまう。若い人たちだけじゃないんです。既に結婚をされている中高年の方でも、「もう一度結婚し直すんだ」ということで、1人当たり1回140万円の献金をむしり取られて合同結婚をする。この合同結婚をすることによって、「サタンの血統から神の血統へと血統転換が行われるのだ」、そういう触れ込みで、「まことの結婚をすることができる」ということで参加する人が非常に多い。最近は1世でなかなか新規の信者というものがいないものですから、2世たちがこの合同結婚式に続々と参加をしています。今年の5月ぐらいに、やっぱり6,000人、日本人だけで6,000人の参加者があったというふうにいわれています。こうやって聖なる結婚をして、そしてその子どもたちが生まれてくる。「この人たちが神の世界をつくっていく新人類なんだ」という扱いになるわけですね。ということで、内部では非常に大切にされている儀式です。

そして、見逃せないのは、自民党をはじめとする政治権力と非常に深く結託しているという実態です。この政治権力との癒着でもって、例えば統一協会という名前、「世界基督教統一神靈協会」という名前だったんですが、これが「世界平和統一家庭連合」というふうに名称変更がされてしまった。元来、「こども庁」という形で子どもの福祉ということを専門に担うはずだった省庁が、いつの間にか「こども家庭庁」になっていた。これも統一協会の意思が大きく介在した結果だというふうにいわれています。そしてさっきからちらちらと出していますが、2世問題ですね。統一協会の家庭から生まれてきた子どもたち。生まれた時から信仰を強要される。別に文鮮明をメシアだと信じる信教の自由は、誰にだってあるわけですけれども、問題は、「信じない自由」というのが剥奪される。だから、子どもの時から恋愛を禁止される。子どもですから、お酒を飲んだりたばこを吸ったりというのは禁じられるのはある意味当然なんですけれども、禁酒、禁煙、禁恋愛（まるでAKBだなというふうに思ったりしますが）という中で、非常につらい思いをしながら育っていって、青年期になってもなかなか社会適応ができない子どもたちが増えているという問題。だいたいこの5つ、偽装勧誘、靈感商法、合同結婚、政治権力と

の癒着、そして2世問題。この5つに統一協会の問題点は集約できるのではないかと思います。

それぞれの問題に対して、キリスト教会をはじめとして、私も含めて、いろんな抵抗をしてきました。偽装勧誘に関しては、詐欺みたいなもんですから、要するに「あれは統一協会がやっているんですよ」と。統一協会が野放しになっているんで、これをまねする他のカルト団体もいっぱい出てきまして、宗教であることを告げずに接近して、だんだんと取り込んでいく。いわゆるマインドコントロールというのが、いっぱいされています。これに対抗するために、「いろんな悪徳団体がこういう勧誘の方法を取っていますよ」と。特に「マインドコントロールというのはこういうふうに行われますよ」という情報をたくさん人に広めることによって、新しく信者にさせられる人を減らしていこうということをやってきました。

特にマインドコントロール被害というのは誰にでも起こり得る。特別引っかかりやすい人がいるわけではないということについては、本当にあちこちで強調していることです。靈感商法に対しては、要するに、何かお金を献げたり物品を買ったりしないと「地獄に落ちる」というような脅し文句で、お金をむしり取るわけですね。これはそもそも人々の中に、宗教というものについての基本的な理解が欠けているという現状があります。そして日本古来の、「物には魂が宿る」という民間信仰的な宗教観が広まっていて、それを多くの人は宗教だと自覚していないんですね。宗教とは何かということを、いわば教育することによって、靈感商法被害というのは抑止できるのではないか。「ご先祖様というのは私たちを守ってくれるのであって、決して私たちを不幸にするためにいるんじゃないんですよ」ということを、ことあるごとに宗教の立場から訴えていく。これをもって靈感商法に対する抵抗をしてきました。

また、合同結婚も、統一協会の合同結婚というのは、いわば家父長的な家庭形成ということを目指すものです。家族形成というものを健全化するように、例えばジェンダーの問題について知らせていく。だから教会の中から性差別ということをなくしていくための戦いというのが、非常に大事になるんですね。そういう活動を通じて、あるいは性的マイノリティ、LGBTQと呼ばれる人たちへの差別を、可能な限り撤廃していくというような活動を通じて、統一協会の合同結婚とは違う価値観を教会がベースになって、教会に限りませんが、いわゆる仏教の人たちなんかも手伝って、合同結婚の異常さ、あるいは実際に結婚しちゃってつらい思いをさせられている、主に女性たちを支援することを通じて、さらに子どもたち

には性教育を徹底化するということで、この合同結婚的なアプローチに抵抗をしてきました。

さらに政治権力との癒着の問題に関しては、信教の自由に関わる問題ですから、その信教の自由というのは、信じたいものを信じたいように信じる自由という側面もありますけれども、信じたくないものを拒否する自由でもあるわけですね。ということで、「信じたくないものを信じさせられるような、そんな政治権力には抵抗しましょう」、そういう政治運動をすることで、統一協会と政治権力との癒着の構造を暴いてきました。

だけれども、一番最後の2世問題だけは、どうやつたら手を付けられるのかが、今のところ手探り状態です。1992年、桜田淳子で話題になった合同結婚から既に31年たっているわけですね。統一協会というのはだいたい、どのカップルも子だくさんになる傾向がある。「罪のないこどもたちが増えれば増えるほど、世界は平和になる」という考え方ですから、たくさん子どもを産む。子どもが産まれないカップルには養子縁組をする。そんな形でどんどん2世が増えて、たぶん今、数万人規模で出現していると思います。統一協会の信仰にうまく定着できている人ならほっといてもいいんですが、本人が幸せなら。だけれども、問題はそれに違和感をおぼえ、そこから抜け出したいと思っている人たちをどう救援するか。特に未成年のメンバーたちが、その宗教的な環境から自由になりたいと思ったら、家出しか方法がなくなっちゃうんですよ。未成年が家出したら、さっそく住む場所、食う物に困るわけですね。そういう人たちをどうやつたら支援できるかということを、本当に今、手探りでやっているところです。こんなのが、統一協会問題の整理、およびそれに対処する方向性ということになるかと思います。

ところが、当の統一協会は、例えばこのあいだの火曜日11月7日に記者会見、解散命令請求が出されたことを受けての記者会見を行いましたが、あれを見ていても、何が問題とされているのか全然理解していないですね。むしろ「自分たちが宗教迫害を受けてるんだ」と、自分が被害者だという思いでいるわけです。これはもう全く認知の歪み。もちろん靈感商法であれ、偽装勧誘であれ、彼らは善意でやっているもんですから、その問題性に気付きにくいとはいえますけれども、だけれども被害をこれだけ振りまいているという自覚が全然ないというところが一番の問題だろうと思いますね。

だから、被害を訴える被害者、元信者とか、たくさんいるわけですけれども、それは被害を自称している、反対勢力だと考えているわけです。この反対勢力の親玉と

されているのが、「靈感商法被害対策弁護士連絡会」、通称、「被害弁連」といいますが、この被害弁連に対する誹謗中傷がものすごく激しいことになっています。また、被害弁連の背後には共産主義勢力がいるのだという妄想的な世界観を持っています。だから統一協会側は、100億円におよぶ供託金を出して、それで被害を解消しようという提案をしておりますけれども、これは、はたで見ていると、「金さえ払えば問題解決なのか」と、その程度にしか感じてないのかという憤りを覚えますが、あれが彼らなりの誠意なんですね。認知の歪み。だから、誰に対しても対話をしようという姿勢がありません。むしろ、「相手を説得しよう」という形でアプローチしてくる場合がほとんどですね。

この統一協会問題に対抗するために、私たちは、むしろ宗教であるということを前面に打ち出すべきだというふうに思っています。「健全な宗教とカルトとの違いは何か」ということを、私たち自身からアピールしていく。そうやってカルトのおかしさということを世の人々に示していくということが、恐らく大事なのだろうと思います。ところが、既存の宗教の中では、まだカルト的な方法と健全な宗教との違いをうまく打ち出せていないという現状もありますね。ということで、何がカルトで何が宗教なのか。その見極め、その手がかりになりそうなものを、フランスで1995年に提出されたのですが、「アラン・ジュスト報告書」というものに示された10項目の、宗教とカルトとの違いの項目を挙げておきました。時間がないので読んでおいていただきたいんですが、1個でも当てはまつたらアウトという、非常に厳しい基準です。われわれの教会がこういうことをやっていないかということを考えながら、「これをしないとあなたは地獄に落ちますよ、呪われますよ」という、呪いをかけるのではなくて、「あなたは今、生きているまで祝福されているんですよ、神様に喜ばれているんですよ」ということを伝えていくのが、いわゆる健全な宗教ではないかと、私は個人的に思っています。

カルト問題は、今後どういう推移をたどっていくのか、本当はもうちょっと細かく語りたいんですが、時間オーバーのようですので、あまり詳しくは言えません。でも、2世問題への取り組みということが、今後カルト対策の主軸になっていくことは間違いないと思います。合わせて、私たちの教会から2世問題を出さないということも大事になってきます。どうしても信仰の継承ということで、特に若い人やこどもたちに対する宣教ということを私たちは重視してしまいがちなのですが、しかし、年を取って死ぬ直前になって洗礼を受ける人だっていっぱい

いますよね。そういう人たちが、じゃあ天国に行けないのかといったら、そんなことはないはずですよね。若い人がいないということを嘆くのではなくて、そして若い人たちを私たちの味方として引き入れるのではなく、若い人たちがそのありのままで生きていけるような支援をしていくこと。そして「その人のいのちを喜ぶ」という姿勢を保ち続けることが、長い目で見れば、カルトと私

たちを隔てる大きな壁になっていくんだろうと。そして、そうでないカルトに対して、「どこが悪い」「ここが悪い」ということを指摘できるような手がかりを得ることができるようになるだろうと、そんなふうに考えております。ということで、駆け足でしたが私の発表とさせていただきます。ありがとうございました。

当日配布資料 いのちの現場から聴く（3）

「旧統一協会問題」の論点整理

日本基督教団 白河教会 牧師
竹迫之（統一協会脱会者）

● 自己紹介 カルト問題に対する無理解との戦い

→ 「まるでショッカーですね（笑）」～「変身！」

● 「旧統一協会問題」の整理

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| → 偽装勧誘 | …情報開示と注意喚起 「マインドコントロール被害は誰にでも起こり得る」 |
| → 「靈感商法」 | …「宗教」に対する理解増進と呪術的信仰に対する批判的対決 |
| → 合同結婚 | …家族形成の健全化とジェンダーフリー（LGBTQへの理解増進と性教育強化） |
| → 政治権力との癒着 | …「信教の自由」の徹底化と腐敗議員の責任追及 |
| → 「二世」問題 | … ? ? ? |

● 「旧統一協会」側の対応に見える問題点

- 「被害者は自分たち」 11月7日の記者会見に見る「認知の歪み」
- 被害弁連と共に産主義勢力が（仮想）敵 「被害者を自称する反対勢力」
- 「供託金」 金を払えば問題解決か？ … 歪んだ「誠意」と解散請求
- 「対話ではなく説得」の姿勢

● 宗教とカルトの違い

→ アランジュスト報告書（1995）

- | | | | |
|-------------|-----------------------|-------------------|-----------|
| 1. 精神の不安定化 | 2. 法外な金銭的 requirement | 3. 住み慣れた生活環境からの断絶 | |
| 4. 肉体的保全の損傷 | 5. 子どもの囲い込み | 6. 反社会的な言説 | 7. 公秩序の攪乱 |
| 8. 裁判沙汰の多さ | 9. 従来の経済回路からの逸脱 | 10. 公権力への浸透の試み | |

→ 「呪い」か「祝福」か

● カルト問題の行方 ～「2世問題」への取り組み

- 「二世」問題に見る人権侵害
- 「カルト宗教」の概念と健全な宗教との差別化
- 「正しさ」の提示ではなく「迷う者」との伴走



いのちの現場から聞く～チャプレンという立場から 「隣人と共にいること、耳を傾けること」

半田ウィリアムズ郁子

英国国教会リーズ教区司祭、聖路加国際病院非常勤チャプレン

おはようございます。半田ウィリアムズ郁子と申します。とても聞きがいのあるお話を聞きして、私は何を一体何を語るのかなという気持ちがあるんですけれども、いただいた時間の中で少しだけ一緒に「スピリチュアルケア」という観点から、「傾聴」、話を聞く。「話を聞く」というところに私たちが呼ばれている」ということを、チャプレンとして働いてきたことからなども考えてきたことを共有できたらと思います。

まず、自己紹介をします。私は日本のプロテスタントの教会の信者、クリスチャンホームに生まれて、東京で育ちました。日本基督教団の中でも長老派と呼ばれるような教会、豊島区にある武蔵野教会という所で幼児洗礼を受け、今もそこが私の母教会となっております。私の曾祖父や祖父も牧師でした。長老派ですね。そして私の幼少期からは、豊島区からは遠い所に住んでいたので、東村山教会という所に通って育ちました。そして高校生の時代、またその後も何回かアメリカに住みました。その時も長老派の教会に通っていましたので、結婚した相手、マーク・ウィリアムズは、イギリス人なんですけれども、イギリスのリーズ大学という所で「日本学を始めてくれ」と頼まれて、小さい子を連れてイギリスのリーズで暮らし始めた時に、始めて英国国教会の礼拝に出ましたので、聖公会、教会で礼拝をするようになりました。正直言って、お客様のような感覚で礼拝に行っていたことを覚えております。初めは「数年間行くかな」と思って行ったところが、気が付いたら30年いたという感じです。3人の子育てをしながら、リーズ大学で私も日本語のクラスを教えたり、翻訳のことを教えたりしていたのですけれども、本当に思いがけないことで英国国教会の司祭になるという道に導かれ、そしてまた思いがけないことに病院チャプレンという場で奉仕するようになりました。

何で私が今ここにいるかというと、夫が突然、東京のICU、国際基督教大学に数年前に呼ばれましたので、私の母校でもありますので、あちらの病院チャプレンの職

を泣く泣く後にして、日本に今しばらく来ております。ICUのキャンパスに住み、学生の牧会、ミニストリーに携わっております。また不思議なことに、聖公会の聖路加国際病院でのチャプレンも、隔週の木曜日だけお手伝いに行っております。

イギリスで30年暮らした私にとって、一番大きな問題というのは、日本にいる時は知らなかった英国人捕虜の人たちと日本人との間の、大きなギャップというか、「和解ができない」という問題でした。実際、イギリスに暮らしてみると、どれだけ多くの人たちが戦争中に日本軍が東南アジアで行ったことによって深い傷を受けて暮らしておられ、そしてそのために激しい怒りと憎悪が日本人に向けて、日本に向けてあり、それに対して日本にいる私たちが全然無関心というか、知らないでいるということが、本当に大きな問題であるということに気が付かされました。それに対して「私は一体どうしたらよいか」というところで、私はあまり勇気がないですから、あれだけ日本人のことを嫌っている人たちに、わざわざ会いに行って謝るなどもできず、悶々としておりました。そのような中で、イギリスに暮らし始めてちょうど10年の時に、1人のクリスチャンの日本人の女性で、ロンドンで元捕虜の人たちとの和解のために奉仕をされている、恵子ホームズさんという方との出会いがありました。そのおかげで私は「和解礼拝」というものに赴くことができ、その礼拝において「懺悔の祈り」という、その祈りを祈らせていただくということの恵みを、考えてみればクリスチャンとして育ちましたけれども、生まれて初めて経験することができました。

その「和解礼拝」には、加害者側の人間として罪を感じ、どうしても行かなければいけないという緊張の思いで行きましたけれども、神の前で、そして私たちの国に行いによって傷ついた人たちの前で懺悔の祈りするということの、意味の深さと大きさに、その場に至るまで知らなかったということに気が付いた自分がありました。「なんでそのことが今まで分からなかったのだろう」と

いう悔恨の思いもありました。そこで謝るということ、十字架の下で謝罪をするという恵みが与えられているというところで、私は「本当にイエス様の愛に出会った」という実感がありました。涙が止まりませんでした。加害者側の人間としての、罪の意識だけで赴いた私でしたけれども、思いがけない赦しと癒しというものを、本当に神様はくださるのだということを知りました。

そして、その礼拝では司会の方が、「平和のしるしの交換として握手をし合いましょう」とおっしゃった時に、まだその時は、でもこちらから握手を求めていく自信はありませんでした。しかし、あちらから、そこに居た日本人、見るからに日本人と分かる私たちのほうに向かってきて、握手を求めてくださいました。教会で育ちましたから、「敵を愛せよ」という教えは知って育ちましたけれども、その教えの恵みに出会ったことは生まれて初めての経験でした。ですから、「和解というものは神様がギフトとして、贈り物としてくださるのだ」ということを学ばせていただいた、本当に私の人生の中の大転機となる出来事でした。

実はそこに赴いたころは、地元の英國国教会の教会でいろいろ奉仕をしておりまして、またいろいろな場面で、「伝道者にならないのか」という話があったのですが、でも「私は日本人で、英國国教会はどうも違うと思います」なんてずっと言っていたんですね。しかし、この「和解礼拝」で、神様が与えてくださる、とんでもない和解というものがあるのだということを、本当に1人のクリスチヤンとして学んだ時に、自分は「英國国教会と日本人は合わないんじゃないかな」という、そういうことをつべこべ言っている時ではないのだと、いう意識に導かれ、「それではこのような場所で私のような者も仕えられるのならオファーします」ということで、道のりをたどっているうちに、司祭になるという道に導かれたというわけです。

それで、私のこれまでの道のりの話を長々としてしまいましたけれども、いろいろ悩み、また捕虜の方に対し「何もできない」という思いを持っている時など、やはり教会の中で、かたわらで私の話を聴いてくれる人たちがいたということも思い起こします。イギリス人の方たち、イギリス人であるけれども私の話をいつも聴いてくれる人たちがいました。やはり私を私なりに受け入れてくれる、受け止めてくれるということには、大きな恵みと励ましがあります。そのような道をたどらせていただいたので、その感謝から、もし私のほうから話を聞ける場所に出会わされたならば、出会わされた隣人の方に、親身になってその方の話を聴くという場所に、とても感

謝をもってこちらから立ち向かえるというか、そこに行けるように、遣わされるようになってまいりました。

そして病院でいろいろな方にお会いしますね。教会という所は、信仰を持っていたり、また信仰を求めているような方々が見えますので、日本人が牧師として居ても、そうかとなるかもしれないけれども、病院でいろんな方に会う場合に、またまた「私は日本人でチャプレンとして居て、本当に心を開いてくれるのだろうか」という、そういう変な心配もしましたけれども、そういうことはやはり関係なく、とにかく「出会わされた人の話を聴きたい」と自分をそこに身を置くということで、神様が用いてくださるということを経験することが、次から次と起り、そこから私も成長させていただいたという思いがあります。病院では、お医者さんだったり看護師さんだったり薬剤師さんだったり療法士だったりすると、何か患者さんにやってあげることがはっきりしていますよね。でもチャプレンの場合は、特に出会う患者さんはクリスチヤンではないこともありますので、最初から「お祈りします」とか「聖書を読みます」とは言わないですね。ですから、出会わされる患者さん、または家族の方、またはスタッフの方、その方なりのお話を聴くということを徹底させていただくということから、本当に大切な学びを得られました。

そして一つ、チャプレンとして出会わされたエピソードをお話したいと思います。

この中で私のこの話を聞かれた方もいらっしゃいますけれども、もう一回我慢して聞いてください。あるクリスマスイブの夜でした。クリスマスキャロルを、近くの教会の聖歌隊の方と一緒に回って歌い、それも終わり、さて帰ろうかという時に、その日の午後の出会った、ある方のことが思い出されました。

高齢の男性の方で、いつもクリスマスイブは大切な奥さんと一緒に必ず家で、家族と一緒に過ごしていたものなのだけれども、今年はここ（注：病院）に来てしまい、自分が病院に入院しているということよりも、家に残してきた1人で居る奥さまのことをとても気の毒に思い、悲しく思っていた。その表情が忘れられなかったので、「もう一回様子を見に行こう」と思って顔を出しました。そうしたらとても喜んでくださいり、またベッドサイドに椅子を置き、お話を聴きました。そして、考えてみればクリスマスイブですよね、「ベッドサイドコミュニケーション」というのがありますて、病床聖餐ですね。本当に簡単に、ウェハースとぶどう酒を交換する（注：陪餐のこと）ものですけれども、「それをしましょうか」。「それはとてもうれしい」と。そしてその聖餐を受けるため

に、共に懺悔の祈りをしました。そして共に罪の赦しの、感謝の祈りを献げました。そしてみ体のあるパンと血を示すワインを分かち合い、そして感謝の祈りをして、そのお部屋を後にしたわけです。部屋には平安な気持ちが溢れている感じがしましたし、静かなメリークリスマスということで、その患者さんを後にしました。

私としてはそれで終わりだったんですけれども、その数日後、チームで働いておりますので、同僚のチャプレンがその患者さんを訪ね、そしてその同僚が部屋に帰ってきた時に、「信じられないよ」って。何かというと、あの方はビルマ戦線で、とても残虐な行為を目撃し、それに遭って、そして生きて帰ってきてからは「絶対に日本人は許せない」と。日本人とは絶対顔を合わせない、交わらない、日本製の物も買わない、日本製の物は触りもしないという主義で、50年以上暮らしてきた、生きてきた、そういう方だった。ところが、あるクリスマスイブの日に自分を訪ねてきてくれて、自分の心細かった話を共に居て聴いてくれて、聖餐を共にしたチャプレンは日本人だった。

「気が付いたらそれまでずっと握りしめていた、絶対に握りしめていて手放すことはできないと思っていた怒りとか、無縁さとか、そして憎悪とか怨念とか、それが全て不思議なように消えてなくなっていて、そこにいい知れない、思いがけない平安が与えられて、平安に満たされた自分が今あるので、心から感謝している」ということでした。私のほうこそ驚きました。まさかそんなことになっているとは夢にも思っていませんでした。先

も申しましたように、日本のことをそれだけ怒っている人たちに、面と向かって謝罪に行くということはとても苦手な私でしたので、もしその方がそのような主義で、その時まで生きてこられたということを知っていたら、きっと足がすくんでしまって、その方を訪ねることはしなかったかもしれません。チームで働いておりますから、他のイギリス人とか他の国籍のチャプレンに行ってもらうことは全然可能ですので、逃げていたかもしれません。しかし、神様はそんな私のことをも分かっていてくださってか、そこに送り込んでくださり、そこで私という、そこに居た私を用いて、神様がその方に語ってくださった、そしてその方を癒してくださったという、神様の働きをそこで見せていただいたという思いがありました。

私たちが何かをするというのではなく、むしろ「自分は無力であり、こちらで何かをするということではなく、そこに送ってくださる神様を、主を信じてそこに出向き、魂と魂の出会い、それを神様に差し出す」ということが、教えられることではないかと思います。チャプレンとしてどなたかを訪ねる時に、本当によく起こることは、「お話をしてくださいました方と、そこに聴く者として居た私、両方に神様からの恵みが注がれた、癒しの恵みが注がれた」と、よく実感できる、ということでした。それは別に、病院チャプレンである必要はないわけですね。私たち一人ひとりに魂が与えられていて、そしてその魂をもって相手の方に接し、親身に話を聴くというところに送られる時、それは恵みの時だと思います。どうもありがとうございました。

ハンドブック掲載資料 いのちの現場から聴く（4）

いのちの現場から聴く～チャレンという立場から 「隣人と共にいること、耳を傾けること」

半田ウィリアムズ郁子

隣人となるよう呼ばれている

- 誰かの「隣人になる」ということの基本には、私たちが出会わされ、心動かされた人と「共にいる」こと、そして、その人の「声に耳を傾ける」ということがある。
- 誰かと「共にいて、声に耳を傾ける」ことは、その人を大切に思うことを相手に伝える行為。
- その人のありのままを受け入れ、そこに共に居る、そして話を批評・批判せずに思いやりを持って聞く、その人にとっての「大事」を大事として聴く姿勢が大切。

- 私が、思いがけなくチャプレンの立場に立つようになってから強く感じることは、人は誰でも、誰かがありのままの自分を受け入れて「耳を傾けてくれる」ことで、深く励まされるということ。人は、その励ましから、安心が与えられ、自分の不安や色々な思いも語ることができるようになっていく。
- それは、話す本人にとって、自分の置かれている状況を見直すことや、自分自身についての新しい気づきが与えられる機会にもなり、心の平安や希望への道が開かれていく。

私たちの自分の力でなく、主がなさること

- 「耳を傾ける隣人になる」ことに呼ばれる時、まず、私たち自身は、まことのぶどうの木である主につながっていることが大切。その主の愛に生かされるところから、出会わされる人の「となりびと」となるために遣わされていく。
- 私たちは、出会わされる隣人に「耳を傾けながら」、自分が無力であることを思い起こし、ただ主の愛の力に全てを委ね、癒しと救いを祈っていくことが大事。
- 主を信頼して「耳を傾ける隣人になる」呼びかけに応えていくところに、相手の人との間に心の響き合いが生まれ、恵みが注がれる。

特に、人生の最期を迎えている方の「となりびと」となる時

- 目の前に与えられている人に真剣に心を向け、その方の地上での旅において、しばしの間、靈的な伴走をさせていただく。
- ご本人もまたこちらも、主との関係性において靈的に深められる貴重な日々といえる。
- 互いに「限りある命」が地上で与えられているという連帯感。それでも、「今、ここに生かされている」、その「今」の命の日々の価値を再認識。
- 最後までその方らしさを尊重できるよう、ご家族、医療スタッフと密に協力。

グリーフ・悲嘆のケア

- 悲嘆は、人それぞれ異なる形や長さを要するということを尊重。
- 何度も必要なだけ、悲しみ、寂しさ、また故人の思い出など、繰り返して話すことを促す。
- 悲しみは消えなくとも、傾聴を持って支える「隣人」の存在となることは可能。

考察事項として：

皆さんご自身、これまで誰かの「となりびと」として「共にいること・耳を傾けること」へと導かれたご経験を振り返り、経験した恵みや難しさを思い起こしてみてください。その時の事情や状況などから何か学べることはあるでしょうか？

- 「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。」（ローマ12:15）
- 「王は答える。『よく言っておく。この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。』」（マタイ25:40）
- 「主は、「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中で完全に現れるのだ」と言われました。」（コリントII12:9）
- 「私はまことのぶどうの木…あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。」（ヨハネ15:1, 5）



私のホームレス支援活動との関わり

柴本孝夫

九州教区司祭

お祈りをします。主よ、私の岩、私のあがない主よ。私の言葉と思いがみ心にかないますように。アーメン

九州教区の司祭の柴本と申します。昨日から、3つの教会のお話とか、他の語り手の皆さんのお話を今日、お聞きしまして、大変いろいろと刺激を受けておりますが、そんな中、こうしてお話することになりました。私の自己紹介はこのハンドブックにありますので、ご確認いただければと思います。

一つだけ付け加えますと、数カ月前の、スタッフとパネラーとの打ち合わせの時にもお話をいたしましたが、私が司祭按手を受けたのは1994年で、今からもう29年前になります。その司祭按手の出会いの時に、私の青年の仲間がずらっと来てくれまして、「あなたは偉い」とほめられました。やつらは、あえてやつらと言いますが、やつらはわざわざ新しいトレーナーを用意して、それに「司祭按手おめでとう」と書いて、それよりも大きく「偉い、あなたは誰もが司祭になれるなどを証明した」と。そんなふうにマジックで書きまして、みんなで署名したものを私に手渡して喜んでおりました。

その時、私は正直、ちょっと腹立たしく思いましたが、それから教会で働き始めまして年数が経つにつれて、だんだんそうだなと思わされております。この頃はそんな心境です。

なかなかいろんなことがうまくできずに、よく悩み、そして困っておりますが、そんな私が、でも自分なりに大事にしてきましたことは、「出会った人、あるいは出合った出来事にこだわって関わってみる」ということを、自分なりに大事にしてきました。といっても、これももちろん、うまくやれているわけではありません。ある時、北九州でのホームレスの支援活動にも出合いました。そんな流れで今回、この発題をすることになりました。

まず、そのきっかけになりましたのは、実はここにおられる管区事務所総主事の矢萩新一司祭が、神学生時代に聖公会神学院の実習で、「北九州ホームレス支援機構の活動に関わりたい」と、そういう希望を出されました。

そこへ私が地元の人間として、「じゃあ私が案内しよう」ということで、私もそこに関わることになりました。これもきっと主のお導きだったと思います。矢萩司祭は1週間ほどで、その良い実習をちゃんと済ませて終わられましたけれども、私はこれをきっかけに誘われまして、それから13年間くらいでしょうか、実習することになりました。

この間、さまざまな出会いと貴重な経験をいたしました。北九州のホームレス支援活動で最初に携わったことは何かといいますと、まず毎回の金曜日の夜の炊き出しに通って、お手伝いをするということでした。そして私のような人間には、つくづく思いますけれども、「役がある」というのがとても大事だなと思います。初めて炊き出しに行きましたら、そこでちょっとびびりながら、参加をし始めましたけれども、一つの係として、テントを建てて、係としてみそ汁を配る。薬も衣服も、係として手渡していく。炊き出し後にパトロールがありましたが、そのパトロールにも係として出かけ、係として居場所を訪ねていく。私にはそのような役が与えられたので、毎回私はそうするようにいたしました。

しかし、立場はどうであっても、実際に関わっていきますと、直接そこで人と出会います。そうすると、当たり前のことに気付かされていきました。実際に話してみると、そこに居たのは普通のおじさん、おばさんで、自分の親、親戚、近所のおじさん、おばさんたちと何も変わらない人たちだった。「ホームレス」という言葉でくくられる特別な人ではなくて、普通に名前を持った1人の人だった。当たり前のことですけれども、そういうことを感じたわけです。そして、「これまでなんで出会えなかったのか、なぜ関われなかったのか、これこそがおかしい」というふうに思わされました。これが初めのほうの私の気付きでした。

その後、ずっと関わりが続いていきました、間もなく、この炊き出しだけではなくて、当時、北九州ホームレス支援機構は自立支援住宅というものを運営し始めていま

した。やがて私は責任者として関わることになりました。それは古いアパートを1棟借り切りまして、炊き出しの際に希望する人を募って、約10人に入居してもらい、自活するために約半年間サポートする、そんな活動でした。それぞれに担当者を付けて、担当者が入居した1人に密接に関わっていく。これをずっと繰り返して取り組みました。13年間で、私は担当者として、20名くらいの方たちに密接に関わりました。これが私にとって大変、刺激的でした。

その関わりは、最初に面接、いわゆる聞き取りから始まります。その人が一体どんな人生を送ってきたのか。何度も会って、じっくりとお話を聞きます。そうすると、壮絶な人生ドラマを聞くことになります。そんな中の一人が、私たちが用意した古いアパートに入ることになって、その部屋に連れていきます。そうすると、部屋に入った途端、彼が半ば絶叫するように言います。「おー、ここは天国や」と。何ともいえない笑顔で、そんな言葉をおっしゃるわけです。そんなことをおっしゃるもんですから、私たちも本当に驚きながら、でも、喜ばれています。そのことを感じながら、こうして支援住宅での生活が始まっています。

それから6ヶ月間、いろんなやりとりを、ちょくちょく行き来しながら関わっていきます。そんな人たちと関わり合って、正直、大変なこともたくさんあります。事件が起こったら、そのたびに飛んでいく。そして一生懸命話す、関わる。これを繰り返しますけれども、でもそんな関わりを一言にまとめると、「やはりこの人たちは偉いな」と、つくづくそういうふうに思われました。「ぼろぼろになった、もう死のうかと思った、もう何もないと思った、そんな時にあんたたちに会って助かった」と。そんなふうに心から感謝をされるわけです。何も飾らずに本音で生きている。そんな姿を見ていて、「私もこんな気持ちで生きていきたい」、何度もそんなふうに思われました。

皆さんのお手元のハンドブックに、「この出会いと交わりの中で感じ学んだこと多数」と書きましたけれども、その部分を読ませていただきたいと思います。「屋根があり、壁があるだけで感謝、感激する人の姿」。「どんなに遠くても歩けばいい、やがて着く」。「大阪から帰ってきた」、「鹿児島へ行ってきた」というおじさんたちが何人もいました。「本当に不可能なことはそうそうない」。高速道路を自転車で走ったという人もいました。「究極のミニマリスト」。全財産は紙袋一つという人の姿に触れて驚きました。「何度もいなくなる」。毎回みんなで大騒ぎし、探し回った。すると探すと見つかるという体験

を幾度もいたしました。「人間はざるい、こすい、でも素直、率直、正直」と感じさせられました。そして「失敗しても失敗しても何とか生きようとする人の姿、人生の達人」、そんな人たちと出会いました。

13年間の関わり、そしてそれは今も終わったわけではなくて関係は続いておりますが、そのことを振り返ってぎゅっとまとめると、こんな豊かな経験が与えられました。そして、こんな経験をさせていただいて、今回、私が発題として皆さんに問いかけたいことは、教会はよく、「みんなに開かれている」といいます。その言葉どおり、私は、「教会は社会のさまざまな人たちが出入りする場でありたい、人生の交差点のように人と人とが出会い、そして助け合う場になってほしい」と思っています。しかし現状はそうではなくて、むしろ閉ざされているのではないか。自戒を込めて言いますけれども、私たちの教会の多くは、あたかも「会員制」のような、そういう場になっていないか。そんなふうに私は思われます。

具体的に、出会いと交わりが起こって、同時にさまざまな問題、課題が持ち込まれる。そしてそんな中で、一緒に聖書に聞き、地の塩、世の光として歩んでいくのが教会であってほしいと思います。あるいは、喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く、そういう歩みを実践していくのが教会であってほしいと私は思っています。しかし現状はどうかといえば、今は、疲弊し縮小する教会の姿ばかりが目に付きます。この現状を何とか乗り越えて、人のいのちの必要に応える大切な取り組みをして、成長する教会の姿こそ見てみたい、そんなふうに強く思っています。これをぜひ実現していきたい、そのように思っています。

これを目指して進むために、私たちはどうしたらいいのか、このことを皆さんと意見交換をしたい。そしてぜひ、お互いに力を得たいなど、そんなふうに思っています。ということで私の発題を終わらせていただきます。ありがとうございました。

私のホームレス支援活動との関わり

司祭 マルコ 柴本 孝夫（九州教区）

●きっかけ – なぜ、関わるようになったか？

2001年9月14日の越冬活動が最初。

聖公会神学院の某神学生の実習。実習先として「北九州ホームレス支援機構」を希望。

現地のお世話役として、その神学生を連れていくことになった。

それまでの認識は、時折ニュースで触れていたこと。

北九州越冬実行委員会が「活躍している」「行政に公園から排除された」「代表は奥田という人物…」。

へえーそんな活動があるのかー、そんな人がいるのかー、と思っていた…程度。

「でも、きっといのちに関わる大切な活動だろう」。いつか行ってみたい…と思っていた。

そんなところに、実習生の話。

連れて行く形で連れて行ってもらおう…関わりの開始。

●印象は？

最初は、ちょっとビビリながら参加し始めた。

どんなことがあるのか、不安と期待を感じつつ金曜夜の越冬活動へ。

「係り」としてテントを立て、「係り」として味噌汁を配る。薬も衣類も「係り」として配る。

拠点での活動を終えると、パトロールに出かけ、「係り」として居場所を訪ねる。

ほんとうは、普段から関わりがあってよかった。でも、声をかけたり関わったりできなかった。

そのおかしさに気づいた。

「係り」として、直接関わることによって、初めてこの壁を越えることができた。

あたりまえのことに気づいた。

話してみると、普通のおじさん。

自分の親父、親戚のおじさん、近所のおじさんとなんら変わらないひとりの人。

「ホームレス」と括られる人でなく、○○さん、普通に名前をもったひとりの人がいた。

これまで、なんで出会えなかったのか関われなかったのか、これこそおかしいと思った。

●実感してきたこと

越冬活動、パトロールだけでなく、「自立支援」活動への関わり。

ひとりの人の担当として生活を取り戻すお手伝い — 週に最低1~2度の密接な関わり。

えらいなあーとつくづく思う。

輝かしい経歴などない。「ぼろぼろになった。」「死のうかと思った。」「何にもないと思った。」

「そんな時にあなたがたに会って、助かった。」と、心から感謝される。

古いアパートに入ることになって、「ここは天国や」。何とも言えない笑顔で言われる。

何も飾らず、本音で生きている。

私も、こんな気持ちで生きていきたいなあーと思った。そんな気持ちで関わってきた。

まさに、いい出会い。いい関わり合い。いい経験…。

（2004年4月30日 第1回ボランティア養成講座での体験報告から）



私は、2002年4月、福岡県宗像市の宗像聖パウロ教会から北九州市の戸畠聖アンデレ教会へ転任。戸畠での6年間、続いてすぐ隣の小倉インマヌエル教会に移っての6年間、合わせて北九州で過ごした12年間、支援活動にどっぷり関わることになった。

この間、北九州ホームレス支援機構は特定NPO法人となり組織が拡大。私は、自立支援住宅入居者の担当、運営委員長、そして副理事長としても関わった。(肩書では特別な響きがあるかもしれないが、あくまでも一ボランティアとしての関わり)。現在大変有名になっているこの団体の代表、日本バプテスト連盟のおくだともし奥田知志牧師とともに活動に携わってきた。

○この出会いと交わりの中で感じ、学んだこと多数。

- ・屋根があり、壁があるだけで感謝・感激する人の姿。
- ・どんなに遠くても歩けばいい、やがて着く。—「大阪から帰ってきた」「鹿児島へ行ってきた」
- ・ほんとうに不可能なことはそうそうない。—「高速道路を自転車で走った」
- ・究極のミニマリスト。—全財産は紙袋一つ。
- ・何度もいなくなる。毎回皆大騒ぎ探し回った。探すと見つかる。
- ・人間はずるい、こすい。でも、素直、率直、正直。
- ・失敗しても失敗しても、何とか生きようとする人の姿。人生の達人。

自立支援住宅の出発式（＊卒業式のようなもの）での竹田周二さんのお礼の言葉

ネバーギブアップ

人生は七転び八起きです。私は何度もつまずき何回も失敗しました。もう起きるのよそうと思いました。そんな時でした。神の助けです。北九州ホームレス支援機構の諸先生方です。おかげで心臓が悪く倒れる寸前でしたが、手術をして命を助けて頂き有難う御座いました。これも先生方のおかげです。有難うございます。身体はロボットになりましたが、アトムのように空は飛べません。又、人も助ける事もできません。だが少しは世の為、一寸でもお役にたてればと思って居ります。有難うございます

○私の関心

子ども・青年、障がいを持つ人、ハンセン病を負った人、災害被災者支援、沖縄・平和の取り組み、加えて、ホームレス支援、など。

ルーツは — 出身教会 久留米聖公教会での出来事。

多くの青少年が集まる教会。非行、不登校、家庭不和。家出、窃盗などの事件も…。時折、生活困窮者も来訪。幼稚園、ボイスカウト活動…。人が集まり、賑やか、楽しい。同時に、問題・課題も集まる。

NPO、その他諸機関などの、ある問題・課題に特化した支援のための組織また働きは必要。

だが、これらを教会の働きとすることが必要。

教会は、専門家集団でなく、素人集団として取り組む。その他の機関と連携する。

○教会は、社会の様々な人たちが出入りする場、行き来する場でありたい。

⇒ 現状は、閉ざされている。あたかも会員制の場のよう。



豊かな出会いと交わり。様々な問題・課題が持ち込まれる。

聖書の実践の場。「地の塩、世の光」として歩む。丁寧に関わる。

聖公会のパリッシュ理解 — 地域の人々、社会・世界への牧会としての関わり。

■ いのちの現場から聴く：全体討議

卓 ありがとうございました。本当に、私たちはいろんなことを学ばせていただきました。自己紹介、またご自分の経験を踏まえて、たくさんの学びとキーワードを与えてくださったと思います。キーワードをもって、私たちはあらゆる出来事をそれに当てはめて考えることができると思います。例えば今、いのちがおろそかにされている。イスラエルとパレスチナを見ると、自己絶対化によって、「自分の信仰、自分の考えが絶対だ」という、盲目的な信仰によって、ああいうことが起きているかもしれません。また、「自分と違う」ということで、民族、人種、また宗教、そして性的嗜好などなどの理由によって、相手を否定して、抑圧して、差別するということが、今起こっているということも私たちは分かります。そしてそれによって何が起きているか。貧しく、また小さくされた方が最初に苦労されますね。そしてこどもたち、また年寄り、弱くされている者が一番被害を受けているということを考えました。

また、そのことによって私たちに何ができるか。できないかもしれない。しかし、お話の後には、「赦し合うこと、和解、癒し合うことというのは、どのように私たちができるのか、どのような働きを通してできるのか」ということについて、解決法は分からぬのですけれども、いろいろ考えさせられました。

今、ディスカッションではないので、深い話はできないんですけども、そういうキーワード、私たちがこれから自分の営み、またこれからの教会の歩みを考える上で非常に参考になる、そのキーワードということを考えいただきたい。それで私たちは、それについて「補足」をすることもあります。また私たち教会は、批判が非常に苦手ですよね。教会はああだこうだいわれると、自己正当化というか、「そうではないんだ」ということで弁明、言い訳をしようとしている。非難ではないんですね、批判、建設的な批判。聞いてもそういうのが多いんですけども、それぞれ語ってくださったご自分の話を踏まえて、これから私たちの歩みにおいて参考になる、またちょっと言い足りなかったという部分がありましたら、それを踏まえて言っていただいて、さらにもし教会に対する「愛情のある批判」をしていただければ、それを私たちは甘んじて受け入れて、からの前向きな姿勢として捉えて歩んでいきたいと思いますので、そういうことをお互いに話できればと思います。柴本さんからよろしくお願ひします。

柴本 「どういう話をしようか」と思って、さっきの発題はそういうことでお話しさせていただきましたけれども、あと分科会のほうもありますので、そこでもどういうお話ができるかなと思っておりました。私が宣教協議会で、こうやって発題をするというふうに言ったら、あるベテランの牧師さんが手紙をくださいました。手紙をくださって、そして、「あなたは司祭として、牧師として働いている、聖公会の牧師として働いていて、そしてこの宣教協議会に行って発題をするという立場なので、ぜひ私の思いを聞いてくれ」という手紙でした。その方もずっと牧師として生きてきて、ずっと働いてきて、やっぱり教会の牧師として、自分の教会の信徒たちの牧会を本当に熱心に、引退した今でもやっておられるんですが、そういうふうに教会で一生懸命働いてこられて、本当に尊敬できる方ですけれども、その方がおっしゃったのは、やっぱり、『『信徒ファースト』『信徒の牧会ファースト』にどうしてもなってしまう』。なってしまうというか、そのことが優先順位としては高いというか、「そのことを熱心にやってきた」と。それは本当に大切なことなんですけれども、それとは違って、社会のこととか世界のこと、地域のこととかが、(優先) 順位から落ちてしまう。そうすると教会で熱心に働いてこられたので、自分が退職した後に、「地域の方たちといろいろ交流して、『地域のことをいかに知らなかったか』ということを、今よく思い知らされている。」ということをおっしゃっていて。「このことで、どういうふうになっていくのだろうか」という話をされていました。地域のいのちに仕えるより、教会の中で牧師として働くことが、意識的にも無意識的にも優先になってしまっている。でも「本当は違うんじゃないかな」という思いがあるんですよね。そのあたりのことを伝えてこられたので、本当に私も、そういうふうに思ったりいたします。いろんなのちを考えるということと、そこに仕えるということと、教会の牧師であるということと、重なりたいと思いました。私も焼き出しに行ったり、沖縄に行ったり、いろんなことに関わっておりますが、私は「牧師として行っている、司祭として行っている」ということにはこだわっていますけれども、他から見ると、そうでもないかなと。という、ちょっと感じたことをお伝えしておきます。

卓 ありがとうございました。そういうお話を伺うと、先ほど竹迫さんからお話がありまして、私たちの存在理

由というか、教会の働き、「呪いではなくて祝福する」。「神様から祝福をいただいて、その祝福を分かち合う」ということですけれども、みんな能力も限られているし、物理的にいろいろ難しい。それで、その祝福を、自分が属している教会、司牧している教会だけではなくて、社会へもっと広げていくということも大事だと思うんですけれども、その面において竹迫さんはどう思いますか。

竹迫 カルトからの脱会というのは、辞めたら終わりということじゃなくて、マインドコントロールされていた時の認知の歪みというのが、辞めた後も残るものですから、私は「後遺症」と言っていますけれども、その「後遺症」の解決のために、辞めてからだいたい入っていたのと同じぐらいの期間、苦しみが続くといわれているんですね。それを解消する研究と実践をやる場として、「いのちの家LETS」という施設をやっております。実は白河でその活動をする時、たくさん的人が集まれる施設が、なかなか適した建物を見つけることができなかつたんですが、実は白河教会から徒歩3分の所に、聖公会の会堂があったんです。当時、司祭さんもおられず、信徒さんも確かに1人しかおられなかつたのかな。その場所が使えると非常にありがたい、だけどわれわれもお金がないから、だいたい相場でいえば月額5万円ぐらいはかかりそうだけれども、何とか2万円で抑えられないかなと思って、当時の管理司祭だった方にお話をしたところ、「2万でいいですよ」って言われたんですね。ちょっと拍子抜けして、「なんでそんな安いんですか」って聞いてみたら、その司祭さんが、「実は私、40年前に統一協会を脱会した者です」と。その時、思わず、「神様っているかも」とて思いました。「あんたほんとに牧師か」って言われましたけど。だから、これが一つの例だと思うんですが、もし教会に人がいなくなつても、そこには神様の祝福つてあるんだと思うんですね。どういう形でそれが花開くかは分かりませんけれども、「私たちが何もできなくても、神様はやってくださるんだ」ということを、ちょっと感じさせられた体験でした。今はその建物も取り壊されまして、アパートが建っております。私たちも別の建物を何とか見つけて活動を継続しています。これからはたぶん、家出してくる2世たちの駆け込み寺的なことが必要になってくる。でも、せいぜい数人の人しか対応できませんから、焼け石に水なんですけれども、でも、変わらず神様の祝福つて、ずっと在り続けるんだろうなっていうことは、何となく感じるんですね。私たちの力が及ばない所でも、神様は働いてくださると思いますね。

卓 ありがとうございました。祝福がつながっているということですけれども、竹迫さんからの話によると、「呪いか、あるいは祝福か」というところで、一番、呪いの代償というか、本当に不幸な人生を歩まざるを得なくなっている、例えば山上徹也被告のこどもの時の写真を見ると、「まさか殺人者になるとは」と思つたりしました。それで2世のことも、いわゆる宗教2世のこともおっしゃつたんですけれども。先ほど安達さんは、「こどもに対するケア」というか、ケアではなくて「祝福」というか、「祝福された存在、ありのまま」ということをおっしゃつたんですけれども、今、お二人の話を踏まえて、「こどもたちに対して、私たちは祝福された存在なんだよ」ということを常に語っておられると思いますけれども、付け加えて（コメントを）よろしくお願ひいたします。

安達 「祝福された存在なんだよ」って言葉で言っても、なかなかこどもたちも分からぬですし、大人の私たちも一生懸命頭で考えちゃうところがあつて。ただ、本当に人ととの関わりの中で、「神様はここにいてくださるな」っていう瞬間がやっぱりあつて。それは自分の意思とは全く違うところで働いてくださつてることのほうが多いなと私は思うんですけども。そんな瞬間、瞬間を少し分かち合えた時、「やっぱり神様はいてくださるな」っていうふうに思つたりするんですね。私はたまたま本当に、就職した最初の園がキリスト教保育だったので、日本基督教団の幼稚園だったんですけれども、その次に清里に参りました、キリスト教保育をずっとして、その場に居させてもらったんです。一つは、「人間の力でこどもたちを育てるということじゃない」ということを、すごい実感しています。もちろん、こどもも育つ力はあるんですけども、私たちの力以外のところに、やっぱり神様はいてくださるんですね。そのことを経験しました。それ（経験）はきっと人それぞれ違うと思うんですけども。

ただ、保育士の先生たちとお話をすると、こどもが一生懸命祈つてゐるんですって。例えば、4月に（あるこどもの）妹が入ってきて、（入園してきて）ずっと泣いているんです、そうしたらお姉ちゃんは心配で心配でしょがない。でもそれを一生懸命、神様に祈つてゐるんですね。「妹の何々ちゃんが泣きやみますように、保育園が楽しくなりますように」って。そういう姿を見て、クリスチャンではない先生も、「神様いてくださるんですね」っていうふうに言ってくださる。そういう瞬間を分かち合える時って、祝福をいただいているなっていうふうに、すごく思つたりします。

信徒としては、教会って、教会の中で「もう1人の自分」みたいな感じで、ありのままで神様の前に居させてもらえる、そんな所なんです。そういう温かい方が周りにいらっしゃって、そしてそういう空間の中で、日常生活とはまたちょっと違うような時間が持てる。私はそんなふうにこどもたちからもパワーをいただき、そして兄弟姉妹、神様につながる方からも本当に力をいただき、そんなことが全て祝福されているなというふうに思っているんです。

卓 そうですよね、神様は見えないんだけれども、はっきりと私たちの間に宿られた、それで私たち人間と人間の間におられ、つなげてくださる。それによって私たちは神様を感じているんだけれども、そのこどもたちの話を伺いました。

人間って大きくなると、人間と人間関係というの、祝福し合う対象じゃなくて、先ほど申し上げたように、自分と違うということで、「呪い始めて憎む」ということに大人は発展していくんですね。そういう人間と人間の間の本来の在り方というか、差別をなくすということを、差別による痛みを感じて取り組んでいらっしゃる堀江さんは、「祝福」がキーワードになっていますけれども、どういうふうに捉えていらっしゃるか聞かせてください。

堀江 ありがとうございます。先ほどからお話を伺っていて、大人になったから呪うのかというと、必ずしもそうでもなくて。幼稚園のある教会で伝道師をしていたころ、こどもたちを見ていると、ジェンダーの問題、男であるとか女であるとか、「男らしさ」「女らしさ」って、もう砂場で（起こります）。こちら（清里）は砂場がないんですね、森ですもんね、園庭じゃないですもんね。文脈が違うということを学ばせていただいている。やっぱり「こどもは無垢ではない」ということも、私自身はこどもたちに教えられてきたなと思っています。逆に問われることもたくさんありましたし。どんな差別問題とも重なってくる部分はあると思うんですけども、祝福のちょっと手前で留まりたい。というのは、やっぱり「ゼロの地点」にまず戻さなきゃいけない。尊厳を回復していくことが必要だと私は思います。そこでこれも文脈が違うので誤解を生んでしまうかもしれないですから、「和解とか赦し」という言葉を使う手前で留まりたい」と思っているんです。教会での牧会をしていた時の経験もそうですけれども、対話が成り立たない時に、「お祈りをしましょう」「神様に聞きましょう」という言葉が語られる時の怖さ。あと、日本基督教団という教派

では、今はあまりそうでもないすけれども、差別問題を担っていた委員会が全部つぶされていった、そして沖縄教区との対話ができなくなったということが今、あります。そういう意味でも、聖公会では沖縄教区の方々の報告を伺いながら、ブースを見ながら、「私はやっぱり日本基督教団にいるんだ」ということをすごく今、考えさせられてもいるんですけども。

その時に、「神様と対話をするというのは、人との対話を阻害してしまうことにならないか」ということ。今、目の前にいる人と対話しなければならないのに、「お祈りをしましょう」と言ってしまうこと。教団総会では、対話をぶった切って、「じゃあ閉会祈祷に入ります」という形で。お祈りに入られると、誰も不規則発言できないんですよ。そこで、「もっと対話をしてください」と叫ぶことが、「祈りを邪魔した者」として「異端だ」というレッテルが貼られていくということがありました。なので、和解とか赦しの手前で、また祝福の手前で考えなければならないことが、私にはまだまだたくさんあるんだなというふうに考えています。

本来、聖書の言葉を引用すべきですけれども、今日、リ・ジョンファさんの言葉を引用しておきます。この人は何を言いたいのか（というと）、解釈がすごくたくさんあるので難しいんですけども、共同体について考えるリ・ジョンファさんが、「居心地の悪さ」ということを書いているんですね。明解な答えがない中で、神様との対話の中でも、明解な答えを得る人もいれば、得られない人もいる、それで解釈もさまざまに、「居心地の悪さ」というのが残ると思うんです。その「居心地の悪さ」というところから逃げずに、それでも対話を試みていくこと。そこには、時には温かさだけではなくて、やっぱりずっとこれは語っていることなんすけれども、「怒り」という感情が大切だというふうに思っているんです。怒りってネガティブな感情なので、出してはいけないというふうに、いろんなマイノリティの人たちは感じてきたと思うんですけども、「怒ったら負けだ」「やっぱり同性愛者ってとんでもない。いつも怒ってるやつだ」「女はすぐ感情的になる」とかいうレッテルは必ず貼られるので、怒りって、すごく「出してはいけないもの」と思われているけれども、その怒りというのを大事にしていく中で、同じく怒っている人たちと出会っていくことができる、その「怒りの共同性」というのを、私はその一歩手前のところで大事にしていきたいなと思っています。そういうことは本当にいろんな人たちからキリスト教の中で教わってきたということを学んできました。以上です。

卓 ありがとうございました。今、「祝福の前段階」という話がありまして、対話の大変さを教えてくださったんですけども、私たち、お祈りをする時、神様を自分の都合に合わせるんですよね。それで、神様に言いつ放して、聴こうとしない。傾聴しない。また、人との関係もそうですよね。聴こうとしないということがたくさんありますけれども、それで人間の関係が断絶したりということもあったりするんですけども。半田さんは傾聴、人の話を聞くということから、神様のみわざが始まったと。（神様は）人を通しておっしゃったんですよね。また病院は病む人々が集まって、また神様に呼ばれる、それで看取る場所であるんですけども、聴くということと、最後の看取りということを含めて、聴くことに対する、もう一つの大切な教えをいただきたいと思います。

半田 堀江有里さんがおっしゃったので、「怒り」ということでまず思ったんですけども、私の場合、元捕虜の人たちの怒りの言葉は、やっぱり聴かないと分からなかった。それを表現してくださったことによって、私も知らなかつたことに気付かされたというのは、とても大切なことでした。それを知らなかつたことを恥ずかしいと思い、そこから、「やっぱり聴いていかなければいけない」と心が動かされるようになっていったということが大事かなと思います。

最近、日本兵の人たちが、命令で中国でひどいことをさせられて、その後、「話せない」「そのことを誰にも言えない」ということを抱えたまま生きていたので、家庭

内暴力につながったという証言を、最近聞くようになりました。そこに生まれる怒り、痛みというものを聴く私たちでいなければいけないということ。そしてそれを聴いた時に、私たちはロボットではないですよね。心と魂を持っていて、そのような痛みにある人たちの言葉を聴いて、そこで私たちの心、魂がロボットではないので、そこで何か響き、かき乱される、そこから応えていくというのが、傾聴ということ。聴くということが、その一つの表れ、一つの呼びかけにもなりますね。怒りの声であったり、痛みの声であったり。それに出会わされた自分の心が、かき乱されたところから、応えとして、レスポンスとして送り出されてゆく。私たちがそれぞれ遣わされていく。

祝福に届くまでには、長い道のりであることのほうが多いと思います。けれども、それは私たちが自分の力で行くのではなくて、もし、癒しなり和解なりがくるとすれば、それは神様がなされることなので、自分の力がないことで諦めてしまうのではなくて、共に歩ませていただけるということじゃないかなと思います。

卓 ありがとうございました。今、お話を伺ったんですけども、これから語り手のどなたかに、結論やまとめは頼みません。私も偉そうに言えません。皆さんも今、思い巡していらっしゃると思うんですよね。そのモヤモヤ感を大事に留めていただいて、後ほど分科会で、それぞれの語り手の方が提示してくださったキーワードを中心に、深めていただければと思います。



分科会

[A] こども、キリスト教保育 安達美樹さん

●分科会の進め方：基本的には、キーワードを確認しながら分かち合いをしたい（安達）

●内容：

- ①歌を歌う「そらにかがやくほし」（かきはらゆうじ詩曲）
- ②詩の朗読を聞く「ひとりひとり」（絵本）
- ③自己紹介
- ④小グループに分かれて意見を出し合う（5グループ分け）
- ⑤全体で分かち合い

●分かち合い：

- ・なぜ宣教協議会にきたのか。心にあるキーワード一つひとつにみんなが関心を持って意見を分かち合うことができた。
- ・一人ひとりを神様が愛してくださる、とはどういうことなのかを考えた。自然の中に幼児教育があることの意味を考えた。
- ・話を聞いた感想と質問をした。
- ・安達さんの話し方：優しさ・深みがあった。安達さんたちの積み重ねと実際の難しさ。信徒ではない職員との関わり方。キリスト教教育のチャプレンがいなくなる可能性もある？卒園生の消息、教会に行っていない先生との関わり方。
- ・子どもが自然の中で育つことの重要さ。現実と理想のギャップ（親との対応）。親に幼稚園のファンになってもらうことが大事ではないか。教会の宣教の観点から（同世代がいない問題）。
- ・キリスト教教育の最前線としての保育・教育の在り方。子どもと神様をつなぐ大切さ。

●安達さんに対する質問

- ・子どもに関わる上で困難なこと、失敗などを聞かせてほしい。失敗談を聞きたい。
- ・子どもたち同士の関わりはどうなっているのか。（→全部子どもたちに任せている。もちろん、殴り合いもする。掴み合いもする。けれど、ありのままの様子を受け入れている・見守っている。）
- ・卒園生のその後について。（→キリスト教から離れちゃう子が多い。でも、それでもいい。どこかで思い出してくれて、キリスト教に繋がってくれればいい。）
- ・教会に来ていない・信徒ではない教師の子どもに対する関わり方。（→そもそも、信徒か否かという垣根を作らないことが必要。礼拝の中で職員の先生方がメッセージをすることもある。子どもを通して、親もキリスト教・神様に触れることができる。）



[B] 性の多様性 堀江有里さん

<交わされた意見>

- LGBTQが商品になっている、という堀江さんの指摘に対し、在日の外国人にとっても同じような状況であり、多様性の大切さをここでも感じる。
- LGBTQの方は我々のすぐそばにおられるという認識を持たなければならない。
- 教会における婦人会の役割を考えたい。そのための手がかりがこのグループシェアリングで見つかればいいと思う。
- 同性カップルの結婚を認めるかどうか。希望的には認めたい。クビを覚悟で同性婚の式を認めるかどうか。男女は外観ではわからないかもしれないがわからなければそれでいい。男女と聖書に書いてあるのでそれを行う。
- 人の分類をしていくということは整理がつかない。多彩性とレインボープライド（北海道教区）に希望を持つ。
- 虹色のはこぶね2019年から。いろんな方がいて目が開かれてくる。
- マイノリティの問題ではなく、周りの私たちの問題。
- 数字の大切さ：男性教職（聖職者）と女性教職（聖職者）の給与の差を数字で明らかにすることは必要。礼拝出席者の男女を分けなくなったのは残念、実態が掴めなくなるから。
- 婚姻制度は法的には不平等だから是正するべき。法的構造の問題と形式的不平等の問題。
- 教会に通うのはそこに何らかの救いを求めるから。そのために同性婚の式文はあるといい。
- 同性婚の祝福。新しい生活を始めようとしている人への祝福をしたい。祈祷書改正に盛り込まれる。妻、夫どちらも使えるようにすれば可能。ただし反対もある。
- 「公言」とは何か。
- 教会に来て、来会者名簿で「男、女、こども」で分けるのは嫌いだ。見直しもなく思考停止になっている。
- なぜ闘うのか。先輩を見習って当事者が闘わなくてはならない。



[C] カルト、人権 竹迫之さん

分科会を始める前に竹迫さんより、講演会の時にお話しできなかった内容をお話頂くと共に、アラン・ジュスト報告書（1995年）についての補足があった。10項目に対して、1項目でも当てはまつたらカルトと言われるが、アラン・ジュスト報告書は信教の自由の観点から論議を呼んだという。

カルトに対して論破をすることは無理である。当事者家族の「どうしたら（カルト信仰を）やめさせることができるか？」、また当事者がどうしたら自分から「（カルト信仰を）やめよう」という気付きを引き出すことができるか、アプローチ等寄り添うことが大事である。また、団体を規制することではなく、行動を規制することも大事。

●洗脳とマインドコントロールの違いは何か？ →目的と結果は似ている

- 外部からの暴力的アプローチ→洗脳（家族の「カルト脱退行動」は、こちらになりやすい）
 - 本人に自覚を持たせるように見せかけてのアプローチ→マインドコントロール
- 宗教2世は家族や世の中の動きを見て「このままではいけない。何とかしなくては」と抑圧されやすい。生きづらさを感じている人にどのように寄り添うかが課題である。

●キリスト教も注意するべき点がある。幼児洗礼の問題、牧師の家庭で生まれた等…

- ・信教の自由は、信じない自由も含む。
- ・何が子どもの幸せに結びつくか？それは整理しなくてはならない問題である。時には強制を伴わないといけない場合もある。それは個別の状況による。

●教会に新興宗教やカルト教団が来た場合

- ・乗っ取りを考えているカルト教団…自分から教団名を明かすことはほぼない。（相手は愛想が良い事が多いらしい）
- ・相手が何のために教会を訪ねてきたか、会話等を通じて探る必要がある。
- ・仲間にはなれないがお祈りはできるとアピールする。

●正統と異端の違い

- ・宗教的以外のカルトもある。
商業カルト（ねずみ講）、政治タイプカルト（ネット右翼）、ホスト（マインドコントロール）等々…。
- ・正統の教会でもカルト化することがある→牧師の権力集中化や囲い込み。
- ・子どもに信仰を継承してほしい→子どもにとっておせっかいである。
- ・教会の色気をどこまで抑えることができるかがポイントである。
- ・因みに自主性を全く認めないのはカルトである。

☆統一協会の逆をいえば福音的になる。カルトの真逆を行く→健全な教会となる。

☆局所的には狂信的なことが起こるが、それが長続きする事ではないのではないか？

このような時に伝統宗教が頼りになるのではないか？

☆人間が生きていくためには宗教は必要である。それは悪いものから防ぐ。

☆2000年も継承されてきた伝統宗教の力を信頼してもいいのでは？

☆カルトの存在を許さない社会にすることが必要である。



[D]傾聴、スピリチュアルケア 半田ウィリアムズ郁子さん

1. 半田ウィリアムズ郁子さんのお話

- ・傾聴とは、アクティブ（=積極的に）耳を傾けることであり、人となりを受け止めることである。
- ・神と人の関係、人間同士の関係、あるいは出会いを大切にしていくことが重要である。そこに神が望んでおられる神の国（=平安）がある。
- ・キリスト者は、天と地をつなげる役割を持っている。私たちは、与えられた隣人を大切にする者として、キリスト者として遣わされている。隣人への愛は神から来ているゆえに、常に神とつながっていることが大切である。つまり隣人を愛するとは、神様への応答である。
- ・心と心との触れ合いを通して、私たちは変えられていく。私たちは、心のある者として人と寄り添い、心が動かされる。
- ・エピソードをひとつだけ紹介する。ジョージさんという人からチャプレン（半田さん）に「来てほしい」と呼ばれた。ジョージさんは、宗教的な人間ではないと打ち明けた後、次のような話をした。「自分は健康がなによりも自信があった。ところが病気で酸素マスクをつけなければならない状況になり、『自分が情けない。自分は何のために生きてきたのか。』と自分に問わざるを得なかった。でも、このことを妻に言うと彼女は悲しむだろう。だからチャプレンに聞いてほしかった」。お話を最後に、昔、ジョージさんは、軍隊チャプレンから祈りを教えられ、今も神に毎晩祈っているとのことだったので、「嘆きも悲しみも神様が聴いてくださるのは恵みですよね」と聞き返すと、彼は「そうですね」と頷いた。そこで共に聖書を読む機

会が与えられた。その後、一緒にお祈りした。ジョージさんは最後「ありがとう。今度は妻と一緒にチャプレンに会いたい」と言ってくれた。このエピソードから、私は、何をしたというわけではないが、「そこにいること」それをしてただけであった。自分の力だけで何とかしようとすると疲れてしまう。神の助け、導きを求めながら歩んでいくことが大切である。

- ・お話の中で半田さんは、アーネスト・ゴードン『死の谷をすぎて—クワイ河収容所』の一部を朗読した。

2. 分かち合い

以上のような半田さんの話をきっかけに、参加者一人ひとりが、日々行っていること、経験していることについて、分かち合う時間がもたらされた。

- ・聴くことの難しさを共有した。それは、違う人を受け入れることの難しさであったり、話を聞き出すことの難しさであることを分かち合った。聴くということは一方的なことでなく、お互いが求めていくことであり、そのようにしてお互いが変えられるということである。
- ・それぞれの経験を分かち合った。例えば、聴こうという姿勢や待つことの大切さを痛感させられたこと、聞く人だけで問題を解決してしまおうとしたこと、また「してあげたい」という気持ちを抑えて、話す人が自分の話を通して、自ら気づいていくことの大切さなどが挙げられた。
- ・神様から出会わされている。愛は神から来る。自分からではない。
- ・心を開いて人の話を聴いてきただろうかと自問自答する機会となった。教会の一人ひとりが傾聴していく、そのように教会が聴き合えるコミュニティになっていけばよいと思う。
- ・「神への傾聴」というキーワードが出た。東日本大震災でのボランティア活動の際、被災地でいろいろとお話を聞いていた。その中で、被災地の方々から、しんどかったことのお話がどんどんと膨れ上がり、聞くことにしんどくなってしまった。病者訪問、相手の方の話を聞くときに、励まさないといけないと思うと、なかなか傾聴できない。自分が軸になってしまふ。何を言おうかではなく、聞く人自身が自分を空っぽにして、全身全霊で聴くことが神への傾聴ではないだろうか。話す人にとって、評価されなければ、物足りなさを感じる。しかし、それが徐々に受け止めてくれているという安心感につながっていくのではないだろうか。
- ・聴くことは難しい。家族、両親など相手のことをよく知っていると、心を開いて聴くことが難しい。どうしてもその相手の話すことを否定してしまうことがある。気づきとしては、「聞いてあげる」といった姿勢ではなく、「話す人の側に神がおられる」という姿勢が大切なのではないだろうか。
- ・話を聴くときに、自分に近い人ほど聴くのが難しい。つい正しいことを言いたくなる。早く解決を望んでしまったりする。答えが出なくとも、一緒に立ち止まるということが大切なのではないか。聴いている人も、ストレスがたまる。聴く人も時に誰かに聴いてもらうことも大切であると感じる。
- ・聴くことの難しさを共有した。自分の心を開くこと、聴くことを怖れて心を閉ざしてしまうことがある。またついつい助言をして、解決を求めてしまうことがある。神からの助けが必要とされていることを実感できた。隣人を愛するとは、自分を愛するように、つまり神様が自分を愛するようにということだと気づかされた。

[E]貧困 柴本孝夫さん

●柴本さんから「いのちの現場から聴く」についての補足

- ・他のプロフェッショナルな話し手とは違い、私は知識を与えるなどの難しいことはできない。
- ・13年間、密接にかかわった方の話。自立支援住宅入居のための面談から密接に関わり、柴本さん夫妻とも良い関係。教会の出張へもよくついてきた。また、教会行事にも参加。葬儀の時の説教を聞かせてもらう。



●柴本さんからの投げかけ

教会が縮小していっていて元気がない。地域に支えてもらう教会という考えは良いと思うが、司祭自身にも良い考えがないので、一緒に考えていきたい。

[意見]

- ある教団の教会の話。閉鎖になった教会の事を司祭が「教会にコミュニティはあったが、コミュニティの中に教会はなかった。」と話していた。自分とは違う他者を認めること、教会にとって他者とは「地域」。教会の形を重視するのではなく、例えば児童園のように形を変えて地域に溶け込むのも一案。他者（地域）と出会って、その結果を教会に循環する、という考えが大切ではないか。
- 自分が関わる幼稚園児を見ていて、貧困には見えるものと見えないものがある。見えない貧困の人たちとどのように関わっていけるのか。時期をとらえる大切さを感じる。
- 柴本さんの人柄がこのような密接な関わりを生まれさせた。（私の教会では）ひとり親家庭支援のために教会を使ってもらっている。月に一度、父親たちと「お酒を飲む会」をしている。その中から様々な関りができるので、信徒になってくれることを焦らず待ちたい。



[質問]

- ホームレスの人たちと関わる時、怖くはなかったのか？
→ 最初は「ビビりながら」だったが、接してみると決して恐ろしい人たちではない。

[意見]

- 教会に1人勤めていると、教会は1日中開けておくべきだとは思うが、教会内に人がいるかも知れないと思うと正直怖い。
- 「貧困」という言葉を考える時、社会の最下層の人たちが締め出される状況だ。教会の外へ出て行き、それらの困窮した人たちに出会うことが大切。

●最後に

貧しい人だけではなく、エリートと言われるような人もホームレスになり得る。皆、課題を抱えながら懸命に生きている。教会もともに考えることが大切。

グループシェアリング（1）

このグループシェアリングでは、「1. ここまでプログラムを振り返って感じたこと」と、「2. 今回の宣教協議会のテーマ」について話し合いました。話し合いを始める前に「大切にしていただきたいこと（P238掲載）」を読み、全員で確認をしました。また、各グループに「木のバトン」が配られ、話している人がバトンを持ち、バトンを持っていない人は聞くこと、そのバトンを渡しながら話し合いを進めることを意識してグループシェアリングが行われました。

以下は、各グループの担当者が作成した記録です。基本的にそのまま掲載しましたが、「いのちの現場から聴く」の語り手の表記は統一し、誤字脱字は修正しました。

Aグループ



- ・実行委員の熱意がすごいと思った。
- ・スケジュールがタイトでまだ頭の整理ができていない。
- ・もう少しゆとりの時間があったら皆さんにつたえたいことをまとめる時間ができると思った。
- ・海外からの参加者がいたり、もしくは海外の現状を聞



いたりすることができたら日本の宣教についても深く考えられるのではないかと思う。

- ・人と接するのが得意ではないが、周りから話しかけてくれたり、困ってたら手助けしてくださるので、教会ってこういうところなんだと知った。もっといろんな人の話を聞いてみたいと思った。
- ・3つの教会の話を聞いて感動した。数の問題ではなく教会が開かれていることが大事なんだと感じた。
- ・外で黙想の時間があっても良いと思った。
- ・日本聖公会の方向を決めていく中でアングリカン・コミュニケーションの中の問題も考えていけたら良いと考える。
- ・大館の教会のお話を聞いて、自分の教会も喜びを持って奉仕ができる教会になるにはどうしたらよいかと考えている。
- ・安達さんのお話からこども達に接する接し方から学ぶ部分が大きかった。
- ・幼稚園のチャプレンを信徒に、という話がある。
- ・宗教2世問題についての分科会について、聖公会の中でもこどもの囲い込みについてどこまでが囲い込みか考えてしまう。若い人たちのやろうとしていることを止めてしまう前に何かしてあげられないかという思いがある。
- ・こどもの礼拝の式文をこどもたちにわかりやすいような言葉に変えたり、こどもの環境に沿った文言に変え

- たりなど、宣教協議会の中で同じ思いを持って動いている人たちがいることが嬉しかった。
- 幼稚園の先生たちの横のつながりが活発になっている。
 - 同じ聖公会の中でも世界をみても多様性を認める人、認めない人がいるが難しい問題。
 - 聖公会は分裂の歴史を辿ってきている。今後そうなってもしょうがないことと思う。
 - 堀江有里さんのお話から、同性愛を認めない人に対して、聖書のどこに書いてありますか、というのが印象的だった。
 - 死刑制度の問題などでも聖書は賛成の立場にも反対の立場にも使われてしまう。
 - 一般の人の見方として、宗教に対して大丈夫なのか、と言われる。
 - 社会福祉士の資格を取るときに、一緒に連れていくと

したら誰がいいですか、という問い合わせに「牧師」があった。なぜ牧師なのだろうと思っていたが、今ならわかる気がする。

- イギリスと比べて日本の方が式服や教会の作りなどトラディショナルだと思う。
- 分科会の中では普段の取り組みなどのシェアがなされた。
- 司祭さんが教会にいてくれれば地域に開かれた教会への一步を踏み出せる。
- コロナの影響はやはり大きく、教会と幼稚園の施設を使って愛餐会をしていたが、それが難しくなっている。
- 3年間という時間の長さから愛餐会の再開の難しさを感じている。
- 宣教協働について、一步踏み出してみないとわからないことがある。

Bグループ



[全体]

- 宣教協議会にきて、日本聖公会全体で集まっているということを実感した。
- 自分の所属グループについてふたたびその意義を考えたいと思わされた。

[実り持ち寄りブース]

- 過去に所属したことのある教区の昔と今に見入ってしまった。それぞれ試行錯誤されていると感じた。また同じ教区でも普段交わりのない人たちとも交わりをも

てて良かった。

- 教会と幼稚園をつなぐ役割を与えられているのではないかということにプレッシャーを感じつつ教会に幼稚園の先生がもっと来やすいようになってほしいと改めて思った。
- 自分の教区のブースを準備するなかで教区の歴史も含めて知ることができたのはよかったです。
- 各教区、各委員会のこれまでの歩みが視覚的に、聴いたり、物理的に触れることができて体験的に知ることができた良い機会だった。
- みんなが楽しそうに、にこやかに談笑している感じがよかったです。
- 2012年の宣教協議会で持ち寄ることを約束した「実り」ってなんだろうと考えさせられた。目に見える、大きな実績ということよりも、地道に続けてきたこと、ネガティヴなことも含めて、神様とともに歩んできたこと自体がそれぞれの実りなんだと思った。

[物語を聴く]

- 高齢化、少人数という課題は共通していると感じた。コロナ禍で教会の交わりが制限された経緯なども共感しつつ、それぞれの教会が「力強く」歩んでいることに勇気をもらった。
- 大館の教会と東京の教会の祈り合う関係について考えさせられた。教会というと自分の教会のことだけで完結しがちだが他の教会と関係を持ち続けることはいいなと思った。
- 会議も大事だが「出会いの中での話を聞いてほしい」



という信徒の声にはっとさせられた。

- ・大館の教会で「過去にいろいろ大変な時期もあったけど、いつでも変わらない祝福があった」という言葉に励ましをもらった。むしろ大変なときにこそ神様の力が大きく働くのではないか。

[いのちの現場から聴く]

- ・祝福の前にとどまってみる、徹底的に聞いてみる、話し合ってみる必要があるのではないかという堀江さんの言葉にその通りだと思った。

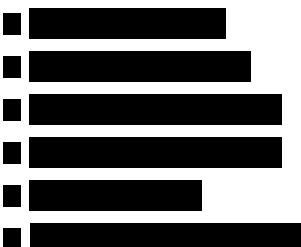
[テーマについて]

- ・教会の中の交わりが深まると、一方で新しく来られた

方がで疎外感を感じる人も多いのではないか。また、交わりのなかに自分から入っていこうという気持ちも少なかったのではないか。そのような人をみかけると気になる。教会の人すべてに声をかけてくれる婦人がいる。見習いたい。

- ・教会の働きが内側だけに向いてないか、外との関係も教会が教会であるために大切ではないか。
- ・お茶を飲む、話を聞き合う、これが大事な本質かなとも思う。
- ・さみしい思い、孤独な人が教会の中にも、外の地域にもいないようにしたい。

Cグループ



[分科会感想]

- ・保育園現場で大切なのは、上から抑えるのではなく、のびのびと過ごし、こどもたちに耳を傾ける姿勢が大切であることを共有した。また現場における職員同士の関係性について、どうしているかという疑問が出た。信徒である職員と信徒でない職員の関係性の難しさはあるが、清里ではキリスト教保育について分かち合いが上手にできているということを聞いた。
- ・キリスト教系カルト・新宗教の区別はする必要があるだろう。教会に繋がっている青年のお話が印象的だった。若い人の居場所を作り出す必要性について、協議したら良いのではないか。
- ・世代的な事柄かもしれないが、大学に入ったら統一協会（原理研究会）からの勧誘を受けた経験がある。最近は、教会に入ってくることもあるが、自分自身は見分けることのできる気がしている。方法や手法について、知っていると防止できる可能性がある。
- ・貧困というテーマだった。あるホームレスの方と深く関わったというお話が印象的だった。自立支援活動をする中で、友だちのような関係になり、沖縄にも一緒に行ったり、あるときは激しく喧嘩もすることもあった。人格と人格のぶつかり合い、関係性を構築し、召された時はお葬式を柴本さんがなさったというエピソードを聞いた。出会いの中で深く深く関わっていくこと

が印象的だった。サポートする側とされる側を超えた関係性。最初はビビっていたということだったが、立場や役割によって自身が活かされるという体験を通して、偏見が解消されることになった。

- ・スピリチュアルケアについて、東アジアの捕虜収容所のお話の中で、「死の家」と呼ばれる場所で神に心を開いていく元兵士の証が印象的だった。（参考：ゴーデン『死の谷を過ぎて』）私たちは出会わされるという中で神が下さった愛を共有できるのかもしれない。

[各教区ブース]

- ・京都事件の検証報告書を通して、「となりびとになる」「つながって実を結ぶ」というのは、加害者の立場からは求められないという葛藤がある。堀江さんの提言にもあったが、和解と解決の一歩手前で踏みとどまるという言葉が身に沁みた気がした。

[私たちのあゆみ]

- ・厳原の3名で守られている教会に感銘を受けた。今年の献金は大丈夫だろうかと心配している時に神が働いてくださり、補うことができたというエピソードをはじめ、「神様が、神様が」という言葉が印象的だった。



心を向けて傾聴することの大切さを感じている。心と体と魂が一つになることの大切さを感じた。

- ・ 厳原、大館の教会のエピソードが心に残った。分担金や献金の悩みは尽きないものだが、3名で回しており、ご高齢の方が中心にもかかわらず、よく回しておられると感心した。東日本大震災の支援についても教会だけの力ではなく、一つの宣教的働き、奉仕においても地域の人と協力することで教会を活気づけるきっかけになるのではないかと感じた。
- ・ 厳原の木寺由美さん、1人で主日礼拝の準備をされている中にイエスさまが共におられるという告白に感動した。信仰における喜びは素晴らしい。
- ・ 教会の存続に関しての考えが、1人でもいる限り存続するというお話は印象深いし、どれほどにそのような思いをお持ちの信徒さんがいるだろうか。教役者の忙しさ、健康が心配という話が出ていたが、どのように地域との繋がりを持って施設を運営するかも考えさせられた。また聖研よりも牧師とゆっくりとお話をしたい。

[教会の現状]

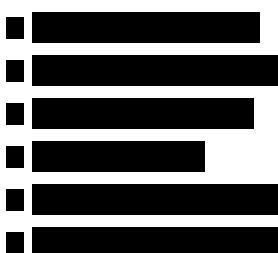
- ・ 実は、宣教協議会への参加は補欠要因で突如くことになった。教区では、教会の閉鎖等の問題を抱えている。教区会でもそのような議案が出たり、宣教協働が5年計画で進められている。今回は、大館が取り上げられたが、幼稚園の建て替えの際に理事を中心に町おこし的な雰囲気にもなった。保育そのものが地域から

評価されたケースもある。信徒中心に運営していく成功的な例の一つである。しかしながら、立ち行かない教会は閉鎖しなければならない現状もあり、頭を悩ましている。

[「となりびと」というキーワード]

- ・ 教会の中の隣人と教会の外の隣人があるのではないかという気がした。
- ・ 関連して信徒も隣人ではないかという分科会での話もあった。けれども、実は中と外もあまり区別はいらないではないか。
- ・ 教区で最も古い福島聖ステパノ教会に属している。NHKエールで取り扱われた。たくさんの見学者が来たり、地域で初めてきた人がいたり、教会を開く意味を再確認した。東北教区のミッション・ステートメントにもあるが、開く動きという働きをしつつ、人が気楽に来られるような配慮に取り組んでいる。
- ・ バザーの売り上げの一部を地域で活動している団体に献金することを決めた。また別の話であるが、こども食堂にも教会を開いて活動にも関わることも始めた。
- ・ 教会が会員制になっているのではないかという問い合わせにハッとさせられた。外の人たちが入ってくると、違和感を感じることもあるが、幼稚園との働きを通して教会以外の人たちとのつながりも大切にしたいと思い始めている。教会の敷居が高いといわれることにも通じていると思われる。

Dグループ



[今までのプログラムで感じたこと]

- ・ 教会での信徒の関わりを考えるとき、「役」があるということが一つキーワードとして挙げられるように感じた。屋我地聖ルカ教会での青年によるサーバー奉仕、厳原教会での信徒の役割（財務・祭壇奉仕・営繕）、柴本さんが北九州でホームレス支援活動をするなかで感じた「係り」としての役割など。
- ・ 半田さんのイギリスでの体験として、ビルマ戦線で日本軍による捕虜を経験したイギリス人が日本人に対して持つ負の感情はかなり強かったことを聴いたが、こ



れによって「赦す」ことの難しさを感じた。しかし、思いがけない流れでこのようなイギリス人と病床聖餐に共に与かり、和解を経験したということと、自分自身が受け入れられない人と分かり合えたときの喜びを思い出した。

- ・「繋がり」というキーワードが挙げられる。それは、地域との繋がり、学校との繋がり。そして、エキュメニカル（カトリック、福音系、聖公会）の繋がりなど。
- ・実り持ち寄りブースでは各教区の特色が出ていたが、なかでも京都教区が幼稚園で起きた牧師による性的虐待をいまも謝罪をしながら、覚え続けて、再発防止に努めていることが印象に残った。
- ・9月の青年大会では久々に対面で大勢の方との交わりを与えられて感謝だったが、今回、あらためて宣教協議会に参加して、大勢が集まれたことに嬉しさを覚えた。そして、日本聖公会で考えなければならないtopicsを確認した。
- ・教会同士の合併について、各教区での取り組みを聞くと、事情はさまざま、例えば、合併を経験した教会では礼拝が豊かになったというご意見もあれば、5年後は自分の教会は無いだろうというアンケート結果が出たところもあった。
- ・分科会について、柴本さんのホームレス支援の話を聴いた。自分をふりかえると大阪西成は怖いイメージが強く、足を踏み入れたことがない。しかし、教会は待つ

- ているだけではなく、外へ出かけていかないとならない。
- ・半田さんの話の補足を分科会で聴いて、empty handとにかく聴くということの大切さを感じた。神のみ国のシャロームとは何かと言うと、神の愛と平和が満ち満ちているという思いを共有することではないか。
 - ・半田さんより『クワイ河収容所』（アーネストゴードン）を紹介された。苦しい人の話であり、実際、人の話を聴くのは難しい
 - ・苦しい人と出会うとき、事柄を解決することに気持ちが動くが、寄り添って側にいるということが大切であると思う。しかし、それは難しいことでもある。

[私たちが隣人となるために]

- ・教会ファースト（次に地域）でよいのか？という問い合わせを受けたことがあるという経験を柴本さんが話したが、実際、隣人となるということを考えるとき、地域の人と関わりを持たないと始まらないのではと思う。教会と地域を分けてしまうとき、教会の本質が失われるのではないだろうかと思う。
- ・柴本さんの分科会で参加者より「地域に支えられる教会」を目指す話が出たが、とても大切な視点だと思った。

Eグループ



[昨日を振り返って、その他]

- ・実り持ち寄りブースで、継続・歴史を展示されているものが多かった。自分の教区では、信仰の継承をうたっている。統計を取ると、世代が若いほど継承されていないことがわかる。教父母の証しをつくって意識をもつてもらったり、恐れず、本人に堅信を勧める。教区の問題がどれほど自分事として捉えられるか、を教役者も信徒も意識するべき。
- ・歴史を歩む中に自分が組み込まれていないと单なる年表になってしまう。
- ・教会はいつも明かりがついていて扉が開いているもの、ということを昨日言われたが、実際を見てみると、自分の教会では無理で、信徒と聖職が互いを支え合って信徒数を増やしていければいいな、と感じた。

- ・小さな教会が大きな教会と協働していたのは素晴らしい。
- ・教会が経営する英語教室のこどもたち（ノンクリスチャン）のテリトリーになっていてうれしい。
- ・「寂しい教会」「小さな働き」の「寂しい」「小さい」というのはどういう意味なのかよく理解できない。若い子たちは「継承者」と見られ、扱われると、責任が重くて怖くなってしまうと思う。清里から教会に戻ると、分科会で話し合った同じ熱量では教会で話せないと思う。持ち帰ってからが問題だと思う。
- ・「小さい」という表現が出たが、皆さん結構生き生き



と活動している。信徒数にこだわらないで良いのではないか。

- ・教会はどのような場所なのか、何をしているのかを実際に見てもらうことが大切。バザーをしても聖堂内には入ってくれない。地域の必要に応え、活動していくことが大切。
- ・地域に教会の存在をなかなか認めもらえない。幼稚園併設だと、幼稚園だと思われたりする。
- ・昨日3つの教会が、今日5人の方の話が取り上げられたということは、これらの教会から、人々から何かをつかまなければならないのだと思う。
- ・洗礼を受けることを考えるのではなく、「いのちを大

切にする」という観点から仲間を増やしながら、自然に洗礼に導かれる事を望みたい。

- ・役割という言葉が昨日から気になっている。ステレオタイプな言葉と結びつきやすいので注意が必要。Ex.若い=力仕事、IT
- ・教会財政のことを気にする余り、献金を（あまり）上げもらえないような方々が教会に通い始めた時に嫌がる人がいるが、そういった方々が来てくださるのが本来の教会で、とても恵みだと思う。
- ・この場にいられることがとても幸せ。自分が思っていることを皆さんも同じように思っていると知って本当に嬉しい。

Fグループ



[今まで感じたこと]

- ・「他の人々（キリストと出会っていない人）」が神の国へ招かれる経験について思いを深める
- ・他教派のクリスチャンとの出会いを通して自分が聖公会にいる意味を考える ⇒ 「他者」とのかかわりを持つことの重要性
- ・「一緒に向き合う」という姿勢
- ・さまざまな違いを実感・発見することを「新鮮な出来事」として受け止めていく ⇒ 「物語」の思い・情熱・労苦を分かち合うことの喜び
- ・少なくなってきたら「閉じる」のではなく1人でもいたらその人のために開ける
- ・数を増やすこと=宣教ではない（数人でも人が集まつたところには喜びがある） ⇒ 祈りのパートナーシップからお互いにとって実りのある関係を結ぶことの大切さ《脱、「メンバーシップ」》
- ・アングリカンネットワークのつながりの中にあることの証し
- ・同じ祈祷書を使って互いに祈り合っているという豊かさ…世界で祈りが数珠つなぎになっている
- ・体と心が自由になるような経験を！（カルトと正反対の歩み）
- ・誰にとっての「安心」かを考えているだろうか



- ・傾聴：隣人愛⇒神様からまずもらってその愛に応答していく
- ・「教会報告」の中で分かち合わせることは「いいところ」ばかりだったところから弱い部分を分かち合う
- ・「他の人々」の統計はとらないのか
- ・教員が名札をついているのは？
- ・洗礼を受けていないけれども教会の周りにいる人の存在
- ・「罪」=「罪悪感」になっている？⇒美德？
- ・開会礼拝の式文より…「信仰と疑いを携えて」というイメージの重要性

[「いのち尊厳限らないもの」隣人となるために]

- ・いのち：環境問題
- ・いのちは与えられているものだという認識が薄れている
- ・違うものを尊重する
- ・イエスさまは自分から離れていく人や弱い人の隣にいる

Gグループ



- ・プログラム間の休憩が少ない。→このシェアリングを時間調整に使ったらどうか。
- ・グループGでは、「これまでのプログラムやテーマを通して、見聞きして嬉しかったことや、考えを変えさせられたことなどを共有することを目的とした」

[プログラムについて]

- ・悩みながら参加した。不安は拭いきれずに今も不安だが、徐々に不安は溶けてきた。
- ・いろんなことがあったが、神様はおられるというこの確信はある。
- ・女性の聖職者が協議会で活躍しているのをみて、力をもらった。
- ・マーガレット教会との協働のストーリーを聞く中で、本当に本音でやりとりしている感じが伝わってきた。
- ・竹迫さんの講演の中で、「信徒が少なくなても、神様はおられる」という言葉が心に響いた。竹迫さんの話で出てきたのは越山健蔵司祭（東北教区退職司祭）。
- ・協議会に来て二つのつながりを感じた。①武藤主教さまとの再会があった。武藤司祭（当時）に可愛がってもらった。大人と同じ扱いをしてくれたことが嬉しかった。②色々な思い出が詰まったファイルをブース紹介でたまたま見つけた。
- ・教会がサロン化していることを疑問に感じていた。「教会は一つの資源」ということが大切だと思った。子育ての拠点としての地域の中における教会の役割りも重



視してはどうだろうか。柴本さんの話を聞いてそういうことを思った。

- ・宣教の人的教勢の低迷ばかりではなく、一人ひとりに出会うということがすごく大事だと思う。
- ・教会がどうやったら神様のみ言葉を聞いて、自分が楽しく生かされていると実感できるだろうか。そういう環境を作るのが牧師だと思う。
- ・教会の外にどれだけ、福音の喜びを作っていくかが鍵ではないか。
- ・「ありのままの私」がそのまま受け入れてもらえる環境が大事。
- ・大館の皆さんのが喋ったことが、ある意味で本質ではないか。司祭が不足している状態、司祭が疲れている状態ではいいアイデアは生まれないのでないか。
- ・教会はサロンではない！本音を言わないと本来の教会の目的＝家族になるという大事な視点を見失わないようしたい。
- ・カルトの話に出てきた。宗教2世の話。統一協会だけではなく、聖公会も同じことを経験してきているのではないか。
- ・若い人との接し方がわからないということも、実際の話ではないだろうか。

[テーマについて]

- ・開かれた教会とはなんだろうか。
- ・現代は情報と娯楽が溢れている。その中で宣教についてどう考えていくのか。
- ・人と人が一緒に、「いのち」と「いのち」が合わさってあたたかくなる。そのことを実感することできた。「いのち」の温かさを感じていくことが大切ではないだろうか。
- ・宣教しよう！という力強いことではなく、「愛は伝染するもの」「伝わるもの」そのことを念頭に置いて、つながりを持つことが大事。
- ・教会でのそれぞれの役割が明確になること＝帰属感が明確になると、宣教の在り方や教会の在り方が浮かび上がってくると思う。
- ・2世問題、選択の自由、「その人のありのまま」をどのように受け入れていくのかが大切。招かれた私たちが今度は、他者を招くことが大事（けれど、選択の自由を考慮しなくちゃいけない。）
- ・「辛抱強さ」と「希望」をどこまで表現できるのかがテーマに表れていると言えるのではないだろか。
- ・葬儀は最大の宣教の場ではないか。

Hグループ



[今までの分かち合いや振り返り]

- 前回の宣教協議会で提言を挙げたが、今回の宣教協議会に至るまで、それをしていないのではないか。その反省から始まって欲しかった。
- 今回、前回からのつながりが見えない。繋げましょうと言っていたのが、繋がっていないのではないか。
- 「共生」のイメージから入ったのはよかったのではないか。
- 10年の歩みについての確認はあるか？また、「他者」教会にとっての「他者」とは誰か？
- 誰でも人生においてボタンの掛け違い等は起こり得る。そういった方々から教会は目を背けていないか。
- 神を求める心が貧しい人の集まりが教会。
- キーワードとして「となりびと」「他者」を取り上げて欲しい。
- 「他者」を「となりびと」とするのが良いのでは？
- 教会にとっての「となりびと」を探すことが大事。「他者」と「となりびと」との関係。
- 他者を受け入れることによって、“教会にとっての無縁のとなりびと”を受け入れることが大事。そのことが宣教を変えるのではないか？
- 「となりびと」に至るまでの我々の意識を変えることが大事。小さくされた側を「となりびと」と見なさない、放置していたことが今のような争いを起こす世界に至らしめたのではないかと思った。
- 私たちが大事にしなくてはならないことは、私たちの先入観等の問題を問うこと。
- 中途半端な和解をしてはならない。「となりびと」になったつもりになってはいけない。
- 先ず話を聞く。分かった気、理解している気でいるのは良くない。
- 小さい教会の物語について。自分が（異動によって）



教会を去った後に無牧になってしまう。その教会は自ら「閉じます」と表明した。今回1日目の「私たちのあゆみ～物語を聴く」で取り上げられた教会は良くまとまっていたが、実際はそうでない教会の方が多いのではないか？

- 主教座聖堂から離れた教会は1人の司祭が3つの教会を管理をしていたりする。牧師の事務量の軽減をはかるべき。
- 前回の宣教協議会の内容等がどうだったかの把握ができていない。実感もない。実りといつても実らなかつたのも実りなのではないか？
- きれいな言葉でまとめていこう感があった、という違和感があった。批判ではないが、そういう私たちも認めて進んで行くのが大事なのでは。
- 「いのち」のイメージ、幅広い。何が「いのち」なのか、共有したいが。

[テーマに関わる事]

- 「いのち」他者とはなにか。みのりの対極にあるものを考えていない。人のいのちだけではなく、環境を含めてのいのち・世界を大事にする。つながっているということもいのちなのでは。
- 環境を含めて大事にしないと、人のいのちも大事にできない。大震災 自然破壊 放射能汚染 人のいのちだけでなく、色々なものが汚染されてしまった。
- 何故神はこのようなことを起こしたのか？
- いのちの対極という形で突き詰めて考えていないのではないか？

Iグループ





[私たちのあゆみ]

- ・3教会とも皆さん楽ではないだろうが、働きをになっておられる。
- ・教会に集まる家族という雰囲気を大切にしていた。小さくてもそれでよいのだ、と感じた。
- ・ある程度人数の多い教会は「誰かがやってくれるだろう」との姿勢が強い。3つの教会の皆さんは働きを重荷ではなく喜びとして担っていることが伝わってきた。それは信仰の喜びであり神に仕える喜びであると感じた。

[分科会「こどもたちとの関わり」]

- ・「幼稚園の未信徒の先生に対してどのようなアプローチ

チをしているか」との質問に「特に垣根を作っていない。信仰の有無にかかわらず様々な役割を各々が担いこどもを見てくれる」と答えておられ感銘を受けた。

- ・小さなこどもたちとの関わりは、宣教を考えると種をまいていくこと。いつ芽が出るかはわからないが…種を蒔かないと芽もでない。

[分科会「性の多様性」]

- ・LGBTQの方々は自分の周りにもいるはずだが、不勉強無関心だったと感じる。公会も寄り添っていけるか、変わっていけるか、自分も見ていきたいと思った。
- ・教会はコミュニティ、誰が来ても受け入れられる場が求められる。各教会=現場のブースをみると、各教会が活発に活動しておられて強められた、嬉しく感じることだった。横のつながり強められ、それぞれの強みが共有される工夫があればよいと感じた。

[その他]

- ・地球環境にも触れてほしいと感じた。
- ・信仰の継承の視点から、家族への声かけも必要ではないか。強制ではなく。
- ・管区・教区共にまだ力のあるうちに協働や合併など必要な動きを行ってほしい。宣教を続けていくために重要であると感じた。

Jグループ



[前半のプログラムで感じたこと]

- ・大きな教会はできる人に役目が集中してしまう。大きな教会でも一人ひとりが役目を持ち、賜物を用いることが重要。
- ・神様から与えられた役目を喜びに感じられるか。武藤主教の「聖職が真摯に誠実に牧会していく必要がある。」と言われたのがよかったです。
- ・他者をどう受け入れていくかが大事。
- ・昔は「何故信徒は変わらないのか」という思いがあった。聖公会は聖職中心だと感じる。責任は教役者にある。イエス様も弟子たちと3年共に居て、弟子たちも変化があった。牧師と信徒は年間52日くらいの関わり

がある。その日数で変わることは難しいのではないか。

- ・牧師がどこまで質を上げる努力をしているかが問われている。
- ・教会に行ってお恵みを頂き、喜ぶことが大事。自分は喜んでいるのか？日曜日教会から帰ると疲弊している。聖職が喜んでいるかが大事。
- ・「役割」があることが大切。役割があると嬉しい。地域の中で教会が役割を持つことが大事。
- ・教区内の11教会は教会としては成立していない（信



- 徒が3人以上いない）。頑張っている教会を見ている。「もっと頑張れ」とは言えない。
- ・疑問ばかりだと信仰は成り立たないが、信仰に疑問を持つことが大事。
 - ・将来が不安である。教会の終わり方、閉じ方を考えている。
 - ・牧師不足と牧師が忙しくなっている。忙しい牧師には話しづらい。遠慮してしまう。牧師には生き生きとしてほしい。
 - ・時代的に宣教しにくい。社会的な事情もある。しかし、歴史的に見れば、日本は宣教しにくい国。

- ・神様にお恵みをもらうために招かれている。
 - ・宣教は洗礼堅信を受ける人を増やすのではない。
- [となりびとになるためにというテーマについて]
- ・自分中心ではなく、神様を主体として考える必要がある。神様を求め、心を向ける必要がある。
 - ・となりびととなるためには敬うことが大事。傾聴し合う場としての教会が大事。相手に合わせすぎると辛くなる。
 - ・聴くことはとてもエネルギーがいる。
 - ・「役割」がキーワード。
 - ・教会はごちゃごちゃしたほうがいい。でも静けさを求めている人もいる。それぞれが思いを語ると混沌とする。

Kグループ



[これまでの振り返り]

- ・タンザニアに派遣 (JOCS)。GFS代表。タンザニアのタボラにも支部がある。つなげたい。困難の中にある人々と共に生き、地域、隣人とのつながりを大切にしたい。
- ・半田さんのチャプレンとしての経験の話が心に響いた。
- ・4つの教会に派遣されている。時間もなく教会員との会話も少ないが、教会は何をビジョンにしていくのか、祈り求めている。これまでのプログラムを自分の現場にどう当てはめるのか未消化。
- ・常置委員として参加。財政部と幼保関係担当。これまでの発題は個人レベルのアプローチ。フラットな関係を大事にしている大会を感じている。英国に長くいた。その時に、日本軍から奪ったものなどがあった。



ホームズさんもよく知っている。立教の原子力のことを反省することもいいが、それが聖公会としてどうなのだろうか？個人の問題と聖公会の問題の間にギャップを感じる。昨日の話と今日の話にもギャップを感じた。

- ・玉城家はよく知っている。屋我地聖ルカ教会と祈りの家教会。戦後米軍支配の中、愛樂園には入れなかった。神戸教区から来た鬼本司祭が聖ルカ教会を作った。祈りの家教会は超教派で司牧。ハンナ・リデルが青木執事を送り、愛樂園を創設。戦前、国は地域からの差別があったために療養所を作れなかった。今日はカルトの話の分科会に参加。若い時に統一協会の勧誘にあった。沖縄には基地がある。オスプレイが家の上を飛ぶ。この話はみなさんに、自分とは関係がないとは言って欲しくない。
- ・逗子には米軍がいる。
- ・私たちは生活が脅かされている。普天間が38年に移っていく。
- ・基地問題をすると、長くなる。これは政治問題。外交問題。今日の話題ではない。
- ・これはいのちの問題。声を上げないといけない。
- ・上原主教の話はいのちの問題。
- ・働いている近くでもタッチアンドゴーで、いつでも基地からの発着陸がある。
- ・上原主教の話を素直に受け止めたらいいのではないだろうか。
- ・政治の問題だとしたら、今米軍と自衛隊が、死体処理の問題を扱っている。なぜこんな訓練をしているのか。沖縄があぶない。おかしくないですか。私たちはどうでもいいんですか。
- ・日本国があるから日本聖公会がある。国があるから生活がある。それがスタート。

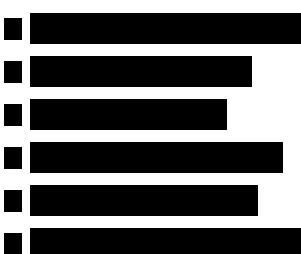
- ・ こどもの頃、憲法が無かった。日本国民じゃなかった。日本国憲法が自分たちに適応されなかった。小5、6年目に日本国憲法を習った。日本に復帰していくからとの理由。人権の問題として。それまでは天皇中心だったが、そうじゃない世界、一人ひとりが大切にされていく世界を学んでいた。
- ・ それ以前がおかしかった。
- ・ しかし今まで日本国憲法が一度も適応されたことがなかったのが沖縄。
- ・ 初めての宣教協議会参加。厳原聖ヨハネ教会があるということが地域の人にとってのシンボル。
- ・ 与えられたもの、現実にあるものを取り入れながら、どういう生き方をするか。多彩な性の認識が大事。知ることが大切。薩摩川内市に毎日勤務。川内には原発がある。政治的な意図がひかれている。住民は付度させられる。特別支援学校の教師をしており、エネルギー教育もしている。反対は教育の場では言えないが、人間が処理できないものは扱いについて課題があると話している。どう動けばいいのか悶々としている。反差別の生き方を持っておくことが大事。

[となりびとになるために（～をする）]

- ・ 柴本さんから、私たちの教会に困難を抱えた人が来たら、迎えられるのかという問題提起があった。こんな経験がある。クリスマスの時、聖書の学びをしていて、精神的に困難を抱えている方々が参加してくださった。増えていってクリスマスに20人くらいの人々が来てくれたが、当惑を覚えた信徒さんから苦情があった。
- ・ 運営自体を考えていかないといけない。ただ内部の議論が多くなっているが、具体的にどうするかがない。どうするか。逗子教会は家庭集会をしていたが、出来なくなってきたが、具体的な話をしていけたらいいと思っている。
- ・ 柴本さんの問題提起は信徒教育の問題。教会で炊き出しをしてきたが、長くすると見慣れてくる。

- ・ ホームレスのことだけがすべてではない。過去に比べて教会に来る人が多様になっている。教区としての取組とかを考えたい。
- ・ 開かれた教会というが、教会の建物に来てもらうイメージが強いが、そうじゃないのでは。私は出向くことをしていきたい。色々なところに行つたけれども、札幌聖ミカエル教会に戻り、建物を守る気持ちだけではなく、AAや、そして地域に出かけて行って出会うことでも教会だと今思っている。現在タンザニアのスターハウスで生活。イスラムとキリスト教は40%、40%。開かれた教会のイメージは、多様で広く、豊かな出会いの中にあるのではないだろうか。
- ・ 人とつながる、自分がその道具になる。
- ・ 開かれると壊される。安定が破壊される。開かれることへの抵抗が既存の教会にある。
- ・ 昔は教会にスペースがあったが、今は町内に色々ある。今は教会が地域に使ってもらうところは減っている。保育園などが今的方法。宣教協議会では、具体的展開を期待したかったが、個人の話になっている。
- ・ 宣教協働区の話はある。共同体でしか出来ないことはある。1人では何もできない。
- ・ 性別役割分担は言ってはいけない風潮があるが、機能的な役割というものはある。
- ・ 名札に書かれているフラットで話すというルールの共有はパワハラ予防のため。
- ・ 司祭や主教からいい話が出ることを期待したい。
- ・ 柴本さんの最後の言葉は、司祭が違うところに異動になった時、司祭がしていた活動が継続できるのかを考え、そのために学びなさいとの話だと受けとめた。
- ・ アングリカン・コミュニケーションの交わりがあるので、ブラジル聖公会とのつながりや、タンザニアのつながり、課題を抱えた方々とつながりを大切にし、多彩なリソースと連携していこう。

レグループ



[3つの教会の物語から]

- ・ 教会に対しての尊厳について。ギリギリのところに神

様の恵みがあると感じる。3つの小さい教会が、宣教する主体として「地域」的な使命を意識し持っていた。中・大規模の教会がそこから、何を受け止め直していくのか、それを今回の呼びかけに表せたら良いと思った。

- ・ 教会に大きい小さいはないということ、印象的。
- ・ 「何かをする」ことばかり考えるよりも、自分たちがどうありたいかの思いが大事。
- ・ 1人が一つずつ役割を持つこと=それぞれ持っている賜物を生かすことを考えさせられた。

- ・教会の3つの物語の提示に意図があり、チャレンジがあるだろうと見ている。目立った教会、地方の教会の幾つかの事例を出さなかったのはなぜだろう。どのようにそのチャレンジを受け止めるかということを考え続けている。
- ・財務担当なので、普段は教会について信徒数や献金額で考えることが多い。3つの教会のような小さい教会こんなに生き生きとしている希望が見えた。数字ではないこと。
- ・この宣教協議会は、今の時代における教会の本質（＝祝福）的な営みを見つめることだと感じている。
- ・プログラムを通じ「ひとりを見ようとしている」「一つのいのちに向き合う」ことを考えさせてくれた。
- ・神様と向き合うことが大事。じっくり人の気持ちの寄り添える場所がなかったが、キリスト者として、目指していきたい。
- ・3つの教会から気付かされること。このような紹介の機会は少なかった。こんなこともできています。ではない。物語。教会にみんなで見れたらいいなと思いました。
- ・大館の教会では、一人ひとりの関わり方を認める。みんなが一緒にいても良い。
- ・一人ひとりととなりびとになるに通じるものがあるのかなと思う。概要ではなく、それぞれの人を、個性を受け入れる。受容。
- ・小さい子どもも、自分も教会で様々な人に温かく支えられている。
- ・「何がしたい」「こんな教会になりたい」と考える目標は現実不可能な夢になっていないか。教会に与えられている本質的な役割、地域からの期待されていることだろうか。厳原のおばあちゃんたちの時代を経験していた。その子どもたちの世代が教会にきている。有珠の地で、地域に、心底の願いが出てる。小さな教会が地域を意識して、誠実に自分たちの役割を果たしていると必ず次の時代が来ると思っていた。
- ・宣教って何。イエスの様の言葉を伝えること。イエス様を行動で示すこと。幼稚園では伝えやすいが、いっぽく地域に出た時に、どのように伝えられるのか…。考

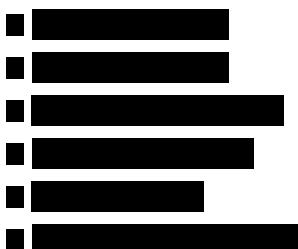


えた。庭の整備する姿、庭の柿木、それを地域に示す。

[テーマについての分かち合い]

- ・1人を大切にする。一人ひとりの出来事を見ていくことの大切さを感じている。
- ・出会わされること。出会いの神秘。その出会いは神様が与えてくれるもの。小さな出会いの一つひとつを宝のように扱う。そのためには、教会のコミュニティの中に、神様から使命が与えられている喜びを受け止める必要がある。
- ・神の国の実現は神様に主体性がある。その主体性に応える私たちの喜びや理解がある。キリスト教の宣教の原点を大事にする。
- ・前回の宣教協議会を見ると、東日本大震災などがあった出会い、外に出ていくというのがあった。コロナの後、分断された時を経て、全国から集まり合う。改めて気づき合う。
- ・原点に戻ると、神様と自分の間に喜びが生れること。神様との向き合いかた。神様ときちんと向き合うことで喜びを見出す自分を感じる。
- ・神様と見つめ合おう。向き合うことをやっていこう。力があった教会は自分たちができると思っている。でもできない現状。何かしようではなく。
- ・竹迫さんの話から、自分が出会う人の迷いによりうこと。無理やり脱退させるのではなく。正しいことが当事者にとって暴力になることもある。

Mグループ



まず、みんなで話し合いのガイドラインを輪読した。

[本日までのプログラム全体の振り返り]

- ・3つの小さな教会の話と、特に厳原聖ヨハネ教会のことを通して、そのことを踏まえ、自分の教区の教会について、またどのように教会を続けるべきかを考えられた。

- ・ 厳原のことを聞く中で、涙が出るほど心が動かされた。3人の信徒たちが、たとえ1人になったとしても教会を守りたい、ということが非常に感銘深かった。
- ・ 財務委員の業務と絡んで、教区への分担金のことで心がいっぱいであったけど、最後には神様が何とかしてくださる、ということをとおして、合併のこと以外にも、神様からの何かの恵みが与えられることを思うようになった。
- ・ 3つの教会を管理している。それなりの距離を移動しながら牧会するという、ある意味厳しい状況ではあるが、いろんな方の声を拾うことが重要で、その声にどのように向き合うべきかを、思われた。小さい、大きいの関係なしで、信徒たちの歴史が教会の歴史であることを思われ、思うようになった。
- ・ 厳原のことを思ってくださり、非常に嬉しかった。というのは、自分の教会が厳原聖ヨハネ教会と同じだと思われたから。



[分科会を通して感じたこと]

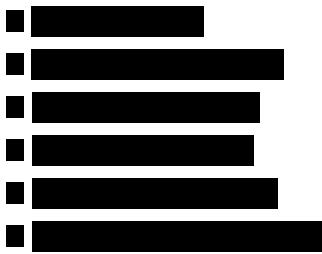
- ・ 半田さんのグループ。聴くことの難しさの話題について共感していただいた。また、自分が持っていることが「自分だけかもしれない」と思われても、私と同じような思いを持っていることを知ることができたのが、本当に嬉しい。
- ・ 竹迫さんのグループ。その続きとして聞いたことが、「2世問題」。それについては、聖公会といった、キリスト教の中にもあるのではないだろうか、という認識があった。その問題に対しても、子どもの思いを尊重することが一番重要であると思われた。異端とカルトは違い、また、その他の様々なことを聞くことができたので、良かった。
- ・ 安達さんのグループ。キリスト教保育を行っているけれど、信徒はほんの僅かで、他は非キリスト者であるため、「本当のキリスト教保育とはなんだろうか」と

いうことを思われた。今までキリスト教系幼稚園だったら、全員が信徒と思っていた。

- ・ 柴本さんのグループ。もう一度、柴本さんの話を聞き、話し合いをした。若い青年たちの「一歩間違えたら貧困の状況になる」と思ったことが衝撃であった。自分は、地域に支えられる幼稚園・教会でありたいと思っているため、そのことを考えながら、皆と分かち合いをしてきた。そして、これらを通して貧困を身近なものと感じられた。
- ・ 半田さんのグループ。職種上、傾聴の研修は行われるが、それはあくまでビジネスのためであって、本当の傾聴ではなかったことを気付かされた。傾聴、聴くことは、「私の気持ちを聞いてほしい」ということである。

[協議会のテーマについて]

- ・ 何かができるから、となりびとになれるのではなく、その人のそばにいるから、となりびとになれるのだ、と思っている。自分の周りの人に関心を持ちたい。そして、批判的に聞こえる聖公会の「生めるさ」が、どちらかの主義に傾倒されず、誰にも寄り添えるということを可能にしていると思われた。
- ・ 教会のメンバーと楽しく生活することができればそれでいい、と思っていることを気付かされる。視野を広く持ちたい、気持ちはあるが、どうしても身内だけ、内向きになってしまふことに悩みを持つ。
- ・ キリスト教家庭であるけど、仕事の事情で教会に行くことができなかつたので、自分が教会に居場所がないと思っていた。来て、ひとりぼっちで礼拝するだけなら、それはその人が礼拝しただけで、教会員として礼拝ができたわけではない。
- ・ 結婚してから教会に行くようになって、最初は教会に対して苦手と思っていたが、姑が自分に自然と寄り添つてくださったので、洗礼堅信につながるようになった。無理強いをしなくとも、人々はくるようになる。そのため、教会の敷居を高めないように。
- ・ 当事者と支援者の関係が誰かのとなりびととなれるだろうか。それについて悩んでいる。自分は誰の隣びであるかを考えたい。



[これまでの感想]

- 半田さんの講演を聞いて、人の話を聞くことの大切さを改めて気づかされた。ありのままの自分を受け入れていていることに安心するのだと思った。
- 東日本大震災の被災者にどのように寄り添えばよいのかという悩みがある。安心感は神様から与えられるものではなかろうか。
- 学ぶことが大きい。宣教協議会の参加に対する不安もあるが、とてもいい勉強をさせてもらっている。鹿児島の信徒さんの話を聞いていると、感動した。というのも、信徒さんが小さな教会を大切にしていることをお聞きして、教会の信仰が深くなっていることに神様のお働きを感じたからである。会議があるときに、礼拝の大切さをつい忘れてしまうことがある。けれども、今回の宣教協議会は、祈りもあり、準備に携わった方々に感謝したい。
- 東日本大震災の支援において大館教会のお座布団のお話を感銘を受けた。小さい仮設住宅だと部屋が狭いゆえに、スペースが取れず、必要な枚数をお渡しできないということがあった。
- 1日目に小さい教会の紹介がされてとても心に残った。東京都内でも同じことが起こっている。信徒数が減少、高齢化。役割がないと来ない人もいるといった現実がある。10年後の教会を考えるとどうなるのか。他人事ではないと思った。小さい教会でも扉を開いているこ



とが大切であるのだと共感した。

- 今の世界も人間の心も病んでいる。安心できる第三のスペースが必要。それが教会であってほしい。安心できる場所を作るために必要なことは、聞いてもらえるそれだけで嬉しいと思えるようなところではないだろうか。東日本大震災、仮設住宅でほっこりカフェを出した。他の教派の内、「聖公会だけ残ってください」と現地で言われた。というのも、聖公会だけ伝道をせずに、ただお話を聞いていただけであったからということがあった。ボランティア活動、「～してあげる」といった支援も大切であるが、それを宣教の道具にしてしまう危険が教会にはある。
- 被災地では、支援として物を配るということから、日を経ていく内に、きりたんぽを一緒に作るなど、何かと一緒にやっていくというコミュニティに変化していった。そのような中で、こっちからでなく、向こうから色々と話をかけていただいた。コロナ後、ようやく県外からのボランティア活動が再開された。ずっと続けていくことが大切だと思う。
- 特に西日本と東日本大震災の被災地との温度差があるように感じる。阪神淡路大震災、神戸市須磨区の教会で今も1月17日に礼拝をささげている。他方、原発事故など今でも東日本大震災の復興は終わっていない。こうしたことからも聴くことの難しさを感じる。「聴く」の漢字には「心」という文字がある。
- 日本聖公会、宣教のため、教会のすべきことは何か。宣教協議会はそのことを考える場であると参加して感じている。
- 宣教協議会は、初めての参加で、参加して何ができるか否かではなく、そのままの自分で感じることを持ち帰ることだと思っている。私は、クリスチャンになって間もないが、外に目を向けるために、クリスチャンでなかった自分の見方も忘れずに覚えておきたいと思う。

[「となりびとになるために」についての想い]

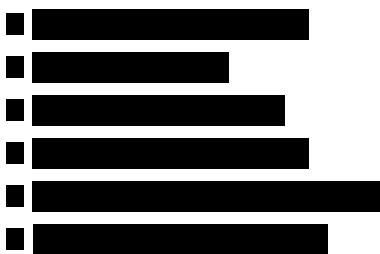
- 日本聖公会婦人会のお話。感謝箱献金を祈りの内におささげすることから婦人会がはじまった。ケニヤではアラカワさんが立ち上げた親のいない女の子のための児童養護施設に献金をおささげしている。彼女たちも私たちのとなりびとであり、お互いが祈りの内に隣人であると感じる。そこの間にいつも主がおられると感じている。
- 東京の教会でフードパントリーを行っている。スタッフも取りに来る人もお互い話をしながら共に歩んでい

- る。隣人になってあげるといった一方的なものではなく、そのようにお互いの関係性から宣教を考えていくということなのだと思う。食べ物に困っている人が身近にいるという現実に気づいていくことが大切なのだと思う。続けていくのも難しい。
- ・広島の教会の横に公園がある。そこで炊き出しを行っているが、地域の人々も協力してくれるようになった。地域の輪が広がり、続けていくことの実りがあった。

イエスさまに対して恥ずかしくないもの、おいしものを人々に提供しようという在り方を目の当たりにして、驚いたことがあった。

- ・コミュニティ・センターにはどのような人々が来るのか、何年いても知らないことがあった。夕ご飯を食べれないこどもたちに料理を作り提供している。教会もその働きに参加し、幼稚園関係の方々も徐々に参加するようになった。

○グループ



[実り持ち寄りブース]

- ・自分の教区は実りがなかったのでは、と思っていた。しかし皆さんの働きは素晴らしかった。思ったより楽しかった。

[私たちのあゆみ～物語を聴く]

- ・素敵な形で教会を守っていく。3人以下になった場合、見送る立場になりたくない。自分の教会は傾聴がない。後ろ向きの自分もいる。この10年は前向きではなかった自分に気が付いた。
- ・誰がいなくても神様の働きは続く。今までの危機感ではなく、前向きでいく希望を感じた。
- ・教会は我が家の延長であってほしくないと思っていた。しかし3つの教会の話を納得。ふさわしい「看取り」も必要。
- ・遠方の教会の管理は大変、元気が出ないことも事実。コロナ禍によって変わった。教会に誰が来てもOKという状況を作り出していく。成功例だけではない。いろんな形があっていいのではないか。

- ・私の置かれた場所と同じ境遇。教会の信仰は必ず実を結ぶと確信した。
- ・頑張っていいけど、無理はしないこと。
- ・定住牧師がいる教会の甘さも問題。

[いのちの現場から聴く]

- ・竹迫さんのセッション：幼児洗礼を考える上で、「親が子を思う願い」と「子どもの受け取り」は別である。いのちの尊厳は、一人ひとりそれぞれに多彩なものだということを認めると、いろいろなことがそこから出

てくると思う。

[いのち、尊厳限りないもの]

- ・こどもの現実は暴力を伴う遊びが多い。当たり前のことだがどのように大事にされていくのか。
- ・自己肯定感を持っていない人々に対して支えていくこと。尊厳を守るために社会の構造を変化する必要がある。自分の力だけではできない場合もある。
- ・いのち？命？Life？Common？隣人になることは一緒に普通にlifeしていくこと。普段の生活を続けていくこと、日常生活を続けていくことは極めて大事。
- ・すべての人と隣人にならなければならないのか。ハーダルが高い時がある。「嫌い」もある。「知ること」だけでも十分の時もある。神にゆだねることも必要。



[礼拝]

- ・一緒に祈ることの豊かさ。
- ・聖歌の選びがよかった。

[総合的な感想]

- ・礼拝が「多様」…。目的ではない。プロセスによって多様になり、さらに多彩になる。
- ・頑張って結論は出さなくていいけど、伝えていく（分かち合う）ことが大事。
- ・日程はタイトだったが、仕方ない。

Pグループ



- ・3つの教会の物語、特に大館の教会からのお話に元気をいただいた。
- ・5人の語り手の方たちは、それぞれ隣人をしっかり見つめて、共に歩もうとしておられる。自分にはその意味での隣人がいるだろうか。
- ・隣人をみつけること、話を聞くことが大切だと思った。
- ・2日間で沢山のお話を伺ったが、まだ咀嚼できていない。
- ・持ち寄りブースの中で、京都はシンプル過ぎた感がある。「報告書」を持ってきたが、他教区の方に読んでいただくべきかどうかという迷いがあり、あまりアピールできなかった。せっかく持参したのだから、積極的に配布すればよかったと思う。
- ・喜びと言えない「みのり」を持ち寄ってくださり、共有することができて良かった。京都の事件は、どこでも誰にでもおこり得ること。「起こり得る」こととして学んでいく必要がある。
- ・(東北教区)震災後の10年を紹介するスライドショーアップを作成予定だったが、時間不足で断念、残念だった。
- ・対馬に教会があるとは思わなかったので、厳原の教会からの報告に驚いた。教会は大小では語れないと思った。
- ・(北関東教区)持ち寄りブースのために実りを必死で探し、絞り出した感があり、さしたる実りは無いと思っていたが、持参したものを他教区の方が評価してください、観点が違うことに気づかされ、うれしくもあった。
- ・傾聴とは何か、改めて考えさせられた。(半田さんのお話)



- ・きっかけが何であれ、LGBTに関して話題にできるようになったことは大きい。
- ・宗教2世の問題は、カルトのことを離れても、私たちの課題である。自由と信仰の継承のバランスは難しいと感じる。
- ・カルトの被害者救済はこどもへの支援が最優先だと伺い、納得した。
- ・神学校に若者を送ることばかりでなく、年配者に学んで働いていただくことを考えたは?聖職の働き方について考えていきたい。
- ・信徒になってくれたら…という下心は、絶対もつべきでない。
- ・思いのほか他の人に見られている経験をした。「見られている」ことも意識したい。

[テーマについてのキーワード]

- ・(教会から)出かけて行く
- ・サマリア人は「聴いた」(声も、叫びも、声なき声も。想像力も大切)
- ・他人に声を掛けること (小さいことの積み重ねから、関係を築いていける)

Qグループ



[実り持ち寄りブースについて]

- ・他の教区のがんばっている様子を知ることができて良かった。委員会がテーマをもとにブースを作っておられるのが新鮮だった。

[私たちの歩み]

- ・いろいろな教会のご苦労と恵みに心が動かされた。大館における小さな教会と大きな教会の交流は、自分たちにないものを、地域を越えてわかちあう良い経験だ

と思う。

- ・「教会が人々の居場所になっていること」「信徒さん一人ひとりが役割をになっていること」「地域・社会とのつながりがあること」という共通点がこれらの教会にはある。
- ・皆がお互いに違う存在であることを受け入れるのがいかに難しいか。ともに教会を維持していくという目的意識があるから、みなさん元気なのではないか。

[いのちの現場から聴く]

- ・教会はマイノリティの人々が安心して過ごすことができる空間であるべきだ。
- ・和解は加害者の真剣な悔い改めなしには起こらない。自分たちが楽になりたいとか、早く解決したいとか思うのではなく、痛みをかかえながら歩むことが大切。
- ・教会は「ゆるし」のイメージが強いが、痛みを共有することなしに安易なゆるしはない。
- ・へりくだって主と共に歩むこと、慈しみ、そして公正が大事。
- ・その人の身になって考える、想像力が必要だと思う。

[テーマについて]

- ・雨に濡れている人に傘を差すのではなく、いっしょに濡れることこそ「となりびとになる」ことだと思う。いい人になる、助ける人になる、と誤解してしまうと、

「助ける人と助けられる人」の役割を固定してしまう危険性がある。むしろ神様に出会わされた、隣人とされた、ということを大切にしたい。



- ・「いのち」は生物学的なものだけでなく、人生や生き方を含む言葉。いのちが神様から与えられているということを知っているかどうかが大事。
- ・自分たちの人生にも破れや嘆きがある。それをどのように悔い改めて、神様を見上げていくか。
- ・「となりびと」となるためには、「イエスの弟子であること」を大切に考えるとよい。

Rグループ



[実り持ちよりブースについて]

- ・「実り」の意味をどのようにしたらよいのか迷いもあつたが、これまでの10年の自分たちの教会や教区の活動を振り返る良い機会となった。
- ・他の教区や委員会のブースを見て、参考になった（刺激を受けた）。
- ・持ち寄られた「実り」に触れ、そこで得たものを、どのように教区・教会に持って帰れるのかが問題。

[私たちのあゆみ～物語を聴くについて]

- ・小さな教会の物語を聴き、これから人が少なくなっていく（信徒も聖職も）教会は、これからどうしたらよいのか考えさせられると同時に「教会を守ってくれるのは神様」という言葉に感動し、励まされた。
- ・教区・教会は「信徒が減った…」「献金が減少した…」と、ネガティブなことばかりを言うが、昨日の「私たちのあゆみ～物語を聴く」では、小さくても教会を守っていく喜びが感じられ、ポジティブな発想に刺激を受けた。
- ・小さな教会を守る土壌（＝信仰の豊かさ）は、その教

会の歴史の中で育まれてきたもので、それは神の恵みであると思う。

- ・参加者の司牧するある教会（現在堅信受領者25名程度）では、コロナ禍で教会を閉じずにいたところ、全くの新来会者が得られ、受洗された。

[テーマについて]

- ・となりびとになることは、そんなに難しいのか、との意見が上がる一方、となりびとになることの難しさも語られた。また、そもそも「となりびとになる」とは

どういうことなのか、との意見もあった。

- ・「となりびととなること」は上から目線の言葉ではないのか？となりびととなさせてくださるのは神様の恵みなのではないか？

また、今回の宣教協議会で、この10年の実りを持ち寄ると言われたが、前回の宣教協議会を受けて何ができなかつたのか、それはなぜ出来なかつたのか？という「課題」を持ち寄つた方が良かったのではないか？との意見が出された。

Sグループ



[感じたこと]

- ・神学院卒業50年経つ。①近くの教会がまとまるのではなく遠くの教会がつながるのは面白い。②人口減少の中、大阪教区の教役者は韓国人3人、多種多様。
- ・①管理している教会がお一人の信徒。現実には人数を増やすことだけではないのではないか。②堀江さんの「祝福」の前に必要なことがあるのではないかに同感する。今回のアピールもそのことを留意して言語化したい。
- ・①日本の教会は違う文化を持っているのにそれぞれの教会のルールに縛られている。他の教会の働きを学びあうことが大切。すでに他の教会にあるものに目を向け学ぶ必要がある。②日本聖公会は内向きになつてゐる。あるものに目をむけ、いかに外に目を向けていくか。自分たちが主ではなく、客にならないとなならない。
- ・この協議会自体が、年配の人だけでなく、若い人も多様に参加している。素晴らしい。所属する教会は大きいと言えるが、規模に関わらず神様と対話している姿勢は変わらない。
- ・若い人が少なかった。教会ごと、教区ごとにカラーが違う。
- ・自分が生まれ育つた大きな教会も、遣わされた小さな教会もやるべきことは同じなことが「物語」の中で分かった。

[テーマに沿って]

- ・信徒が少なくなつてゐる。亡くなつた人もいるが、礼

拝の前に鐘をつくと寂しくない。繋がつてゐる。

- ・岐阜は10人来れば多い方の教会。歴史はある。一方の教会はフィリピン人が多いが、信徒が少ない。ある種、役割を終えた教会が他に引き継ぐという考え方。改めて新しいところに用いられていく。
- ・屋我地聖ルカ教会は130人信徒がいたが今は少ない。でも信徒さんが寂しくないといつ。
- ・どうしてもハードの話になるが、ソフトの話が必要。誰の隣人となつていくのかが狭くなつていて。これは教会として必要なこと。
- ・教会はあなたにとつて何？と聞くと「居場所」と答える。
- ・安心して出でていける「居場所」になつてほしい。教会を訪問看護ステーションにしたらという案が出でている。
- ・牧師さんが自分でやることができない。では誰がやるのか。すでにある資源とタイアップするのも手かもしれない。



Tグループ



[ここまでを振り返って]

- ・「実り」は持ち寄った後、それで終わらず、「神様にそれをささげる」ここまで行う必要がある。
- ・「物語を聞く」の3つの教会の信徒の方たちは、決して「希望がない」様子には見えなかった。しかし帰つてからこの話を自教会に伝えると、「何言ってるの～」と理解してもらえないだろう。どうやって伝えたらいいのだろうか。
- ・「言葉による宣教」「行いによる宣教」の2つがあるという話だったが、信徒には「言葉」は難しい。
- ・分科会D「傾聴」に参加した。人の声に耳を傾けることについて考えさせられた。自分の子どもや若い人にも教会に来てほしいが、どう声かけしてよいのか、そこまで聞きたかった。
- ・分科会C「カルト」に参加した。若い人が来ても役目を押し付けてはいけない。また逆に若い人が仲間を連れてきて、教会を乗っ取る危険な団体があるという情報も聞いた。
- ・分科会D「傾聴」では、「自分は人の話を聞くが、自分の話は誰に聞いてもらえるのだろうか。それがイギリスではきちんと組織的に出来ているが、日本ではそれができない」と言っていた。
- ・分科会E「貧困」。ホームレスというと何となく怖いという先入観があるが、しかしそれを乗り越えて体当たりで向き合うことで、人と人との人格的な関わりまで至る。本当に開かれた教会になるため、会員制の教会から脱するためのチャンスは、意外と身近な所に用意されているという話だった。
- ・5人の語り手に共通していたのは「傾聴」。牧師と言うと「世捨て人」というイメージを持つ人もいるようだが。決してそうでない。社会で皆と同じように生活していることを伝えたい。

[各教会、各自の現状から]

- ・たとえ1回反発して教会を離れても、いい想い出があつたらいつか戻ってくる。待っていることも大事。ゆっ

くりやっていきましょう。

- ・2012宣教協議会において確認されたのは「特効薬はない」ということ。急ぐと上手くいかなかったり、カルトに陥る危険も。決して焦る必要はない。私たちは「焦ること」と戦っているのではないか。
- ・確かに現状を見れば「焦る」のは当たり前。でも一人ひとりにできることは限られている。自分にできる精一杯を行つて、あとは神様にお任せするしかないと思っている。
- ・お世話になった先輩司祭が最近召された。のんびりした人で、教会外でいろいろな活動をしていた。決してすぐに人を教会に誘うことはなく、長くゆっくり関わっていくことが大切だと教えられた。
- ・「あんた、社会問題やりすぎ」と言われるが、社会問題は礼拝とも教会ともつながっている。それを丁寧に伝えていきたい。
- ・「聞く」ことは大切だが、無理な場合もある。自分の手は2本しかない。全ての手を握ることはできない。それ以上すると自分が壊れる。ひとりでキリストになつてはいけない。
- ・丁寧な牧会の丁寧とは何か、時間をたくさんかけることなのだろうか。



バイブルシェアリング

少人数のグループに分かれ、「キャンドル方式」のバイブルシェアリングを行いました。聖書箇所はグループごとに、ルカによる福音書第10章25節から37節と、ヨハネによる福音書第15章1節から17節のいずれかを用いました。



当日配布 ワークシート

ヨハネによる福音書第15章1節から17節

!びっくり ?はてな・疑問 ↓なるほど・納得 +痛み □感激

節	自分	メモ					
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							
8							
9							
10							
11							
12							
13							
14							
15							
16							
17							

○この時間に大切にしたいこと

この時間は、皆で一緒に聖書を読み、互いの思いを分かち合い、自分ひとりでは見えてこなかった聖書のメッセージに共に触れる時間です。

聖書の講義を行うような形式ではなく、また議論することを目的とするのではなく、自由に語り合い、互いに聴きあいます。その際、自分と違う感じ方について、単純に批判したり否定したりせず、どうしてそう思うのか理解しようとすることが大切です。ただし、一方的に誰かを傷つけることが明らかな場合は、ファシリテーターは静止します。また、誰か一人が話し続けるのではなく、皆が参加しているという感触を持てるように配慮し合います。

何よりも、これから読む聖書箇所を心に留めながら過ごします。

○進め方

1. 祈りをもって始めます。
2. 聖書箇所はルカによる福音書第10章25節から37節、もしくは、ヨハネによる福音書第15章1節から17節です（グループによって異なります）。
3. 誰か一人に全体を通してその日の聖書を読んでもらいます。その後二人、つまり三回通読します。
4. その後、各自黙読をします。10分ほど用います。
5. 黙読の際、次のマークを別紙のそれぞれのテキストの節に書き込みます。

- ！ (びっくりマーク)
- ？ (疑問マーク)
- ↓ (なるほど・納得マーク)
- ＊ (痛みマーク)
- ॥ (感激マーク) を、それぞれ書き込みます。

深く考え込まずに、直感的な選びで良いと思います。また、マークのついていない節があっても良いですし、同じ節にマークが複数あっても良いです。

6. グループの全員から、節ごとにどのマークをつけたかを出し合います。この時にはその理由は言わずに、ともかくマークだけを伝え、別紙の表にその人の名前とマークを全員が書き込みます。
7. 次に、節ごとに、どうしてそのマークをつけたかを出し合います。どの箇所にどのマークが正しかったことや一つだけの結論や、何かをまとめようとするようなことは行う必要がありません。そしてこの時間が大変大切な分かち合いの時間となりますので、たっぷり時間を使ってください。マーク以外に気がついたこと、思い出したこと、分かち合いたいことなどを自由に話し合ってください。答えが出なくても次の節に進んで良いです。また、誰か一人だけが話しているということにならないように、ファシリテーターは配慮します。
8. 最後に終わりの感謝の祈りをささげて会を閉じます。

主教会からのメッセージ

矢萩新一司祭 それではこの時間、主教会からのメッセージということで、一言お祈りをしてから始めたいと思います。お祈りします。

私たちをいつも守り、導いてくださる神様、今日新しい朝、聖餐の恵みにあずかり、宣教協議会3日目の朝を迎えることができたことを感謝いたします。これから11教区の主教さまからメッセージをいただきたいと考えています。私たちが、これから約10年に向かっている変化の中であなたのみ業を表すために、私たち一人ひとりを用いてくださいますように。このひとときの時間、豊かな学び、そして気付き、方向性が与えられますように導いてください。この小さな感謝と願いを、主イエス・キリストのみ名によってみ前にお献げいたします。アーメン

改めまして、おはようございます。紫の服の方々が並んでおられます。皆さん、お顔と名前と教区は一致されますでしょうか。それぞれ一言ずつまた後でお話をいただきますので、その時に自己紹介をしてください。

私たちは、今年宣教164年目を迎えていると思います。今、教区は11教区ございますけれども、これが11教区になったのは1972年、沖縄がアメリカ聖公会から復帰をして、11教区になって今に至っております。現在、全国の教会の数は305教会です。2022年の末ですね。現在堅信受領者数は何人ぐらいだと思いますか。11,785人です。コロナの影響もあったかもしれませんけれども、12,000人を切っております。教役者数は退職のご奉仕されている方も含めて187名になっていますね。これは30～40年前ぐらいの数の半分ぐらいの数になっているんじゃないかなと思います。

そんな中で、各11教区の教会、また関連施設で宣教の働きのためにご奉仕くださっていますけれども、この宣教協議会でこれから約10年、日本聖公会の方向性について考えようとしています。でも実際にその働きをしていくのは各教区でありますし、それぞれの教会、施設、

現場での働きが大切になってくると思います。

そんな中で日本聖公会は2020年に宣教協働区制、3つの宣教協働区に分けて協力をし合いましょう、そして伝道教区になって、新たな体制に向かうことができるということを決議しました。そのことについて、まずは武藤主教さまから、宣教協働区制、伝道教区制ができた経緯について少しお話をいただきたいと思います。よろしくお願ひします。

■ 宣教協働区制・伝道教区制の 経緯（武藤主教）

武藤謙一主教 今回の宣教協議会、この3日目は、宣教協働区のことが主になります。1日目、2日目、現場からの教会の声、あるいは働いている人たちの声を聞いていくという流れからはちょっと趣を異にし、言ってみれば組織の体制のことですね。そのことを今日一日、私たちはそれぞれの宣教協働区に分かれて分かち合いの時を持とうとしています。こういうプログラムになったということ、本来だったら1日目、2日目に聞いたことをもうちょっとみんなで深めていくとか、そういうことにならぬ、組織のこと、体制のことを話し合う。それが今の日本聖公会の一つの現状だということだと、これから約10年間の日本聖公会の宣教を考える時に、やはりどうしてもこの体制のこと、組織のことも考えざるを得ない、そういう状況に今、日本聖公会はあるということだと思います。

そして、この宣教協議会実行委員会から主教会に要望されたことは、「宣教協働区、伝道教区制について、主教たちの思いを熱く語ってほしい」ということだったんですね。私たち、定例の主教会の中でも、毎回各宣教協働

区の報告というものをお互いに分かち合っています。そしてこの今日のことのためにも、私たちどんなふうに、この時間皆さんに、私たちの思いを伝えようかということも話し合いました。先ほど矢萩総主事が言ったように、最初に宣教協働区、伝道教区制ができた経緯について少しお話をし、それから各主教さんたちの思いを語っていただくというふうにすることになりました。

先週、九州教区の教役者会がZoomで行われました。九州教区は私が2025年3月に定年退職しますので、その後どうするかということを今年はみんなで学び、分かち合い、話し合い、考え、決断しよう、そういう年を迎えるんですね。主教職とは何かということを学んだり、宣教協働区、それから伝道教区制についても、講師の方をお招きしてお話をしたその後での教役者会だったんです。そこでも教役者だけで、私たちどうしようかということで、この宣教協働区、伝道教区制についてみんなで分かち合いの時間を持ちました。

ちょっと私ががっかりしちゃったのは、あまり大きい声で言えないんですね、でも伝わっちゃうんですね。九州教区の教役者の中に、「伝道協働区」なんていう言い方する人がいたり、それから「日本聖公会は3つの教区になるんだ」「必ず伝道教区になるんだ」とか、(そのような)ニュアンスのことを話す人がいる。あるいはよく分かんないという人もいるんですね。本当に、やっぱりこの宣教協働区、伝道教区制というものがどういうものなのかということの理解が、自分の教区の中でも決して十分にみんなに理解されているのではないということが、よく分かったことだったんですが。それぞれの教区、教会で、この宣教協働区、伝道教区制というものが、どうなものなのかということを、もう一度みんなで分かち合っていただきたいなと願っています。

その経緯についてということなんですが、実は2020年の11月20日付で、日本聖公会主教会メッセージ「宣教協働区・伝道教区制について」というものをお出しています。ですので、今日はこのメッセージをもう一度皆さんにお読みして、その経緯というものをご理解いただけるようお願いしたいと思います。

※「日本聖公会主教会メッセージ、宣教協働区・伝道教区制について」読み上げ。資料編P196参照

こういうメッセージを主教会は2020年の11月に出しました。ここに書かれているとおりなんですね。本当に私たちは、これから自分の教区だけでやっていくというのではなく、宣教協働区内の中で、互いに協働することを通して、そしてこの日本での宣教、牧会に携わっていく。そういうことを主教会は願い、この宣教協働区、それから伝道教区制というものを打ち出したわけです。こうすれば万々歳ということではありませんし、そのことのメリットもあればデメリットもきっとあるんだと思います。でも、そういうことも含めて、それぞれの宣教協働区の中で互いに支え合い、励まし合い、助け合い、重荷を担い合って歩んでいく。私たちはそういう日本聖公会だということを、この宣教協議会の中でも確認し、そしてまたそのことをそれぞれの教区の中の各教会の教役者、信徒の皆さんにもお伝えしていただきたい、そんなふうに願っています。

矢萩 武藤主教さま、ありがとうございました。私さつき自己紹介し忘れていました。管区事務所の総主事をしております矢萩新一と申します。京都教区から出向中です。これから3つのテーマを設定させていただきます。



1つ目は、「この世界の中でとなりびととなるために大切にしたいこと」。テーマに関連することです。そして2番目が、「この世界における宣教、牧会で大切にしたいこと」。3つ目が、「宣教協働、教区再編において大切にしたいこと」。3つのテーマで、主教さんに3分ずつ、熱いメッセージをいただきたいと思います。まず1番目、「この世界の中でとなりびととなるために大切にしたいこと」。京都教区の高地主教さんからよろしくお願ひします。

1 この世界の中でとなりびととなるために大切にしたいこと

(高地主教・長谷川主教・西原主教)

高地敬主教 「となりびとになるために」というテーマをいただきました。先ほどの、武藤主教さんのお話は、かなり組織論のお話だったと思います。物理的な組織論というよりも、教区としての本質論ということになっていくんだと思います。

私のもともとの考え方の一つは、「全ての人間関係はもともと崩れている」という、それが前提になっております。恐らく、それが人間の持っている原罪と呼ばれるものだと思っています。京都教区、京都事件と呼んでおりますけれども、初めの被害者の方に重大な二次加害を起こしてしまったということがありました。おどといの教区のプレゼンでもいわれておりました。その二次加害をしてしまったという時にも、何度もお詫びの言葉は述べてきたのですけれども、今から振り返りますと、「何をお詫びしてきたのかよく分かっていなかったな」ということを思われます。

今年の管区のハラスメント研修で金香百合さんが、「人に害を及ぼしてしまった人に、すぐに謝罪させてはいけない」ということを言っておられました。とても大事なことだなと思います。「人にすぐに謝らせてはならない。



何を謝罪すべきかを考える時間を奪ってはならない」ということを言っておられました。十数年経って、ようやく「『何をお詫びすべきかを考えるべきである』というところまで気が付いてきたんだな」というふうに思っています。

昨日の5つのお話の一つにも関わってきましたけれども、こんなことを言っておられました。「加害の気持ちを初めて知った」というようなお話が、昨日の5人のうちの1人の方からありました。それとはちょっと相容れない言い方をしてしまうかもしれませんけれども、関係がより崩されて、そして人に痛みを負わせてしまった時に、お詫びの言葉が受け入れられたように見えることもあります。けれども、個人であれ、組織であれ、あるいは国家であれ、加害をしてしまった人たちが被害者から許されることを期待してはならないんだということも、最近になってようやく分かってまいりました。ただ、私たちにできることは、「何がよくなかったのか振り返り続ける、お詫びの言葉にしていく」ということだけなんだと思います。

「歴史認識」という言葉があります。この歴史認識についての本に、こういう言葉があります。「加害の意識化は大事である。自分自身が加害者であることを意識しないといけない」。とても怖いことだと思います。被害者であるというふうに主張するのはとても楽だし、そうしたい。加害者も、「自分は実は被害者だ」とすぐに言ってしまいます。でも、自分が加害者であるということを意識化するということは難しいのだと思いますけれども、していかないといけない。「加害者としての自覚から逃げてはならない」というふうに書かれております。特にこれは日韓関係の中での話です。日本に居る者は加害者としての自覚から逃げてはならないということなんだと思います。決して許されないという経験、それから逃げてはならないと。とてもつらいことだと思います。

京都事件についてのこの20年も、いろんなことがありましたけれども、今ようやくここに至ることができたなということを思います。これからもたぶん、いろいろ気が付くことができてくるんだと思います。加害者として許されない。「許されない」という経験をイエス様はされたんではないかと。そのために許されずに十字架にかかって殺されました。それを通して、ようやく私自身が神様に受容されている。このことを自分のこととして、イエス様がされたことを自分のこととしてしていくということが求められているんだろうと今、考えております。ようやくそれを通して、人と少しほとなりびとになれるかなということを思っております。

矢萩 ありがとうございました。「足りなさを知る」ということは本当に大変なことですね。では次は長谷川主教さんから、よろしくお願ひいたします。

長谷川清純主教 半年前に主教になりました東北教区の長谷川清純と申します。よろしくお願ひいたします。私の与えられたテーマは、「この世界の中でとなりびととなるために大切にしたいこと」です。2011年3月11日、東日本大震災が私の中では転機になっています。日本聖公会が被災者支援をする際に名前を付けました。「いっしょに歩こう！」です。私たちの主イエス様が、私たち全ての人たちの同伴者、寄添者にならって、私たちも被災された方々と同伴をする、させていただくという思いでございました。

当時、日本福音ルーテル教会も仙台に来られて被災者支援に入りました。男女1名ずつの専任者がスタッフでした。ルーテル教会は、私たち日本聖公会と一緒に歩こうとしたように、その活動に名前を付けました。それは、まさにずばり「となりびと」です。

その中で私は、私たち自身が出会わせていただいている方々が、もう私たちのとなりびとであり、今一緒に聖書を読んでいますけれども、イエス様が、「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である」といわれている「あなた方」は、私たち全員ですから、私自身も誰かにとつてのとなりびとだし、私が出会う人たち全てがとなりびとだというふうに思っています。

その時の心構えは、やっぱりイエス様にならって、その人のそばに居ながら、その人の痛みや悩みや叫びや、さまざまな思いを受け止めることはとてもできないんだけれども、でもそこにイエス様がいらっしゃるので、「私はイエス様にお願いします」の気持ちで、その人たちと共に居ることが可能となったのだというふうに思います。

他所から石巻市に支援活動に来た牧師先生がいて、その方は2014年に渡波キリスト教会を設立します。石巻市にいた多くの被災者を、男も女もこどもも大人も、おじいちゃんもおばあちゃんも、みんなそこに居て一緒にご飯を食べよう、お茶を飲もうということで始まって、教会ができていきます。それはすごいことだったというふうに思います。一つの私たちの教会の在り方を見せていましたのだというふうに思いました。ありがとうございます。

矢萩 長谷川主教さん、ありがとうございました。続きまして西原主教さんからお話しいただきます。

西原廉太主教 おはようございます。中部教区の主教を

しております西原廉太と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。

中部教区ではこの9月に、4年ぶりに対面の教区研修会を開催することができました。私が主教按手されましたのが2020年10月なので、主教になって初めて対面で皆さんと、教区の皆さまと一堂に会せたことを本当にうれしく思っております。そこでさまざま、中部教区は難しい問題を語り合いました。

本当に貧しい教区です。恐らく11教区で一番、資金がない教区でありまして、「人もいないしお金もないし、課題ばかりでどうしよう」という、そんな深刻な話し合いで始まりました。

2009年に日本聖公会宣教150周年記念の大礼拝を、カトリックの東京カテドラル聖マリア大聖堂で行ったことを覚えてらっしゃいますでしょうか。参加された方、たくさんおられますね。その時、参加された方はご記憶かと思いますが、メインの説教者として招かれたのが、第104代カンタベリー大主教だったローワン・ウィリアムズ大主教さんでした。大主教さんが語られたことで、とても印象に残っているキーワードは、「裸足の宣教」だったんですね。要するに、150年前に宣教師たちは何も持たないで、何もない所で、しかもキリスト教が禁じられているような所で、駆けずり回って私たちの聖公会の教会の礎を作ってくれた。そのことを「裸足の宣教」として、私たちに思い起こしてくださったのをご記憶かと思います。

この9月の事務局の教区研修会の最後のまとめは、「裸足の宣教をもう一回やろう」ということでした。要するに、「ゼロベースから開拓伝道、開拓宣教を行なう。何もない。お金がない。150年前は、もともとなかったのだから、もう一回ゼロベースからの開拓宣教をやろうじゃないか」。そんなふうに結構盛り上がったんですね。その盛り上がりは今どうなっているか不安なんですが、かなりハイテンションで終わったので、そのテンションを続けたいんです。

要するに、イエス様は、「魚が2匹しかありません、5つしかパンがありません」じゃなくて、「魚が2匹もあるじゃないか、5つもパンがあるじゃないか」という、それを神様が祝福してくださるんだということに立ち戻りたいということだったんですね。

そう考えた時に、「ゼロベースの開拓伝道、開拓宣教」といった時に、もう一回始めるとすると、果たして150年前、100年前のこの教区の枠組み、地割りも含めて、それが果たして理にかなっているのかどうかを、もう一回リセットして考えるべきなんじゃないかということな

んですね。私の考えている宣教協働区の考え方です。

また、150年前、100年前は、恐らくそれぞれの教区が、中部教区はカナダ聖公会ですが、CMS、SPGや、米国聖公会、カナダ聖公会といったそれらのミッション、宣教団体をある種基準にして、教区ができていったと思います。でも今はもうそういう時代じゃありませんから、そこからもリセットしたほうがよいだろうと。

これからの基準は、教区の再編なりをする場合の基準は、「それぞれの地での、宣教、牧会を丁寧に担えるために、いかに有効な地割りとか枠組みが必要か」です。交通のシステムが全然変わっているわけですね。実際に、中部教区と京都教区は今、仲良くさせていただいております。例えば、私が管理牧師をしております高田降臨教会は、へたをすると月に1回しか聖餐式ができないので、京都教区の高地敬主教さまにお願いをいたしまして、金沢の松山健作先生、そして富山から柳原健之先生に交代で、月1回手伝ってもらっています。聖餐式が月2回でできています。また、中部教区の土井宏純司祭が三重伝道区をお手伝いして、教区を越えています。富山と高田は（距離が）すごく近いわけです。そういう意味では、そういういた現代の交通システムにふさわしいような形に、もう一回リセットしたらどうかというのが一つです。

もう一つは、先ほど与えていただきましたテーマですが、「いかにいのちを大切にできるか。いかにとなりびととなることができるか」という基準を持って、新たな伝道宣教エリアを日本聖公会全体で作り上げていけないだろうか。それが、私が考えているところの、宣教協働区がいかに大切かということの考え方の一つでございます。

そしていま一度、今こそ原点に立ち返って、「裸足の宣教を皆さんでしようじゃないか」ということです。裸足というのは、貧しさを示す印であり、そして「裸足の宣教の旅の終わりには、必ず足を洗ってくださる主が共にいてくださるんだ」ということに信頼して、いま一度、裸足の宣教を日本聖公会全体でやっていきたい。それが宣教協働区、また伝道教区の一つの重要な論点ではないかというふうに考えています。



矢萩 西原主教さん、ありがとうございました。それは2つのテーマです。「いのち、尊厳限りないもの。この世界において、宣教、牧会で大切にしたいこと」。まずは高橋主教さん、よろしくお願ひします。

2 この世界における宣教、牧会で 大切にしたいこと

(高橋主教・入江主教・小林主教・上原主教)

高橋宏幸主教 東京教区主教および北関東教区管理主教をしております高橋です。よろしくお願ひいたします。与えられた「宣教、牧会」という言葉をめぐって黙想、思いめぐらせをしてまいりました。その実りをお伝えしたいと思います。

宣教という言葉、恐らく百人百様どころか、百人二百様、三百様のリアクションがあると思います。しかしその時に私、本当に気を付けたいと思っていますが、「主（しゅ）は誰になっている」か。もちろん「私たち」と言って間違いありませんけれども、その中に、「神様によって支えられて、導かれて」というのが落っこちてしまうと、極めて危険な言葉だなというふうに思いました。

そもそもイエス様がその働きをなさる時、恐らく、1人でなさったほうが正確、迅速だったと思います。聖書を読んでも分かりますように、足手まといになるような、内輪で権力争いをするような弟子たちを12人呼び集められて、お召しになって、その働きを始められましたけれども、それを受けまして、イエス様はなぜ、誰のためにこの世にご自身の体、枝としてのキリストの教会をお建てになったか。もちろん、私たちのためではありますけれども、その時に、「たち」というのは一体誰を指しているんだろう、その範囲はどこなんだろうと。

顔の見える（範囲）だけではないはずです。その教会という敷地を越えて、近隣社会、広くはこの世界、全て生きとし生ける賜物としてのいのちが置かれているところは、全て「たち」に含まれる。「どれだけ視野を広げていかれるか」というのが、私たちがいつも問われている、チャレンジを受けている重いものと思っております。そのことをこれからも問い合わせ、黙想し続けていくことが、宣教というものを考える、かたちづくる根幹になると。

そして、私はあえて説教でも「キリスト教会」という言葉はほとんど使っておりません。キリストの教会、つまり私たち（です）。そして昨年のランベス会議で刺激を受けましたのは、私たちはもちろんクリスチャンです。

キリスト教徒です。しかし、「キリストの弟子である」ということを、強く心に刻みたいと思います。キリストの弟子とされた、弟子として招かれお召しをいただいた、そのことを深く考えていくことの中で、おのずと私たちが仕える対象は見えてくると思っております。

しかも宣教は、イエス様の歩みを思います時、当然外へ、人々の中へ（行きます）。ウィリアムズ主教のことを言い表しました、「道を伝えて己を伝えず」という言葉が、いまだに伝えられております。イエス様に倣い、歩まれた道を歩む時、当初（弟子たちは）13人から始まりました。今、世界何十億とクリスチヤンはいわれておりますけれども、この13、シンボリックな数字でもありますけれども、非常に深い意味があると思っております。一昨日の、3つの教会からのお話とも、私の中では結び付きました。

イエス様が歩まれたご生涯の中で、本当に大事にされ、心碎かれた心で、take part in、参与していく。そのためには普段、絶えることのない祈りと黙想のうちに何を献げるべきか、献げなければならぬかということが見えてくると、繰り返しになりますが思っております。

そしてもう一つ、牧会とは、非常にコンパクトな言い方になりますけれども、「神様からの尊いかけがえのない授かりものであるいのちに仕えるために、祝福、すなわち力付け、あるいは送り出す、送り出される」ことです。先ほど、聖餐式の中で最後に、「ハレルヤ主とともに行きましょう」と（言いました）。海外の式文を見ておりますと、Let us go forth to serve and love the Lord. という、もう少し長い言葉が、toの後に目的があります。「神を愛し、神に仕えるために」。祈祷書改正も細かいことは存じ上げませんけれども、「神のいのちに仕えるために」という言葉が入ってくると、私たちはこの言葉を持って、派遣されていく（という）、非常に深い意味が、言葉は短くてもそこに盛り込まれると（思います）。私たちの意識改革にも、啓発にもつながるというふうに思っております。

最後に、皆さまよくご存じの方、いっぱいいらっしゃると思いますが、先ほど西原主教さまのお話の中にローワン・ウィリアムズ大主教の名前が挙がりました。2007年3月、ヨハネスブルグで全聖公会の会議がありました時に、（大主教は）メッセージを発信なされました。聖歌隊の指揮者の役割を、例えの話になさいました。聖歌隊の指揮者の一番大事な任務は、例えば大声を出して、外れている人、1人浮いている人を注意することではないと。あるいは、音が外れて不協和音を生み出している人を注意することでもないと。そこにいる声の小さい人、

あるいは声を発したくともなかなか発せずにいられる人が、このクワイアにいるということをきちんと察知し、そして、「あなたがいることが大切なんです」と。もしその人の存在を無視するとか、あるいは周りも鈍感であるということが明らかになつたら、この聖歌隊はないほうがいい、ということを宣言することです。

大変厳しい思いです。しかし、これは聖歌隊のことはなしに、聖歌隊を例えにして、教会の姿勢、宣教、あるいは牧会の大きな指針として、私は大事にし続けたいというふうに思っております。

今聖公会のみならず、世界中の聖公会で先般、香港でCCA東アジアの主教会議がありましたが、そこでもキーワードとして出ました。教皇もおっしゃっています。「いのち」。もうこれはありきたりというか、よく使われる言葉ですけれども、本当に真剣に深刻に、しかも1人1回しかない人生、授けられたいのち。そこに奉仕する、あるいは奉仕できるということは、私たちの宝であり、特権であり、感謝というふうに思っております。

そして、最後にもう一つ。東京教区には小笠原聖ジョージ教会（があります）。離島のある教区は沖縄教区、九州教区、他にもありますけれども、東京教区としましても、これは東京教区の一教会のみならず、日本聖公会の離島の、大事な宣教の拠点でもあると思っております。どうぞそのことも覚えて、お祈りに加えていただければ大変、東京教区主教としても感謝でございます。以上でございます。ありがとうございました。

矢萩 ありがとうございました。続きまして、入江主教さんから、よろしくお願ひします。

入江修主教 横浜教区の入江です。「宣教、牧会」ということを私なりの言葉でいうと、「いのちが生かされる福音、つまり喜びを伝えていく、証ししていく」ことになるかなというふうに考えています。そしてその喜び、何に喜んでいるかといったら、おとといからの宣教協議会の中で出てきた3つの教会の現場からのお話を聞いていても感じたんですが、「神様に仕える喜び、それを喜びとしていく」ということではないかなというふうに思っています。

神に仕えるということなんですけれども、私たちはよくお手紙なんかでも、「主に在って」とか、先ほどの主教会のメッセージにも、「在主」、主に在りてということが書かれていることがありますけれども、皆さんが集まっているこの清里、ポール・ラッシュという人がここに清泉寮を建ててスタートしたということですけれども、彼

の有名な言葉でDo your best、「最善を尽くしなさい」、And it must be first class、つまり「一流でありなさい」。そこで切れているんですけれども、ポール・ラッシュの語っている意味は、そこにin God、つまり「主に在って、神に在って」ということが付いていた。そういうことをお聞きして、やっぱりそうだったんだろうなというふうにつくづく考えます。

私たちはいつも最後に、「主に在りて、神様のうちに在って」ということが常になければならないし、そのことの中で喜ぶ。自分が勝手に思いどおりになって喜んでいるんじゃなくて、本当に神にあっての喜び、それは神様に仕える喜びなんじゃないかなというふうに思っています。

もう一つは、今年の9月の聖書日課の使徒書にあった、「ローマの信徒への手紙」第12章9節以下なんですけれども、言葉としては、「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」(15節)。この1節だけはよく用いられるんですけれども、その前後を見ると、「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはなりません」(14節)。そしてその後にも、「誰にも悪をもって悪に報いることなく、すべての人の前で善を行うよう心がけなさい。できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に過ごしなさい」(17・18節)。「平和」という言葉がそこにも出てきます。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。『『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる』と書いてあります。『あなたの敵が飢えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる』。悪に負ることなく、善をもって悪に勝ちなさい」(19~21節)。

こういう脈絡の中で語られている。「喜ぶ人と共に喜ぶ人、泣く人と共に泣く人」。これは一体誰なんだろうか、私にとっての誰なんだろうか、私の仲間なのか、あるいは友人なのか、親しい人なのか、そうじゃなくて悪

に対して、あるいは復讐という言葉が出てくるとやっぱり敵対する人、敵に対してそのことがいわれているという、そういう意味がここにあるのではないかということを強く感じています。

つまり、「誰と喜ぶか、誰と泣くか」。そこに実はイエス様を通して与えられた平和、そして愛の本質が示されているのではないかなということを思いながら、そしてこのことから人につながっていく、となりびととなっていく、宣教、牧会の歩みがあるのかなというふうに今、感じているところで、これを大切にできたらというふうに思っているところです。ありがとうございました。

矢萩 ありがとうございます。小林主教さんからよろしくお願いします。

小林尚明主教 神戸教区の小林です。今回、宣教協議会に来させていただいて、とてもたくさんの気付きを与えられて、昨日のバイブルシェアリングでは、衝撃的な気付きを与えられまして、同じグループにいた人たちは、「こんなことも主教は感じないのか」という、びっくりしたようなこともありました。そういう意味で、本当に恵まれた宣教協議会ができていること、皆さんと共に神様に感謝したいと思っています。

私たちに与えられたテーマが「宣教、牧会で大切にしたいことは何ですか」ということでした。このテーマをいただいた時にすぐ思い出したのが、昨年の夏に英国のカンタベリーで開催された、第15回のランベス会議です。その時に「ランベス・コール」というものが決議されていくんですけれども、その「ランベス・コール」の中で、「弟子であること」という、このことが私はとても大切だと思って感じました。2016年のACC-16から10年間、2026年まであと3年ありますけれども、アイルランドで行われるACC-19までの間の10年間を、「弟子であること」を大切にしていきましょう」という、そういう決議です。



自律的弟子性および弟子養成の期間として、大切にすることです。

そして皆さんよくご存じだと思いますけれども、「マタイによる福音書」第28章の最後のところ、復活のイエス様が、「だからあなた方は行って全ての民を私の弟子にしなさい」といわれていることからきているわけです。ランベス・コール「弟子であること」「1 はじめに」の1. 1に、「弟子とは、思いと体と靈において学ぶ者である」ということが書いてあります。学ぶんだと。「自分たちはこれでいいんだ」というよりも、学び続けていくもの。そういうことをいわれているんですね。

そして、じゃあ私たちは一体何を学び、どこに向かって成長していかなければいけないのか。そのことはやっぱり目標ですよね。あそこに行かなければいけないんだと。そのためのステップを踏んでいくんだという。そういうことだろうと思います。

じゃあその目標は一体どこにあるんだろうかということを考えます時に、ジャスティン・ウェルビー大主教は、3回の講演をされまして、8月7日の最終日に第3回の講演をされます。その中で私は非常に素晴らしい言葉だと思っていることを、皆さんにここで紹介したいんですけども。こういうふうに大主教が言わされました。

「より深く成長し、数を増やしている多くの教会の強みは、誰もが福音を知り、イエス・キリストとの愛と出会いについて、自らの証しを語ることができるということです。彼らは雄弁ではないかもしれません。神学はやや粗雑かもしれません。しかし彼らが心から語る時、他の人々は耳を傾けるのです。そして彼らの変えられた人生そのものが、その言葉を物語るのです」

ジャスティン・ウェルビー大主教は目標をこういうふうに語られていました。本当に数を増して、元気で宣教がいっぱいできている教会は、みんながまず福音を知っているということ。そして、イエス様との出会い、愛と出会いを、自分の言葉で語れるようになっている。それは表現とか言葉が少し貧しいかもしれないけれども、その人たちが本当に心から語る時に、周りの人たちはその声を聞くでしょう。そして語るだけではなくて、やっぱりそのように自分たちが生きている。喜びを持ってクリスチャンとして生きていることが、その人たちが語る言葉を証ししているんだと。

本当に簡単な言葉で言われていますけれども、まさに宣教、牧会です。「では牧会とは何ですか」と。それはもちろん、苦しんでいる人に寄り添う、そのことを聞いていく、一緒にとなりびとになっていくということもあると思いますよ。でもやっぱり牧会って、「福音をその

人が知り、喜び、イエス様と出会った愛と、自分が愛されて受け入れられたという喜びをもって、そのことを人々に語れるようになること」。それが本当の牧会なんじゃないかと思うんですね。そのことを私たちはやっていきたいと思います。

神戸教区はちょうど2026年が宣教150年です。そういう意味で、宣教150年の礼拝を中心的に考えててくれるメンバーがこの中に来ていますし、神戸教区には神学塾運営委員会というのがあって、そこからも責任者が来ています。彼も一生懸命、「『弟子であること』というディサイブルシップを、これからやっていきましょう」と言ってくれています。そういう意味で、ジャスティン・ウェルビー大主教が最後に私たちに残してくれたメッセージを僕は大切にしているふうに思っています。ありがとうございました。

矢萩 ありがとうございました。同じテーマで最後、上原主教さん、よろしくお願ひします。

上原榮正主教 おはようございます。上原です。よろしくお願ひします。私が語ることは、皆さん語ってくださいましたので、いらないんじゃないかなと思うんですけど。私にも「宣教、牧会について」ということがテーマで与えられております。私は牧会といいますと、すぐに「牧会訪問」という言葉が頭に浮かんでくるんですけども、それは「キリストを携えることだ」というふうに私は教えられました。キリストの代わりを持っていくというんですかね。なかなか難しいんですけども。もう一つ、そのことによって、離れている信徒を教会につなげていく。あるいは教会を知らない人たちを教会につなげていく。そういうことが牧会じゃないかなというふうに考えております。そういう時に、信徒のお宅を訪ねれば安否を問い合わせ、その人の必要についてお話を聞き、あるいは路傍で教会のことを語る時には、慰めの言葉を語り、励ましを与える、そういうことが牧会じゃないかなというふうに思っています。

でも、この時に私たちに必要なことは靈的成長だと思います。牧師も信徒も、お互いに靈的に成長していくなければ、そのことはできない。

今、小林主教が語ってくださいましたけれども、「宣教の5指標（アングリカン・コミュニケーション）」があります、「3) 愛の奉仕によって人々の必要に応答すること」。「教会の5要素」では、「主にある交わり、共同体となること（コイノニア）」。そういうことを牧会は目標としてなされるんだと思います。

そして牧会の最終的目標というのは、信徒を教会につなぎとめるだけではなくて、信徒を教え、養い、育てる。そして最終的には信徒自身が新しい信徒を育てるようにする。それが「宣教の5指標」の、「2) 新しい信徒を教え、洗礼を受け、養うこと」につながっていく、そういうふうに思っています。

教会の成長、牧会の成長というと、キリスト者の靈的成長が必要ですけれども、その時によく私たちは教会への貢献度とか、靈的成長、礼拝出席しているかどうか、社会奉仕をしているかどうか、そういうもので計りがちになります。でも私は、そうではなくて、さっき小林主教の話にありましたように、私は「ワクワク、イキイキ、ニコニコしている者になれるかどうか」だと思っています。私の沖縄教区のビジョンは「ワクワク、イキイキ、ニコニコ」です。「ワイニ、ワイニ」と言いますけれども、教会に来ていまでも何か期待をしている、わくわくしている。私はいつも生き生きしている、キリストに会って生き生きと。そしてにこにこしている、「いつも喜んでいなさい」と。そのみ言葉をしっかりと胸に抱く。

もちろん私たちの周りは、ワイニ、ワイニできるような状況ではありません。問題も抱えています。私自身もたくさんの問題があります。心配も悩みもある。毎日が戦争の報道で、災害や地震とか、幼子が、女性が、老人が、しょうがい者が犠牲になっている。そういう話を聞けば心も塞いでくるわけです。

しかし、神様は私たちに約束をしている。聖書のみ言葉があります。「あなたがたを襲った試練で、世の常でないものはありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます」これが「コリストの信徒への手紙Ⅰ」第10章13節の言葉です。そしてまたイエス自身が、「ヨハネによる福音書」第16章33節で、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている」とおっしゃっている。そういうみ言葉を私たちは一つひとつ思い出しながら、にこにこしていく。神は共にいてくださるんだと確信をしていく。一人ひとりが自分で祈り、聖書を読み、そしてそこに黙想しながら神と対話の中で自らを高めていく。そういうことが私は靈的成長だと思います。

でも、それができるのは、一人ひとりが神の宮だからですよね。私たちの中に神様が住んでおられる。私たちの中にいつも神様が一緒にいる。それを私たちは忘れてはいけないと思います。

人は、知識や知恵や能力とか才能で人をはかりますけ

れども、でもそういうものは必要ない。パウロは「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」（「テサロニケの信徒への手紙Ⅰ」第5章16～18節）と教えました。聖職はワクワク、イキイキ、ニコニコできるような信徒を養い、育て、そして導く。信徒もまたワイニ、ワイニができるように新しい人に伝えていく。

私の思いですけれども、暗い教会だと人は近寄ってこないと思います。みんながその中でどういう人たちが、年寄りであろうが、いろんな人たちがいると思うんですけれども、ニコニコしていれば、大きな関心を寄せてくれるんじゃないかなと思います。私は、そうしていくことが牧会だと思っています。以上です。

矢萩 ありがとうございました。3つ目、「宣教協働、教区再編において大切にしたいこと」。武藤主教さんから、よろしくお願ひします。

3 宣教協働、教区再編において 大切にしたいこと

（武藤主教・笹森主教・磯主教）

武藤 宣教協働、教区再編ということは、本当にまだ始まったばかりです。この後の各宣教協働区の報告にありますけれども、例えば九州教区、神戸教区、沖縄教区の中でも、本当にいつも会議はオンラインです。今回ここで初めて対面するみたいなところで、本当にまだ始まつたばかりです。ですから本当に丁寧に、「会っていき」というところから始まっていくんだなということを、つくづく思っています。

今、九州には浄土真宗大谷派というお寺があるんですけれども、今まで九州には5つの教区があったと思います。それがひとつになっちゃったんですね、合同して。それはそれでまたとても大変だと聞きましたけれども。聖公会だけではない、仏教でも。ついこの間カトリックでは、大阪大司教区と高松司教区が、新しい大司教区になりました。そういう流れはあるんだろうなと思いながら。私たちがこの宣教協働区、そして伝道教区制ということを考えていく時に、聖公会の中だけでなく、もう少しいろんな人たちとつながっていくということ。例えばエキュメニカルな働き、エキュメニカルな宣教の協働、あるいは他宗派の人たちとの協働。そういうことも、いつでも大事にしていきたいなということを思います。



あるいは、宗教に関係なく、その地域にいる人たち。そういうことがやっぱり宣教協働ということの中に含まれていいんだろうなというふうに思います。

そして特に、今朝も食事の時に、ある方たちと話していたんですけども、今回私たち、日本の聖公会だけがこの協議会をしています。ですけれども、日本聖公会はアングリカン・コミュニケーションの一員なんですね。そして大韓聖公会とは40年にわたって協働をしてきている。今回、だからそこに大韓聖公会から誰も来ていないとか、あるいは高橋主教さんがおっしゃったように、CCEA、東アジアの教会から誰も来ていないということも、ちょっと寂しいなと思うんですけども。そういうアングリカン・コミュニケーションの仲間がいるということ、そこで協働。こういったことも、私たち自分たちだけでやらなければというのではなくて、私たちは今まで、そういう広いつながり、宝を持っている。そしてまたこれからもそういう可能性があるということ。そのことを私はこれから宣教協働というふうなことを考えていく時に、いつでも大事にしていきたいなと思っています。

最後に一つだけ、私たちはやっぱり、「平和の器にしてください」、これが私たちの宣教の基本の姿勢だということですね。1995年の宣教協議会で話されたこと。このことは終わったんじゃないんですね。2012年も、それから今回も、この後も、私たちはいつでも「平和の器にしてください」。それこそ第2次世界大戦という戦争責任告白をした、高地主教さんの言葉でいえば、その「過ちを犯した」ということを、ずっと意識し続けながら歩んでいく「平和の器にしてください」、という願いを持った共同体であるということ。そのことを大事にしていきたいと思っています。

矢萩 ありがとうございました。続きまして笹森主教さ

ん、よろしくお願ひします。

笹森田鶴主教 北海道教区の笹森でございます。北海道教区は、幾つかの場所でもお話ししていますけれども、日本本土の22%を占めています。そして東北教区は18%です。この2つの教区が一緒になろうとすると、日本本土の40%が一つの教区になっていくという可能性が、少し何となく見えているというような感じになっております。

その広大な面積の両教区の社会的な課題というのは共通しています。高齢化社会、そして若者の流出、過疎化、そして自治体のサービスなどが次第に希薄になってしまっているというような、そのような状況などがあります。教会としての課題も盛りだくさんです。

これらの課題は、たとえ2つの教区が一つになっても、決して解決しないという課題です。けれども、課題の多い地域社会にこそ福音が必要です。地域社会にある教会や関連施設の存在は大きいです。また、時がよくても悪くとも、日本のガリラヤともいえる場所に、既にキリストが働いてくださっている。そこに私たちは後から付いていくだけです。そのように考えます。

そうしますと、教会のサイズや組織のサイズにかかわらず、できることというのはたくさんあるはずだと思います。そのような中、東北教区と北海道教区は「チーム北国」という名称で、長谷川主教さまの5年後の定年を見据えて、今後、宣教協働と教区再編ということに取り組んでいこうということで、合わせてミッション・ステートメントなども文書として作成し、今度の11月の両教区の教区会に提出することになっております。

これまでの自分たちの組織の中だけで考えることよりも、新しい人たちと出会うことによって、それまでの経験の視座や、それから見つめているところ、大事にしているところ、また実際にやっていることが違う人たちと

一緒になるということは、とても大事なことだと思っております。

私自身が東京から北海道に移って、本当にたくさんの出会いがある中で学ばされ、そして信仰を問い合わせ、そして「自分の大切にするべきこと、教会が大切にするべきことは何か」ということを問われているというふうに思っております。恵みの経験をしております。

先月半ばに1泊2日で、両教区の合同教役者会を函館で行いました。色々なことがある中で、ミッション・ステートメントの中に、「チーム北国」が「逆転の福音」という言葉を使って、案を提出しました。そうしましたら、ほぼ全ての教役者から、「何言っているんだ。福音というのはもともと逆転じゃないか」ということで、その言葉がなくなりました。私は、それが共通に得られたということ一つで、とても大きな成果だったというふうに考えておりまし、そのように発言してくださった北海道教区の教役者や、東北教区の教役者を、私は本当に誇りに思いました。

素晴らしい視点で、今までの蓄積を積み重ねてくれている。だからもう、どんどん会って、いろんな人たちとの関係の中で信仰を刷新され歩んでいくこと。恐らく組織論では難しいです。私ども、現代の交通網の崩壊している中に住んでおりますので、それも無理です。だけど、だからいいんです。そこに教会がある。そのことを大切にしていきたいというふうに思っております。以上でございます。

矢萩 ありがとうございました。では最後に磯主教さん、よろしくお願いします。

磯晴久主教 大阪教区の磯でございます。宣教協働、教区再編において大切にしたいことということで。大阪教区は、ご存じの方もありますように、十何年も京都教区と合併しようとしてきたんです。失敗の経験を持っております。これは非常に大きな財産だと思っています。どうして失敗したかを一生懸命考えていましたが。京都教区のほうは4分の3（の賛同を）取ってくださったので、合わせる顔がないです。申し訳なくて、今でも高地主教の顔をまともに見られない。でも無駄ではなかったんだと思っています。

私も2025年3月で定年退職になりますので、これからどうするか、主教選挙と教区の今後について、伝道教区に手を挙げるか、ということで議論が回っております。同時に、「教会って何かな、信仰って何かな」という話し合いをする時も、もっておりまます。印象としては、教

区のことよりも、「私たちの教会はどうなるんですか」というほうの心配が高いように思いますが、考えていただきております。

ただある意味、宣教の最前線にいるのは教会であり、あるいはひょっとしたら学校とか病院とか、社会施設が最前線にいると思うんですね。教区は、それをどんなふうにしてサポート、支えていけるようなものであるかを考えます。時に、常置委員会でも時に、「これからどうしていこうかな」と話し合うんですね。「今日、明日ということは無理かもしれないけれども、でもやっぱり新しい教区がいるよな」というところでは、常置委員も同じ方向をみんな向いております。「いずれ新しい教区が必要だ」ということを思っております。

本当は京都教区とご一緒にいたら化学反応が起きるんじゃないかなと思って楽しみにしていたんです。あるいは、いろんなタレントを持った人たちが増えますので、財政的に楽になると何んなことはないんですけども、やっぱりいろんな賜物を持った人たちがたくさんいて、いいものが生まれてくるんじゃないかなと思っていました。残念ながら失敗しましたけれども。

でも（大阪教区は）今年教区成立100年ということで礼拝を献げました。韓国からも台湾からもお客様が来て、一緒に礼拝を献げました。ですから大阪のテーマとしては「多様性ということをどうやってみんなで受け止めていくのか」ということが今、大事なことだと思っています。

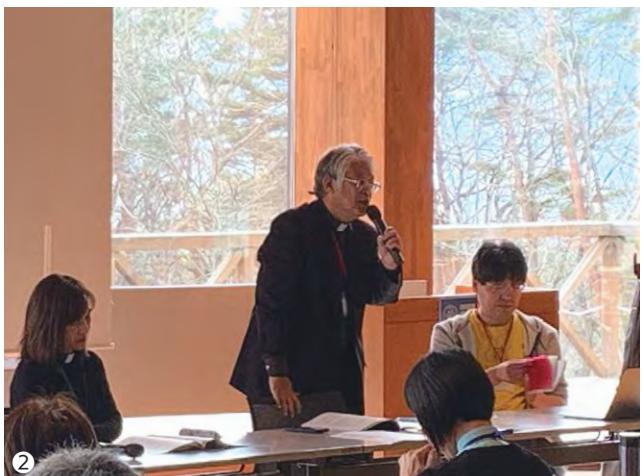
その意味で、教区から教会の発信としては、「どのようにして多様な多彩な社会の中で、共に生きていけるのか」ということが大きな課題かなと持って歩んでおります。大阪教区も「いずれ新しい教区になるぞ」と思って歩んでいきたいなと思っています。以上です。

矢萩 ありがとうございました。最後に一言、武藤主教さんからいただいたて終わりたいと思います。

武藤 皆さん、私たちのそれぞれの意見をどんなふうに受け止めていただけたでしょうか。宣教協働区、あるいは伝道教区ということの意味というもの、皆さんのが少しでも、私たち主教たちが語ったことの中から、その希望、あるいは光とかそういうのを受け止めていただければ、あるいはこれは大事にしていきたいと思うこと、そういうことを考えて何か一つでも二つでも、皆さんのが心にとどまっていただければ、本当にうれしいなと思います。皆さん、お聞きいただいて本当にありがとうございました。

宣教協働区アワー

参加者は各宣教協働区の活動報告を聞いた後、東日本・中日本・西日本の宣教協働区ごとに分かれて、交流や祈りの時をもちました。本報告書には、事前に共有された資料、および当日の様子を掲載しています。



宣教協働区の活動報告をする参加者

①東日本宣教協働区 大友宣（北海道）

③中日本宣教協働区 司祭 大岡左代子（京都）

②東日本宣教協働区 司祭 鈴木伸明（北関東）

④西日本宣教協働区 司祭 濑山会治（神戸）

チーム北国、始動しています。

「今こそ、恵みの時、今こそ、救いの日です。」 IIコリント6:2



2022年11月に行われた東北教区・北海道教区それぞれの教区会において、「チーム北国」設置の議案が決議され、チーム北国は2023年3月に始動しました。現在メンバーが仙台基督教会と札幌キリスト教会を相互に訪問しあい、毎月の会合を重ねています。

チーム北国では、長谷川清純主教の定年を迎える5年後を目指し、両教区の宣教協働ならびに教区再編について実施と検討を重ねることを目指しています。そして向こう5年間のロードマップを作成し、両教区の現状や課題を分かち合い、すでに活動を積み重ねている北関東・東京両教区に学びながら、両教区の宣教協働ならびに教区再編に向けてのミッションなどについて検討し、さらに実際に出会い、交わり、一致していく機会を作っていくことが主な活動内容です。

すでに昨年から相互の代祷を実施し、今年はじめに開催された東北教区「執行機関拡大会議」会合に北海道教区から大町信也司祭を派遣、主教按手式の説教者として北海道教区主教が参列、さらに北海道教区の教役者会の講師として、また「教区礼拝」説教者として東北教区主教が招かれ、東北教区教役者会に北海道教区主教が参加するという具合に出会いの機会を持ち、少しづつですが顔と顔とを合わせての交わりが始まっています。また9月には北海道教区婦人会総会へ東北教区婦人会会长赤坂康子さんが参加され、この宣教協議会の両教区参加者による女子会もオンラインで開催し、10月には両教区の函館での一泊の合同教役者会も予定されています。

また今後の協働や教区再編の道筋を具体的にしていくために、北関東・東京教区に倣い、「宣教協働」、「広報」、「組織」、「財政」と4つのセクションを設置し、セクション毎の協議検討や活動を開始しています。さらに毎年この営みを確実に積み重ねていくために、両教区教区会での毎年の実りについて提案、また決議を行う予定です。今年の両教区の教区会では、ミッション・ステートメントを協議する予定です。

北海道教区は日本の面積の22%、東北教区は18%です。両教区合わせると日本国土の40%の面積となります。この広大な北の地に、過疎化や高齢化、若い世代の流出などの両教区共通した課題を抱えつつ、そのような現場であるからこそ福音が必要であることを大事に宣教活動に従事している教会が点在しています。「日本のガリラヤ」であるこの地で主が働いておられる、そこにわたしたちも共にいたいと願っているからです。

チーム北国では、現在2名のキャプテンと4つのセクションのメンバーによって働きが担われています。さまざまなレベルでの交わりの実施もこれからです。今後、固定されたメンバーの枠を越えて、東北教区・北海道教区の信徒・教役者全員がチーム北国のメンバーであることが浸透していくことを目指しています。

東日本宣教協働区 北関東教区・東京教区宣教協働の歩み

1. 北関東教区・東京教区宣教協働の歩み

- 2020年2月11日、「北関東教区第3回教会を語る会」で広田勝一教区主教が、北関東教区が伝道教区に移行するとともに、東京教区との宣教協働を推進していくことを説明。

- ・2020年11月23日の北関東教区定期教区会において、伝道教区移行を決議、翌年3月6日の日本聖公会臨時総会において承認され、2021年4月1日に北関東教区は伝道教区となる。
- ・北関東教区と東京教区は、どちらかの教区が吸収合併されるのではなく、両教区で新しい教区を創り出していくことを確認する。
- ・東日本宣教協働区 北関東教区・東京教区分科会を設置、タスクフォースの名前で両教区宣教協働諸活動を開始する。
- ・「北関東教区・東京教区 宣教協働・新教区設立推進に関する覚書」を取り交わし、「北関東教区・東京教区宣教協働特別委員会」設置の議案が両教区教区会でそれぞれ決議される。これにより、タスクフォースが特別委員会として使命を引き継ぐこととなる。
- ・北関東教区・東京教区 宣教協働特別委員会では、①宣教協働、②広報、③組織、④財政の小委員会を設置し、それぞれメンバーを充実させながら活動を行うこととした。委員会はZOOMで今日までに15回行われている。また上記4つの小委員会はそれぞれ集まりを持って企画実行にあたるほか、必要に応じて宣教協働と広報など合同の委員会を行う。
- ・①宣教協働小委員会は両教区に関するプログラムの企画実行、②広報小委員会は両教区既発行の印刷物交換、合同機関紙の発行、ホームページ開設に向けての諸準備、③組織は東京教区教会グループ、北関東教区諸教会の課題や実情を把握して宣教方針を策定した上で、新教区の組織について検討、④財政は、両教区の財政一本化を目指して専門的な内容を含めた研究を行い、実現に向けての課題への取り組みを鋭意行っている。

2. 今後の課題等

- ・東京教区は新型コロナウイルス感染症の影響を全国で最も大きく受けた教区であり、礼拝休止や集会休止の期間も長く、両教区で新しい教区を創り出していく働きについて、各教会に広く適切な情報伝達に努めている。また教会グループごとに両教区宣教協働に関する諸課題を整理しつつ、今後の活動へ結び付けていく。
- ・北関東教区では、教区諸教会の活性化を目指してそれぞれの教会の課題や使命、新教区との結びつきについて直接対話をしつつ、取り組みを進めている。
- ・2024年中の実行を目指し、北関東教区・東京教区合同礼拝を企画している。この礼拝は宣教協働・広報の小委員会が実行委員となり、準備を進めている。
- ・両教区での新教区設立の推進継続可否を、今秋の両教区の教区会で承認を求めるこになつており、特別委員会では継続が承認されるよう、各教会に理解を深める努力を継続しているところである。なお継続が決議されたら、2年後の2025年秋の両教区の教区会における新教区設立決議に向け、歩みを進めていくことになる。

ハンドブック掲載資料 中日本宣教協働区（横浜・中部・京都・大阪）報告

Ⅰ 2021年～2023年 中日本宣教協働区協働委員

- <横浜教区> 主教 入江 修、司祭 田澤利之、中林三平
 <中部教区> 主教 西原廉太、司祭 土井宏純、河西恵子（2021年）、大内久子（2022年～）
 <京都教区> 主教 高地 敬、司祭 大岡左代子、伊藤真紀（2021～2022年）、瀬戸和子（2023年～）
 <大阪教区> 主教 磯 晴久、司祭 柳 時京（2021～2022年）、司祭 小林 聰（2023年～）、太田幸彦

II 協働委員会の開催（すべてオンライン開催。横浜、中部、京都、大阪の順でホストを務める）

2021年 2月5日、4月20日、7月27日、11月12日 ※4月17日 4主教によるミーティング

2022年 2月17日、5月12日、7月8日、9月29日、

2023年 1月12日、4月18日、7月25日、

※この他、チャプレン研修ワーキンググループ（主教磯晴久、司祭土井宏純、司祭大岡左代子、中林三平）によるミーティングが行われている。

III 活動についての報告

1. 毎回各教区報告を行い、情報交換を行っている。特にこの委員会の立ち上げ当初はコロナ禍にあったため、各教区のコロナ対応について情報交換があり、様々な違いや工夫を知ることができた。
2. 宣教協働区、伝道教区制の導入は主教会のリーダーシップによって始まったことから、第1回の委員会で「4教区主教によって協働委員会の方向性を話しあってほしい」という意見があり、2021年4月17日にミーティングが行われた。その結果各教区が主催する研修・教育プログラムの共有><合同礼拝の実施><チャプレンの働きを励ます研修の実施><教区を超えて草の根レベルでの教会間の交流>などが提案され、実施可能なところから始めることとなった。
3. 2022年から各教区の代祷表を交換し、宣教協働区内の教会・施設等について互いに祈りあっている。
4. チャプレン研修会の実施（2022年11月28日、2023年7月10日 いずれも19時～20時30分）
どの教区にも関連施設や学校等があり、相当数の教役者は派遣された現場でチャプレンとして働きを担っている。その現場での喜びや悩みを分かち合い、励まし合う場として、またチャプレンの働きと宣教について共に考える場を、との思いで実施した。オンライン開催、かつ短時間の実施であったが、今後も内容の工夫をして継続していきたい。
5. プログラム、情報の共有
「キリスト教保育についての学び」（動画配信：京都教区より2021年）「寿町の活動の現状について」（オンライン：横浜教区より2021年）「LGBTQ+について」（オンライン、動画配信：中部教区より2021年）「み言葉の礼拝についての学び」（オンライン、対面：横浜教区より2021年）、「ヒューマンライブラリー」（オンライン：中部教区より2023年）「子ども、青少年のキャンプ プログラムでの交流」（2021年～ 京都教区より）、各教区の教区会決議録の交換。
6. 隣接する地域での人事交流として、土井宏純司祭が桑名エピファニー教会、四日市聖アンデレ教会（京都教区）、柳原健之司祭・松山健作司祭が交代で高田降臨教会（中部）の礼拝奉仕を行っている。（2023年4月より、月1回）
7. 財政問題、特に教役者給与や関連施設との関わりについても、共通する課題である。
8. 委員会発足前から協働、教区再編の歩みを進めてきた大阪教区・京都教区合併についての進捗状況を共有し、両教区会での決議に注目していた。しかし2021年11月23日の両教区会では同時の可決とはならず、新教区設立には至らなかった。この結果を受けて、両教区は協働関係を一旦白紙に戻したが、これらの経験が今後の協働、教区再編への道に生かされることを当委員会では期待している。

IV 今後の課題

オンラインでの会議による利便性ゆえに11回もの会議を重ねられた反面、より率直な意見交換のために対面での会議を希望する声もある。2024年4月を目標にしていた大阪教区と京都教区の合併が実現しなかったことにより、中日本宣教協働区は宣教協働、教区再編を含めての率直な意見交換が必要とされる。現在は可能な範囲での協働にとどまり、具体的な協議には至っていないが、今後は、それぞれの教区のもつ課題をさらに共有しつつ、どのように歩んでいくのかを分かち合っていきたい。

1. 西日本宣教協働区の現在に至るまでの経緯（2021年1月から2023年8月まで）

- 1) 各教区、主教、聖職1名、信徒1名、計3名、合計9名で協働委員会を構成している。
- 2) 初年度は毎月1回協働委員会を開催した。
- 3) 3教区はかつて平和礼拝（沖縄慰霊の日礼拝、広島平和礼拝、長崎原爆記念礼拝）、フィリピンワークキャンプなどを合同で行ってきた。平和礼拝に関しては、各教区の主教の参加と、聖職、信徒に参加を促すこととした。
- 4) 各教区の組織、宣教・伝道体制、財政などについて、各教区順番に発表した。各教区ともに聖職・信徒数の減少、礼拝参加者の減少、献金額の減少など、危機的状況になっている。
- 5) 2022年からは2、3ヶ月に1度の協働委員会とした。正義と平和担当者、青年担当者、人権担当者は、3教区の課題や協働できるものを模索し協働することを確認した。
- 6) 平和礼拝のポスターは、各教区が独自に作成していたが共同で作成し、管区事務所より各教区にも配布した。
- 7) 信徒セミナー、神学塾（神戸）、中高生の集いなど、情報の窓口を置き、教区を超えて参加できるようにした。
- 8) 2023年から「西日本祈りのつどい」を毎月1回、各教区持ち周りで開催。教会紹介も行っている。

2. 今後の宣教協働活動の課題

以下のような取り組みを通して各教区の宣教・伝道活動を活性化させ、あわせて教区再編の可能性を見ていきたい。

1) 管区担当者を中心とした活動の充実

正義と平和担当者 — 三つの平和礼拝の共通ポスターの作成。

各教区の情報交換と各教区の平和礼拝への出席。

人権担当者 — 毎月第4月曜日にオンライン会議。

各教会の人権啓発のために、10月の人権デーに合わせて「人権の祈り」を各教会へ配布する予定。

青年担当者 — 夏のプログラムの西日本宣教協働区間での人的交流を促進

「ノーカラータイム」という名称でのつどいを予定（第1回10月20日 九州教区担当・オンライン）宣教協働区間での交わりの時を増やしていきたい。

2) 三つの平和礼拝の充実

沖縄慰霊の日の礼拝、広島平和礼拝、長崎原爆記念礼拝を宣教協働区の大切な礼拝として位置づけ、それぞれの礼拝への参加を通して共に平和への取り組みを進める。

3) 「祈りのつどい」の充実

各教区が担当し毎月一回リモートで行っている夕の祈りを充実させる。毎回の参加者は50～60名。

4) 他教区のプログラムへの協力と参加

神戸教区の神学塾通信講座への他教区からの講師の協力と受講（現在約60名受講）。

5) 教区再編への動き

2024年6月までに主教選挙か伝道教区制かの選択をする九州教区の今後の取り組みを、神戸教区、沖縄教区も共有する。

東日本宣教協働区 宣教協働区アワー報告

東日本宣教協働区では、4教区の参加者が一堂に会する機会を得て、会の前半、宣教協働について、また宣教協働区・伝道教区制についての質疑応答を行いました。北2教区はチーム北国としての働き、南の北関東教区はすでに伝道教区として歩んでおり、北関東教区と東京教区は新教区設立に向けて検討を重ねています。異なる2つの流れをもっている東日本協働区ですが、様々な質問とそれに対する答えが飛び交いました。

各教区で宣教協働のための委員としての働きをしている参加者、あまり宣教協働について話を聞いたことがなかった参加者、様々な視点から、「ぶっちゃけこの先どうなっていくの?」、「教区が一緒になるってどういうこと?」、気になっていることをざっくばらんに質問し、「宣教協働についてより多くの教会の人たちに伝わり考えてもらうにはどうしたらいいのか」というようなことも話

題にあがりました。

後半は、チーム北国と北関東・東京に分かれ、5、6人のグループでの昼食と交流の時間となり、多くのグループではお弁当の後、清泉寮のソフトクリームを食べに出ていました。タイトなスケジュールの合間のほっと一息、互いに知り合い、打ち解け、今後に向けての一歩となりました。



中日本宣教協働区 宣教協働区アワー報告

3日目の午後に行われた「宣教協働区アワー」は、横浜教区、中部教区、京都教区、大阪教区からの参加者が、旧館ホールに一堂に集いました。

「全員で何人?」「机をどうやって並べるの?」こんな基本的なことから何も準備ができていなかったわたしたちの宣教協働区では、集まるところから大騒ぎ。誰がイ

ニシアティブをとるのか、どんな集まりにするのか、誰かが事前に準備しておくべきだったのだ、ということをこの時間帯になって気づいた、そんなお粗末な始まりでした。

とにかく全員が座れるように机を口の字型に並べ、全員着席してお弁当を確保。旧館ホールがいっぱいになり、

こんなに人がいるんだ！ということを改めて感じました。そんな状況だったため、急遽中日本宣教協働区協働委員で参加しているメンバーが進行役を進めるこになつたところで、「各教区から挨拶を、笑える挨拶を」という呼びかけが1人の教区主教からなされました。その教区主教の教区では、参加者が主教を指名し、一番バッターは教区主教となりました。その後は、主教が教区内の誰かを指名し、結果的にいわゆる「一芸披露」が行われることになりました。(清里の気候についての紹介もありましたが…。)その後、全員を8グループに分けて、それぞれの教区の現状や宣教協働について語り合い、この時間はお開きとなりました。初めてお会いした方、何度かお会いしている方など様々であったと思います。そんなに長い時間ではありませんでしたが、貴重な出会いの時間になったと思います。

ところが、夕食の時間にある参加者の方から「あの場はとてもこわかった」「なぜあのようなことが許されるのか」「主教から指名されたら断れない」「あのようなことが許されて、どうしてセーフチャーチなどと言えるのか」等の指摘がご自身の所属教区主教と一部の参加者にありました。その指摘を聞いたある人は「自分が当たられたら何をしようか、とむしろ積極的に準備して盛り上げようと思っていた。申し訳なかった。」と応えました。また、ある人は「笑えることを強制したらハラスメント、だと思ったが、大きな声では言えず周辺の人と話していた。そして、言い出したのなら自分でどうぞ、という思いでその役を主教に振った。」と振り返りました。この指摘については、翌日に4人の主教の間でも共有されました。また、協議会後に参加者で共有した教区もありました。後日聞いた意見の中には「場を盛り上げようとしたことだから」という意見や「主教に振ったのがハラスメントではないか」あるいは「自ら進んで芸を考えていた」「こういう場で振られたら何かやるようにはしているが、喜んでやっているわけではない」、「自分が振られたらどうしようかと不安に思っていた」、「今回の主教と一芸披露した教役者の個人的な関係性ではOKでも、それを知らない人から見たら問題のある構図に見える」などの意見があり、その場にいた人の感じ方は様々であったことがわかりました。

「笑える挨拶を」との発言から始まった一連の出来事が「ハラスメント的」と指摘されたことは、発言者にとっては意図しないことだったろうと思います。みんなが楽しくなれば良い、という思いだったかもしれません。けれども、結果として、パワーがある者が無い者へ「No」と言えない要求をする状態になりました。また、同じも

のをみんなが楽しむだろうと思った全体主義的な空気もあったのではないかと思います。

また運営の視点からは、中日本宣教協働区では、この時間のための準備を何も行わなかった、ということが大きな反省点です。宣教協働区協働委員で宣教協議会に参加するメンバーが限られていたこともあり、実行委員会からの「この時間は宣教協働区にお任せである。」ということをおそらく誰も意識していませんでした。そして、最初に書いたように誰がイニシアティブをとるのかについて、まったく相談のないまま宣教協議会に突入したことがこのような状況をつくりだす原因になったと思います。簡単に言えばコミュニケーション不足、ということになるのだと思いますが、そのコミュニケーション不足はなぜ生じたのか、について振り返ることが今後の協働においても大切なことだと感じました。

そして何よりも、今回の宣教協議会が大切にしてきた「誰にとっても安心、安全な場」を確保できなかったことを大いに反省したいと思います。

以上の報告は、実際に宣教協議会の場で起きたこととして記録に留める必要がある、との実行委員会の判断もあり、このように書き留めることになりました。誰かの責任を問うことが目的ではなく、その場にいた「止めることができなかったわたしたち」「止める必要を感じなかつたわたしたち」にも目を向けてほしいと思います。また、普段のわたしたちの教会にありがちいろいろな風景を問い合わせ直すきっかけになればと思います。

○追記

本報告原案の確認を依頼した4教区主教からは、今回の問題提起の本質を最も敏感に受け止めなければならない存在が主教という立場にあるものであること、歴史的主教制をもつ教会におけるその立場の重要性と責任、また同時にその大いなる危うさを肝に命じなければならぬこと、2024年2月の主教会においても全主教で今回の課題と反省を共有したことなどの応答がありました。

また、この文書作成のプロセスにおいては、当該主教や問題を指摘された参加者の意見を聞き作成し、また原案について他の教区主教、参加者からもコメントをもらいましたが、内容についてすべての中日本宣教協働区の参加者の思いが反映されているものではありません。そういう意味では、現時点でのある意味、未完の文書であります。むしろ、誠実な意見の交換がこれからも丁寧に続けられることこそが重要なのだと思います。

(文責：司祭大岡左代子 中日本宣教協働区協働委員)

西日本宣教協働区 宣教協働区アワー報告

西日本宣教協働区では、昼食を食べながら、自己紹介を行いました。昼食を食べた後は、九州教区の方が作成してくださった「イエス様のきせき～治癒の軌跡と出会いの軌跡～」という朗読劇を参加者全員で行ないました。内容は、イエス様の幾つかの治癒の物語と最初の弟子たち、ザアカイ、マルタとマリヤなどのイエス様との出会いを劇にしたものです。練習の段階では、台本を見ながら朗読をしていましたが、徐々に熱が入り、各地の方言が入ったり、大げさなしぐさが入ったりと笑いが絶えない楽しい劇となり、大いに盛り上りました。そして最後に聖歌538番をみんなで歌いました。

西日本宣教協働区は、協働区委員会もオンラインでの会議しか行ったことがなく、月に1度行っている「祈りの集い」もオンライン。いつも画面越しにしか会うこと

ができませんでしたが、初めて対面で共に集まることができました。この時間は、イエス様と出会った人たちの喜びを想い起こし、協働区のメンバーと出会えた喜びをみんなで分かち合うことができました。



グループシェアリング（2）

Aグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

チャレンジ

[コメント]

- 聖公会はチャレンジをしていくことが苦手だと思う。
- 変わりたくない・現状をキープしたいという思いがあり、それが応答できなかったところだと思う。

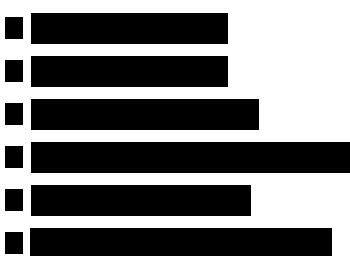
2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

チャレンジ

[コメント]

- 教会には教会用語がたくさんあり、それが業界用語のようになって一般の人にわかりにくくなってしまっている。また、こどもたちや初めて教会に来た人には主日の礼拝が難しいものとなってしまっていることがある。
- 人間が作った伝統や慣習にとらわれたり自分の思いで動くのではなく、善きサマリア人のたとえのように人間の価値観ではなくイエスの視点で見方を変えてチャレンジしていくようになっていきたい。

Bグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

自分が経験して、伝えたいこと、あらわしたいこと、実現したいことを、わかちあうことができなかった。

[コメント]

- 教会のよさ・楽しさなどを家族に言葉や姿で伝えられなかった。
- 前回の宣教協議会の提言を受けて管区や教区レベルでふさわしい機関を用意することが出来なかった。

- 赴任先の海外で、東日本大震災の情報を受けていたが、それらをうまく現地の人びとに伝えられなかった。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

助けてください、できません、ごめんなさい、無理です、とありのままをさらけ出すのも神様への素直な応答。ものがくところに祝福がある。自分の弱さを認める。となりびとの弱さによりそう。

[コメント]

- セルフケアが必要だということを痛感している。
- エレミヤとかペテロも自分の弱さをさらけだしていて、そこに神の祝福があった。

Cグループ



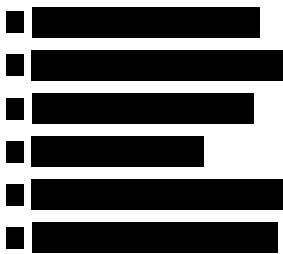
1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

- ・イキイキとした礼拝（=ていねいな宣教牧会）が、あまりできていない。
- ・教会委員（共同体）相互のケアにおける困難さがある。パワーバランスやガバナンスの不安定さに課題を抱えている。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・イキイキとした礼拝（=ていねいな宣教牧会）を互いに工夫していく。
- ・避けがちであった礼拝奉仕（「み言葉の礼拝」における勧話・奨励）に参与する、むしろ機会を頂いたと発想転換することで恵みを感じることができる。
- ・原点に戻る：はだしの宣教：考え方直す：イエスさまが共にいてくださるところに戻る：小さな声に耳を傾けて行くということで共同体形成の原点へと繋がっていく。

Dグループ



ケリュグマ、ディアコニア、マルトゥリア、レイトイ
ルギア、コイノニアを指標として)

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・さまざまな人との繋がりを持つためには、さまざまな人が持ち合っている痛み、苦しみを神様へ繋げるためのチャンネル（経路、道）を私たちが合わせてゆくことが求められるのかもしれない。
- ・例えば、インスタグラムのような広く認知されたツールを使いながら、教会の礼拝の様子やメッセージなどを分かりやすい言葉で伝えてゆく。また、結婚式や炊き出しなどの情報についてハッシュタグをつけて繋がりの機会を増やしていく。それをキャッチしてくれる人が現れたときチャンネル（経路、道）が合うということになるのではないだろうか。

Eグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

宣教協議会五提言すべて

[コメント]

- ・宣教協議会の言葉も理念もほぼ伝わっていない
- ・知らなかった、ペーパーは教会の片隅に
- ・すべての項目の内で一定の成果を収めているものは元々、教区・教会の立地、リソース、経験、環境、知っているごく一部のはたらきかけを生かしている

- ・献金 神の民として神の招きを受けて集う教会に行く喜び・いる喜びからるもので、積極的な意味でなく金や人がない、そのために高まる負担としての献金

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

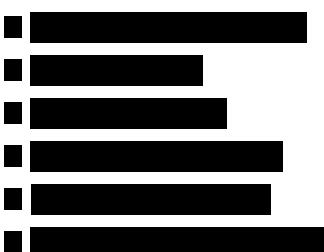
ネットワークの複合的強化 まじわりの深まりへ

[コメント]

- ・エピスコパシーの伝統にあるアングリカンとして主教各位の重みを認識し、メッセージの反復性を強化

- ・教役者たちの専門家的な言葉や知識を駆使した発信の意義
- ・賛成反対の自由はもちろんあるが、教会に伝えることはマストとする
- ・信徒も委員会も教役者も縦横斜めのネットワークを形成する

Fグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

「聖職中心主義」からの脱却・多様な奉仕職の展開

[コメント]

- ・神様に喜ばれることを実行する
- ・神様が成長させてくださる実感
- ・忍耐強さ
- ・畏れ
- ・自然との出会い
- ・共同体として養われていく

- ・リトリート 神が畑を耕してくださる与えてくださる
- ・マインドフルネス 気づきの瞑想
- ・歩く 移動する
- ・神の国に招く / 共同体に招く
⇒「ドメスティック」な雰囲気がある
- ・マイノリティとの出会い
- ・つながりの流れで切磋琢磨と新しい出会い
- ・靈的に枯渇していく（信仰的な話し合いの場の必要性）

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

神を探求できる場【例：「信徒神学校」・「信徒と聖職とともに学ぶセーフ・チャーチの学び」など】

[コメント]

- ・聖職中心ではなくすべての人が神と共に生きたいという想いに応える
- ・礼拝の充実

Gグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

- ・コロナ禍における痛み
- ・宣言（協議会）と現場の乖離

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・できることは絶対ある！（自分ができること）
- ・自分の身の回りの人に積極的に働きかける（当事者になる）。

Hグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言に応答出来なかつた。

[コメント]

- ・提言を具体化させるにあたり、問題意識が薄く、主体性が今よりも低かったかもしれない。
- ・管区や教区に推進する機関が置かれていなかったのは大きな原因ではないか。
- ・それによって提言が教会や信徒全体に染み込んでいない。存在自体知らない人もいる。
- ・しかし答えられたか？と聞かれると「はい」とは答えられないが、やる努力はした。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

これまでの歩みを更に進め、深めていく。

[コメント]

- ・「清里コール」は前回の二の舞にならないように
- ・「清里コール」を推進するために管区や教区に機関の設置を希望する。
- ・10年後もこのような集まりができたらしいなと思う。
- ・10年に限定しなくても良いのでは？
- ・他者にもっと目を向けていこう。

○テーマに関わる事

- ・「いのち」他者とはなにか。みのりの対極にあるものを考えていない。人のいのちだけではなく、環境を含めてのいのち・世界を大事にする。つながっているということもいのちなのでは。
- ・環境を含めて大事にしないと、人のいのちも大事にできない。
大震災 自然破壊 放射能汚染 人のいのちだけでなく、色々なものが汚染されてしまった。
- ・何故神はこのようなことを起こしたのか？
- ・いのちの対極という形で突き詰めて考えていないのではないか？

Iグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

10年前に既に神様からの声・恵みはあったが、私たちは関心を寄せるこ・聴くこ・見ること・知らせるこことが十分ではなかった。

[コメント]

- ・2012年宣教協議会で出された「日本聖公会＜宣教・

牧会の十年＞にむけて」の提言は、現在見ても新鮮であり、必要なことが示されていると感じます。しかし、新鮮であるということは、今まで私たちはこの提言に関心を寄せるこ・見ること・知らせるこが不十分であったという一面も示します。

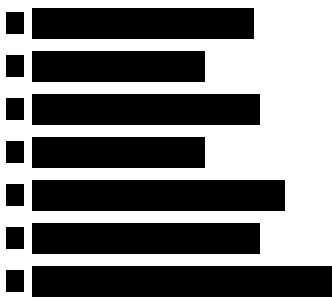
2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

何か取り組めるものに関心をもって、動き出す。

[コメント]

- ・2012年宣教協議会での「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞にむけて」の提言にも関心を寄せ、応え動き出すための土壤作り協働体制を整えること。また、いかなる分野についても歩み続ける必要があると考えます。

Jグループ



わることができない。

- ・信徒同士の争いや信徒と教役者の良い関係性を持つ。
- 教役者同士の関係性をよくしてほしい。

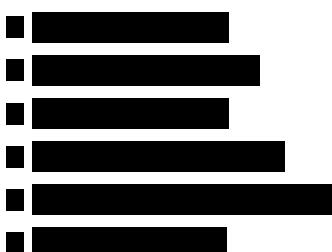
2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・信仰生活の中で楽しさ、喜びをもつこと。
- ・神様から与えられている恵みに気がつく。

[コメント]

- ・様々な地域や情報などに関心を持つ。牧師が楽しそう、嬉しそうにしていると信徒も嬉しい。
- ・神様が私たちに与えてくださるたくさんの人に出会っていくこと。
- ・自分のやりたいと思う意思の中にも、思いがけないこの中にも神様の恵みがある。そこに目をむける。

Kグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

- ・教会のビジョンが見えづらかった。
- ・こどもたちの学びの場、宣教がコロナ禍で奪われた。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・教会に来れず、つながれなくなった人との接点づくり
- ・開かれた教会となるために、教会や私自身が変えられるように祈る。

Lグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

自分たちの「教会」のこと、自分のことにつながりすぎていたために、神様の与えてくださっている出来事の一つひとつ、出会う一人ひとりに向き合うことが十分にできなかった。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

イエス様から愛されている原点に立ち返る。そこから、目の前のいのちに出会い、むきあう。

Mグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

単発的、一回限りのイベントになってしまったこと。それぞれイベントを瞬発的に立ち上げたが、それ限りになって、持続できなかった。その背景としては、様々な原因があるものの、そうなったのは私たちが危機感をあまり感じることができなかった。

[コメント]

- ・1995年の協議会の決議（日の丸掲揚禁止）が守られていないこと。
- ・コロナによって、今まで続けていた日常（愛餐会、歓談等）の小さな積み重ねが途切れてしまったこと。
- ・人数が減り、任された教会が増えたことによって、私たち教役者が丁寧な牧会が続けられなかったこと。
- ・九州教区の各教会が「5年後の夢」という掲示板を作ったものの、単発的なイベントの連続だけで終わってしまった。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

原点に立ち返ること。礼拝、人とのつながり、祈りを大切にしたい。むしろ、コロナのおかげで、私たちが本当に大切にしようとしたこと、原点に戻るようになった。

[コメント]

- ・教会との距離が遠くなってしまった方々を来させるには、日常を回復する努力をしたい。手法としてはSNSやZoomといったデジタル媒体とを利用し、また教会訪問などの交流等があろうか。
- ・WEB媒体を活用することで、人と人とのつながり、大切にしていたものを続けていきたい。
- ・逝去した父のことを思いながら、一緒に礼拝していることを感じられた。
- ・日曜学校のこどもと教師が少なくなったが、1人になったとしても辞めずに礼拝を守り続けたい。
- ・礼拝を守るのは私1人であるけど、そこには神様と一緒にいるということを信徒の皆さんに共有と、私たちが1人ではないことを、教区を超えた繋がりを維持・持続することで実現したい。
- ・使徒たちの手紙で一番見られるのは「あなたたちを愛しています」「会いたいことを心から願っています」である。対面で話し合うを通して、私たちにかけられた招きへの答えになるだろう。

Nグループ

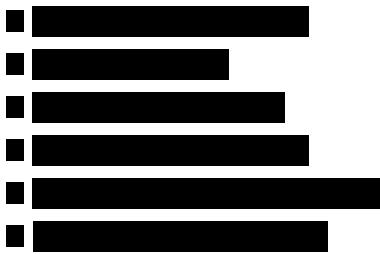


1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

2012年宣教協議会での「教会内での牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きを丁寧に実践していくこと」が、教役者の減少や長引くコロナ禍の影響などによって、教会内そして教会のある地域の声にていねいに耳を傾けることができなかった。ゆえに、応答すらできなかった。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

この10年間を省み、そのようなことができなかったということからの「招き」として、今回の宣教協議会の「いのちの現場から聴く」を通して、いろいろな声を「聴く」ことの重要さを学んだ。となりびとが耳を傾けることで、また私たちが耳を傾けることによって、深く励まされ、安心が与えられる。それは神様から安心が与えられるということ、そのようなとなりびとになるために、教会の人たち、地域の人たちと共にいて、その声に耳を傾けることをしていく一人ひとりになっていきたい。



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

私たちが「ないものねだり」を続け、自分たちの理想像ややりたいことに固執して、神が今の私たちに与えてくださっているものを見出す努力を怠ったこと

[コメント]

- ・人的リソースの枯渇＝共同体の魅力の枯渇
- ・一人ひとりの枯渇の問題：カルトにつながる
- ・応答できなかったことはあったが、足りないものに対する愛情は感じた。
- ・教会の中で完結してしまい、外に対する働きかけが足りなかった。
- ・神と社会を繋げる働きができなかった。
- ・人がいないので…という負のスパイラル。丁寧な牧会：だんだん仕事は増える（幼稚園、管理教会の増加）→丁寧でなくなる、という前提がつくのが疑問。人のせいにしている。「自分のできなかったこと」を人のせいにしていたら解決が見つからない
- ・いつでもなんでも、の万能選手になれないとしたら、どういう専門家になれるか？
- ・自分の環境で求められていることと、やりたいこととのすり合わせの困難さ：自分以外の人が自分や教会に求めているもの、自分が教会に対して持っているものの違いをすり合わせるのが難しい。それをある意味「しょうがない」で片づけてきた。逆に、これが私の持っているものです、というのを前面に出すのも違うし、本当はやりたくないと思いながらやるものも問題。どう教役者のモチベーションにつなげていくか。
- ・自分はきちんとやらないと気が済まないが、一方では無理が来て、自分を大事にできなくなってくる。「ていねいに」というときに、自分の限界を超えたことを勝手に思ってしまう。

- ・女性男性ということで、片手間な仕事をしている人だけが宣教協働区の会議に出られる。教会の役割も同じで、仕事があると引き受けられない。今回の参加者も、普通に就職している人が来てくれるとよいと思いつつ、それがかなわない。やりくりの困難さ。言葉は悪いが、豊かな人だけが教会に来られて、頑張って働いている人は活動の中心になれない。

- ・教会には嫌なことがある
- ・往々にして、自分だけが苦労していると思ったり、苦労させられていると思ったりする。でも他の人が代わろうとしても手放さないし、自分が思い通りにほかの人がやらないと怒る。そういうことがよくあるが、最後の責任は牧師にあると言ってまくしたてられて困る。「火花散るのは元気な証拠」人がいなければ火花は散らない。

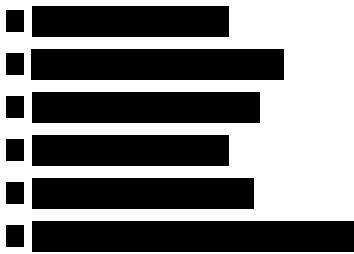
2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

それぞれの固有の賜物を認め合い、互いの違いを知り合いつつ、隔てのない○○○○を作る

[コメント]

- ・全体的には「ボーダーレス」になれなかった。線を引くことから自由でなかった。聖職任せ、信徒任せという区別や分離。教会と社会。教会の中での福音は仲良しクラブ。宣教協働区で目指しているのも、このボーダーレスになることではないか。
- ・「となりびとになる」も「わたしとあなた」の間の線を超えること。寝ないで信徒訪問に行く、礼拝を熱心にする、が丁寧な牧会ではない。その結果自分に酔うということもある。一つの視点は「ボーダー」
- ・人材の貧しさがボーダーレスにつながる
- ・人材難：クリスチヤンではない家族が教会の営繕を手伝ってくれる
- ・教会の青年が地方から都会に出てしまって残ってくれないという悩み→教区間協働につなげられないか？

Pグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

(私たちがいただいた、遣わされている) 喜びを持続できなかった

[コメント]

- ・応答できなかったことを出し合って、言葉でまとめる
と、上のようなことかな？ということになりました。
- ・2012年の宣教協議会で発信されたことに、具体性（わ

かりやすい行動規範のようなもの）がなかったことも、
できなかった要因のひとつではないかと思います。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・(私たちが) 出会った（出会わされた）人が、してほしいことを（想像力を駆使して）していく。
- ・(私たちが) 出会った（出会わされた）人を、(私たち
が) 選ばないこと。

[コメント]

- ・具体的な「これをしよう」というようなことを編み出
していきたいです（マニュアルではないけれど…）
- ・何をすべきかただ考えるより、出会った、出会わされた
人によく聴き、寄り添い、その人がしてほしいこと
をするのが良い…という思いになりました。

Qグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

わたし・わたしたち・教会が、自分自身ととなりびとに
対して開くことができなかった。

[コメント]

- ・自分の弱さに気づけない、となりびとの存在や声に気

づけない、イエスの弟子であることを忘れている、異
なる人々に開かれていない。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

自分が寄り添われているものであることを知り、寄り添
うものとなる。

[コメント]

- ・わたしたちが神様に愛され、赦され、生かされている
ことを、福音を通して知り、イエスの弟子になる。イ
エスキリストの行った愛の働きを実践する。自分の思
いではなく「イエス様ならどうするか」を考える。

Rグループ



1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

- ・「青年たちの声に耳を傾け、自主的な活動を尊重して

支援します」と言っているが、教会が若者に求めてい
るのは奉仕（労働力）というのが現状。

- ・若者は思い出作りをしたいが、奉仕をしたくないわけ
ではない…奉仕（教会の障子の貼り替えなど）も人数
が少ないとモチベーションが上がらないが、人数がた
くさん集まれば、何をやっていても楽しい。
- ・まずは、青年が集まる場であることが前提。若者の
人数が多くいれば、もっと教会に若者が集まる。(ex.
神戸教区の中高生大会のカタチが目標)
- ・褒められるために奉仕するわけではないが、褒められ

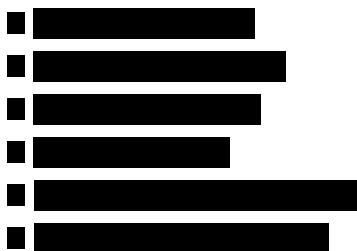
るのは嬉しい。

- ・教区・管区を超えてネットワークをつくり活動したい
青年たちを支援して欲しい。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

- ・若者もおとなも世代やジェンダー、おかれた立場の違いを超えて、互いの声に耳を傾けます。
- ・そのためには互いの声を聞けるような仕組み作り、環境作りが大事。

Sグループ



覚と共有が不十分。

- ・コロナ対応も後押ししている。

2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

これから日本の社会を見据えて形の維持に固執せず多様で小さな働きができる、小さな教会がいい。

[コメント]

- ・それぞれの意味を吟味する。
- ・昔大人はバザーを楽しそうにしていた。今人が減っていき大人が悲痛な顔でやっている。するとこどもが引いていく。
- ・沖縄教区（小さな教会）教会は楽しい。こどもは大人を見ている。子供に役割を与えてくれる。責任感も湧く。

Tグループ



2. 私たちは、招きにどう応えていくか？

神様が備えて下さった出来事と、人との出会いを大切にすることで応えていきたいです。その中に、招きの呼びかけを見出し、たとえ自分の意志にそぐわないことであっても、また時間はかかることであっても、ゆっくりじっくり忍耐強く関わり続けていきたいです。

[コメント]

「招き」は後になって「これはもしかして神様からの呼びかけ？」と気付くことが多いものです。「お恵み」なのか「試練」なのか、私たちには判断がつきません。まずは興味関心をもって、勇気をもって一步踏み出していきたいです。わかりやすい言葉を用いて、また行いを用いて、キリストの愛を伝えていきたいです。しかしそれは容易なことではありません。結局、一人ひとりのできること、一つの教会でできることは、置かれた身近な世界において、神様に出会わされた隣人を大切にしていくこと、そこが出発点になるのではないでしょうか。

1. 私たちが、応答できなかったことは何か？

聖職も、信徒も一人ひとりが、宣教の担い手として神に召された者ですが、教会の内外においてその働きが道半ばであると考えます。

[コメント]

教会が自分の居心地の良い場所になることを無意識のうちに求めてしまい、考え方やペースなど多様な違いを持つ人々に十分な配慮が行き届かず、壁を作り、真の隣人になれていない、開かれた教会になれていないことに気付かされます。ことに世界、社会で脅かされている「いのち」に対しての関心が、まだまだ不十分であると感じます。

「宣教協議会からの呼びかけ」作成・意見交換

3日目のプログラム終了後、参加者で結成されたドラフトコミッティが、グループシェアリングで出された意見をまとめ、「2023年宣教協議会 清里からの呼びかけ」と題した案が示されました。

示された案に関するドラフトコミッティからの説明は、まとめると次のような内容でした。

- ・「提言」ではなく、「呼びかけ」とすること
- ・サブタイトル「ここからまた始めよう となり人となるために」
- ・呼びかけの3つの柱
- ・これまでの経緯が書かれた部分（コミュニケ）
- ・グループシェアリングで出された意見から集約された共通項目

説明の中で、「前夜のドラフトコミッティの会議では、グループシェアリングで出された様々な意見を全てまとめることはできなかったこと」「全体会でそれぞれに重要だと思う内容を付け加えてもらいたいこと」が伝えられました。

会場からは、「呼びかけ」の形とすることへの質問、前日のグループシェアリングで出された意見が十分に反映されていないことへの指摘が寄せられました。ドラフトコミッティとしては、この時間に参加者が小グループになって話し合い、示された案の内容への追加事柄を提出してもらうことを予定していました。しかし、グループで話し合った意見を、持ち帰り反映させるプロセスなど、会の進め方自体が問われ、議論は「呼びかけ」の内容を完成に近づけるための具体的な話し合いとはなりませんでした。

全体会が混迷する中、参加者の中から、「今回の宣教協議会の要となる部分は、2回のグループシェアリングであった」との意見が出されました。グループごとにこれまでにないほど様々に意見を出し合い、全体のグループシェアリング



でさらに議論した、これまでの過程を評価するものでした。「これだけの議論を、そもそも、一晩で形あるものとして出せるものなのか」「皆が納得のできるまとめを出すためにはもっと時間が必要ではないか」「今ここでまとめるよりも、持ち帰り、採択はその後でよいのではないか」との意見が次々に出されました。また、「前日までのディスカッションによって、この場にいる参加者が『呼びかけ』の主体となって発言している、この状況自体が一つの成果ではないか」との意見も出されました。

参加者からは、ドラフトコミッティが限られた中で呼びかけ作成の作業を担われたことへの感謝の言葉に加え、コミッティの継続を求める声が挙がりました。実行委員会とドラフトコミッティによる検討の結果、「呼びかけ」案を持ち帰り、この場で出された意見を踏まえて検討を継続することで、全体会は着地点を得ることとなり、予定されていた時間を過ぎて終了となりました。

内容についての意見

- 前文に、「2012宣教協議会からこの10年を振り返って、2012年宣教協議会の提言の浸透が不徹底だったことへの反省」など、文言の追加が必要だと考える。
- この宣教協議会は、2012年宣教協議会の提言についての反省会ではなかったはずだ。呼びかけは、この4日間を聴き、話し合った内容を表してほしい。
- 呼びかけの内容に、各グループから出された意見の内容が反映されることを望む。
- 今回の宣教協議会では宣教協働区、変革への議論もしてきたが、案ではそれらが抜けている。変革へ向けた言葉を入れる必要があるのではないか。
- この宣教協議会では、教会の中のことについての議論はあったが、日本社会でこの10年に起こってきたことが論議されなかった。日本で差別やヘイトスピーチの問題が起きている。「となりびと」ではなく「当事者」がいることについてもっと考える必要がある。世界でおきている戦争のことなども話題にでなかったことは残念であった。
- 宣教協議会後も「ぶどうの枝分科会」「ぶどうの枝協議会」にあたる会を続け、継続的に検討する機会がつくられることを期待する。

宣教協議会終了後、ドラフトコミッティは名称を「コールコミッティ」と変更し、出された意見を踏まえ、呼びかけ作成の作業を続けました。

コールコミッティで再検討された呼びかけは、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」の題で年内にまとめられ、2024年2月1日と2日の2回に分けて、Zoomによる参加者への報告会を行いました。報告会の中で最終的な文言が固められた後、2024年2月2日の日付で、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」として発表されました。



コミッティの記録

山野貴彦

メンバー選出

1995年および2012年の宣教協議会提言と同様、2023年の宣教協議会においても「清里コール」なるものが、最終日に提示されるはずであった。これは「ランベス・コール」のいわば日本聖公会版にあたるものであり、各教会の共通理念になることが期待されるものである。

そのドラフト作成に召集されたのがコールコミッティ（旧ドラフトコミッティ）である。ただ、そのメンバー（筆者以外に、川島創士、高橋牧、咸允淑、林和広、古本みさ、宮本泰輔、吉谷かおるの各氏=50音順）が発表されたのは協議会本番の初日であった。寝耳に水の召集であったこともあり、最初の会合から実行委員とコミッティメンバーのあいだで激しい議論が交わされることになった。協議会に至るまでの実行委員各位のご労苦が相当なものであったことは想像に難くない。日々の激務がある中、多種多様の素晴らしい企画を考案された、その点は感謝の念に堪えない。ただ、「『～のとなりびととなろう』の『～』を埋めてコールを作成されたい」という穴埋め問題形式の依頼には同意し難く、呼びかけ作成計画はゼロからのスタートとなった。その中で、2012年提言への反省なくして今回の呼びかけ文作成は不可能である、という点で各人の想いは一致した。それゆえ、グループシェアリングのテーマはこれに即したものとなった。

発出の延期

会期中、実行委員とコミッティメンバーは連日夜中に至るまで、各プログラムにおける参加者各位のコメントを精査し、各プログラムの構造理解も確認して議論を重ねた。そして可能な限りの声を集めたドラフトを一応は作成したものの、急造の感が否めず、最後の全体会は当然のごとく紛糾した。そのため、呼びかけについてコミッティが持ちかえり、議論を重ねてあらためて発表するということで協議会は幕を閉じた。

オンライン会議の開催

コールコミッティ各人のはたらきの場は日本各地であり、物理的に集うことは困難であった。そのため、オンライン会議で議論が継続されることになった。会議は2023年11月29日、12月7日、13日、19日、2024年1月30日の合計5回。議論は一定の同意が成立するまで続いたため、各回とも長時間の会議となった。

呼びかけ作成のプロセス

呼びかけ作成に際して①宣教協議会において出された様々な声にもう一度耳を傾けて神学的に考察する、②2012年の提言をあらためて確認し、継続性を意識する、の2点に注意が払われることが委員のあいだで同意された。作成完了に至るまでには以下のようない経緯があった：

・第一回会合（11月29日）

「呼びかけ」作成のための基礎的な諸点について確認した——役割、ビジョン、アジェンダ、経緯、目的、方針、公開方法、前提、呼びかけ案の仮作成、留意点。また、年内の完成という実行委員会の依頼を受け、発表時期を2024年2月とすることも決定した。

・第二回会合（12月7日）

11月29日の会合を受けて、呼びかけ文の具体案が検討された。議論が活発となり、第一項「神のみ声に耳を傾けよう」の決定に至るまでに予定時間をはるかに超過するものとなった。

・第三回会合（12月13日）

第一項の再確認を行ってから、第二項「人々の声に耳を傾けよう」、第三項「世界の声に耳を傾けよう」について議論された。詳細な話し合いにより、この回も予定時間を大幅に超過することとなった。具体的な発表日時はここで決定した。これを受け、第四回会合で呼びかけ文を完成させるため、事前にメールを用いて議論が頻繁に重ねられた。

・第四回会合（12月19日）

この回で呼びかけ文に関する議論が終了した。全体のレイアウトも確認された。最終段階のため各項目への精査があらためて行われ、この回も予定時間の大半を超過を見た。

・第五回会合（1月30日）

呼びかけ文発表を前にした打ち合わせ。詳細についての最終確認と文言調整、発表当日の役割分担決めを行った。

以上を経て2024年2月1-2日（被献日）に「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が発出された。コミッティメンバーは、協議会で挙げられた様々な声に耳を傾け、また、過去の宣教協議会に学び、今後くり返し教会で読まれ、宣教に資する呼びかけ文になるよう努めた。それでもなお不備は多くあろう。しかし、この呼びかけ文は「出して終結」ではなく、今後生じると思われる賛否両論を受け止め、冊子やインターネットを通して今後も様々な声と共に鳴されることが想定されている。その中で、各々のはたらきの場で用いられてゆくことが願われる。そのための対話の場も継続的に置かれる予定となっている。

進言

最後に個人的雑感として、再び宣教協議会が開催されることを前提に、二つの私見を申し上げておきたい。

1. 「協議会」というからには具体的に協議される主題が必要である——たとえば「職制」「教会と財政」「教会と農」「信徒のはたらきと祈祷書／法憲法規」等々。そのような具体的な主題について実行委員を中心に各教区や各委員会で議論されていることを事前調査しておき、徹底的に討議して決定すべきと思われる。分かち合いや大事な話を聞くことに主眼を置くならば「協議会」という名称ではなく、「交流会」「激励会」などとするとよい。もしその名称であれば、2023年の集いも成功の類に入ったであろう。
2. 提言を会の最終日に発出するならば、そのための専門委員は遅くとも本番一年前に選出され、実行委員会と協働し主題や理念を共有しておくべきである。

2023年宣教協議会実行委員のご尽力に敬意が表されることは間違いない。次の開催があるとすれば、これらの点が留意され、今回の委員を中心に新たな力が加わることで、1995年、2012年、2023年を引き継ぐ素晴らしいものになると信じている。



3. 礼拝

- 3-1. 礼拝説教・メッセージ
- 3-2. 様々な礼拝・祈り
- 3-3. 礼拝奉仕者一覧
- 3-4. 礼拝式文



開会礼拝

主教 アンデレ 磯晴久

実行委員長



主の平和・シャロームの実現をお祈りいたします。

皆様、ようこそ宣教協議会へお越しくださいました。心より歓迎申し上げます。今日から私たちは、同じ釜の飯を食う仲間になります。「これからどうなるんやろう」と不安な思いをお持ちの方もあるでしょう。

協議会を進める中で、ワクワクドキドキとなっていくことを願っています。

3年前から準備を進めて参りましたが、準備の段階、そして今回のプログラムを見ておりまして、「傾聴」ということばをいつも心に感じてきました。「聞く」ではなく「聴く」。耳を四方八方に開き、心で聴くということです。「持ち寄りブースから」「3つの小さな教会の声から」「いのちの現場から」「お互いの声から」聴くのです。小さな声、声にならない声に聴くことを大切にしたいと願っています。

前回2012年の宣教協議会では、前年に東日本大震災と原発事故が起こりました。今回は、ウクライナも大変ですが、ガザが大変です。ハマスとイスラエルの戦争が始まり、ガザでは1万人以上（イスラエル側は1,500人と人質200人）の死者がでています。大量虐殺になるのではないか、心配です。「天井無き牢獄」といわれるガザの人々の恐怖、痛み、悲しみ、絶望はどれほどでしょうか。先ほど死者数を申しましたが、単なる統計数値で終わる話ではありません。ある人にとって、祖父、祖母、父親、母親、夫、妻、息子、娘、兄弟姉妹、友人、パートナーなのです。取り換えるきかない「いのち」を持った人間に関わることなのです。それぞれに生存の権利を持ち、未来や夢ある人生を生きている人々、そして多くのこどもたち。女性たちも「いのち」を奪われています。

今から30数年前、エルサレムのセント・ジョージ神学校で学ぶ機会を与えられました。当時のイスラエルのラビン首相は比較的民主的な人でした。イスラエルとパ

レスチナの人々の共存・共生を訴えていました。パレスチナ側もアメリカも同意していました。しかし、ラビン首相は共存・共生に反対するシオニストの青年に暗殺されてしまいました。

「共に生きる」世界の実現は遠のいていました。人と人が「共に生きる」ということが、どれほど難しいかを味わいながら、今日に至っています。

今回の宣教協議会のテーマは「いのち、尊厳限りないもの」ですが、この中に「共に生きる」ということも含まれています。「人と人」、「人と自然」、「神様と私たち」というテーマが含まれています。

先日NHK「こころの時代」で、ガザ在住の人権活動家・弁護士のラジ・スラーニさんの歩みが紹介されました。その中で、スラーニさんが、「今ガザで起こっていることは、宗教対立ではなく、人間の尊厳にかかわることであり、人間の尊厳が著しく脅かされているのです。」と語っておられました。

このメッセージを書きながら、私はある讃美歌を思い浮かべておりました。『新生讃美歌』や『讃美歌21』にある「善き力にわれ囲まれ」です。

1. 善き力にわれ囲まれ 守りなぐさめられて
世の悩み共にわかち 新しい日を望もう
※善き力に守られつつ 来るべき時を待とう
夜も朝もいつも神は われらと共にいます
2. 過ぎた日々の悩み重く なおのしかかる時も
さわぎ立つ心しづめ み旨に従いゆく ※
3. たとい主から差し出される 杯は苦くても
恐れず感謝をこめて 愛する手から受けよう ※
4. 輝かせよ主のともし火 われらの闇の中に
望みを主の手にゆだね 来るべき朝を待とう ※

（実行委員会注：日本聖公会聖歌集では552番「善き力持つ者らに」。ただし翻訳は異なります）

デートリッヒ・ボンヘッファー牧師の詩であります。ヒットラーとナチスの中に悪魔的なものを感じた同牧師は、ヒットラー暗殺計画にも参加します。

しかし、ナチスに捕らえられ、ナチス崩壊1か月前に絞首刑となります。彼が生きていたら、第二次世界大戦後のキリスト教世界は大きく変わったのではないかと言われる方でした。彼が死の数か月前にフィアンセと家族

に宛てた手紙にこの詩がありました。私たちも主イエスの善き力に囲まれていることを憶え、また、来るべき朝、来るべき時を待ち望んで、宣教協議会を始めましょう。

ボンヘッファー牧師は、死に臨んで、「これが最後ですが、私にとっては始まりです。」ということばを残しておられます。宣教協議会は始まりです。

と一緒に、宣教協議会を創り上げていきましょう。

主教 ルカ 武藤謙一

首座主教

清里にこうしてみんなで一緒に集まることができて、本当にうれしく思っています。「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」(詩編第133編1節、新共同訳)。この聖句を皆さん、実感されているんじゃないでしょうか。この清里に初めて来られた方は、いらっしゃいますか。今日はせっかく初めて来られたのに、霧で何も見えません。「ここってどんな所なのだろう」ときっと思われていると思います。

私は18歳まで、ここで生まれ育ちました。そしてまた牧師としても10年間、この清里で牧会しました。今日は本当に(景色が)見えませんが、ここは本当に、豊かな自然が美しい所です。神様の創造の業がここにあります。必ずあります。だから霧が晴れればちゃんとそれは見えます。本当に神様の素晴らしい賜物が、私たちは見えているだろうか。霧に包まれたような、先が見えないような、そういう不安を感じているのではないかと思います。でも必ず、神様の素晴らしい国がある。神様の恵み、賜物、光がある。そのことを本当に信じて、そしてこの4日間、ご一緒に過ごしたいと思います。

数字だけ見ると、「この先どうなっていくのだろう」

という不安ばかり、思いがどんどん起こってくるかもしれません。でもそうじゃない。神様のみ国はある。そして神様がちゃんと私たちのことを、共にいて見守り、導いていてくださる、祝福してください。そのことに信頼し、これから先10年間、私たち日本聖公会の各教区、教会が、どんなふうにその喜びを他の人たちと分かち合っていけるのか。そのことをみんなで祈りの中で考え、話し合い、そしてまた帰っていって、それぞれの教区、教会の中でそのことを分かち合って、また次の10年の一步を歩み出したいと願っています。みんなで本当に喜びの中で、恵みのうちにこの4日間を過ごせるように、皆さんのご協力をよろしくお願ひいたします。



朝の祈り

主教 マリア・グレイス 笹森田鶴

祈祷書改正委員長

実行委員 これから朝の礼拝をおささげします。その前に、この朝の礼拝の趣旨の説明を申し上げます。この宣教協議会、2日目となりましたけれども、これから日本聖公会の宣教の在り方をまた考え、共に集い、祈り、そして出会っていく、そういう場所であろうというふうに思います。これから私たちが何を祈り、何を求める、何を分かち合って歩んでいくのか。それを考える時に、それを示していく大切な祈りの書こそ、日本聖公会祈祷書であるというふうに考えます。

この宣教協議会、そして今、進められている祈祷書改正というのは、共に聖公会の過去、現在、そして未来を見据えた活動であり、その活動の根本には祈りがあります。日本聖公会祈祷書が現在、改正のプロセスにあるということを実行委員会は伺いました。そしてこのたび、今日の礼拝におきまして、祈祷書改正委員会の委員長である笹森田鶴主教をお招きし、改正の理念や現状について、お話を聞かせていただきたいと思います。また、現在改正が進められている式文の一部、詩編を用いて朝

の礼拝をおささげし、新しい式文、新しい言葉、その響きを、それらを用いる喜びを感じながら、ご一緒に時間を過ごしてまいりたいというふうに考えております。それでは笹森主教さま、お話をお願ひいたします。

笹森主教 皆さん、おはようございます。私は、祈祷書改正委員会、そして礼拝委員会の委員長をこの4月から拝命いたしました、北海道教区の笹森田鶴と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私に与えられた時間は5分でございますので頑張ります。

まず、本委員会は2014年の祈祷書改正準備委員会のミッションステートメントを引き継ぐ形で、2016年から活動を開始しております。そして具体的な試用版を皆さんのお手元に提供していくために、本委員会としての理念をあらためて作成いたしました。それが今、映していただいている、このような形になっております(別表)。

「ミッション」「ビジョン」「バリュー」という枠組みで組み立ててみました。この意味については、また詳し

祈祷書改正の理念（ミッション・ビジョン・バリュー）

ミッション（存在意義・使命）

わたしたちは、改正によって、
多彩ないのちを大切にする
21世紀日本の聖公会祈祷書
を作成します。

【ビジョン】（目指すべき姿）

改正される祈祷書は、
日本聖公会において信仰と生活を共にする人が、
神に造られ、いのちを与えられた民として、
キリストと共に旅路を歩んでいくために用いる
祈りの書です。

【バリュー】（価値観・行動指針）

<宣教的>

- 「宣教の五指標」を意識する
- 様々な意味での「多様性」を尊重する
- 現代的な課題に応答する
- 日本社会と日本聖公会の現状を踏まえ、
将来像を視野に入れる

<神学的>

- 聖公会的な「聖書・伝統・理性」を尊重する
- 最新の研究成果・実践例を採り入れる

<実践的>

- 30年先を見据えた祈祷書である
- エキュメニカルである
- 礼拝での使用に適切な日本語を用いる
- 信仰の旅路の同伴者である
- 信徒の奉仕職を促進する

この画像は祈祷書改正委員会作成のウェブサイトからご覧いただけます。

<https://nskk-pb2026.blogspot.com/p/index.html>

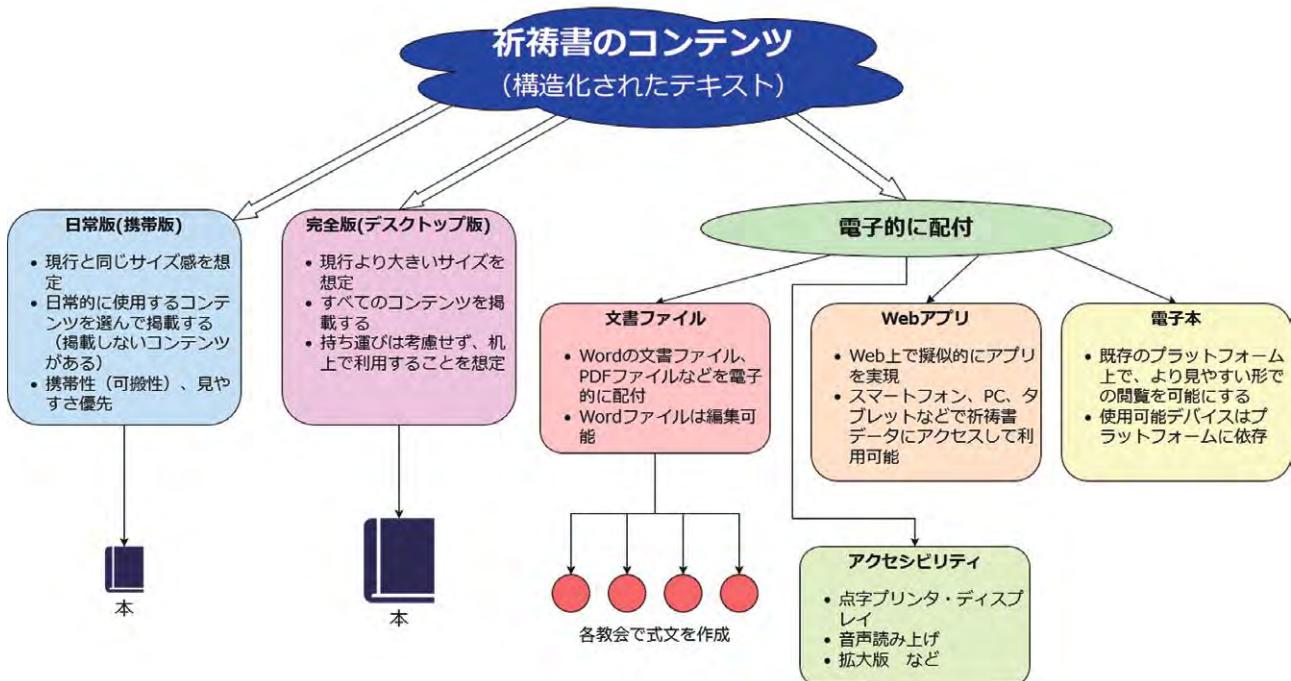
くお聞きになりたい方はどうぞいらしてください。ミッションというのは存在意義、そして使命。ビジョンは目指すべき姿、理想像。そしてバリューは価値観、行動指針という具合です。

「ミッション」、「私たちは、改正によって、多彩ないのちを大切にする21世紀日本の聖公会祈祷書を作成します」。「ミッション」のキーワードとなったのは「多彩」という言葉です。しばしば、多様性という言葉が用いられますが、「多彩」は多様性よりもさらにもう一步進んで、「多様な色を持つ一人ひとりのいのちが色とりどりに輝く」、そういうさまを表す言葉だと考えました。これまでのミッションステートメントの背後にある「ライフの共有」、「ライフ」というのは「人生、生活、そしていのち」ということになりますけれども、その「ライフの共有」という考え方にもつながっているものだというふうに考えております。また、改正祈祷書が21世紀の日本という時と場所に奉仕するものであるということ。さらに、 anglican の伝統に連なるものであることも意識

化するべきであると考えております。

次に「ビジョン」です。このようにまとめました。「改正される祈祷書は、日本聖公会において信仰と生活を共にする人が、神に造られ、いのちを与えられた民として、キリストと共に旅路を歩んでいくために用いる祈りの書です」。これは既に7年間使用してまいりましたミッションステートメントを、ほぼそのままの形で継承しているものであります。

また、「バリュー」。これを「宣教的、神学的、実践的」というカテゴリーに分けて指針を提示しております。例えば、宣教的な「バリュー」としては、「宣教の五指標を意識すること」「現代的な課題に応答すること」などが挙げられております。神学的な「バリュー」では「聖公会的な聖書・伝統・理性を尊重すること」「最新の、できる限りアジアでの研究成果・実践例を取り入れること」。それから「30年先を見据えた祈祷書であること」「エキュメニカルであること」「信仰の旅路のよき同伴者となること」「信徒の奉仕職を促進すること」などです。



これらを意識しながら改正の作業を委員たちは進めております。

さらに、目に見える形としての祈祷書という点では、「祈祷書一冊に全てが網羅されている」という考え方を大きく変えています。祈祷書をコンテンツと捉え、それをどのように書籍や電子版などで提供していくかということを具体的に検討しております。例えば紙媒体としての祈祷書という点では日常版。礼拝でよく使うものを集めたもの。さらに、当然ですけれども完全版。あるいは祭壇用など。また、電子版としての文書ファイル、ウェブアプリ、電子本などです。

また、現在主教会の承認をいただいて、先ほどもご紹介ありましたけれども、皆さまにご提示できる試用版といたしましては、詩編さらにエキュメニカルな改正、共通聖書日課、通常RCLと私たちは呼んでおりますけれども、それに準拠した聖書日課というものを、試用版として今の時点では皆さまのところにご提供することができております。この2つの試用版のご提供については、もう既に管区から各教区を通じて、各教会の皆さま方にお知らせがいっていることと思います。今年の降臨節第1主日から、この新しい試用版の聖書日課と詩編は使用できることとなっておりますので、ぜひ各教会でご検討いただいて、用いてくださるかどうか、できましたら1年ぐらいかけて継続して用いていただいて、その感想なりご意見なりを合わせてお寄せいただけたら大変ありがたいというふうに思っております。

なおかつ、管区事務所からはこれまでそうでありましたように、今までの聖書日課と詩編と並んで、この新しい聖書日課、RCL版に準拠している聖書日課の聖書箇所、そして試用版の詩編の印刷物も配布する予定でござります。

ざいます。

昨日の3つの教会の物語を伺いながら、これらの理念や方向性によって改正される新しい祈祷書が使われ、そして各教会が礼拝によって励まされ、そしてこの世に遭わされてゆくものとして整えられていく、そのことを願ってやみません。また、皆さまにご心配いただいておりますが、作業の遅れについては大変心苦しいものがございます。できるだけ早く他の試用版も皆さまのお手元に届くことができるよう委員一同、鋭意努力していきたいというふうに思っております。祈祷書改正のベースが、礼拝委員会と合同ですけれども、ございますので、ぜひ

お立ち寄りください。詳しい内容など、QRコードを通じて資料を提供することができていると思います。

また、この宣教協議会に、全員ではありませんけれども、何人かの祈祷書改正のメンバーが参加しておりますので、ご紹介したいと思います。その場でお立ちいただければ大変ありがとうございます。(祈祷書改正委員会委員および協力者の紹介あり)

何よりも、この改正祈祷書の作業が神のみ旨にかなうことができるよう、お祈りいただきたいというふうに思っております。また、どうぞ各教区、教会などでお呼びください。説明しに上がります。そして試用版をできるだけご利用いただいた上で、ご意見をお寄せいただきますように、心からお願ひいたします。私からは以上です。ありがとうございました。



協議会2日目 11/11 朝の祈り

聖靈降臨後第24主日（特定27）聖餐式

主教 マリア・グレイス 笹森田鶴



父と子と聖靈のみ名によって アーメン

1995年、2012年、そして2023年と開催されてきた日本聖公会宣教協議会において、私たちはこれまでの歩みを振り返り、すべてを神の前にささげ、またこれから日本聖公会の旅路を方向づけてきました。これまでの宣教協議会と同様に、昨日、一昨日と、様々な背景の方々を通して、喜びと希望、悲しみや苦しみ、偏見や孤独、また解決されないことへの痛み、戸惑いや熟考、そして地に足のついた希望や夢を伴った、それぞれのいのちの重みのある物語を聴かせていただいています。

同じように、神の造られたこの世界のいのちを脅かす戦争、暴力、自然破壊が今も起こり、声にならないうめきに覆われたこの世界にも、その声のお一人おひとりの物語があります。

この場に集められた私たちが、主日に与えられる神の恵みによって整えられ、この世界に働く神に従っていくために、これらの声を聴き、立ち止まって考え、日本聖公会の方向付へと向かっていくことができますようにと願います。ことに方向づけに必要な預言者の言葉を思い巡らしつつ、私たちの思いを遙かに越えていく聖靈の導きを祈り求めたいと願います。

今日のアモス書で、神は、悲しみ嘆いていらっしゃいました。そのことをアモスはイスラエルの指導者たちに向けて告げます。（アモス書5:18-24）

アモスは、紀元前8世紀後半、ヤロブアム2世が北イスラエルを統治していた頃に主な活動を展開していた人物です。荒れ地が広がるテコアの出身の農業従事者でした。自分は預言者ではなく、酪農を営み、またいちじく桑の生産者だとアモスは言います。

この時代は北イスラエルも、また南ユダもとても栄えていた時代です。両方合わせた領土はソロモン王国に匹敵するほど拡張し、平和と繁栄がさらに広がっていくと人びとは期待していました。ことに戦争による領土の拡大で繁栄を享受している特定の人びとにとって、この期待は非常に重要なものでした。

一方、その影の部分では、社会の中での不正や貧富の差が拡大し、また指導者たちの退廃は目を覆う状態となっていました。貧しい人々はさらに貧しくなり、賄賂が横行し、祭司と裁判官は結託して無実の者に有罪判決が下るような不正義がまかり通っていました。同胞を踏みにじって得た富を享受している者のいにえが神殿にささげられます。

荒れ地という自然の厳しさの中で、決して楽ではない生活をしてきたアモスは、経済的な豊かさの中で神から離れ、他の人の苦しさに気付かずに過ごしている都市の指導者たちを見過ごしにすることはできませんでした。アモスは、痛烈な批判を展開していきます。

神はイスラエルに対し、何度も、何度も、「私を、主を求めるよ、そして生きよ」と呼び掛けていたはずだと、アモスは告げます。イスラエルが生き残るために、イスラエルを必死に呼び戻そうとされたのです。

しかし何度も呼び掛けても、イスラエルの民、ことに祭壇に近い者たちは神の声を聞こうとはしませんでした。主の日への期待を、自国のさらなる平和と繁栄の日と勝手に思い込んでいました。神が、その力をもって現れる日は確かにやって来ます。けれどもそのような自己安寧の期待しかないイスラエルにとって、主の日に起こることは決して光の出来事とはならないのです。そして神は、徹底的な祭儀の拒否を示されます。盛大な祭りの音、礼拝の音が貧しい人々の声や叫びをかき消していたからです。そして、このように命じられました。

「公正を水のように
正義を大河のように
尽きることなく流れさせよ。」

礼拝の中心にあるべきものは、自己目的のためのささげものではなく、神の公正と正義です。公正とは、神の御旨がかなった状態の社会の様子、神の秩序のこと。そして正義とは、そのような社会の中で神と人、人と人との交わりが正しくある状態です。神はこの公正と正義が実現している世界を求められます。そしてその公正によって、実に神はイスラエルに、すでに大いなる救いの恵みを与えてくださっていたはずでした。

礼拝という意味のドイツ語の言葉に、Gottesdienst という言葉があります。直訳では、「神奉仕」です。この言葉には、「人間が神に対してささげる奉仕」という方向性と、「神が人間に対してささげる奉仕」という方向性の両方が含まれていると言われています。聖書に記されている物語がすべてそうであったように、常にはじめに神の愛が人間へと注がれ、その応答として人間は神への賛美へと導かれ、神の造られた世界へ奉仕するため生きしていく恵みを与えられます。

だからこそ、人間の応答としての礼拝の中心にあるべきは、溢れ出る神の公正と正義です。そして「その公正と正義を、この世界に向かって、そしてあなたの生きている場に向かって、とうとうと流れ出てくるようにさせよ」と主は呼びかけられていると、アモスは語ります。

今日の福音書のたとえでも、そのような神と人間との関係にとどまるようにという忠告のたとえが語られています。(マタイによる福音書25:1-13)

少々この箇所に向き合うのにとまどいを覚えてしまう自分がおります。

たとえば、数少ない女性が登場するたとえ話なのに、賢い女性と愚かな女性と、女性が分断されて描かれていることです。父権制において、女性たちが都合よく良い女性と悪い女性に分けられてしまってきたことを思い起こします。また、本来の「良い」が何を意味しているかということはさておき、社会から期待されている良い女性への要求に対する不安や恐れが起こります。また、キリストと教会の関係を婚宴と表現されること、そのように例える場合には必ずキリストが新郎であることへの違和感もあります。このたとえ話は私にとって受け止めきれないことや、また居心地の悪さを感じる要素があります。この居心地の悪さは、私が生涯を通じて担っていく課題ではありますが、教会のひとつの課題であろうとも受け止めております。そのような課題を持ちつつ、読み進めていきます。

さて、賢い5人と愚かな5人の違いは、ただひとつ、「予備の油を用意していたかどうか」ということだけです。愚かな5人は、賢い5人からは油を分けてもらうこともできず、追い出された上に、当時誰でも参加できるはずの婚宴の場から、知らないと告げられ、夜に締め出されてしまう恐怖が描かれています。これは当時の社会の中でも想像を越えるひどい扱いです。それほどまでに予備の油を準備しているかどうかということによって、神と人との決定的な分断が起こる、それが今日のたとえ話の主旨です。

では、この油とは何か。その答えを具体的に明確にし、解決して安心したくなります。けれども私たちは、この協議会で聴いた一つひとつの物語にあった葛藤、そして課題を抱えて生きていく時間の長さに触れることができました。そう簡単に、「油はこれだから、これをしないようにしよう」などと言い切ることがどれほど危険で愚かなことなのかということにも気づいています。

それでも、せめて、今日の旧約聖書のアモスの預言や、またマタイ福音書の中心的なメッセージを手がかりにして思い巡らしてみます。すると、ひとつのイメージが浮き出でます。預言者からのビジョンです。神の正義と公正を大河のように流れ出させる、ということです。

この水は、つくることなく、勢いよく流れ出ます。自分たちのところにとどめておくことはできません。もう十分だからと言って止めることもできません。神からのものだからです。それは必ず外へ外へと向かって大水となって流れしていくのです。

大河は水一滴の集まりです。一滴一滴は小さな粒です。教会らしい、一つひとつの出来事としての一滴です。点在している、そして小さな教会らしい出来事にきちんと光を当て、流れ出していく神のこの世界でのお働きへそれぞれが連なっていくとき、その一滴を集めた大河を流れ出させていくこととなっていきます。

「神の公正と正義を流れさせよ」という主のご命令は、周縁に追いやられている人びとへの奉仕、また神が造られた被造世界への奉仕の日々を、神への賛美とともに生きることへの招きです。その招きに応え、それぞれ出会っている人々との交わりの中で、神の公正と正義について考え続け、行動し、失敗しながら、再び神に立ち返り、迷いながらも歩み続けていく信仰共同体でありたいと願います。

私たちも、この一滴になります。すべてのいのちがこの被造世界において、神の愛と慈しみの中で過ごすことができるためです。教会がその選び取りと行動をし続けていく旅へと歩んでまいりましょう。



協議会3日目 11/12 主日聖餐式



閉会聖餐式

主教 ルカ 武藤謙一

首座主教

十主よ、私の岩、私の贖い主、私の言葉と思いがみ心に
かないますように アーメン

皆さん、先ほどの最後のセッションでは、参加者の皆さんがあなたが賛同する「清里からの呼びかけ」をまとめることができませんでした。閉会聖餐式を挙げて、この宣教協議会の成果を携えてそれぞれの地へと戻っていくことを想像していましたが、その通りにはなりませんでした。今、何かもやもやした気持ち、すっきりしない想いを抱きながらおられる方も多いと思います。私自身もそうです。参加者から提案されたように、聖餐式ではなく、時間の許す限り協議を続けて「清里からの呼びかけ」をまとめの方がよいとも考えていました。しかし、このように混乱したときだからこそ聖餐式を挙げることが大事だと考えます。私たちの原点であるからです。今皆さんがあなたに抱いている「もやもや」も、すべて神様のみ前にお献げし、主イエス・キリストの御体と御血によって養われ整えられることが必要だと思うのです。

BSAの足立征三郎さんがブース紹介の時にお話ししていましたが、ここ清泉寮は1938年、立教大学のBSAの研修施設としてポール・ラッシュ博士によって建てられました、そして、戦後1948年に現在のキープ協会の働きが始まりました。私は小学生のころから、ポールさんのこと、キープ協会のことについて次のように聞かされてきました。

敗戦後、日本聖公会も組織を再編します。食料も何もかもが不足している日本の、80%は農村だったそうです。日本聖公会は、戦後の農村の伝道を考え、その一つの構想として生まれたのが、すでに清泉寮があった清里でのモデル事業でした。ポール・ラッシュ博士とBSAのメンバーが中心になり、「信仰、保健、食料、青年への希望」の四つの理念を掲げて「清里農村センター」が始まります。清里聖アンデレ教会、清里聖ヨハネ図書館、清里聖ルカ診療所、実験農場が建てられ、地域の人たちの必要に応えようとしました。キリストの福音を宣べ伝える、高冷地であるために酪農によって食料を確保する、無医村だったこの地域の人たちの健康、医療を提供する。

そして、地域のこどもたちが図書館に遊びに来るようになったのがきっかけで、仕事に忙しい親たちの要望によって始まったのが清里聖ヨハネ保育園でした。そして清泉寮は青年たちが集まって語りあう場でした。「弘道所」と呼ばれる建物が周辺の地域に何ヵ所も建てられ、立教大学の学生たちがこどもたちを遊ばせ、聖路加看護大学（現・聖路加国際大学）の学生や保健師が保健指導に来られ、また聖書勉強会などが行われました。

そのモデルはイエスです。イエスがこどもたちを祝福したように、5つのパンと2匹の魚で多くの人の空腹を満たしたように、ガリラヤの町や村を巡りながら多くの病人を癒したように、山の上で多くの人たちを教え、生きる希望を与えたように、人々の必要に応えて働かれた主イエスに従う信仰の働き、宣教の働きでした。

職員たちもこの敷地の中に生活して、一つのコミュニティでした。私はこどもでしたから詳しいことは知りませんが、決して理想通りであったわけではないでしょう。教会や施設でもあるように、運営を巡って、人間関係、周囲からの批判、様々な困難や葛藤、また時には失敗や過ちもあったにちがいありません。今では「清里の父」と呼ばれるポールさんも決して偉人だったとは思えません。時代の変化とともに、清里も農村から観光地へと変わり、名称もキープ協会となり、事業内容も変わったものもあります。それでも変わらず、イエスの教えに従ってなされている働きです。

戦後直後の日本とは違って、社会そのものが複雑化、多様化し、またそこにある課題も多様です。戦後直後の日本とは比べようもありません。それぞれの遭わされた地域によって、課題も異なることもあるでしょう。どんな人たちとの出会いがあるのかによって、取り組む課題が見えてくることもあるかもしれません。いずれにしても、イエスがなされたように、教会はその人たちの必要に応えて共に歩む共同体として、その人たちの声に耳を傾けていくのです。単純だと思われるかもしれません、「イエスはどうされるだろうか」、日々の生活のなかで、いつもこのことが私たちの言動の基準なのではないでしょうか。

今日の聖餐式の聖書日課は「伝道祈禱」のものを用いています。「弟子になる」という言葉がこの協議会のなかでも大切な言葉の一つになりましたが、マタイによる福音書の最後の部分です（マタイによる福音書28:16-20）。復活のイエスは、マグダラのマリアともう一人のマリアに「きょうだいたちにガリラヤへ行くように告げなさい。そこで私に会えるだろう」と言われますが、弟子たちはガリラヤへ行き指示されていた山に登り、そこで復活のイエスに会い、ひれ伏します。マタイは「しかし、疑う者もいた」と記しています。11人全員が復活のイエスを信じることができなかつたのでしょうか？

ところが復活の主は、そのことにはまったく無頓着に、その疑う者も含めて弟子たちに「私は天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい」と命令されます。ヨハネによる福音書のように「あなたがたに平和があるように」と言って手とわき腹を見せることもされません。挨拶もなしに、「あなたがたは行ってすべての人を弟子にしなさい」と命令されるのです。あたかも「疑う者が信じる者となり、十分に準備が整うまで待っていられない、今すぐに

行きなさい」と言っているように聞こえています。弟子たちを遣わされます。天と地の一切の権能を持っておられる復活のイエスご自身が世の終わりまで共にいてくださるからです。

マタイによる福音書はここで終わっています。弟子たちはどんな想いで山を降り、人々に福音を語るかは記されていません。この続きは、これを読んだ私たち一人ひとりに託されているのでしょうか。

この聖餐式をもって宣教協議会は終わりますが、本当に大切なのはこれからです。弟子たちが山を降りて行ったように、私たちもここからそれぞれ遣わされている場へと向かいます。それは戦争・紛争、自然災害、貧困、難民、偏見・差別など多くの課題を抱える痛みの多い社会です。

私たちを愛し、世の終わりまで共にいてくださる主に信頼し、神の愛、福音の喜びを告げ知らせる者として共に出かけてまいりましょう。

父と子と聖霊の御名によって アーメン



協議会最終日 11/13 閉会聖餐式

様々な礼拝・祈り

協議会中は多様な礼拝が獻げられました。2日目の「朝の祈り」では改正祈祷書に収録される予定の「詩編」を試用し、「分かち合いの礼拝」は青年世代の参加者を中心に準備と礼拝奉仕がなされました。セーフチャーチ・ガイドラインワーキンググループによる3日目の「夕の祈り」は、暗闇の中で「創世記」の朗読とともにろうそくに火を灯し、「反創世記」の朗読とともに消していく黙想的な礼拝でした。奏楽にも工夫がなされ、リコーダーやギターも用いられました。



①協議会2日目 11/11 昼の祈り

②③④協議会2日目 11/11 分かち合いの礼拝



⑤⑥⑦⑧協議会3日目 11/12「セーフチャーチ」をテーマにした夕の祈り

礼拝奉仕者一覧

〈WEB版のため不掲載〉

2023年日本聖公会宣教協議会

礼拝式文



11月10日（金）開会礼拝	1
11月11日（土）朝の礼拝（祈祷書併用）	4
昼の祈り（祈祷書併用）	8
分かち合いの礼拝	9
11月12日（日）聖霊降臨後第24主日（特定27）聖餐式（祈祷書併用）	15
夕の祈り（セーフチャーチ）	18
11月13日（月）閉会聖餐式（祈祷書併用）	22

* 『日本聖公会祈祷書』以外の式文と、聖書日課・詩編・聖歌番号を収録しています。祈祷書を用いる場合は、その旨記載されています。
* 聖歌はスクリーンに映写されます。
* 11月12日（日）、13日（月）の聖餐式および11月11日（土）「分かち合いの礼拝」の信施は、マイノリティ宣教センター・聖ヨハネ保育園・カルト問題キリスト教連絡会・日本聖公会生野センター・アングリカンアライアンス、以上の5か所にささげられます。

2023年11月10日（金）～13日（月）
山梨県・清里 清泉寮

11月10日（金）開会礼拝

使用聖歌 489 心を尽くして

418 誰もひとりでは

(集まりのはじめに)

司式者 神さま あなたのまねきによって 呼びあつめられ
会衆 わたしたちは み前に集まりました司式者 あなたは イエスのみ姿でわたしたちに 現れてくださった方
この世の苦しみを伴う道を わたしたちと共に歩まれる方

会衆 あなたに 礼拝をささげるために集まりました

司式者 希望と怖れ 信仰と疑いをたずさえて
会衆 わたしたちは ここに集まりました司式者 ありのままの姿で わたしたちを招かれる あなたの前に
会衆 今 集まっています

司式者 あなたは わたしたちを決してお見捨てにならないと約束してくださいました

会衆 その約束を信じて わたしたちは祈ります

聖歌 489 心を尽くして

聖書 マタイによる福音書 第14章13-20節

13イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり寂しい所に退かれた。しかし、群衆はそれを聞いて、方々の町から歩いて後を追った。14イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人を癒やされた。15夕方になったので、弟子たちが御もとに来て言った。「ここは寂しい所で、もう時間もたちました。群衆を解散し、村へ行ってめいめいで食べ物を買うようにさせてください。」16イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたの手で食べ物をあげなさい。」17弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」18イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、19群衆には草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで祝福し、パンを裂いて弟子たちにお渡しになり、弟子たちはそれを群衆に配った。20人々は皆、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを集めると、十二の籠いっぱいになった。

11月10日（金）開会礼拝

賛歌 小羊への賛歌

1 主、わたしたちの神よ || あなたこそ、栄光と讃れと力とを受けるにふさわしい方
2 あなたは万物を造られ || み旨によつて万物は存在し、創造された
3 ほふられた小羊よ || あなたこそ、栄光と讃れと力とを受けるにふさわしい方
4 その血によって神のために || すべての民を贖われた
5 神に仕えるみ國の民、また祭司とされて || み民は地上を支配する
み座にいます方と小羊とに || 賛美、讃れ、栄光、力が、世々に限りなくありますように
アーメン

お話 「宣教協議会への招き」 実行委員長 主教 磯 晴久

主の祈り

天におられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み國が来ますように。
みこころが天に行われるとおり地も行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆります。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
國と力と栄光は、永遠にあなたのものです アーメン

宣教協議会 こどもの祈り

すべてのものの つくりぬしなるかみさま
あなたのめには、わたしたちはみな、おなじようにとうといものですが
どうかわたしたちが、あなたのあわせてくださったひと すべてを
イエスさまがなさったように、たいせつにする ことができますように
また、あなたが おつくりになった ものすべてを
かけがえのないものとして、だいじにしてゆくことができますように
そして、わたしたちを
ほんとうの平和がやってくるために、はたらくものとしてください
イエスさまのみなによって おいのりいたします アーメン

み守りのため

ひかり みなもと しゆ よ やみ て ゆた あわ まも
光の 源 である主よ、この世の闇を照らし、豊かな憐れみをもってわたしたちを守り、
こん や き けん ふせ ひと こ すく ぬし いづく
今夜の危険をことごとく防いでください。ひとりのみ子、救い主イエス・キリストの慈
しみによってお願ひいたします アーメン

司式者 神さま あなたこそ わたしたち一人ひとり
またわたしたちの手にするものすべての創り主です

どうかわたしたちを

会衆 自分ひとりしか愛せない狭さから 解放してください

司式者 そして あなたが育んでくださるこの集いの中で また世界の中で

会衆 わたしたちのありのままを 互いに分かちあえますように

わたしたちの知っていることを 互いに分かちあえますように

わたしたちの持っているものを 互いに分かちあえますように

司式者 この交わりに私たちを導いてくださった キリストのみ名によって祈ります

一同 アーメン

黙祷

しゆ
主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、わたしたちとともにあります
ように。アーメン

聖 歌 418 誰もひとりだけでは

【出典：女性が教会を考える会・東京発行『私たちの祈り集「こころを神に」』】

11月11日（土）朝の礼拝

11月11日（土）朝の礼拝（祈祷書P. 18）

使用聖歌 2-2 風に目を覚まして

413 思いやりの心そなえ

* 聖書日課・詩編は当日の「夕の礼拝」のものです。

* 詩編のみ、聖書協会共同訳の以下の訳を用います。

詩編 第95編 1-7節

1 さあ、主に向かって、喜び歌おう || 救いの岩に喜びの声を上げよう
2 感謝のうちにその前に進み || 賛美と共に喜びの声を上げよう
3 まことに主は大いなる神 || すべての神々にまさる偉大な王
4 地の深みもその手の内にあり || 山々の頂も主のもの
5 海も主のもの。主が造られた || その手は乾いた地を形づくられた
6 さあ、ひれ伏し、身をかがめよう || 私たちを造られた方、主の前にひざまずこう
7 まことに、主こそ我らの神 || 私たちはその牧場の民、御手の羊
榮光は || 父と子と聖霊に
はじめのように、今も || 世々に限りなく アーメン

詩編 第23編

1 主は私の羊飼い || 私は乏しいことがない
2 主は私を緑の野に伏させ || 憇いの汀に伴われる
3 主は私の魂を生き返らせ || 御名にふさわしく、正しい道へと導かれる
4 たとえ死の陰の谷を歩むとも、私は災いを恐れない || あなたは私と共におられ、あなたの鞭と杖が私を慰める
5 私を苦しめる者の前で、あなたは私に食卓を整えられる || 私の頭に油を注ぎ、私の杯を満たされる
6 命あるかぎり、恵みと慈しみが私を追う || 私は主の家に住もう、日の続く
かぎり
榮光は || 父と子と聖霊に
はじめのように、今も || 世々に限りなく アーメン

詩編 第27編

1 主はわが光、わが救い。私は誰を恐れよう || 主はわが命の磐。私は誰におののくことがあろう。
2 悪をなす者が私の肉を食らおうと近づくとき || 私を苦しめる者、私の敵のほうが、かえってつまずき、倒れる。

3 たとえ、軍勢が私に対して陣を敷いても、私の心は恐れない || たとえ、戦
いが私に向かって起こっても、私の信頼は揺るがない。

4 私が主に願った一つのこと、私はそれを求め続けよう || 命のあるかぎり主の
家に住み、主の麗しさにまみえ、主の宮で尋ね求めることを。

5 災いの日に、主は私を仮庵に隠し || 幕屋の隠れ場にかくまい、大岩に高く引
き上げてくださる。

6 今や、私の頭は群がる敵の上に高く上げられる || 主の幕屋で歓声をいけにえ
として獻げ、主に向かって歌い、ほめ歌を歌おう。

7 主よ、呼びかける声を聞いてください || 私を憐れみ、答えてください。

8 あなたに私の心は言いました「私の顔を尋ね求めてください」と || 主よ、私
は御顔を尋ね求めます。

9 御顔を私から隠さず、怒りによって僕を退けないでください。あなたは私の助
けとなっていました || 私を置き去りにせず、見捨てないでください、
わが救いの神よ。

10 父と母が私を見捨てようとも || 主は私を迎えてくださいます。

11 主よ、あなたの道を示し || 敵対する者のゆえに、私を平らな道に導いてくだ
さい。

12 私を苦しめる者の思いのままにさせないでください || 偽りの証人と暴言を吐
く者が私に向かって立ち上りました。

13 私は信じます || 生ける者の地で主の恵みにまみえることを。

14 主を待ち望め || 勇ましくあれ、心を強くせよ。主を待ち望め。
栄光は || 父と子と聖霊に
はじめのように、今も || 世々に限りなく アーメン

第1日課 シラ書 第51章1-12節

1 王である主よ、私はあなたに感謝します。
私の救い主である神、あなたを私はほめたたえ
あなたの御名に感謝を献げます。

2 あなたは私の守り、私の助けとなり
私の体を滅びから
中傷する舌の罠から
偽りを働く者どもの唇から救ってくださいました。

3 あなたは敵対する者の面前で私の助けとなり
あなたの憐れみと御名の偉大さによって
私を餌食にしようと仕掛けられた罠から
私の命を狙う者の手から

11月11日（土）朝の礼拝

わたくし せ お 私が背負っていた数々の苦悩から私を救い出してくださいました。
まわ と かこ いき つ 4周りを取り囲み、息を詰まらせるような炎から
わたくし とう 私が投じたわけではない火のただ中から
ふか よ み そこ 5深い陰府の底から
よご した いつわ こと ば 汚れた舌と偽りの言葉から
ふ ぎ し はな や すく だ 6不義の舌が放つ矢から救い出してくださいました。
わたくし たましい し ちか 7私の魂は死に近づき
わたくし いのち よ み 私の命は陰府のすぐそばまで降りました。
わたくし し ほう と かこ たす 8私は四方から取り囲まれ助けてくれる者は誰もいませんでした。
たす もと あた 9助けを求めて辺りをうかがったのに助けてくれる者はいなかったのです。
とき しゆ わたくし あわ 8その時、主よ、私はあなたの憐れみと
むかし しんせつ み ねざ おも だ あなたの昔からの親切な御業を思い出しました。
あなたは、あなたを待ち望む者を助け出し
あくにん て すぐ だ 10私は、悪人どもの手から救い出してくださいます。
わたくし ちじょう たんがん こえ あ 9私は地上から嘆願の声を上げ
し すぐ こ ねが 11死からの救いを乞い願いました。
わたくし わたくし しゆ ちち 10私は、私の主の父である主に呼びかけました。
くのう ひび おも あ もの 11苦悩の日々に、思い上がった者どもがはびこる時に
こりつ むえん わたくし み す 12孤立無援な私を見捨てないでください。
わたくし み な た 11私は、御名を絶えずほめたたえ
かんしや さん び うた うた 12感謝をもって贊美の歌を歌います、と。
わたくし ねが き い 13すると、私の願いは聞き入れられました。
わたくし ほる すく だ 12あなたは私を滅びから救い出し
くなん とき たす だ 13苦難の時に、そこから助け出してくださいました。
わたくし かんしや 14それゆえ、私はあなたに感謝しながらあなたをたたえ
しゆ み な 15主の御名をほめたたえます。

第2日課 マタイによる福音書 第14章22-36節

22それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸へ先に行かせ、そ
の間に群衆を解散させられた。23群衆を解散させてから、祈るために独り山に登ら
れた。夕方になっても、ただ一人そこにおられた。24ところが、舟はすでに陸から何
スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。25夜が明ける頃、イ
エスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。26弟子たちは、イエスが湖
の上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声を上
げた。27イエスはすぐに彼らに声をかけ、「安心しなさい。私だ。恐れることはない」
と言われた。28すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、私に命令して、水

の上を歩いて御もとに行かせてください。」²⁹イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。³⁰しかし、風を見て怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。³¹イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言わされた。³²そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。³³舟の中にいた人々は、「まことに、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。³⁴こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトの地に着いた。³⁵土地の人々は、イエスだと知って、付近にくまなく触れ回った。それで、人々は病人を皆イエスのところに連れて来て、³⁶せめて衣の裾にでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆、癒やされた。

特 祷 聖霊降臨後第23主日（特定26）

全能の神よ、あなたは独りのみ子を与えてわたしたちの罪のいけにえとし、また清い生涯の模範とされました。どうか深く感謝してその計り知れない恵みを受け、常に力を尽くしてみ跡を踏むことができますように、主イエス・キリストによってお願いいいたします。アーメン

代 祷

*ナイジエリア聖公会アサバ教区のため。
 *東北教区秋田聖救主教会、能代キリスト教会のため。
 *現在改訂作業のすすめられている日本聖公会祈祷書が、「多彩ないのちを大切にする21世紀日本聖公会祈祷書」として完成し、豊かに用いられていきますように。
 *本日2日目を迎える宣教協議会が、神様の導きのうちに、共に祈り、互いに聴き、思いを分かち合う会となりますように。福音の宣教のため、悩み苦しむ人の「となりびと」とされ、ともに生きるための様々な知恵と力を、神様からいただくことができますように。

2023年宣教協議会のための祈り

信頼と和解、平和と正義の源である主よ、人間の愚かさと誤りにより、今なお戦争、弾圧、差別、分裂の絶えないわたしたちの世界を顧みてください。日本聖公会宣教協議会を祝福し、わたしたちがこれまでの歩みを振り返り、その実りを感謝することができますようにお導きください。そして、新たな歩みの出発点とすることができますように、わたしたちの足元を照らし、知恵と力をお与えください。
 あなたは、み子イエス・キリストを通して、すべてのいのち、とくに小さくされている人々と共に生きることの大切さを示してくださいました。どうかぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの「となりびと」となる道を歩むことができますように、わたしたちをお導きください。主イエス・キリストによってお願いいいたします。アーメン

11月11日（土）昼の祈り

11月11日（土）昼の祈り（祈祷書P. 79）

使用聖歌 527 傷ついた人の

562 キリストの平和

代 祷

- * 紛争の終息のため。殊に、パレスチナ、ウクライナ、ミャンマーを覚えて
- * 日本の入管体制における人権尊重のため
- * 社会・家庭環境等によって、安心と安全を得られずにいる子ども、青少年のため
- * 様々な困難により希望を見出せずにいる人々、病気の人、貧しい人、孤独と悩みの内にある人々のため

11月11日（土）分かち合いの礼拝

使用聖歌 福音書 イエスはわたしとともに（楽譜は本文中にあります）

奉 献 418 誰もひとりだけでは

退 堂 498 主われを愛す

ともに集う

司式者 初めに、世界が闇であったとき、神は言われた。「光あれ」

会衆 そして、光があった（創 1:1-3）

司式者 初めに、静けさの中で、言は神とともにあった

会衆 言は、神であった（ヨハネ 1:1）

司式者 神は、その独り子を世にお遣わしになった

会衆 その方によって、わたしたちが生きるようになるためである（I ヨハネ4:9）

悔い改めの祈り

司式者 神のみ前にひざまずいて、自らを省み、ともに罪の赦しを祈りましょう
一同 憐れみ深い神よ、わたしたちは、してはならないことをし、しなければならないことをせず、思いと、言葉と、行いによって、あなたと隣り人に対し多くの罪を犯しています。どうか罪深いわたしたちをお赦しください。新しい命に歩み、み心に従い、み栄えを現すことができますように、救い主イエス・キリストによってお願ひいたします アーメン

特 祼

司式者 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

司式者 祈りましょう

2023年宣教協議会のための祈り

信頼と和解、平和と正義の源である主よ、人間の愚かさと誤りにより、今なお戦争、弾圧、差別、分裂の絶えないわたしたちの世界を顧みてください。日本聖公会宣教協議会を祝福し、わたしたちがこれまでの歩みを振り返り、その実りを感謝することができますようにお導きください。そして、新たな歩みの出発点とすることができますように、わたしたちの足元を照らし、知恵と力をお与えください。
あなたは、み子イエス・キリストを通して、すべてのいのち、とくに小さくされている人々と共に生きることの大切さを示してくださいました。どうかぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの「となりびと」となる道を歩むことができます

11月11日（土）分かち合いの礼拝

よう に、わたしたちを お導 きください。主イエス・キリストによつてお願いいたし
ます。アーメン

ともに聞く

司式者 聖書のみ言葉を聞きましよう

第1朗読 イザヤ書 第41章17-20節

17 苦しむ人や貧しい人が水を求めて、水はなく
かれ した かわ ひ あ
彼らの舌は渴きで干上がるが
しゆ わたし かれ こた
主である私は彼らに応え
かみ わたし かれ み す
イスラエルの神である私は彼らを見捨てない。
わたし ふ もう おか かわ
18 私は不毛の丘には川を
たに なか いすみ ひら
谷の中には泉を開く。
わたし あ の いけ か
私は荒れ野を池に変え
かわ ち みず みなもと
乾いた地を水の源とする。
わたし あ の なか すぎ
19 私は荒れ野の中に杉やアカシヤ
ミルトスや松の木を植え
あ ち いと すぎ
荒れ地に糸杉、にれ、つげの木を共に植える。
しゆ て
20 主の手がこれをなし
イスラエルの聖なる方がこれを創造されたことを
かれ み し
彼らが見て、知り
ここ とど とも さと
心に留めて、共に悟るためである。

第2朗読 使徒言行録 第17章22-31節

22 パウロは、アレオパゴスの真ん中に立って言った。「アテネの皆さん、あらゆる点
においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます。²³道を歩き
ながら、あなたがたが拝むいろいろなものを見ていると、『知られざる神に』と刻ま
れている祭壇さえ見つけたからです。それで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、
それをわたしはお知らせしましょう。²⁴世界とその中の万物とを造られた神が、その方
です。この神は天地の主ですから、手で作った神殿などにはお住みになりません。²⁵
また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もあ
りません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、こ
の神だからです。²⁶神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。²⁷これは、人に神を求めるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようといふことなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れて

はおられません。²⁸皆さんのうちのある詩人たちも、『我らは神の中に生き、動き、存在する』『我らもその子孫である』と、言っているとおりです。²⁹わたしたちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考へで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません。³⁰さて、神はこのような無知な時代を、大目に見てくださいましたが、今はどこにいる人でも皆悔い改めるようにと、命じておられます。³¹それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。』

聖歌 「イエスはわたしとともに」 <3回>

詞・曲 安足 麻子

イエスはわたしとともに わたしのよわさのうちには
イエスはわたしとともに わたしのやみのうちには
イエスはわたしと共に わたしの弱さの内に イエスはわたしと共に わたしの闇の内に

⑥うたえ暗闇にとどまることのないように

朗読者 主は皆さんとともに

会衆 また、あなたとともに

朗読者 聖ヨハネによる福音書第15章1節以下に記された主イエス・キリストの福音。主に榮光

会衆 主に榮光がありますように

1 「私はまことのぶどうの木、私の父は農夫である。2 私につながっている枝で実を結ばない枝はみな、父が取り除き、実を結ぶものはみな、もっと豊かに実を結ぶよう手入れをなさる。私が語った言葉によって、あなたがたはすでに清くなっている。4 私につながっていなさい。私もあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分で実を結ぶことができないように、あなたがたも、私につながっていなければ、実を結ぶことができない。5 私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。6 私につながっていない人がいれば、枝のように投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。7 あなたがたが私につながっており、私の言葉があなたがたの内にどとまっているならば、のぞむのを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。8 あなたがたが豊かに実を結び、私の弟子となるなら、それによつ

11月11日（土）分かち合いの礼拝

て、**わたし**の父**ちち**は**えいこう**を**う**受けになる。
朗読者 **しゆ** **かんしや**
会衆 **しゆ** **かんしや**
会衆 **しゆ** **かんしや** **主に感謝します**

一沈 黙一

使徒信経

わたしは、**てんち** **つく** **しゆ** **ぜんのう** **ちち** **かみ** **しん** 天地の造り主、全能の父である神を信じます。
また、その独り子、**ひとご** **しゆ** **しん** **せいれい** **やど** わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によって宿り、おとめマリヤから生まれ、ポンテオ・ピラトのもとで苦しみを受け、**くる** **う** **じゆうじか** **し** **ほうむ** 十字架につけられ、死んで葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちからよみがえり、天に昇られました。そして全能の父である神の右に座しておられます。そこから主は生きている人と死んだ人とを審るために来られます。
また、聖霊を信じます。聖なる公会、聖徒の交わり、罪の赦し、体のよみがえり、永遠の命を信じます アーメン

平和の挨拶

司式者 **しゆ** **へいわ** **みな** 主の平和が皆さんとともに
会衆 また、あなたとともに
司式者 **へいわ** **あいさつ** 平和の挨拶を交わしましょう

献げもの

司式者 **しゆ** **すく** **わざ** **かんしや** **さんび** **ささ** 主の救いのみ業に感謝し、ともに賛美を獻げましょう

聖歌 418番 誰もひとりだけでは 【献金】

司式者 **しゆ** **たま** **もの** すべてのものは主の賜物
一同 **しゆ** **う** **しゆ** **ささ** わたしたちは主から受けて主に獻げたのです アーメン

ともに祈る

代 祷

司式者 救い主イエス・キリストのみ言葉とみ業に頼り、全公会のため、また世界の
ために祈りましょう

代祷者 神さま、日本聖公会に連なるすべての人、教会に連なる施設の職員、利用者、
その家族、また宣教協議会に集うことのできなかった人びとが、喜びをも
って神の福音を伝えるためにともに働くことができますように、またその
一歩が踏み出せないでいる人びとに勇気が与えられますように

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

代祷者 神さま、戦禍の中にある国（ことにウクライナとロシアの人びと、パレスチ
ナとイスラエルの人びと）、気候危機の影響を受けている人びと、日本で暮
らす外国にルーツを持つ人びととわたしたち一人ひとりが隣人であること
を心に留めて日々を過ごすことができますように

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

代祷者 神さま、わたしたちが多様な性の考え方や価値観を受け入れ、神さまがわ
たしたちを愛してくださったように、互いに愛し合うことができますように

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

代祷者 神さま、愛する人を失い悲しむ人びと、離散させられた人びと、肉体的ま
た精神的な病のうちにいる人びと、路上で生活をされている人びとを憐れ
み、助けてください。また苦しみや悲しみの中にある人びとを癒し、励まし、
あなたが隣りにいることを思い起こさせてください。そして、わたしたちが
この人びととともに生きることができますように

会衆 主よ、わたしたちの祈りを受け入れてください

代祷者 神さま、世を去ったすべての人、ことに、これまで教会を支えてくださつ
た人びと、信仰をつないでくださった人びと、また幼くして逝去された人
びと、若くして逝去された人びと、戦争で逝去された人びとの魂の上に、主
の平安がありますように

一同 み子イエス・キリストによってお願ひいたします アーメン

主の祈り

司式者 主よ、憐れみをお与えください

会衆 キリストよ、憐れみをお与えください

司式者 主よ、憐れみをお与えください

11月11日（土）分かち合いの礼拝

てん おられるわたしたちの父よ、
み名が聖とされますように。
み國が来ますように。
みこころが天に行われるおり地も行われますように。
わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください。
わたしたちの罪をおゆるしください。わたしたちも人をゆるします。
わたしたちを誘惑におちいらせず、
悪からお救いください。
國と力と榮光は、永遠にあなたのものです アーメン

感謝

司式者 ともに祈りましょう
主なる神よ、わたしたちに限りない恵みを与えてくださることを感謝します。どうか、
あなたのみ言葉の光でわたしたちの心を照らし導いてください。わたしたちがあな
たを賛美し、み言葉に従い、ともに主の愛のうちに生活することができますように。主
イエス・キリストのみ名によってお願ひいたします アーメン

主とともに行く

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、わたしたちとともにあります
ように。アーメン (IIコリント 13:13)

派遣の唱和

司式者 ハレルヤ、主とともに行きましょう
会衆 ハレルヤ、主のみ名によって アーメン

聖歌 498番 主われを愛す

11月12日（日）聖靈降臨後第24主日（特定27）聖餐式（祭色：緑）

使用聖歌 入 堂 57 間は消えて

福音書 441 み言は人となり

奉 献 246 憂いを脱ぎ去り

派 遣 473 見つめます心から

* 祈祷書p162「聖餐式」を用います。

* チャントの歌唱はありません。

* 陪餐は御体と御血の2種を、セルフインテインクション（ご自身で浸す）でいてください。

特 祷

全能の神よ、何ものもあなたの支配に逆らうことはできません。どうかこの世の変動の中においても、常にみ国の到来とみ心の成就を望み、確かな信仰をもってひたすら主に仕えさせてください。主イエス・キリストによってお願いいいたします。

アーメン

旧約聖書 アモス書 第5章18-24節

18 災 いあれ、主の日を待ち望む者に。

主の日があなたがたにとって一体何になるのか。

それは闇であって、光ではない。

19 人が獅子の前から逃れても熊に遭い

家にたどりついて、手で壁に寄りかかると 蛇にかみつかれるようなものだ。

20 確かに、主の日は闇であって、光ではなく

暗闇であって、そこに輝きはない。

21 私はあなたがたの祭りを憎み、退ける。

あなたがたの聖なる集いを喜ばない。

22 たとえ、焼き尽くすいにえを献げても

穀物の供え物を献げても

私は受け入れず

肥えた家畜の会食のいにえも顧みない。

23 あなたがたの騒がしい歌を私から遠ざけよ。

豊かな音も私は聞かない。

24 公正を水のように

正義を大河のように

尽きることなく流れさせよ。

詩 編 第70編

1 神よ、救いに来てください　||　主よ、急いでわたしを助けてください
 2 わたしの命をねらう者は恥をさらし　||　災いを喜ぶ者は見捨てられて恥を受ける
 3 「それ見たことか」とあざける者は　||　恥をさらして退く
 4 あなたを求めるすべての人はあなたの中にあって喜び楽しみ　||　救いを尊ぶ
 5 わたしは弱く貧しい者　||　神よ、わたしのもとに急いでください
 6 あなたはわたしの助け、また救い　||　主よ、ためらわぬでください

使徒書 テサロニケの信徒への手紙 一 第4章13-18節

13 きょううだいたち、眠りに就いた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。14 イエスが死んで復活されたと、私たちは信じています。それならば、神はまた同じように、イエスにあって眠りに就いた人たちを、イエスと共に導き出してくださいます。

15 主の言葉によって言います。主が来られる時まで生き残る私たちが、眠りに就いた人たちより先になることは、決してありません。16 すなわち、合図の号令と、大天使の声と、神のラッパが鳴り響くと、主ご自身が天から降って来られます。すると、キリストにあって死んだ人たちがまず復活し、17 続いて生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に出会います。こうして、私たちはいつまでも主と共にいることになります。18 ですから、これらの言葉をもって互いに慰め合いなさい。

福音書 マタイによる福音書 第25章1-13節

1 「そこで、天の国は、十人のおとめがそれぞれ灯を持って、花婿を迎えて行くのに似ている。2 そのうちの五人は愚かで、五人は賢かつた。3 愚かなおとめたちは、灯は持っていたが、油の用意をしていなかった。4 賢いおとめたちは、それぞれの灯と一緒に、壺に油を入れて持っていた。5 ところが、花婿の来るのが遅れたので、皆うとうとして眠ってしまった。6 真夜中に『そら、花婿だ。迎えに出よ』と叫ぶ声がした。7 そこで、おとめたちは皆起きて、それぞれの灯を整えた。8 愚かなおとめたちは、賢いおとめたちに言った。『油を分けてください。私たちの灯は消えそうです。』9 賢いおとめたちは答えた。『分けてあげるにはとても足りません。それより、店に行って、自分の分を買って来なさい。』10 愚かなおとめたちが買っている間に、花婿が着いた。用意のできている五人は、花婿と一緒に祝宴の間に入り、戸が閉められた。11 その後で、ほかのおとめたちも来て、『ご主人様、ご主人様、開けてください』と言った。12 しかし主人は、『よく言っておく。私はお前たちを知らない』と答えた。13 だから、目を覚ましていなさい。あなたがたはその日、その時

し
を知らないのだから。」

代 褒

- * モザンビーク・アンゴラ聖公会、アサンティマンポン教区（西アフリカ聖公会）、
セイント・アザフ教区（ウェールズ聖公会）、アサバスカ教区（カナダ聖公会）、
アトランタ教区（米国聖公会）、アットウーチ教区（南スーダン聖公会）、オー
クランド教区（オテアロア・ニュージーランド・ポリネシア聖公会）
- * NCC「障害者」週間
- * 戦争・紛争・弾圧が続いている地域の人たち（イスラエル、パレスチナ、ロシア・
ウクライナ、ミャンマー）、地震や台風、洪水や火事など自然災害によって避難生活
を余儀なくされている人たち
- * 今週、誕生日、洗礼・堅信記念日を迎える人たち
- * あらゆることに信頼を見出せず苦しみや痛みを分かち合うことのできない人たち、
自分の命に価値を見出すことのできない人たち、解決することが難しい課題と向
き合っている人たち
- * 今週、逝去記念日を迎える人たち
- * 100年前関東大震災で虐殺された数千人の朝鮮人とその他の人々をの魂を慰め、私たちがこの
ことを忘れないように祈りましょう。

11月12日（日）夕の祈り

11月12日（日）夕の祈り（セーフチャーチ）

使用聖歌 572 間夜に火を灯し

569 恐れるな 煩うな

天地創造

● 第1部 創世記

第1部では、地球が生まれていった過程を、聖書の創世記をもとに想像していきましょう。

聖 歌 572 間夜に火を灯し 恐れぬぐう

1日目 光あれ

はじめに神は天と地を創造された。地は混沌としていて、闇が深淵の面にあり、神の靈が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」すると光があった。神は光を見て良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

* 1つ目のろうそくをともす

2日目 空からのメッセージ

神は言われた。「水の中に大空があり、水と水を分けるようになれ。」神は大空を造り、大空の下の水と、大空の上の水とを分けられた。そのようになつた。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。

* 2つ目のろうそくをともす

3日目 海と陸と植物

神は言われた。「天の下の水は一か所に集まり、乾いた所が現れよ。」そのようになつた。神は乾いた所を地と呼び、水の集まつた所を海と呼ばれた。神は見て良しとされた。神は言われた。「地は草木を生えさせよ。種をつける草と、種のある実を結ぶ果樹を、それぞれの種類に従つて地上に生えさせよ。」そのようになつた。地は草木を生じさせ、種をつける草をそれぞれの種類に従つて、種のある実をつける木をそれぞれの種類に従つて生じさせた。神は見て良しとされた。夕べがあり、朝があつた。第三の日である。

* 3つ目のろうそくをともす

4日目 太陽と月と星の創造

神は言われた。「天の大空に、昼と夜を分ける光るものがあり、季節や日や年のしるしとなれ。天の大空に光るものがあつて、地上を照らせ。」そのようになつた。神は二つの大きな光るものを作られた。昼を治める大きな光るものと、夜を治める小さな光るものである。また星を造られた。神は地上を照らすため、それらを天の大空に置かれた。昼と夜を分けるためである。神は見て良しとされた。第四の日である。

* 4つ目のろうそくをともす

5日目 動物の創造 その1

神は言われた。「水は群がる生き物で満ち溢れ、鳥は地の上、天の大空を飛べ。」神は大きな海の怪獣を創造された。水に群がりうごめくあらゆる生き物をそれぞれの種類に従つて、また、翼のあるあらゆる鳥をそれぞれの種類に従つて創造された。神は見て良しとされた。神はそれらを祝福して言われた。「海の水に満ちよ。鳥は地に増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日である。

* 5つ目のろうそくをともす

6日目 動物の創造 その2

神は言われた。「地は生き物をそれぞれの種類に従つて、家畜、這うもの、地の獣をそれぞれの種類に従つて生み出せ。」そのようになつた。神は地の獣をそれぞれの種類に従つて、家畜をそれぞれの種類に従つて、地を這うあらゆるものをそれぞれの種類に従つて造られた。神は見て良しとされた。神は言われた。「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。」神は人を自分のかたちに創造された。「地に満ちてこれを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ。」

* 6つ目のろうそくをともし、沈黙して祈る。

●第2部 反創世記

地は美しく、豊かであった。光は山や海に照り輝き、神の靈が宇宙を覆っていた。人は言った。

天と地のすべての権力を、神の手から「わたし」が取り上げてやろう。「わたし」はその権力はよいものと思えた。「わたし」は権力を握る者、支配する者をほめたたえ、和解を求める人を呪つた。そして「わたし」は権力を手中におさめた。これが世の終わりから数えて6日前のことであった。

* ろうそくを1つ消す

11月12日（日）夕の祈り

ひと
人は言った。

たみ
民の中に分裂を起こしてやろう。「わたし」に味方する民と「わたし」に反対する民
との間に、大きな分裂をもたらそう。そして良い民と悪い民との間に深い溝ができた。これが世の終わりから数えて5日前のことであった。

*ろうそくを1つ消す

ひと
人は言った。

われわれが今までばらばらに持っていたすべての財産を一つに集め、われわれの安全を確かなものとしよう。人の心をコントロールするマスコミと、人の魂を統率するメディアをつくり出そう。そして人々は自由を失い、不安になった。こうして世の中は二つに分裂し、闘いが起こった。「わたし」はこれを見て満足した。これが世の終わりから数えて4日前のことであった。

*ろうそくを1つ消す

ひと
人は言った。

「わたし」が正しいのだ！と人々に思い込ませるために、思想の検閲をしてやろう。そして「わたし」は二つの検閲の機関をつくり出した。一つは「わたし」以外の人が持っている「真実」を隠すこと。もう一つは「わたし」が正しいと思い込ませるための偽りの「事実」をつくり上げること。そしてそのようになった。「わたし」はそれを見て良しとし、当然のことだと思った。これが世の終わりから数えて3日前のことだった。

*ろうそくを1つ消す

ひと
人は言った。

人類を破壊させるような武器をつくりってやろう。遠くにいてもボタン一つで一瞬のうちに全人類を殺せるような強力な武器をつくろう。「わたし」は海底を走る原子力潜水艦と、空飛ぶミサイルをつくり出した。「わたし」はそれを見て良しと思い、それを誇りとした。そしてそれを祝福してこう言った。「地に増えよ。海に満ちよ、空を飛べ」。そうして戦いが起こり、憎しみと死がこの世に蔓延した。これが世の終わりから数えて2日前のことであった。

*ろうそくを1つ消す

ひと
人は言った。

「わたし」に似せて神をつくろう。「わたし」が考えるように考え、「わたし」が行動するように行動し、「わたし」の望みどおりに人々を殺す神をつくろう。そして、「わたし」が「わたし」に似せて神をつくった。そしてそれを祝福して言った。「わたし」

11月12日（日）夕の祈り

とも
の友となり、「わたし」の足の下にこの世を置け。「わたし」の望みどおりに行えば、何
も不自由なことはない。そして、そうなった。「わたし」はこれらすべてのことを見て良しと思った。これが世の終わりの前日のことであった。

すべては暗闇で覆われていた。
しかし、神の靈がかすかに水のおもてを動いていた。

聖書朗読 ヨハネによる福音書 第3章16-21節

16神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。それが、もう裁きになっている。20悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ない。21しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神にあってなされたことが、明らかにされるためである。

聖歌 569 恐れるな 煩うな 主は ともにおられる

*歌の間にろうそくを全部ともす

【出典： NCC発行『すべての暴力を克服する10年一祈りつつ行動するための手引き』】

11月13日（月）閉会聖餐式（特祷・聖餐式聖書日課A年p326「伝道祈祷」）

使用聖歌 入 堂 323 この世はみな 神の世界

福音書 569 恐れるな 煩うな

奉 献 262 なが罪 救さる

陪餐後 388 すくいの道を 開いたイエスを

派 遣 428 光にあふれる永遠の住まいを

* 祈祷書p162「聖餐式」を用います。

* チャントの歌唱はありません。

* 陪餐は御体と御血の2種を、セルフインテインクション（ご自身で浸す）でいただけます。

特 祷（祈祷書p112「宣教のため」）

全能の神よ、あなたはこの世界を愛してみ子を遣わし、すべての人があなたと完全な和解と交わりのうちに生きることができますように望みまた働いておられます、どうかわたしたちを導いてそのみ業を悟らせ、己を獻げてこれを証し、ともにみ国の成就にあずかることができるようにしてください。唯一の大祭司、み子イエス・キリストによってお願ひいたします。アーメン

旧約聖書 イザヤ書 第61章1-3節

1主なる神の靈が私に臨んだ。

主が私に油を注いだからである。

苦しむ人に良い知らせを伝えるため

主が私を遣わされた。

心の打ち砕かれた人を包み

捕らわれ人に自由を

つながれている人に解放を告げるために。

2主の恵みの年と

私たちの神の報復の日とを告げ

すべての嘆く人を慰めるために。

3シオンの嘆く人に

灰の代わりに頭飾りを

嘆きの代わりに喜びの油を

沈む心の代わりに贊美の衣を授けるために。

彼らは義の大木

主が栄光を現すために植えられた者と呼ばれる。

詩 編 第85編7-13節

7 王よ、あなたの慈しみを示し || わたしたちに救いを与えてください
 8 神の語られる言葉を聞こう || 主はその民、聖徒たち、神に信頼する人に平和を約束される
 9 救いは神を畏れる人に近く || 荣光はわたしたちの地に住む
 10 慈しみとまことはともに会い || 正義と平和は抱き合う
 11 まことに地から芽生え || 正義は天から見守る
 12 主はみ恵みを注ぎ || 地は豊かに実る
 13 正義は神のみ前を進み || 神の歩む道を備える

使徒書 エフェソの信徒への手紙 第3章1-12節

1 このようなわけで、私パウロは、あなたがた異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となっています。2あなたがたのために私に与えられた神の恵みの計画について、あなたがたは確かに聞いたはずです。3初めに手短に書いたように、啓示によって秘義が私に知らされました。4あなたがたは、それを読めば、私がキリストの秘義をどのように理解しているのかが分かります。5この秘義は、前の時代には人の子らには知らされていませんでしたが、今や靈によってその聖なる使徒たちや預言者たちに啓示されました。6すなわち、異邦人が福音により、キリスト・イエスにあって、共に相続する者、共に同じ体に属する者、共に約束にあずかる者となるということです。7神は、その力を働かせて私に恵みを賜り、この福音に仕える者としてくださいました。8この恵みは、すべての聖なる者のうちで最も小さな者である私に与えられました。キリストの計り知れない富を異邦人に告げ知らせ、9すべてのものを造られた神の内に永遠の昔から隠されていた秘義の計画がどのようなものであるかを、すべての人に明らかにするためです。10こうして、神の豊かな知恵が、今や教会を通して天上の支配や権威に知らされるようになったのですが、11これは、神が私たちの主キリスト・イエスにおいて実現してくださった永遠の計画に沿うものです。12キリストにあって、私たちは、キリストの眞実により、確信をもって、堂々と神に近づくことができます。

福音書 マタイによる福音書 第28章16-20節

16さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスの指示された山に登った。17そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18イエスは、近寄って来て言われた。「私は天と地の一切の権能を授かっている。19だから、あなたがたは行って、すべての民を弟子にしなさい。彼らに父と子と聖靈の名によって洗礼を授け、20あなたがたに命じたことをすべて守るように教えなさい。私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

代 祷

* 清里の地でわたしたちが共に集い、祈り、神様のみ言葉に聞きながら、2023年宣教協議会を行い、この時を迎えることができたことを感謝いたします。これからわたくしたち日本聖公会の歩みが、尊厳限りない「いのち」を大切にするものとなり、生きとし生けるすべてのものの「となりびと」とされていく歩みとなりますようになります。

* 世界の平和を覚えて

今戦争、紛争、争いのうちにある国や地域の人々、生活の困難や不安を抱え、家族や友人を失い、居場所を失っているすべての人々のため。ことに聖地（パレスチナとイスラエル）とウクライナ、ミャンマー、スーダンなどに一日も早い平和が実現し、人々に対し必要な支援が行われますように。

正義と平和の神よ、わたしたちは今日、ウクライナ、イスラエルとパレスチナ、ミャンマー、スーダンなど戦争、紛争のうちにある人々のために祈ります。またわたしたちは平和のために、そして武器が置かれますよう祈ります。明日を恐れるすべての人々に、あなたの慰めの靈が寄り添ってくださいますように。平和や戦争を支配する力を持つ人々が、知恵と見識と思いやりによって、み旨に適う決断へと導かれますように。そして何よりも、危険にさらされ、恐怖の中にいるあなたの大切な子どもたちを、あなたが抱き守ってくださいますように。平和の君、主イエス・キリストによってお願ひいたします。アーメン。

* 地球環境のため

ここ清里の地でわたしたちが感じることができた、神様の創造の業と素晴らしさを、一人でも多くの方々とわかつあうことができますように。地球環境の保全のため、生きとし生けるものの「となりびと」となるため、わたしたちがこれからも働いていくことができますように。

天地万物を創造された主よ。あなたは、すべてのものを造られ、それらをご覧になりました『よし』とされ、祝福されました。そして、その管理をわたしたち人間に委ねられました。しかし、東京電力福島第一原子力発電所による災害が示すように、わたしたちはあなたのご命令にそむき、自らの欲望を満たすために自然資源を乱用し、地球環境を破壊さえしています。今、そのことの故に世界中の多くの人々が苦しんでいます。どうかわたしたちがあなたのご命令に立ち帰り、あなたによって与えられた自然環境を大切に保全し、後の世代のために残すことができますように。また、原子力発電所による災害など、環境破壊の被害者の苦しみを取り除き、わたくしたちの生活を変え、自然と共に生きることができますように。そして、自然

を通じてあなたが現されるご栄光を仰ぎ見ることができるようにしてください。主イエス・キリストによってお願ひいたします。アーメン

〔「地球環境のための祈り」2022年第67（定期）総会決議第25号〕

* 日本聖公会のすべての教区、3つの宣教協働区の働きのため、また、全国の教会、礼拝堂、伝道所の活動と、そこに連なるすべての人々のため
宣教協議会のさまざまなプログラムを通じて、聴いた諸教会の「物語」に対し、わたしたちが思いを深め、わたしたちが属するそれぞれの地域・場所で教会に集っている人々と共に、祈りを合わせていくことができますように。

* 正義と平和、社会福祉に関わる、すべての「いのちの現場」の働きのため
わたしたちがプログラムの中で聴いたすべてのいのちを守る働きをおぼえ、生きづらさや困難を抱えている方々と、「となりびと」として共に生きることができますように。ことに「語り手」の方々が分かち合ってくださった現場である、保育園、幼稚園、日曜学校、その他、こどもたちの育ちに関わる活動、教会や信仰と多様な性のあり方との関係を問い合わせ、より良いつどいの場を作つてゆく活動、カルト問題に関わり、被害者を支え、人々に情報を伝える活動、悩み苦しむ方々と「共にいて、声に耳を傾ける」活動、災害被災者支援、ホームレス支援など、自然災害や貧困に対する活動、そして、これらの活動に関わるすべての当事者や支援者、関係する人びとのため

* 世界に広がる諸教会との連帯をおぼえて
近代の日本が、植民地支配やアジア太平洋戦争を通じて、甚大な被害を与えた、アジア近隣諸国の方々への悔い改めと祈りを深め、わたしたちが1996年5月に第49（定期）総会にて決議された「聖公会の戦争責任に関する宣言」の内容と精神をますます実行していくことができますように。「となりびと」である各国の諸教会とともに、和解や平和のための働きを担つていくことが出来ますように。
また、アングリカンコミュニオンの宣教の5指標（①神の国へのよき知らせを宣言すること ②新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと ③愛の奉仕によって人々の必要に応答すること ④社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること ⑤被造物の本来の姿を守り、地球の生命を維持・再生するために努力すること）をわたしたちがそれぞれの「いのちの現場」で実践していくことができますように。

* 昨日および本日の聖餐式の信施奉獻先のため
マイノリティ宣教センター、聖ヨハネ保育園および保育所、カルト問題キリスト

11月13日（月）閉会聖餐式

きょうれん らくかい せいこう かいいく の
教連絡会、聖公会生野センター、アングリカン・アライアンス (Anglican Allian
はたら
ce) の働きのため

*この宣教協議会を通して与えられた光が、わたしたちが出会い、「となりびと」
とされていく現場を通して、世界へと広がって行きますように

4. 資料

- 4-1. 関連資料
- 4-2. 「2022年日本聖公会宣教協議会」開催に向けたアンケート
- 4-3. 広報記録
- 4-4. ごあいさつ（ハンドブックより転載）
- 4-5. 大切にしていただきたいこと（ハンドブックより転載）



**2012年日本聖公会宣教協議会
「いのち、尊厳限らないもの」－宣教する共同体のありようをもとめて－
日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言**

2012年9月14日(金)から17日(月)の日程で、浜名湖畔の研修施設「カリック」に、すべての教区主教をはじめ各教区代表、管区諸委員会、そして大韓聖公会からの代表など信徒・教役者140余名が集い、「2012年日本聖公会宣教協議会」が開催されました。この宣教協議会は2008年の日本聖公会第57(定期)総会において、以下の3つの目的で開催されることが決議されていました。

- ① 聖公会信徒の減少・高齢化、聖職者の不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫などの現状を受け止め、互いの知恵と経験を分かち合い、この喜びの福音を伝える具体的な宣教ビジョンを構築すること
- ② 長期にわたる経済不況のもとで、貧困・失業・家庭崩壊など様々な困難に直面し、殊に高齢者や障がい者など社会的に弱い立場におかれている人びとにとては、ますます生きにくい社会になっています。このような社会において、教会に求められている宣教について再認識し、具体的な方策を検討する
- ③ 世界各地における政治・宗教・国家・民族などを巡る対立が続いているおり、未だ戦火が止むことはありません。1996年の第49(定期)総会決議を通して日本聖公会は、日本の戦争責任に関してアジア諸国に対して公式に謝罪しました。その決議を踏まえ、日本聖公会が永久に平和の器として用いられるため

しかし、2011年3月11日に起こった東日本大震災と福島第一原子力発電所の災害は、その地に生きるすべてのくいのち>に対して重大な犠牲と被害をもたらしました。これらの災害がもたらしている様々な課題は、わたしたちのこれまでの生き方や教会のありようを根本的に問い合わせています。もはやこの災害によってもたらされた事態・現実とは無関係に、わたしたちは宣教や教会の具体的な事柄を考えることができません。このような状況の中で今回の宣教協議会が開催され、わたしたちは教会の宣教課題や組織維持の課題を巡り、多くの時間を共有し、学び、語り合いました。

「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」というタイトルで話されたベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターからは、福島第一原子力発電所の災害による放射能汚染に関する深刻な問題提起を受け、キリスト者としてこの現実において、どのような生き方を選択するのかを問われました。東日本大震災被災者支援活動「いっしょに歩こう！プロジェクト」の長谷川清純司祭は、被災者に寄り添う主イエスとの出会いの中から教会の働きを語られました。また、同じく越山健蔵司祭は、放射能汚染地域に生きる人びとの現実と苦悩、そしてその中に置かれている教会と牧師の苦悩・躊躇を語られました。

西原廉太司祭による基調講演「わたしたちの『宣教』を想い描くために～日本聖公会の宣教の課題と可能性～」では、豊富な資料とともに多様な宣教ビジョンが提供されました。さらに笹森田鶴司祭

によるバイブル・シェアリングは、「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか～神との関わりの中で問い合わせに応える～」というテーマで行われ、被造物としての人間の使命について互いに分かち合いました。

これらの学びをもとに、わたしたちは15のグループに分かれ、これから教会のビジョンについて語り合いました。わたしたちはここで話し合われた様々な内容をまとめ、日本聖公会がすべてのくいのち>を守る決意を持った共同体として新たにされるために、以下のような提言をいたします。

しかしながら、限られた時間と人数でのディスカッションによる提案であり、それゆえこれらの提言をもとに、各教区・教会においてさらに議論を深め、実践していかれることを願っています。

日本聖公会<宣教・牧会の十年>にむけて

今回の宣教協議会で、わたしたち日本聖公会の宣教の原点は、教会内の牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きをていねいに実践していくこと、その地域にある課題、そしてこの世界にある課題に誠実に取り組むことにあると再確認しました。

悲劇に満たされたこの世界・社会において、絶望の内にある人びとのかすかな声に耳を傾け、声を出せない人びとの「声」となっていくこと。圧倒的に希望を奪われた状況の中に生きる人びとに対して、「にもかかわらず」、神の祝福“くいのち>の喜び”を語り続けること。それがたとえ、か細い声や小さな祈りであったとしても語り続けること。これらはわたしたちが、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きから学んだことでもありました。

日本聖公会が新しい共同体となるために、わたしたちは過去の歩みを謙虚に省み、神への信頼と希望をもって歩みだします。キリストの救いと喜びをこの世に現すため、またサクラメントをとおして与えられる神の恵みに多くの人びとを招くために、み言葉と礼拝への思いを深め、ともに祈ります。教会は、特に癒しと解放を求める人びとに心を通わせ、一人ひとりのくいのち>を宝とし、地域(パリッシュ)そしてすべての被造物とともに主の救いに与ることを願います。

わたしたちは、これから十年間を『日本聖公会<宣教・牧会の十年>』と名づけ、日本聖公会のすべての信徒・聖職、教会・教区が心を一つにして、それぞれの場、それぞれの形で、以下の諸項目を中心とする<宣教・牧会>に徹底して取り組むことを提言します。その動きを推進するための機関を管区と各教区に設置し、相互に協力しながら新たな共同体づくりをめざします。どのような機関がふさわしいのかについては、管区においては常議員会に、教区においてはそれぞれのしかるべき機関に付託し、新たに歩みだすことを願います。

十年後に「2022年日本聖公会宣教協議会」を開催し、十年の間どのように<宣教・牧会>に取り組むことができたのかを分かち合うことを合わせて提案します。それは同時に、わたしたちの<宣教・牧会>の果実を刈り取る収穫感謝の祭りとなることでしょう。

今回の宣教協議会で話し合われたことを、聖公会が大切にしてきた教会の5つの要素、宣教(ケリュグマ)、奉仕(ディアコニア)、証し(マルトゥリア)、礼拝(レイトゥルギア)、交わり(コイノニア)に基づいて次のように提言します。【() 内はギリシャ語です】

1 み言葉に聴き、伝えること<ケリュグマ>

- ◇ わたしたちは、すべての<いのち>の創造者であり、すべての<いのち>の尊厳を回復してくださる方であり、すべての<いのち>の導き手である、主なる神のみ言葉にたえず聴き従います。
- ◇ 信徒と聖職がともに、“ていねいな<宣教・牧会>”を担っていくため、信徒奉事者・伝道師・特任聖職などを含め、より多様な働きを作り出していく。そのために必要な養成・訓練プログラムを整備します。
- ◇ 神学校での教育を教区や管区が積極的に捉え直し、日本聖公会として、聖職および神学教育指導者の養成に取り組むことを望みます。
- ◇ 東日本大震災被災地の現場における証言をとおして、「被災者に寄り添う主イエスとの出会い」の物語と聖書の物語を重ね合わせ、各々の地域(パリッシュ)で担うべき課題を明らかにします。

2 世界、社会の必要に応え仕えること<ディアコニア>

- ◇ わたしたちは、自然と共生することで、地球の<いのち>を守ります。
- ◇ 困難な状況に置かれた人びととともに歩む中で、<いのち>より他のものを優先する社会に「否」を言い、社会的矛盾を明らかにする勇気を持ちます。
- ◇ 1962年に立教大学原子力研究所の開所にあたって「原子炉奉獻の祈り」^{*1}を唱えたことの問題性を認識し、「原発のない世界を求めて—原子力発電に対する日本聖公会の立場—」^{*2}で表明した内容を誠実に主張・追求・実践します。
- ◇ これからも東日本大震災の被災者に寄り添い、ともに歩み、祈り続けます。「いっしょに歩こう！プロジェクト」が、その「活動方針（ミッションステートメント）」を大切にし、被災した人びとに敬意を払ってきたように、プロジェクトに区切りをつける2013年5月末以降も、被災地の人びとのつながりを尊重することを望みます。
- ◇ 教会の歩みの中で生まれてきた施設(保育園・幼稚園・学校・医療・福祉施設など)が宣教の働きであることを再認識し、地域社会においてそれらの施設と協働していきます。

3 生活の中で福音を具体的に証しすること<マルトウリア>

- ◇ わたしたちは、それぞれの地域における多様な教会の姿が、<福音><宣教>であることを確認します。
- ◇ これまでの教会のありよう（習慣や組織など）を尊重しつつ、現代に証しするために、それらを大胆に変えていく勇気を持ちます。
- ◇ 「どこで、誰と、どのように」を大切にして歩む教会のありかたを模索し、地域の必要に応えていきます。
- ◇ 誰にでもわかる言葉と方法で、信仰生活の魅力を伝えられるように努めます。

^{*1} アメリカ聖公会から研究用原子炉が寄贈された際の祈り／2001年稼働停止

^{*2} 2012年第59(定期)総会決議

4 祈り、礼拝すること<レイトルギア>

- ◇ わたしたちは、すべての<いのち>の尊厳に基づいた多様な礼拝・諸式の研究に取り組みます。
- ◇ 様々な状況で生きる人びとの必要に対応するため、礼拝の時間や曜日の検討、式文のデータベース化、選択肢が豊かな式文の作成、多様な礼拝音楽の研究に取り組みます。
- ◇ 礼拝における信徒の役割をより豊かにするために、必要なプログラムを整備します。
- ◇ 共同の礼拝をより豊かにすると同時に、各自の祈りをとおして、一人ひとりが靈的に成長することに励みます。

5 主にある交わり、共同体となること<コイノニア>

- ◇ わたしたちは、すべての人の居場所・出会いの場となる教会の形成をめざします。
- ◇ 「高齢者」「青年」「女性」「男性」「子ども」「障がい者」「外国人」などとひとくくりにせず、一人ひとりの生きている重みを尊重し、積極的な出会いの中から、いっしょに歩く交わりを形成していきます。
- ◇ 一人ひとりが宣教の担い手として、対等なパートナーシップのもとに協働していくため、ジェンダーの平等を保障し、いかなるハラスメントも起こさない共同体を築きます。
- ◇ 青年たちの声に耳を傾け、自主的な活動を尊重して支援します。
- ◇ この世に仕える教会の形成のためには、様々な立場の人びとが、教会・教区・管区の意志決定機関へ平等に参画することが求められます。その一歩として、女性の比率が高まるように働きかけ、2022年までに少なくとも30%の参画^{※3}を実現し、さらに青年層の参画も推進します。
- ◇ 「聖職任せ」「信徒任せ」ではなく、一人ひとりが教会内外でともに牧会をするという意識を持ち、共同体全体が積極的に宣教の業に参加していきます。
- ◇ 一つの教会だけではなく、教会・教区を超えて積極的な関わりを持ち、互いの賜物を分かち合います。そして互いの違いを乗り越え、具体的に出会う機会を作り、教区間協働や教区の再編を目指して具体的な活動を推進していきます。
- ◇ 世界の聖公会と情報を交換し、互いに学び合い、協力し合います。
- ◇ 大韓聖公会やフィリピン聖公会をはじめ、アジアの諸聖公会との協働をさらに推進します。そのためにも、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」^{※4}のさらなる実質化を図ります。

2012年9月17日

2012年日本聖公会宣教協議会参加者一同

^{※3} 2004年第49回国連女性の地位委員会に派遣された全聖公会中央協議会代表団による声明を受けた第13回全聖公会中央協議会の承認に基づく。

^{※4} 1996年第49(定期)総会決議

議 16・日本聖公会宣教協議会開催・実行委員会設置-1

第16号議案

日本聖公会宣教協議会開催および実行委員会設置の件

提出者 管区事務所

2012 年の日本聖公会宣教協議会「日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言」の提案に基づき、実行委員会を組織し、2022 年に日本聖公会宣教協議会を以下の内容で開催すること。

日 程： 2022 年 11 月 4 日（金）～7 日（月） 3 泊 4 日

場 所： 清泉寮（山梨県清里）

目 的： 2012 年から 10 年間の各教区や管区における宣教・牧会の実りを持ち寄り、日本聖公会の現状と課題を分かち合い、これから宣教に関する方針と方向性を提示する。

参加者： 各教区参加者 8 名（主教・聖職・信徒・女性・青年・財政担当・宣教担当）、

管区関係諸委員会代表者、諸団体代表者など 140 名

予 算：	収 入	参加費	550 万円
		一般会計からの積立て（5 年）	250 万円
		大斎克己献金より（5 年）	300 万円
	支 出	合 計	1,100 万円
		宿泊費	462 万円
		交通費補助	300 万円
		講師・ゲスト・実行委員諸経費	120 万円
		実行委員会費（2 年間）	218 万円
		合 計	1,100 万円

実行委員会： 年齢・ジェンダーなどに配慮した 8 名以内

任期は宣教協議会の庶務終了まで

【提案理由】

日本聖公会は、2012 年に静岡県浜松市の浜名湖畔にて日本聖公会各教区からの代表者や管区諸委員ら約 140 名が集い、「いのち、尊厳限らないもの—宣教する共同体のありようを求めて—」というテーマのもと、宣教協議会を開催した。その開催を決議した 2008 年の第 57(定期)総会において、当初の開催目的は、「信徒減少・高齢化、聖職者不足、教会建物の老朽化、財政の逼迫」、「社会的に弱い立場に置かれている人びとへのケア」、「戦争責任を告白する日本聖公会が平和の器として用いられること」が主な目的として挙げられ、2010 年には箱根スコレープラザにてプレ宣教協議会が行われた。しかし、2011 年 3 月の東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を経験し、地に生きるすべての「いのち」に対してもたらされた犠牲と被害に向き合い、これまで

の生き方や教会のありようを根本的に問われることとなった。

2012 年の宣教協議会では、絶望の内にある人びとのかすかな声に耳を傾け、声を出せない人びとの「声」となっていくこと。圧倒的に希望を奪われた状況の中に生きる人びとに対して、「にもかかわらず」、神の祝福“くいのちの喜び”を語り続けることが大切だと、「いっしょに歩こう！プロジェクト」の働きから学び、日本聖公会の宣教の原点は、教会内の牧会はもちろん、教会のある地域全体に対する牧会的働きをていねいに実践していくこと、その地域にある課題、そしてこの世界にある課題に誠実に取り組むことにあると再確認された。(2012 年宣教協議会提言より) この提言のタイトルともなったく宣教・牧会の十年>を、日本聖公会の 10 年間の宣教のテーマとして名付け、10 年後に「2022 年日本聖公会宣教協議会」を開催し、<宣教・牧会>の果実を刈り取る収穫感謝として分かち合うことが提案されている。

また、この間、昨年 5 月に仙台で開催された「原発のない世界を求める国際協議会」では、日本聖公会が宣教の重要課題として原発の廃止に取り組むことを決意した。

さらに、今年 2 月以来、新型コロナウイルス感染拡大によって、わたしたちの教会はこれまで経験したことの無い状況に置かれている。そこでは、わたしたちのこれまでの教会のありよう、信仰共同体としての働き、社会との関わり方などが問われている。

以上、2012 年宣教協議会からの提案に加えて、この 10 年間にわたる日本聖公会の歩みの中で示された諸課題を協議するために、2022 年に宣教協議会を開催し、わたしたちの教会の宣教・伝道の展望と方策を見出していきたい。過去も現在も将来も、常に変わらずわたしたちを導き、恵みを与え、祝福してくださる全能の神への信頼と希望を分かち合い、これから日本聖公会の宣教に、聖職も信徒も勇気と希望をもって遣わされていくための協議会でありたい。

管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

日本聖公会主教会メッセージ －宣教協働区・伝道教区制について－

2020年11月20日
日本聖公会 主教会

はじめに

日本聖公会の信徒、教役者の皆様の上に、主の豊かな祝福と導きをお祈りします。

日本聖公会主教会は、日本聖公会の現状と将来に思いを巡らせ、今、私たちがなすべきことについて協議・検討してきました。その結果を2020年10月27~29日に開催された日本聖公会第65(定期)総会に第10号議案「日本聖公会法規の一部を改正する件」(宣教協働区・伝道教区制の設置)として提案し、可決されました。このことにより、2020年10月30日より日本聖公会を3つの宣教協働区に分け、各々の宣教協働区で協働すること、また教区は教区会の決議と総会の承認によって教区主教を置かない伝道教区に移行することが可能になりました。

主教会がこのような法規の一部改正議案を提出するに至ったのは、以下のような認識と展望を持っているからです。

1. 日本聖公会のこれまで

日本聖公会は、米国・英国・カナダの各聖公会から派遣された宣教師によって宣教・伝道が開始され、それぞれの宣教団体の方針や計画によって現在の教区区域に成ってきました。その後、様々な試練を乗り越えて活発に成長してきましたが、各教会や教役者の懸命の努力がありながらも1990年頃から信徒数などが伸び悩み、現在では減少傾向にあります。

2012年9月に開催された宣教協議会では、このような状況の中、「ていねいな牧会」ということが提起され、私たち自身の伝道や宣教の「ていねいな」在り方と取り組みが促されました。

2. 宣教協働区

日本聖公会法憲第1条は、「日本聖公会は主教の司牧する若干の教区より成る管区である」と規定しています。これは私たちが、主教の司牧する教区という自律した共同体を基本単位として宣教牧会の業に励んでいることを意味しています。各教区はさまざまな違いをもって歩んできました。そのために私たちは多様な教区の集まりであり、教区の枠を超えて協働することが困難だったのではないかでしょうか。

今回提起された「宣教協働区」という考え方とは、従来の教区という単位を越えて、共に支えあい、共に歩もうとするものです。そのためには各々の教区の持つ制度的・慣習的違いを分かち合い、理解し合い、よりよい方向を目指して行くことが期待されます。宣教協働区に建てられる「協働委員会」の使命は、このような違いを分かち合い、理解し合うための調整機関です。またそれらを理解しあった上で、宣教協働区内で求められる宣教活動や、助けを必要とする部分への牧会活動を具体化するための計画を策定する機関でもあります。これらに加えて協働委員会には教区の再編成（教区の合併や設立）を立案、調整する働きが求められています。

3. 伝道教区

これまで各教区に必ず教区主教が置かれることになっていましたが、今回の法規改正で規定された「伝道教区」とは、教区主教を置かず、管理主教の下で原則5年以内に他の教区と合併等の再編を目指す教区のことです。一つの教区が伝道教区となれば、その伝道教区のためにも宣教協働区内の諸教区が、共に支えあい、共に歩み、結束力をより強めるものとなるでしょう。

4. 日本聖公会のこれから

今回の法規改正は、日本聖公会のこれまでの在り方を大きく変えるものです。教区の枠組みを超えて他の教区と課題を共有し、お恵みや喜びを分かち合い、重荷も担い合うこととなります。新たな枠組みですので、経験したことのない困難な事柄もあるでしょう。そのようなことも共に乗り越え、あるいはこの新しい枠組みをも前進させることを通して、神様から与えられた宣教の業をしっかりと担い直すことができますように主教会一同、心から願っております。

このように私たちの教会が変革されていくための過程が、「宣教協働区と伝道教区制の設置」であります。ぜひ、各教区の信徒・教役者の皆様におかれましても、それぞれの状況、文脈に応じた思いやアイデアを出し合っていただき、それらの一つひとつを、2022年に予定されています「日本聖公会・宣教協議会」に持ち寄って、私たち日本聖公会全体で共有できるビジョンへと練り上げていければと願っています。皆様方のご理解とご協力をいただきますようお願ひいたします。

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」

（ヨハネ 1:4-5a）

在　　主

※ 第10号議案をご覧になりたい方は、下記のアドレスからお願いします。

http://www.nskk.org/province/shiryo/65soukai_kaisei.pdf





管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

日本聖公会各教会 信徒・教役者のみなさま

「日本聖公会宣教協議会」開催延期（2023年11月）のお知らせ

+主の平和がありますように

2020年10月に開催されました日本聖公会第65（定期）総会において、「日本聖公会宣教協議会および実行委員会設置の件」（決議第17号）として、2022年11月4日～7日に清里での宣教協議会の開催を決議し、実行委員会で準備を進めてまいりました。各教区・教会・関連施設・各委員会のみなさまには、この10年の実りや様々なご意見に関するアンケートにご協力いただきありがとうございました。

開催予定日まで1年前を切り、本来ならば準備の進捗状況や協議会の概要をお知らせしなければならない時期を迎えておりますが、準備を始めてからこの1年間、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実行委員のメンバーは対面での実行委員会を一度も開催できていない現状があり、来年の秋頃の感染状況も見通せない中で全国から140名が集まることが可能かどうかという懸念もあります。そこで、実行委員会としては、2023年に1年間の開催延期を提案し、主教会と常議員会で以下の通りご承認いただきました。

2012年の宣教協議会の提言で示された「2012年以降の宣教・牧会の収穫感謝」に加え、コロナ状況下における各教区・教会の苦労や取り組みの一つひとつ、そして2020年の総会決議によって始められた「宣教協働区・伝道教区制」の働きや教区間協働・再編の歩みも「収穫」として祝福したい。そのために2022・23年の準備の過程自体をプレ宣教協議会として位置づけ、日本聖公会の枝に連なる各教区・教会・関連施設・諸委員会毎の分科会を持ちながら、それぞれの経験や提案を拾い上げていくプロセスとし、それらを2023年の宣教協議会において、顔と顔を合わせて分かち合いたいと考えております。

●宣教協議会の延期後の日程

2023年11月10日（金）～13日（月）の3泊4日（清泉寮・山梨県清里）

※ 拡大実行委員会を2022年8月22日～23日に東京（各教区宣教担当者や管区諸委員）で開催し、カテゴリー別の分科会をオンラインで開催しながら準備を進める予定です。宣教協議会（140名規模）と拡大実行委員会（40名規模）の予算については、当初5年間の積み立てに延期分の1年の積み立てを加え、参加費等でまかなう予定です。

2021年12月15日

日本聖公会宣教協議会 実行委員長 主教 磯 晴久
首座主教 主教 武藤謙一
管区事務所総主事 司祭 矢萩新一

—The Anglican Church in Japan—

「2022年日本聖公会宣教協議会」開催に向けたアンケート

管区事務所
〒162-0805
東京都新宿区矢来町65番
電話 (03)5228-3171
FAX (03)5228-3175

日本聖公会

NIPPON SEI KO KAI

PROVINCIAL OFFICE
65, Yarai-cho, Shinjuku-ku
Tokyo 162-0805, Japan
Tel. 81-3-5228-3171
Fax. 81-3-5228-3175

2021年4月25日

日本聖公会各教区

教区主教 様
宣教担当者 様
教区事務所・教務所 御中
各教会牧師・教会委員会 御中
関係施設・団体 御中
教役者の皆様
管区諸委員会 御中

「2022年日本聖公会宣教協議会」開催に向けて アンケートのご協力依頼

主のみ名を賛美いたします。

日本聖公会は2012年に宣教協議会を開催しました。静岡県浜松市の浜名湖畔に、11教区の代表者と管区諸委員ら約140名が集い、日本聖公会の宣教課題を出し合い、大切なことを確認し合った協議会でした。

この協議会において、私たちの宣教の原点が、教会と、教会が遣わされている地域に対する牧会的働きを丁寧に実践すること、地域にある課題、また、この世界にある課題に誠実に取り組むことであると再確認しました。そして、2012年から10年間を〈宣教・牧会の十年〉と名付け、このテーマに沿ってのそれぞれの〈宣教・牧会〉の実りを、2022年に開く宣教協議会で収穫感謝として分かち合うことが提案されました。

昨年10月に開かれた日本聖公会第65(定期)総会における決議により、「2022年日本聖公会宣教協議会」を来年11月4日(金)~7日(月)の日程で、山梨県清里にある清泉寮を会場として開催することとなりました。そのための実行委員会が設置され、準備の話し合いが始まっています。

実行委員会では、日本聖公会の交わりにある全ての皆様と共に、次の宣教協議会へ向けて準備を進めていきたいと考えております。その第一歩として、今回、アンケートをお配りさせていただきます。同封の「日本聖公会〈宣教・牧会の十年〉提言」をご参照の上、ご回答いただきますよう、何卒、ご協力をお願い申し上げます。

主にあって

2022年日本聖公会宣教協議会

実行委員長 主教 アンデレ 磯 晴久

– THE ANGLICAN CHURCH IN JAPAN –

2022年日本聖公会宣教協議会 アンケートについて

1. アンケートの目的

2022年宣教協議会開催に向けて、2012年宣教協議会の提言を改めて共有すること。

2022年宣教協議会企画にあたり、日本聖公会の交わりのうちにある皆様とともに恵みや課題を分かち合い、実りのある協議会とするため。

2. アンケートの種類と対象者

アンケートは5種類ありますので、下記の該当するものへご回答ください。

「教会」……………教会ごとにご回答ください。

記入にあたっては牧師・教会委員会、教員の皆様でご相談ください。

「施設・団体」……………関係施設・団体ごとにご回答ください。

記入にあたっては施設・団体長の方、チャプレンの先生でご相談ください。

「教区」……………教区ごとにご回答ください。

記入にあたっては教区主教様、宣教担当の方でご相談ください。

「教役者」……………日本聖公会の全現役教役者の方、

また2012年宣教協議会当時に現役だった教役者の方はご回答ください。

「委員会」……………管区委員会、また委員会内プロジェクトごとにご回答ください。

3. アンケートの回答方法

原則「Google フォーム」にて回答をお願いいたします。お手持ちの端末から以下の QR コードを読み取っていただくか、管区ホームページのトップページから「2022年宣教協議会アンケート」の記事をご参照の上、該当するアンケートにお答えください。

アンケートの締め切りは6月30日（水）とさせていただきます。



管区事務所ホームページ

<http://www.nskk.org/province/>

※Google フォームへの回答が難しい方は、別紙アンケートの設問をご覧の上、宣教協議会実行委員会（管区事務所気付）までご回答を送付ください。

4. アンケートの使用

ご回答いただいたアンケートは、2022年宣教協議会の企画・運営・報告等、また今後の日本聖公会の宣教を考えるための調査・研究・会合に資料として使用いたします。それ以外の目的では使用いたしません。

5. アンケートへのお問い合わせ

アンケートについてご不明点等ありましたら、管区事務所総主事までお問い合わせください。

メール：genral-sec.po@nskk.org

電話：03-5228-3171

アンケート回答結果 [I. 教会]

設問

- 教区・教会名
- 2012年に開催された日本聖公会宣教協議会をご存じですか? (ひとつに○)
 - よく知っている (例:報告書を読んだ等)
 - 知っている (例:提言を共有した等)
 - 聞いたことはあるがよく知らない
 - 全く知らない
- 2012年の宣教協議会「提言」を改めて意識した上で、2012年以降、貴教会の宣教・牧会の働きの中で丁寧に取り組んできたと思われることを「1つ」教えてください (小さなことでも構いません)。
- 3の回答を2012年の宣教協議会「提言」の「5つの要素」で考えると、どれに当てはまりますか。一番当てはまるものを教えてください (複数にまたがる場合は、その中でもより近いものをお選びください)。

回答数：171件 (全教会 277)

分析：宣教協議会実行委員 司祭 サムエル 北澤洋

1 統計

・2012年宣教協議会の理解度：

「よく知っている」が14%、「知っている」が39%で合わせて53%、「よく知らない」が42%、「まったく知らない」が5%で合わせて47%

半分強が「よく知っている」あるいは「知っている」、半分弱が「よく知らない」あるいは「まったく知らない」という結果。多くの教役者は知っており、管区からもことあるごとにさまざまななかたちでお知らせや報告があったはずだが、各教会で十分に認知されているとは言えない状況が明らかになった。一部の人だけでなく、日本聖公会に属する皆さんお一人おひとりと繋がる協議会にするためにどうすればよいのかが、大きく問われていると思う。



・5要素について：

「ケリュグマ (み言葉に聴き、伝えること)」11%、「ディアコニア (世界、社会の必要に応え仕えること)」25%、「マルトゥリア (生活の中で福音を具体的に証しすること)」13%、「レイトゥルギア (祈り、礼拝すること)」25%、「コイノニア (主にある交わり、共同体となること)」26%



ディアコニア、レイトゥルギア、コイノニアの割合が高く、ほぼ25%ずつ。各教会の皆さんが、礼拝を通し、信仰共同体としての交わりを深め、その力をもってさまざまな奉仕の働きを行なっている姿が浮き彫りになっているように思われる。ケリュグマはレイトゥルギアに含まれると捉えることができるし、教会を離れ生活の場に戻ればマルトゥリアの割合が高くなるのではないか。教会の5要素すべてがいきいきと運動しているように感じられる。

2 キーワード

- ①「地域」…主に「ディアコニア」に分類された回答中に「地域」あるいは「地域とのつながり」といった言葉が散見される。教会が建っている地域の人々への奉仕やその方々との交わりを通して、教会が「内外に開かれたコミュニティ」として歩んでいることがうかがわれる。
- ②「主日礼拝」…主に「レイトカルギア」に分類された回答中に「主日礼拝」あるいは「主日礼拝を守る」といった言葉が多く見られる。全国的に教役者不足の現状の中で、定住の教役者が不在であっても主日には「み言葉の礼拝」をおささげし、主のご復活を常に喜び祝い信仰生活を送っておられる信徒の皆さんのお姿が想像される。
- ③「子ども」…複数の回答中に「子ども」という言葉が見られた。教会建物を利用して「子ども食堂」に場所を提供している教会、併設する幼稚園や保育園との交わりを大切にしている教会、「子ども礼拝」や「幼稚室」の設置などを通して子どもでも安心して礼拝に参加できるように工夫している教会などがある。信徒の高齢化の波の中で、子どもとの繋がりをしっかりと保ち、少しづつでも福音の種を蒔いていく努力は今後とも重要だろう。
- ④「信徒の高齢化」「信徒の減少」「定住教役者がいない」…現在の各教会の現実を表す言葉が多く見られた。

3 アンケート全体を通して（思い付くままに…）

- ・複数の教会の回答で、「宣教協議会の提言を意識して信仰生活を送ってきたかといえば、必ずしもそうではない」という意味の文章があった。それはそうだろうな、と思う。多くの教会で、提言は提言として大切なものとして受け取ったことだろう。けれども一方で、教会はそれぞれの地域に根ざし、その地域の諸課題をその地域に住む信徒の皆さんが対峙しながら営まれているので、提言がそのままその教会のあり方と噛み合ったかといえば、必ずしもそうではなかったのは当然である。
- ・では、今度の宣教協議会でも何かしらの提言を行うのであれば、多くの教会に共通すると思われる課題を取り上げ、提言するのがよいのだろうか。それとも、各教会の現状に可能な限り耳を傾け、そのことを吸い上げるかたちで提言を作成するのがよいのだろうか。
- ・両方とも大事なことは思うが、前者は提言が抽象的になるおそれがあり（2012年の提言はどちらかといえばこちらに当たると思う）、後者は提言に具体的な事柄を盛り込もうとしてかえってまとまらないといった危険性もある。では、バランスの良い中間がよいのか。そういう問題でもない気がする。
- ・そもそも、宣教協議会の提言としてどういう提言が理想的なのか。いろいろな考え方方が可能だが、一信徒（あるいは一教役者）の立場に立って理想的なのは、「元気が出る」提言だろう。「希望が持てる」言葉である。信徒の高齢化や減少、教役者不足、財政のひっ迫。いろいろと困難はある。でも、宣教協議会の提言（あるいは報告）を読んだら、他の教会ではこんなことを工夫して、こんな実りがあったと書いてある。小さい教会が、こんなことを地道に頑張っていると書いてある。自分たちも、何かできるんじゃないか。今の自分たちでもこういうことはできるから、ちょっとやってみようか。そんな風に、信徒や教役者を奮い立たせる言葉である。
- ・そういう言葉を、根拠をしっかりと固めた上で（無根拠では説得力に欠けるので）提示できないか。そんなことを考える。

アンケート回答結果 [II. 施設・団体]

設問

- 施設・団体名
- 2012年に開催された日本聖公会宣教協議会をご存じですか? (ひとつに○)
 - よく知っている (例:報告書を読んだ等)
 - 知っている (例:提言を共有した等)
 - 聞いたことはあるがよく知らない
 - 全く知らない
- 2012年の宣教協議会「提言」を改めて意識した上で、2012年以降、貴施設・団体の働きの中で丁寧に取り組んできたと思われることを「1つ」教えてください (小さなことでも構いません)。
- 3の回答を2012年の宣教協議会「提言」の「5つの要素」で考えると、どれに当てはまりますか。一番当てはまるものを教えてください (複数にまたがる場合は、その中でもより近いものをお選びください)。

回答数: 75件

分析: 宣教協議会実行委員 司祭 洗礼者ヨハネ 大和孝明

1 統計

・宣教協議会の理解度について:

知っているが34団体、知らないが41団体

(半分よりも少ないという結果) 今後は施設・団体にも (「宣教担当者のつどい」と同様) オンラインの会議に参加してもらい、理解しやすいキーワードや短い言葉も用いて、協議会の意図を継続的に伝えていってはどうか。



・5要素について:

ディアコニアが全体の4割 (30団体)、コイノニアが1割弱 (6団体)、それ以外はケリュグマ・マルトゥリア・レイトルギアがほぼ均等に分かれている。

コメント内容は、要素ごとにほとんど差がないが、アンケートを読むと、地域や人々へのディアコニアが、施設・団体の活動の基礎にあると感じられる。



2 キーワード

- 祈り…祈祷書やこども礼拝式文を活用しながら、信徒でない人達とも、共に祈る時間を持っている。(それぞれの施設での式文や祈りの持ち方、工夫について知りたい)
- 教育…こどもと福音を分かち合う。お話やお祈りのしかた (こどもに伝わる伝え方)
保育者への働きかけが大切。キリスト教保育の現場にあって、キリスト教に接したことのない保育者にどのように福音を伝えるか。コーディネーターとしてのチャプレンの存在が大きい。
(病院・福祉施設でも同様に、利用者と職員両方への働きかけが必要)
- 自然環境・災害…阪神大震災・東日本大震災をはじめとする自然災害の被害を知り、支援する。また福島原発事故の教訓から、エネルギー消費構造の転換、自然エネルギーの活用への取り組み。太陽光発電

など。(今後ますます重要になっていく課題)

④こどもが真ん中に…発達に特徴のある子どもや、経済的・社会的に困難な状況にあるこども達を、孤立させない取り組み。児童発達支援やこども食堂などの事業。

→いずれも（意識的か無意識的かは問わなくとも）2012年宣教協議会で提起された様々な課題の実践であり、提言への応答が行われているようにみえる。

3 アンケート全体を通して（個人的な考察として）

①出会いの場（コイノニア）

- 施設・団体は、多様な人々を迎える、出会いの場。教会ではあまり体験できない、いろいろな方々の人生に触れ、その方々の祈りに触れる機会がある。私自身も一人の信じる者として、施設で信徒でない人と共に祈り、働く経験を通じて、自分の祈りや思いが変えられていくことを、日々実感している。
- 教会は、内外の隔てを越えて、皆で共に祈り、神様の存在を喜ぶ集まりであってほしいと思う。その意味で、クリスチャンとそうでない人が共にある施設・団体という存在は、新たな教会？共同体？の未来のあり方を示していると感じる時がある。
- アンケートにおける、社会に向けられた施設・団体の様々な取り組みにも、その可能性を見出すことができると思う。

②伝えることと、共に祈ること（ケリュグマ・マルトウリア・レイトウルギア）

- 施設・団体で、「キリストの愛を共有し、伝える」ことを、どのようなレベル・濃度で実現していくか、いつも考えている。施設・団体に集まる人達は、（教会のように）宗教としてのキリスト教に接することを第一目的としていないことが多い。そのため、現場ではいつも、表現の仕方に工夫が必要とされている。
- み言葉を直接伝えることも時には大事。しかし多くの場合、伝わる言葉、共有できる言葉は何かを、その都度考えながら話し、聴き、働いている。自分が上手にできているかどうかはわからない。
- 施設団体内での様々な機会における「開かれた礼拝」は、共にキリストの愛を感じる上で、大きな機会だと感じる。アンケートで、様々な施設・団体が、礼拝を大切にしていることを、心強く感じた。
- 協議会やその他の機会に、色々な祈りの方式や式文を共有していくことができれば、施設・団体にとっても、また教会にとっても有益だと思う。これまで考えられなかった祈りや礼拝が、豊かにささげられるのではないか。

③協働すること（ディアコニア）

- 一方で現実問題として、以前よりも施設・団体において「キリスト教色」が薄れていくことも知っている。クリスチャン職員の割合が減少し、施設団体と教会との人的・心理的距離が離れがちな状況に、いかに対応するか、両者の間に立つものとして、日々苦心している。一方で施設・団体の側としても、クリスチャンが少数になることで、理念や基本精神を継承していくこと自体に困難が生じていると、経験上感じている。
- 教会と施設との関係が良好で、教会が生き生きとしていることが、関連施設・団体にとっても大きな力になる。自分達のアイデンティティのありかを示してくれる存在として、施設・団体から、教会に対して期待されるところも大きいのではないかと思う。その意味でも、伝道や洗礼堅信者の増加を目指すことは、（数ではないとよく言われるが）施設・団体の協働に際しても、教会が果たすべき役割だと考える。

※アンケートには前向きな回答が多いが、協議会では抱えている問題点もたくさん話すことができればよいと思う。

アンケート回答結果 [III. 教区]

設問

1. 教区名
2. 2012年の宣教協議会「提言」を改めて意識した上で、2012年以降の貴教区の働きについて、「提言」に盛り込まれた「教会の5つの要素」に基づいて振り返ってください。また、働きの中での恵みと課題について教えてください。
3. 2022年の宣教協議会で、取り上げてほしい事柄や実施してほしいプログラムがありましたらお書きください。



回答は宣教協議会ブログにてご確認ください。

<https://2023-missionconference-nikk.com/p/questionnaire.html>

アンケート回答結果 [IV. 教役者]

設問

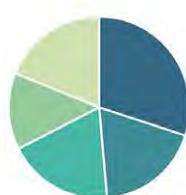
1. 所属教区、職位、年代(20代、30代など)、神学校を卒業された年あるいは牧会の現場に出られた年(西暦)
2. 2012年の宣教協議会「提言」を改めて意識した上で、2012年以降、あなたの宣教・牧会の働きの中で丁寧に取り組んできたと思われること、あるいは丁寧に取り組んでいきたいと思うことを「1つ」教えてください(小さなことでも構いません)。
3. 2の回答を2012年の宣教協議会「提言」の「5つの要素」で考えると、どれに当てはまりますか。一番当てはまるものを教えてください(複数にまたがる場合は、その中でもより近いものをお選びください)。

回答数: 133件

分析: 宣教協議会実行委員 マーガレット・マリア 福澤眞紀子

1 統計

- 回答者133名(20代~70代)。
- ケリュグマが30%、ディアコニア、コイノニア、マルトゥリアが各19%、レイトルギア14%。円グラフにすると綺麗なグラフができるところから、聖職者の仕事は5つの要素全てを網羅していることになる。教役者がバランスよく5つを意識できればいいが、1つに偏らないことが大事。アンケートの回答を5つの分類から1つを選ぶのは難しいという回答が多数あった。



ケリュグマ	40 票 30%
ディアコニア	25 票 19%
マルトゥリア	25 票 19%
レイトルギア	18 票 13%
コイノニア	25 票 19%

2 キーワード

全体の中のキーワードの中で1番目についたのは、「説教」。万人に分かりやすく言葉を伝えるか、これに多くの時間を費やした教役者が多かった。

- ・「聖書研究」「默想」…信徒を育てる、教育すると言う意味。教会の外に対しての宣教という言う意味もある。教役者自らが研鑽していくための意味もある。
- ・「聖餐式」…5つの要素が聖餐式には集約されている。
- ・「洗礼」…洗礼の恵みへ人々を導いていきたい。その準備を大切にしている。
- ・「地域」…説教の次に多かった。教会が置かれている地域でどのような働きをなすべきか。近隣の人たちにどのように接するかに心を配られた教役者が多かった。地域の課題は教会の課題であるという2012年の宣教協議会の実りの1つではないか。
- ・「訪問」「傾聴」「寄り添う」「一人ひとり」「丁寧」…目の前にいる人に丁寧に対応をして行こうという考えがある。
- ・「子ども」「日曜学校」を大切にする。(中高生や青年という言葉はなかった。)
- ・「オンライン」…コロナ禍になってあらわれた新しい手段。

3 感想と提案

教役者に求められる働きは実に多岐にわたることが、あらためて浮き彫りにされた。「オンライン」などコロナ禍に関連しているものを除けば、どれも新しいものではなく、最も基本的なことばかり。神と人とをつなぐ「礼拝」、人と人とをつなぐ「地域との関係」「牧会」、そして同時に自らも学び続け新たにされ続ける必要がある。それを教役者は個々の適性や価値観に基づいて、また置かれた状況や関わる相手によって何を優先するか判断しながら、日々の働きに従事している様子が伝わってくる。そして基本的には一人で考え方行動している。上記のキーワードを参考に、テーマを絞って、宣教協議会では教役者同士の情報交換、交流、研修などの時間を設けることができれば、お互いに新たな力と励ましが得られるのではないかと考える。また、このアンケートでは教役者自身の自己省察となっていますが、信徒の側から見た教役者についての声を集約してみると、また貴重な、意外な気付きがあるかもしれない。教役者と信徒の協働が叫ばれて久しくなりますが、双方向の風通しを良くして、対等に補いあう関係を築いていくことが、今の困難な状況を共に乗り切っていくために不可欠であると考える。

アンケート回答結果 [V. 委員会・プロジェクト]

設問

- 委員会・プロジェクト名
- 2012年の宣教協議会「提言」を改めて意識した上で、2012年以降、貴委員会の働きについて、「提言」に盛り込まれた「教会の5つの要素」に基づいて振り返ってください。また、働きの中での恵みと課題について教えてください。
- 2022年の宣教協議会で、取り上げてほしい事柄や実施してほしいプログラムがありましたらお書きください。

1 分析 (宣教協議会実行委員 執事 セシリヤ 下条知加子)

- 管区の委員会からは8つの回答があり、管区の委員会ではない所からも回答があった。
- 沖縄プロジェクトは、5つの要素に対して1つずつ回答してくださった。また、ある委員会は1つの回答に重点的に回答していた。
- 管区の委員会ではない所からの回答ですが、「精神的なストレスから休業する教役者が多いので、教区や管区全体でサポートし復帰できるプログラムや体制はできないか」という回答があった。
- 聖公会新聞がなくなって、インターネットは苦手だという高齢の方向けに、カトリック教会の「心のともしび」のような「ラジオ伝道が出来ないか」という意見がった。
- 私がアンケートの回答を読んで、各委員会が何をするのかを迷っているのでは?と感じた。それは、宣教の5要素のベクトルが外に向かうベクトルなのか、管区の委員会の中の人たちに向けてのアプローチなのか、エキュメンカルな働きをする方向なのか、よくわからないから。
- 私は管区の正義と平和委員会のジェンダープロジェクトに所属しているが、一つ一つの活動が近視眼的だと感じる時もある。管区の委員会は日本聖公会の組織として、他教派や多宗教への働きかけという方向性にもっと傾けてもいいのではと感じる。

2 分析 (管区事務所 総主事 司祭 エッサイ 矢萩新一)

恵みと課題について

- 各委員会の人的・財源の確保。
- ことに正義と平和に関する課題を、社会的・政治的と遠ざけず、生活と命に関することだという議論の必要性。平和を考えるネットワークの拡大。
- ジェンダーや属性への配慮の必要性（プログラム申込用紙の性別欄、視覚・聴覚・身体的障がいをお持ちの方への配慮など）。「～兄、～姉」「牧師夫人なら～して当たり前」など固定概念の払拭。「青年=お手伝い」という感覚の払拭、意思決定機関や代表者枠に当然青年が含まれるべきという認識を。一人ひとりが主役・現役であるとの意識を。
- 青年・女性・高齢者・障がい者などという集合的な枠やニーズから、多様な価値観や差異に向き合う個別のニーズを大切に。それぞれの世代が経験したことをもっと共有する仕組みと意識を。
- 地域の公的機関との連携。宗教色は出せない中での教会とのつながり。
- コロナ禍で休止せざるを得ない悩み、再開後の在りよう。
- 教会・関連施設内でのハラスメントや差別。「大きな声」が通ってしまう体質の変革。
- インターネットでの差別、個人情報の扱いなど、ネットリテラシーの課題。
- 委員会同士の横の連携。
- 「礼拝の多様性 diversity」から「礼拝の柔軟性 flexibility」へ。

- ・被災者支援のなかで、苦楽を共にし、地域の人たちと一緒に時を過ごし、深刻な現実を伝え、打開の道を共に求め合ったお恵みは大きい。
- ・「原発のない世界を求める国際協議会」は、日本聖公会にとって一大エポック、海外の聖公会に分かれられた。「原発のない世界を求める週間」を開き、問題を共有し、各教区や諸教会に広げていくきっかけとなった。「いのちと核は共存しない」、「原発と放射能汚染はいらない」というメッセージを全信徒に行き渡らせるために、問題を可視化し、身近な自分の問題、全地球的な問題、人類を含めた全被造物の生き方の問題であることを周知させたい。教区・教会・信徒たちが情報共有する困難さ、限界も感じつつ。
- ・クリーンなエネルギー・シフトへの提言と実践を勧めることと、エネルギー政策転換のための働き掛けをすること。

宣教協議会で取り上げてほしい事（※要望）

- ・主の平和の実現を意識したバイブル・シェアリング。
- ・インターネットの苦手な高齢者向きに、聖公会新聞に代わるカトリックのラジオ放送「心のともしび」のようなラジオ伝道を管区で。
- ・精神的なストレスから休職する教役者を教区や管区全体でサポートし復帰できるプログラム等の提供。
- ・ハラスメント防止や差別解消にむけてのアップデート。
- ・それぞれの個性を認め合うプログラム（ジェンダー、LGBT、他）。
- ・自国の文化を良く知るとともに、他国との文化を理解していくような学び。
- ・スチュワード=青年、「青年=お手伝い」という価値観の変革。
- ・各委員会における青年の割合〇〇%を目指す、など。ジェンダープロジェクトの202230のようなイメージ。強引にでも数値目標を設定しては。「自組織が幅広い年代の意見を拾えていない」ことに気づく。
- ・委員会など意思決定機関での青年の扱い。個人のパーソナリティーを無視して、雑用・IT担当・お客様扱いをしない。「せっかく若者がいるんだから、若者から一言」などは悪い例。「青年だから〇〇ができる、青年だから〇〇できない」などのレッテル貼りは、どの世代・属性に対しても許されない。それが異なる視点を持った委員同士、対等な立場のはず。
- ・いつも同じ青年が教区代表になる問題。特段の理由なく“苦し紛れ”の選出によって1人の青年に負担が集中する状況があるなら、問題（青年自身が喜んでいれば別）。「教区（組織）が、幅広い青年の意見を拾えていない」という状況をその都度しっかりと自覚すべき。
- ・「青年=これから主役」「高齢者=もう引退」の価値観。教会における「青年の主体性のなさ」はもちろん大きな課題だが、それと同様に「きっかけがあればすぐに引退・代替わりしようとする高齢層」にも課題があるようを感じる。年齢問わず、全員が「常に現役、常に（何かしらの）最前線」の意識を持てたら…。
- ・教会に居場所がない問題。たまにしか礼拝に行けない青年は教会に居づらい。「役に立たないと肩身が狭い」という意見も。「ただ居る」「たまにだけ居る」ことが教会で許容されていない雰囲気があるとしたら、全世代にとって辛い。
- ・青年自身の中にも青年の周囲にも青年を客体化する意識が刷り込まれている現状があると思う。
- ・ハラスメント防止、女性の意思決定機関参加推進、女性の聖職位とガイドライン、子どもの人権について、SDGsについて。
- ・協議会期間中の礼拝の中で、み言葉の礼拝も用いてください。
- ・「エネルギーと脱原発・反核」、「地球環境問題」、「SDGs」を協議する。

広報記録

「ぶどうの枝だより」と題し、『管区事務所だより』と各教区の教区報に連載しました。転載します。



管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第1号」(2022年2月)

これまでと、これから

こんにちは。2023宣教協議会に関する大切なお知らせです。これから隔月にて、宣教協議会のテーマや具体的なプログラムについて、共に分かち合っていきたいと思います。

これまでの経緯

2020年10月の日本聖公会第65(定期)総会において、2022年11月に清里で宣教協議会が開催されることが決議されました。この決議をもとに構成された実行委員会は、2022年1月までの間に、合計18回のオンラインミーティングを重ねて、準備を進めてきました。また、2021年9月9日(木)・10日(金)・10月7日(木)・8日(金)の4日間にわたり、各教区の宣教担当者とオンラインにて意見交換を行いました。

話し合いの中で、たくさんの課題が見えてきました。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実行委員会は、対面での集まりを一度ももつことができていません。そのような状況下で、1年後に140名が対面で集まることが可能かどうかという、プログラムを作る上で課題がありました。そして何より、皆様との対話の場の設定が必要でした。宣教協議会の準備は、各教会や施設、管区諸委員会など、日本聖公会に連なる皆様お一人おひとりとの対話の中で、深められ、多くの方々と一緒に、進められていくことが必要だと考えました。

そこで、実行委員会は1年間の開催延期を提案し、主教会と常議員会で承認をいただきました。これから宣教協議会に向けて様々に行われていく対話と祈りの時を、ご一緒にいただけますようお願い申し上げます。

テーマとして話し合われていること

—「あなたは誰の隣人になりますか」—

2021年4月から6月にかけて、各教区・教会・関連施設・

管区の委員会の皆様には、アンケートにご協力いただきました。それは2012宣教協議会からの「10年の実り」や、様々なご意見をお寄せいただくものでした。アンケートの回答は、実行委員会にて常に参考すると共に、後述の分科会でもフィードバックしながら、対話を重ねていきたいと思います。

また実行委員会は、宣教協議会の全体テーマについて話し合いを重ねてきました。まず議論の中で見えてきたのが、①「光を持ち寄る」②「10年の実りへの感謝」③「丁寧な牧会」④「宣教協働—共に歩む—」⑤「隣人と共に、隣人のために働く」という諸テーマでした。これらは、5つに色分けした図によって示されました。様々な困難に直面しつつも、多彩な光が満ちている、わたしたち日本聖公会の現在の姿、そしてこれから進んでいくべき姿を示しています。

さらに、これらのテーマを、アンケートの結果も踏まえて分かち合う中で、見いだされたのが、新約聖書「ルカによる福音書」10章25節以下にある、「サマリア人のたとえ」でした。律法の専門家の「わたしの隣人とはだれですか」という問い合わせに対して、イエス様は、「あなたの都合ではなく、あなたが、出会わされた人の『隣人』になること」を求めておられます。それは、「相手の人が、あなたの『隣人』になること」でもあります。「あなたの『隣人』になること」でもあります。



は誰の隣人になりますか」という問いかけは、今後も聖書の分かち合いや默想を通して、深めていくべきテーマにしていきたいと考えています。

大切にしたいこと・これからの予定

宣教協議会の実施にあたっては、以下のことを大切にしたいと思います。また、今後の予定についてもお知らせします。

- イエス・キリストは「わたしはまことのぶどうの木」（ヨハネによる福音書）15章1節と弟子たちに告げられました。「まことのぶどうの木」であるイエス様とつながり、そこから伸びていく、様々なぶどうの枝の集まりが、宣教協議会全体のイメージです。
- 2012宣教協議会「いのち、尊厳限りないもの」の提言で示された、「宣教・牧会の収穫感謝」を行います。各教区・教会の苦労や取り組みの一つひとつ、そして教区間協働・再編の歩みも、分かち合います。
- 皆様と思いを分かち合い、共に祈り、つながるプロセスを大切にします。宣教協議会は1年半先のことではなく、すでに今、この瞬間に始まっていると、考えていただければと思います。
- 〈ぶどうの枝だより〉として、『管区事務所だより』、各教区報や、ブログ、Facebookなどで情報を発信していきます。

○〈ぶどうの枝分科会〉として、2か月に1度、様々なテーマの分科会（管区の各委員会代表者、青年委員やU26運営委員、各教区青年担当者、関連施設チャレンなど）を行います。

○〈ぶどうの枝協議会〉として、2022年8月22日（月）～23日（火）に、各教区宣教担当者や管区諸委員と実行委員会が対面で集まり、今後の道筋を分かち合う予定です。

○宣教協議会の最終日としての全体会を2023年11月10日（金）～13日（月）の3泊4日、清泉寮（山梨県清里）にて開催いたします。

世界は今、環境破壊や気候変動、貧困や格差のさらなる拡大、地域紛争など、大きな課題を抱えています。2012年の宣教協議会で挙げられた課題に加えて、新型コロナウイルスの流行や激増する自然災害は、新たに直面した大きな課題であり、地球規模での祈りや連帯、協働という取り組みが必要です。「まことのぶどうの木」であるイエス様につながる一人ひとりが、この枝の実りとされ、力をいただき、隣人と共に、太陽の光を受けて育っていくような宣教協議会にしていきたいと思います。わたしたち一人ひとりが、日本聖公会の宣教の業を担う大切な一人であることを心に留め、ご一緒にこの2023宣教協議会を作り上げていきましょう。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第2号」（2022年6月）

2023宣教協議会実行委員会から、管区事務所だより版「ぶどうの枝だより第2号」をお届けします。

既にいくつかの教区では、教区報4月号の紙面をお借りして、教区報版「ぶどうの枝だより第1号」を掲載させていただきました。「ぶどうの枝だよりって何？」と思われた方も多いと思います。まことのぶどうの木であるイエスさまにつながる、さまざまなぶどうの枝の集まりをイメージした宣教協議会、その情報をお届けするのが「ぶどうの枝だより」です。今後、管区事務所だより、各教区報、SNSなどでぶどうのロゴを見つけたら、「あっ、宣教協議会だ！」と一人でも多くの方が目を留め、関心を持ち、共に参画してくださることを願っています。

前号でもお知らせしたとおり、宣教協議会は2023年11月10日（金）～13日（月）の日程で清泉寮（山梨県清里）にて開催されます。開催までの時間を大切に活かすため、

実行委員会では「ぶどうの枝分科会」を企画・開催しています。これは、さまざまな立場で日本聖公会に関わる方々に、オンラインにてお話を伺い意見交換をする会です。

「第1回ぶどうの枝分科会」は、管区諸委員会の代表者13名をお招きして2月25日（金）・3月4日（金）に開催しました。各委員会からは活動報告、2012宣教協議会以来の10年間にいただいた恵みと現在の課題、宣教協議会へ向けての思いなどが分かち合われ、そこから宣教協議会へ向けて特に意識したいことのキーワードとして「いのち」「つながる・つなげる」「一人ひとりの物語」「証し」などが浮かび上がってきました。各委員会の働きは異なりますが、根本に流れる大切なものは共通しており、個々の委員会はまさにぶどうの木につながる枝であることが確認できました。

「第2回ぶどうの枝分科会」は5月9日（月）・15日（日）

に管区青年委員会と各教区青年担当者を招いて行なわれました。青年たちと関わり、その生の声を聞いている方々を通して、さまざまな気付きが与えられました。青年たちに対して「未来の担い手」「若い働き手」という固定観念を持つのではなく、今もこれからも、すべての年代の人が共同体の一員として一緒に宣教を担っていく大切さが話し合われました。

「第3回ぶどうの枝分科会」は6月9日(木)に正義と平和委員会・原発問題プロジェクトのみなさまと共に開催する予定です。そして8月22日(月)・23日(火)にはぶどうの枝協議会(拡大実行委員会)が東京のインマヌエル新生教会を会場に、各教区宣教担当者・管区諸委員・宣

教協議会実行委員が対面で集まる形で(オンラインへ変更の可能性もあり)予定されています。みなで祈り、思いを深めながら、2023宣教協議会のテーマとプログラム内容について、ここで具体的な道筋を立てることを目標としています。

上記の「ぶどうの枝分科会」も「ぶどうの枝協議会」もすべて、2023宣教協議会の一部分であると私たちは認識しています。今後、丁寧な情報発信を行なっていきますので、ぜひ注目してください。そしてすでに動き出した宣教協議会の歩みの中に、働き人として加わってください。よろしくお願ひいたします。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第3号」(2022年9月)

「皆様と思いを分かち合い、共に祈り、つながるプロセスを大切に」しつつ歩みを進めている2023日本聖公会宣教協議会。6月～8月の活動の様子を「ぶどうの枝だより第3号」としてお届けいたします。

「第3回ぶどうの枝分科会」

6月9日(木)、ぶどうの枝分科会～原発問題プロジェクト編が、正義と平和委員会・原発問題プロジェクトのみなさまと共にオンラインで行なわれました。はじめに長谷川清純司祭(原発問題プロジェクト長)と池住圭さんからお話を伺い、後半は3つのグループにわかつて分かち合いをしました。この分科会が「原発のない世界を求める週間」の期間中(6月5日～11日)に行なわれたこともあり、オンラインフォーラム「原発はやめようよ」の公開プログラムには宣教協議会実行委員も参加させていただき、原発に関わる問題への理解を深めつつ話し合うことができました。



ぶどうの枝協議会 開会聖餐式説教：実行委員長磯主教

グループの分かち合いでは、原発の問題に日本聖公会として長くかかわって来ていること、(公開プログラム・森松亜希子さんのお話から)「人権」「日々の生活」「いのち」の大切さ、「いのちを守る権利」について、そして原発の問題がいかに私たちに見えにくくされているか、などが話されました。2011年の事故から10年以上が経ちますが、未だ何も解決せず、これからもこの問題に継続的に関わってゆく必要があることをあらためて感じることとなりました。

「ぶどうの枝協議会」

8月22日(月)～23日(火)、インマヌエル新生教会(東京教区)を会場に「ぶどうの枝協議会」が開かれました。全国11教区の宣教担当者、管区諸委員会の代表、宣教協議会実行委員、管区事務所総主事・宣教主事、首座主教、総勢35名が一堂に会しての会議となりました。

(1名は都合によりオンライン参加)

コロナ禍のため、これまでのぶどうの枝分科会や実行委員会はほぼ全てオンラインで行なわれてきましたので、実行委員でさえ全員が一堂に会するのは初めてのことでした。こうして全国からみなさんが集まり、顔を合わせて協議会を行うことができたことは、本当に大きな恵みであったと感じています。

協議会は開会聖餐式をもって始まりました。(司式：越山哲也司祭、補式：卓志雄司祭、説教：磯晴久主教)礼拝の中で“2023年宣教協議会のための祈り”が獻げられました。続いて4つの発題、全3回のグループシェアリング、全体での分かち合いが行なわれました。



発題Ⅳの様子

発題Ⅰは、西原廉太主教によるランベス会議報告でした。この8月の開催の様子をスライドを用いて紹介、これまでの流れと現在の課題についてお話しくださいました。また「ランベス・コール」が宣教の指針として、わたしたちへの呼びかけとして発信されるということを伺いました。

発題Ⅱは、2020年末に始動して以来の宣教協議会実行委員会のこれまでの歩みについて、また話し合ってきたテーマや主題聖句についての紹介、実行委員会で検討してきた5つのトピック（①み言葉の分かち合い②10年の実り③宣教協働区・伝道教区制④原発・環境問題⑤コロナ禍の教会）についてお話をさせていただきました。

発題Ⅲは長谷川清純司祭のお話。スライドを拝見しながら、これまでのプロジェクトの歩みと活動、また直面している様々な問題について伺いました。

最後の発題Ⅳでは、今回の会場となったインマヌエル新生教会の前身である3つの教会（東京聖マルチン教会・池袋聖公会・練馬聖ガブリエル教会）出身の信徒さん方（各1名）から、この教会が生まれるまでの歩みとそれぞれの思いを、「神が共におられ（インマヌエル）『新』しく『生』まれた『教会』の物語」として伺いました。それぞれに違う状況を抱えながら一つの教会になってゆくプロセスを、そのご苦労や悩みを信徒の方々から直接伺うことができてとても良かったとの意見が多く聞かれました。

2日目朝は、テゼの默想形式の礼拝から始まりました。

静かな歌と音楽の中で、また沈黙のうちに思いを巡らせる時間をゆったりと持った後に、グループシェアリングに入ってゆきました。発題を受けての感想や大事に受け止めた事柄についての分かち合いから、それらを宣教協議会のプログラムとしてどう立ち上げてゆくのか、熱心な話し合いがなされました。最後にそれらを全体で分かち合ったのですが、それぞれ様々に違った視点からアイディアが出されてゆきました。

2日間にしては本当に盛りだくさんの会議でしたが、つごう3回のグループシェアリングをメンバーを変えずに行なったことで、より深い話し合いができたように思います。

このぶどうの枝協議会は、2023年11月に行なわれる予定の宣教協議会の具体的なプログラムを発案し、具体的な道筋を立てることを目的として行なわれましたが、本当にたくさんのアイディアが出されたことは感謝です。これらをまとめることは決して簡単ではありませんが、みなさまのご助言をいただきながら実行委員会でじっくり話し合い、よりよいプログラムに向けて準備をしてゆきたいと思います。

今後もいくつかの分科会を予定しておりますが、少しでも多くの方々と「宣教」について共に考えを分かち合えますよう願っております。

みなさま、どうぞよろしくお願ひいたします。



閉会礼拝後、集合写真

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第4号」(2022年11月)

2023年宣教協議会まで残り1年を切りました。この管区事務所だよりに同封されて、ポスターと案内をみなさまにお届けしております。来年の11月、清里でどのような協議会を開催できるのかをより具体的に検討するため、去る11月9日(水)～10日(木)に数名の実行委員が

実際に現地に足を運び、清泉寮内外の下見を行ないました。また、宣教協議会のテーマと主題聖句は、本冒頭に掲げたものに決定しました。これからさらにスピード感をもって、準備を進めていく段階となっています。

前号(Vol.3)にて詳しくご紹介しましたが、8月22日(月)～23日(火)に総勢35名で行なわれたぶどうの枝協議会では、活発な意見交換がなされ、宣教協議会で採り上げるべきプログラムについて多くのアイデアが出されました。それらは世界規模のものから、管区レベルのもの、今まさに直面している社会問題、そして各教会の足元のことまで多岐にわたりました。それだけ、現在私たちの目の前に、取り組むべき宣教の課題が多く存在していることがあらためて明らかになりました。多くの意見が出されたことに感謝しつつも、それらを整理し、実際のプログラムとして組み立てていく作業は、困難を極めます。

10月17日(月)に実行委員が東京に集まり、宣教協議会の大まかなプログラムを協議しました。内容は案内をご覧下さい。3泊4日の日程で、1日目は教区ごとにブースを設けて前回の2012年宣教協議会から10年間の実りを持ち寄ること、2日目は「こども」「性の多様性」「老いと死」その他複数のテーマを設定し、講師を招いてのパネルトークと分科会、3日目は東日本・中日本・西日本の宣教協働区ごとの協議と交わり、4日目は総括という柱で、全体スケジュールを組み立てました。期間中は、できるだけ多様な礼拝を行なうように、また清里の自然の中での屋外プログラムなども検討する予定です。

来年11月に現地に参集するのはおよそ140名程度になりますが、できるだけ多くの方がそれぞれの場所で参加できるよう、いくつかのプログラムはオンライン配信を計画しています。また、各教区からの参加者8名は、既存の枠組みにとらわれず、ジェンダーと年齢に配慮しつつ、より自由な人選をしていただきたいと考えています。参加者が確定したらオンライン準備会を行なって、参加者同士が事前に顔を合わせ、意識を高めて協議会本番に臨めるよう、また終了後は定期的にフィードバックの機会を設け、準備期間も終了後の時も大切にしていきたいと考えています。しばらくお休みしていたぶどうの枝分科会も年明けから再開し、さらに多くの方々のご意見とご協力のもと、これからさらに詳細を検討し決定していきます。

日本聖公会全体での11年ぶりの宣教協議会です。参加者はそれぞれ事情も状況も異なる教区、地域、教会から集まりますので、そこにはさまざまな思い、考え、期待、希望などがあるでしょう。それらを分かち合い、理解し合うことで、各個人、各教会、各教区、日本聖公会の宣教の働きが少しでも豊かなものとなりますよう、実行委員会では知恵と力を注いでいます。どうぞ関心を寄せて下さり、心を合わせてお祈りくださいますよう、お願ひいたします。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第5号」(2023年2月)

各教会にポスターと案内をお届けしてから、3か月が過ぎました。お配りしたポスターの写真は、11月9日(水)～10日(木)に実行委員が清泉寮の下見を行なった際に撮影されたものです。清里の青空と草原、のびのびと拡がっていく景色の中に、神様の創造のみ業が感じられるように思います。

ここ清泉寮は、1995年に宣教協議会が開催された場所です。この会では「日本聖公会の宣教—歴史への責任と21世紀への展望」というテーマのもと、「日本聖公会’95宣教協議会宣言」と「日本聖公会’95宣教協議会共同宣言」、そしてその後の様々な宣教の働きにつながる提言がなされました。

それから四半世紀を越える歳月が過ぎ、教会をめぐる状況は大きく変化しています。現代社会において、教会が神様と「となりびと」に仕え、主のみ言葉を宣べ伝えていく道は、決して簡単なものではありません。しかし、その長く険しい道のりを、「変わることのない恵みによっ

てわたしたちに先立ち、絶えることのないみ助けによってわたしたちを伴い」(日本聖公会祈祷書「諸祈祷」)、これまで神様は、私たちと共に歩んでくださいました。清泉寮で行われる宣教協議会は、日本聖公会に連なる私たちが、1995年及び2012年宣教協議会以来刻んできた足跡を再確認し、特に前回2012年の協議会以降の10年の実りを分かち合う場となります。

そして私たちは、神様に与えられた一人ひとりのいのちの尊厳を再確認し、「となりびととなるために」未来に向けた歩みを、ここから始めます。2022年に開催されたランベス会議において、参加者は「ランベスコール」という提言を作成し、これからアングリカン・コミュニオン(全世界聖公会)が担っていく役割を、世界に向けて呼びかけました。私たちもまた、協議会当日に共に集い、祈り、思いを分かち合うことを通して、日本聖公会版「清里コール」とでも言うべき、未来に向けた提言を行ないたいと考えています。

現在予定されている11月10日（金）～13日（月）全体会当日のプログラムは、以下の通りです（別表参照）。参加者の皆さんには、各教区での2012年宣教協議会以降の歩みを振り返り、宣教の実りを持ち寄っていただきます。また、オンラインを活用して、当日会場に集まることのできない皆様にも、祈りをあわせていただく工夫をしてまいります。さらに、プログラムの中には、各教区や宣教協働区にて、事前にご準備いただく内容も含まれています。それらにつきましては、後日あらためて皆様におはかりします。

本協議会では、実行委員会と皆様との対話、「キャッ

チボール」を大切にしてきました。『宣教協議会ぶどうの枝だより』も、『管区事務所だより』、各教区報、そしてブログやSNSと、多様な形での発信を行なってきました。これからもぜひ一人でも多くの方々にお手に取っていただき、ご興味を持っていただきますよう、よろしくお願ひいたします。

次回の「ぶどうの枝分科会」は3月16日（木）、祈祷書改正委員会の皆様を迎えての会となります。皆様にとって2023年が、神様の祝福と、新たな出会い、そして宣教の喜びに満ちたものになりますよう、お祈りしています。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第6号」（2023年4月）

11月に行われる宣教協議会への各教区からの参加者もほぼ確定し、清里に向けて具体的な準備に取りかかる時期となってまいりました。前号でも触れましたが、実行委員長・磯晴久主教からの宣教協議会へのお招きのメッセージが動画で公開されています。

「宣教協議会への招き」（要約）

この宣教協議会は、2012年宣教協議会の「10年後に実りを持ち寄ってもう一度協議会をしましょう」という約束を受けて開かれる。実りを持ち寄るということに留まらず、その後に起きている多くの困難—新型コロナウイルス、世界各地の争い、環境問題や災害—の中で苦しんでいる人、生きづらさを感じている人がたくさんいることを共に考えたい。また教会も色々な課題を抱えている。私たちは岐路に立っており、これから道をどう歩んでいくかと悩んでいると思うが、希望をもって旅を続けて行きたい。

中村哲医師は医者としてアフガニスタンに入り医療活動をしていたが、この人たちにまず必要なのは水とパンなどの気づきから、灌漑施設を作り、土地を耕し、地域の人と一緒に歩んだ。私たちは複雑な社会の中に生きているが、今行わなければならぬ事、関わらなければならぬ事は意外にシンプルなことかもしれない。それをみんなで発見していきたい。

私たちには様々な賜物を与えられている。そのことに気づいてそれを持ち寄り、知恵と力、想像力と意見を出し合って新しい宣教のビジョンを発見する、そのような協議会になったらと心から願っている。主イエスが私たちのところに来てくださった、隣人愛の大切さを伝えるために来てくださったということを忘れず、そのことを

見つめながら進んで行きたい。できるだけ多くの方に、いろいろな形でこの宣教協議会に参加していただけたらと思う。

「ぶどうの枝協議会／祈祷書改正委員会」

可能な限り色々な立場の方々と分かち合いができるようになるとオンラインで企画してきた「ぶどうの枝分科会」。3月16日（木）には祈祷書改正委員会のみなさまがご参加くださって集いが開かれました。

各自の自己紹介と実行委員会からの今宣教協議会のテーマ・これまでの流れについての説明の後、まず祈祷書改正委員長の吉田雅人主教が、2014年に立ち上げられた祈祷書改正準備委員会以来の経緯、また何故改正が必要か、祈祷書の位置づけなどについて、そして大切な「ミッション・ステートメント」についてお話し下さいました。『祈祷書改正ニュース』第1号の4-5頁「『ミッション・ステートメント』について—基本的理念と方向性—」を是非お読みいただきたいとのことです。（祈祷書改正委員会ホームページ <https://johnan18942.wixsite.com/nskk-prayerbook2026> もご覧ください）

次に市原信太郎司祭から、11のグループに分かれて進められている作業の現状と各分野の改正点についてパワーポイントを拝見しながら伺いました。改正作業は本当に大仕事で、祈祷書改正に携わる先生方がご苦労されている様子が伝わってきました。

その後15分ほど、4～5人のグループで話し合いをし、最後に全体で分かち合いをしたのですが、「祈祷書の解説書があると良い」という意見が印象に残りました。祈祷書についてもっと知り、活用していくことで私たちの信仰生活は豊かにされていくことでしょう。新しい祈祷

書を楽しみに待ちたいと思います。また宣教協議会当日には、祈祷書改正委員会の新しい式文案による「朝の礼拝」をささげる予定です。

「パネリスト紹介」

さて、宣教協議会の2日目プログラム、パネルディスカッションをご担当くださる5名の講師の方々をご紹介したいと思います。

☆安達美樹さん：大阪府豊中市出身。1992年より幼児教育に携わる。1999年公益財団法人KEEP協会清里聖ヨハネ保育園に入職（～2008年）、2022年公益財団法人KEEP協会清里聖ヨハネ保育所に入職、現在に至る。清里聖アンデレ教会信徒。

☆堀江有里牧師：信仰とセクシュアリティを考えるキリスト者の会（ECQA）代表、日本基督教団牧師（京都教区巡回教師）、公益財団法人世界人権問題研究センター専任研究員。関西学院大学ほか非常勤講師。専門領域は社会学、ジェンダー論、クィア神学。1994年より性的マイノリティの相談業務に従事。

☆竹迫之（いたる）牧師：日本基督教団・白河教会牧師、1967年秋田市生まれ。高校3年生時に、いわゆる統一協会に知らずに勧誘され入会、活動中の負傷を機に19歳で脱会。統一協会をはじめとする「カルト」の問題に関わる中で牧師となり、現在、主に脱会当事者

や2世脱会者の精神的ケアについて研究中。

☆半田ウィリアムズ郁子司祭：英國国教会リーズ教区司祭。リーズ大学病院、聖路加国際病院にてチャプレンとして勤務。またICU（国際基督教大学）の大学教会の説教を定期的に担当。「和解」を学ぶ読書会や、学生が安全に不安を話せる場「てばなすペーす」を開催。英國での元捕虜や家族の和解の働きにも長く取り組んでいる。

☆マルコ柴本孝夫司祭：福岡聖パウロ教会、久留米聖公教会牧師。九州教区宣教局長、他。1965年福岡県久留米市生まれ。大学卒業後福祉関係へ進むことも考えるが、勧めを受け聖公会神学院へ入学、1994年司祭按手。長らく管区の正義と平和委員・協力委員、災害支援やホームレス支援活動に携わる。

パネルディスカッションの後には分科会が、また小グループに分かれてのシェアリングも予定されています。講師のみなさまの、それぞれユニークなご経験からのお話がとても楽しみです。

清里に集まることのできる人数は限られていますが、各地におられる方々とつながり、共に経験することができたらと、オンラインでの配信なども計画しています。多くの方に関心を持っていただける宣教協議会となることを願っています。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第7号」（2023年6月）

2020年12月に立ちあげられた宣教協議会実行委員会は、これまで各教会、教役者、管区委員会、施設などへのアンケートとそのフィードバック、さまざまな立場の方々との「ぶどうの枝分科会」の開催、各教区報、管区事務所だより、SNSを用いた広報活動などを行ってきました。テーマと主題聖句も決定し、それを基に4日間のスケジュールとプログラム内容が策定されました。現在は、当日に向けての実務的な準備がピッチを上げて進められ、5月30日（火）には第2回目の会場下見も行われました。

4月23日（日）、27日（木）には、今回、清里に参集される140名余の参加者を対象にした準備会が開催されました。実行委員会からの説明と案内が主な内容でしたが、オンラインの画面を通してはじめて参加者が顔を合わせる機会となりました。11月に清里にて直接集まる時が、ますます楽しみになってきました。

5月1日（月）には、「ぶどうの枝分科会 女性デスク・ジェンダープロジェクト編」が開催され、情報交換、意見交換の時間をもちました。ジェンダープロジェクトは2002年に、女性デスクは2006年に設置され、現在に至るまで日本聖公会内におけるジェンダーに関する諸課題と向き合い、情報提供と啓発に取り組んでおられます。特に前回2012年宣教協議会において、また近年でもいくつかの懸案事例が発生したこともあり、今回、私たちはこの宣教協議会において「大切にしていただきたいこと～みんなが安心して気持ちよく過ごすため～」という項目をいくつか設定しました（下記参照）。宣教協議会が、より多くの人が性の多様性と教会の関係について、思いを深めて下さる契機となるよう願っています。また世界の聖公会においては「女性デスク」から「ジェンダージャスティス（公正）」に、局面がさらに移行していることも紹介されましたが、宣教協議会における1つのキーワードになり得るかもしれません。

2023年日本聖公会宣教協議会

大切にしていただきたいこと

～みんなが安心して気持ちよく過ごすため～

①話しやすい雰囲気を作る

- ・他の人が話しているときは、さえぎらずに最後まで聴きましょう。
- ・他の人に対して敬意を払い、お互いの考え方の違いを尊重しましょう。
- ・開始・終了時間に留意し、時間内になるべく多くの人が話せるよう、互いに配慮しましょう。

②安心な雰囲気を作る

- ・多様な人がいることを意識し、ジェンダー、年齢、立場、地域性などの違いに敏感になります。
- ・自分の言動が不快感を与えると誰かを傷つけたと気付いたら、速やかに謝罪しましょう。
- ・信徒も教役者も対等な関係の場としましょう。

③写真・画像等について

- ・他の人の写真を撮影する時は、事前に承諾を得ましょう。
- ・撮影した写真をSNSなどにアップロードする際は、写っている全員の許可を求めましょう。

5月15日（月）には「ぶどうの枝分科会　主教会編」

が開催され、全10名の主教がご参加下さいました。ここでは特に、新たに設置された宣教協働区、伝道教区が中心テーマとなりました。実行委員会からは、集められた意見や声を主教会側に提示し、主教会の方からは3つの宣教協働区における進捗状況とその背景にある思いが語られました。目に見える形では東日本宣教協働区が最も動きが速いようですが、各宣教協働区内ではそれぞれに他教区との協働が少しづつ始められており、宣教協議会3日目の「宣教協働区アワー」は、同じ宣教協働区の参加者同士が対面で共に過ごす時間が持たれます。日本聖公会という組織が大きく変革しようとしている今、宣教協議会での出会いと交わりを通して、各教区の将来を見据えた歩みがさらに一步前進しますよう、ぜひ祈りと心を合わせてゆきたいと思います。

11年ぶりの開催となるこの宣教協議会が実り豊かなものとなるために、今後、各参加者、各教区における事前準備もどうぞよろしくお願ひいたします。また、プログラムおよび礼拝のいくつかは、オンライン配信を予定しています。ハンドブック等も閲覧できるように用意いたします。11月10日（金）～13日（月）の宣教協議会を、ぜひ皆さまのご予定に加えていただきたいと思います。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第8号」（2023年9月）

「聞くこと」からはじまる協議会

清里で行われる宣教協議会がいよいよ近づいてきました。実行委員会では、当日に開催されるプログラムごとにチームを編成し、分担して準備作業を進めています。

各教区の参加者の皆様には、オンラインの準備会を通して、協議会にむけて用意を進めていただきたい内容を共有いたしました。①協議会初日に展示される、各教区の発表の場であり交流の場、「実り持ち寄りブース」の設置準備、②各教区のこれまでの宣教の歩みについて学びを深めていただくこと、そして③3日目の11月12日（日）に行われる、宣教協働区ごとの交流企画「宣教協働区アワー」の準備、の3点です。また諸委員会からも「実り持ち寄りブース」が準備・展示されると伺っています。ご準備をどうぞよろしくお願ひいたします。

各チームでは、プログラムの内容に関する話し合いも深められています。協議会1日目の11月10日（金）に行われる、日本聖公会の3つの教会から代表の方にお話ししていただく企画は「私たちのあゆみ～物語を聴く」、そして2日目の11月11日（土）に行われるパネルディスカッ

ション・分科会は「いのちの現場から聴く」と名付けられました。お話しくださる方それぞれの思いや語り、となりびとと出会い、共に歩き始めた物語を「聴く」ことを通して、これから宣教・牧会のあり方について、また全体テーマである「いのちの尊厳」「となりびととなること」について、思いを深めていくことになります。

実行委員は8月3日（木）～4日（金）に東京のナザレ祈りの家にて合宿を行い、全体の流れと個別のプログラムに関する打ち合わせを行いました。またスチュワードの皆様（協議会運営にあたり、さまざまなサポートをして下さる方々）とのオンラインミーティングを、8月21日（月）19時～21時に開催しました。話し合いを深めれば深めるほど、必要な準備作業の多さを痛感する毎日です。それでも協議会の全体像が明らかになり、当日までの道筋が見えてきたことに、神様の導きを感じ、委員一同力づけられ、励まされています。

これまで実行委員会は、宣教・牧会の現場におられ

る方々の声から「聴く」プロセスを大切にしてきました。オンライン及び対面の会議で準備を進め、アンケートの実施や「ぶどうの枝分科会」の開催によって、日本聖公会に関わる一人でも多くの方と、対話のキャッチボールを続けながら、議論を深めてまいりました。そして清里での協議会においては、それらの「聴く」プロセス、応答するプロセスの一つの実りとして、2023年宣教協議会から、日本聖公会と関わりを持つ一人ひとりの方々、教会、教区、管区、そして教会を越えて、世界に向かってゆく呼びかけである、「清里コール」を作成したいと考えています。

この「清里コール」につきましては、どのような内容になるのか、これから実行委員会で検討していきたいと

思います。全世界聖公会がランベス会議にて呼びかけた「ランベス・コール」と響き合い、世界と地域とをつなぐ、現在の日本聖公会が行なう内外へのメッセージの発信となります。当日参加者の皆様にはグループディスカッションや祈りを通じて、この「清里コール」の作成を共にしていただきます。当日オンラインでご参加の皆様、また参加はされないものの関心を寄せてくださる皆様とも、その作成プロセスを共有しながらすすめることができますことを願っています。

ご一緒に、様々な方の思いを「聴くこと」から、この協議会を作り上げていきましょう。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第9号」(2023年10月)

さあ清里へ！～実行委員からのメッセージ～

いよいよ2023年日本聖公会宣教協議会の清里での開催（11月10日～13日）が迫ってまいりました。このたびは、各実行委員から一言、みなさまへのメッセージをお届けしたいと思います。

2020年より準備してきた宣教協議会がいよいよ目前に迫り、実行委員会の動きも佳境に入っています。ぶどうの枝分科会・協議会、アンケートなど、これまで関わったすべての方の思いを私たちの今後の宣教を考える場に連れて行きたいと思っています。清里に集われる方も、画面を通してご参加くださる方も、どうぞよろしくお願ひいたします。

〈赤坂聖矢(東北教区)〉

実行委員会が発足して2年10ヶ月、この宣教協議会が清里で参加する方だけでなく、日本聖公会に連なるより多くの人と、教会と、教区と、イエス様を中心としたぶどうの枝のようにつながることを目指して、私たちはひたすら準備を進めてきました。協議会の後、皆さまの身近な所から、新たな宣教の働きが芽生えますように。

〈司祭 島優子(九州教区)〉

いよいよ清里に集まっての協議会(11/10～13)が目前にせまってまいりました。ここで分かち合われること、話し合われることを通して、神の豊かさが示され、わたしたち日本聖公会の向かってゆく方向を見据える手がかりを得ることができますように…！

〈執事 下条知加子(東京教区)〉

宣教協働区・伝道教区制が設けられた2020年10月30日からちょうど3年が経ちました。各宣教協働区では様々な協働の実りが与えられています。その素晴らしい恵みをぜひ一緒に分かち合いましょう。そして「宣教協働区アワー」では、さらに先へ進む道の手がかりが与えられる時間となることを願っています。

〈司祭 杉野達也(神戸教区)〉

これまで私たち実行委員会ではぶどうの枝である皆さんと様々な媒体を用いてつながりながら準備を進めて参りました。ぶどうの枝がさらに豊かに広がっていきますように出会いを大切にしていきたいと思います。そして、私たち一人一人が神の国の成就へ必要な存在として神さまから招かれていることを実感し、希望を持って歩み出すことが出来る宣教協議会となりますように。

〈司祭 越山哲也(東北教区)〉

宣教協議会もいよいよ本番となります。「いのちの現場から聴く」プログラムでは、様々な宣教の現場でいのちに寄り添い、共に歩んできた方々からのお話とわかちあいがあります。清里から再び、聖公会の力強い宣教の種が、日本中に、そして世界に向けて蒔かれていきます。〈司祭 大和孝明(中部教区)〉

日本各地からさまざま「違い」が持ち寄られる清里での宣教協議会は、さまざま「素材」が持ち寄られる「調理場」となっていくような気がしています。

一つひとつの「素材」がお互いの「旨味」を出し合っ

て、主によって調理され(用いられ)実り豊かな「食卓」を共に分かち合いましょう。〈司祭 成岡宏晃(大阪教区)〉

私たちは集められます。いつもの自分の境界を越えたところに、出会いや気づき、そして希望があると信じています。私たちは招かれます。これから教会がイエス様の働きにどのように加わっていくか話し合うために。“境界線”と“教会線”、私たちがどう越えてゆけるのか、それがこの宣教協議会のチャレンジです。

〈福澤真紀子(東京教区)〉

「実り持ち寄りブースの紹介」のプログラムでは、各教区・管区諸委員会の10年の実りが目に見えるかたちで分かち合われます。この協議会のすべてのプログラムを通して、私たちがすでに与えられている実りの豊かさに気づき、元気になり、「となりびと」とともに新しい歩みを始めることができますように。

〈司祭 北澤洋(横浜教区)〉

11月10日(金)～13日(月)に、いよいよ宣教協議会の

メイン・プログラムが、清里清泉寮で始まります。私たちの主イエスは、山に登られました。それは山を下るためです。山上にて神さまの御心を祈り求め、山を下り、神様の御心を人々に伝え、人々と共に神さまの御心を生きるためでした。私たちも清里の高原に集い、神さまの御心を祈り求めます。そして、私たちは高原を下り、与えられたメッセージを、広く教会、関係諸施設、地域の皆さんと分かち合い、皆さんと一緒に、神さまの御心を生きる人になりたいと願っております。

「私たちみんなの宣教協議会」と受けとめてくださると大変うれしく思います。

主の導きを祈りつつ。

〈主教 磯晴久(大阪教区) / 実行委員長〉

皆様方のこれまでのお支えとご協力に感謝いたします。どうかこの宣教協議会が無事開催されますよう、また実り多き時とされますよう、引き続きお祈りください。そして、日本各地から清里へおいでくださるみなさま、またそれぞれの場にあってオンラインでご視聴くださるみなさま、どうぞよろしくお願ひいたします。

管区事務所だより掲載「ぶどうの枝だより第10号」(2024年2月)

「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が完成しました

昨年11月10日(金)から13日(月)に山梨県清里・清泉寮で開催した、2023年日本聖公会宣教協議会では、「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマに、地域の教会やいのちの現場で働いている方々の声を聞き、また宣教協働区単位の交流や、意見交換を通じて、実り多い話し合いがもたれました。しかし「清里からの呼びかけ(仮称)」を最終日までに完成することはできませんでした。宣教協議会初日に結成されたコールコミッティ(ドラフトコミッティ)が、参加者から委ねられて、協議会終了後も「呼びかけ」の起草と修正作業を続けました。

そして今ここに、コールコミッティが作成し、参加者の皆様・実行委員会・スチュワードの意見を反映した、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が完成しました。コミッティの皆様のご尽力に心より感謝いたします。これからはこの「呼びかけ」を、全教区・教会・諸施設、信徒、教役者全員が自分たちのものとして共有し、それぞれの現場にて用いていただきたいと思っています。すでに話し合いを始めている教区もあります。皆

様もご覧になり、ぜひ様々なご意見・ご感想を各教区にてわかつちあつていただければ幸いです。

これまで「ぶどうの枝だより」に関心を寄せ、お読みいただきありがとうございました。これからもイエス様が共にいてくださり、わたしたちが「ぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの『となりびと』となる道を歩むことができますように」(2023年日本聖公会宣教協議会のための祈りより)。

2024年2月 日本聖公会宣教協議会実行委員会
広報「管区事務所だより」チーム
(「呼びかけ」の内容は前掲)



を進めていきたいという願いからタイトルを「ぶどうの枝だより」としました。第1回目は「2023年宣教協議会について」これまで準備してきた事についてお知らせいたします。

これまでの経緯

2020年10月の日本聖公会第65(定期)総会において、2022年11月に清里で宣教協議会が開催されることが決議されました。この決議をもとに構成された実行委員会は、オンラインミーティングを重ねて、準備を進めています。また、2021年9月9日(木)・10日(金)・10月7日(木)・8日(金)の4日間にわたり、各教区の宣教担当者とオンラインにて意見交換を行いました。

話し合いの中で、たくさんの課題と恵みが見えてきました。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実行委員会は、対面での集まりを一度ももつことができていません。そのような状況下で、また2022年の新型コロナウイルス感染状況が見通せない中、大勢が対面で集まることが可能かどうかという、プログラムを作る上の課題がありました。そして何より、皆様との対話の場の設定が必要でした。宣教協議会の準備は、各教会や教区、諸施設も含め、日本聖公会に連なる皆様お一人お一

主の平和がありますように。日本聖公会宣教協議会実行委員会です。今後、各教区の教区報の紙面を定期的にお借りいたしまして、宣教協議会のテーマや具体的なプログラムについて、また1995年と2012年に開催された宣教協議会で協議されて分かち合われてきたことについてお伝えさせて頂きたいと思います。

主イエス様は「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(ヨハネ15:5)と言われました。「ぶどうの木」であるイエス様とつながり、そこから伸びていく「ぶどうの枝」である日本聖公会に連なる皆様お一人お一人とご一緒に協議会の準備

人との対話の中で、深められ、多くの方々と一緒に、進められていくことが必要だと考え、実行委員会は1年間の開催延期を提案し、主教会と常議員会で承認を頂きました。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

2021年4月から6月にかけて、各教区・教会・関連施設・管区の委員会の皆様には、アンケートにご協力頂きました。それは2012宣教協議会からの「10年の実り」や、様々なご意見をお寄せいただくものでした。アンケートの回答は、実行委員会にて常に参考にさせて頂きたいと思います。尚、アンケートの回答結果については「2023年日本聖公会宣教協議会ブログ」にて公開されていますのでご覧下さい。

大切にしていきたいこと・これからの予定

宣教協議会の実施にあたっては、以下のことを大切にしていきたいと思います。また、今後の予定についてもお知らせします。

- 皆様と思いを分かち合い、共に祈り、つながるプロセスを大切にします。宣教協議会は1年半先のことではなく、すでに今、この瞬間に始まっていると、考えていただければと思います。
- 〈ぶどうの枝だより〉として、『管区事務所だより』、各教区報や、ブログ、Facebookなどで情報を発信していきます。
- 〈ぶどうの枝分科会〉として、2か月に1度、様々なテーマの分科会（管区の各委員会代表者、青年委員やU26運営委員、各教区青年担当者、関連施設チャレンなど）を行います。
- 〈ぶどうの枝協議会〉として、2022年8月22日(月)～23日(火)に、各教区宣教担当者や管区諸委員と実行委員会が対面で集まり、今後の道筋を分かち合う予定です。
- 宣教協議会の最終日としての全体会を2023年11月10日(金)～13日(月)の3泊4日、清泉寮（山梨県清里）にて開催いたします。

教区報掲載「ぶどうの枝だより②」～宣教協議会って何ですか？～

1995年宣教協議会について

今回は、1995年の宣教協議会について振り返ります。

そもそも、宣教協議会とは何でしょうか。この宣教協議会以前にも、日本聖公会では宣教に関わるさまざまな協議会が開催されましたが、それらを概観してみると、次のように言ることができます。すなわち、「その時代時代において、協議して方向性を定める必要がある宣教の諸課題について、日本聖公会全体としてなされる協議会」と。日本聖公会全体として、というところに大きな力点があります。

1995年の宣教協議会は、8月28日～31日まで、清里清泉寮にて開催されました。主題は「日本聖公会の宣教—歴史への責任と21世紀への展望」。戦後50年の節目にあたり、「歴史、世界、社会、民衆の中で働いておられるキリストに生きる教会」が目指されました。参加者は184名でした。

塙田理司祭による主題講演「日本の歴史と宣教理解」や、ジョン・ボビー司祭による特別講演「21世紀への教会の展望—あらゆる場を変革するために—」が行われ、井田泉司祭による聖書研究「『正義を行う』ことへの召し」がありました。また、祈りの集いの中での韓国、フィリ

ピンからの証言や、女性、障がい者、環境問題に関する発題がありました。

これらの講演や証言、発題を受け、参加者による協議を経て、協議会最終日に「日本聖公会‘95宣教協議会宣言」が採択されました。そこでは、「日本聖公会が戦争に加担した責任を痛みをもって自らのものとし、敗戦後、すみやかにこの責任を明らかに表明できなかった戦後責任を確認し（…）その罪責を神の前に告白し、被害を与えた隣人の前に謝罪」し「懺悔」すること、また「日本聖公会は、差別、抑圧を生み出し支えている社会構造自体を変革するための地の塩、世の光とならなければ」ならないことが表明されました。また、同じく「日本聖公会‘95宣教協議会共同ざんげ」が採択されました。

採択されたこれらの「宣言」、「共同ざんげ」に導かれるかたちで、翌年の1996年第49(定期)総会において、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」が決議されました。この決議により、韓国・フィリピンをはじめとしたアジアの諸教会との交わりが深まることとなりました。またこの宣言は、1998年ランベス会議で紹介され、多くの国の人々に感銘を与えたようです。

教区報掲載「ぶどうの枝だより③」～宣教協議会って何ですか？～

2012年宣教協議会について

「歴史への責任と21世紀への展望」と題した’95日本聖公会宣教協議会の「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」以降、日本聖公会は韓国・フィリピンをはじめアジアの諸教会との交わりが深まりました。1998年のランベス会議でも紹介され、多くの国の人々に感銘を与えました。しかし、より具体的に進むためには課題もありました。

そこで、2012年の宣教協議会は9月14日～17日、静岡県浜名湖畔の研修施設「カリック」を会場に、3つの目的をもって開かれました。1.教会の直面する現状を分かち合い、具体的な宣教ビジョンを構築すること、2.日本の社会における教会の使命・宣教について再認識し、具体的な方策を検討すること、3.世界に対し、1995年の戦責告白を踏まえ、日本聖公会が「平和の器」として用いられるため。

2010年にはプレ宣教協議会が開かれます。「宣教する共同体のありようを求めて」をテーマに2012年への準備が進められている中、2011年3月に東日本大震災、そ

して、東京電力福島第一原子力発電所爆発事故が起こりました。大きな犠牲と被害を目の当たりにして、宣教や教会のことは、もはやこの災害によってもたらされた事態・現実とは無関係に考えることはできないと思い知らされました。

「いのち、尊厳限りないもの～宣教する共同体のありようを求めて～」

この宣教協議会には全教区の主教と各教区の代表者達が集まりました。これは前回の協議会では叶わなかったことです。そして管区諸委員会、大韓聖公会からの代表を迎えて140名が集まりました。

協議会の初日、ベリス・メルセス宣教修道女会の清水靖子シスターによる特別講演「イエスの道を歩く～未踏へのチャレンジ・未来の子どもたちのために原発を止めるためには～」を通して、福島原発事故の現実に、キリスト者としての生き方をどう選択するのかが問われました。また「いっしょに歩こう！プロジェクト」の報告で

は、現地の人々の悲しみや苦悩の傍に共にたたずむ教会、その只中におられる主イエスの姿が示されました。

2日目、西原廉太司祭（当時）の基調講演で、日本聖公会の宣教を考えるための多様な宣教ビジョンが資料とともに提供されました。笠森田鶴司祭（当時）によるバイブルシェアリングでは「わたしたちは何者で、何をすべき存在であるのか」、多様さを抱えた被造物＝人間の使命について分かち合われました。

参加者はこれから教会のビジョンを語り合い、最後

に『日本聖公会＜宣教・牧会の十年＞提言』にまとめられたのです。

閉会聖餐式説教で植松誠首座主教（当時）は「私たちの日常の中に宣教の現場がある」と語られました。各教会に配られた「2012年日本聖公会宣教協議会報告書」にこれらの詳しい内容が載っています。

それぞれの場で歩んできた私たちの＜宣教・牧会＞を振り返り、新たに向かうために。次の宣教協議会は来年11月に開かれます。

教区報掲載 「ぶどうの枝だより④」

～2023年日本聖公会宣教協議会テーマ、主題聖句、「ぶどうの枝協議会」について～

日本聖公会宣教協議会実行委員会です。今回は、宣教協議会のテーマと主題聖句について また、「ぶどうの枝協議会」（8月22（月）-23日（火））について報告させて頂きます。

2023年日本聖公会宣教協議会テーマ、 主題聖句について

〔テーマ〕

「いのち、尊厳限らないもの～となりびとになるために～」

〔主題聖句〕

ヨハネによる福音書15章5節

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」（聖書協会協同訳）

テーマは、2012年の宣教協議会「いのち、尊厳限らないもの」を引き継いでいます。また、本協議会で大切にしたいこととして「となりびと」というキーワードをサブテーマとしました。これは、イエス様が「サマリア人のたとえ」で、「あなたの都合ではなく、あなたが、出会わされた人のとなりびと」になることを求められました。「あなたが誰かの『となりびと』になること」、それは、「相手の人が、あなたの『となりびと』になること」でもあります。本協議会では、「あなたは誰のとなりびとになりますか」という問い合わせを深めていきたいと思います。

主題聖句に込めた思いは、「まことのぶどうの木」であるイエス様とつながり、そこから伸びていく、様々なぶどうの枝の集まりが、宣教協議会のイメージです。そして、協議会に関わる一人ひとりが、「ぶどうの木」で

あるイエス様を通じて、「となりびと」になっていくことを願っています。

「ぶどうの枝協議会」（拡大実行委員会）について

8月21日（月）-22日（火）インマヌエル新生教会（東京教区）を会場に、武藤首座主教、各教区の宣教担当、管区の各諸委員の代表、矢萩総主事、卓宣教主事、実行委員によって開催されました。プログラムは、21日（月）開会礼拝（聖餐式）を捧げ、磯主教（実行委員長）が説教をされました。礼拝に引き続き「ランベス会議報告」（西原主教）と実行委員による「宣教協議会実行委員会のこれまでの歩み」の発題から始まりました。その後、グループに分かれて分かち合いを行いました。午後は、「原発問題について」原発問題プロジェクト長の長谷川清純司祭より発題、そして会場をお借りしたインマヌエル新生教会の誕生に関わるそれぞれの思いを牧師の卓司祭の司会によって3人の信徒方からお話を伺うことが出来ました。その後、グループの分かち合い、全体の分かち合いを続け、来年の宣教協議会のプログラムの内容について協議いたしました。短い日程ではありましたが、たくさん

具体的なアイデアが出され、協議会に向けてたくさんの「ぶどうの実」を頂き有意義な時でした。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑤」～これまでの「ぶどうの枝分科会」について～

来年の11月に開催される宣教協議会は、当初は今年の11月に開催する予定でした。しかし、新型コロナの感染状況の影響により、宣教協議会実行委員会による準備が思うように進まず、また各教区での宣教協議会に向けた機運を高めることも難しかったため、やむなく1年延期することになりました。けれども、ただ単に延期するのではなく、宣教協議会までの期間をより有意義な時間とするために、管区の諸委員会、聖公会に連なる諸施設、青年たち、主教会などと実行委員会とが分科会を行い、分かち合いの時を持つことが提案されました。この分科会は「ぶどうの枝分科会」と名付けられました。私たちは、「まことのぶどうの木」であるイエス様につながる「ぶどうの枝」ですが、その「ぶどうの枝」同士が、お互いにその恵みと課題を分ち合うというイメージです。「ぶどうの枝分科会」を宣教協議会のプロセスの一部として位置づけ、定期的に開催することになりました。

第1回目の分科会（管区諸委員会編）は、今年の2月25日・3月4日に開催されました。参加者は、管区諸委員会から、礼拝委員会・祈祷書改正委員会、人権問題担当者、青年委員会、正義と平和委員会、女性デスク、ハラスメント防止・対策担当者、日韓協働委員会の代表者の皆さんと、宣教協議会実行委員でした。各委員会へのアンケートの回答をもとに報告があり、その後意見交換の時を持ちました。各委員会のこの10年の働きの恵みと、現在の取り組み、課題について分かち合いました。それぞれの委員会の多様な働きが、すべてイエス様につながつ

ていることに感銘を受けました。

第2回目の分科会（青年委員・青年担当者編）は、5月9日・15日に開催されました。管区の青年委員と各教区の青年担当者、実行委員が参加し、日本聖公会の中での青年たちやその活動について思いを分ち合いました。また、各教区の青年活動の恵みや課題、青年たちの主体性といったことについても話し合われました。宣教協議会においても、青年たちを「お手伝いさん」として扱うのではなく、これから聖公会を担う存在として接することの大切さが共有されました。

第3回目の分科会（原発問題プロジェクト編）は、6月9日に開催されました。参加者は、管区の原発問題プロジェクトのメンバーと実行委員でした。まず、プロジェクト委員長の長谷川清純司祭から「この10年の恵みと課題」と題するお話、プロジェクトメンバーの池住圭さんから「原発と核の問題と聖公会宣教課題について」と題するお話があり、その後意見交換がなされました。この分科会を通して、原発や核の問題は東日本大震災から10年を経てもなお現在の問題であることを強く感じさせられました。

「ぶどうの枝分科会」は、今後も続けられる予定です。来年の宣教協議会に向け、これから多くの「ぶどうの枝」の皆さんと恵みや課題を分ち合えればと願っています。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑥」～宣教協議会未来へ向けて歩む旅～

宣教協議会に向けて昨年1年間は「ぶどうの枝分科会」「ぶどうの枝協議会」を通じて主に管区委員会、各教区宣教担当者の方々と共に祈り、意見を交わして準備を重ねてきました。今年の11月10日（金）～13日（月）に開かれる宣教協議会。現在、プログラムを固め精査する作業が進められています。物語を大事にしたプログラム、子ども達、自分らしく生きることや、声をあげることが困難な人と共に生き働く方々を招いてのパネルトークとグループディスカッション、宣教協働区へ向けて他。過去から現在、そして未来へ向けての協議会となります。準備はこれから益々深まっていきます。

メッセージ「宣教協議会への招き」

実行委員長 主教 磯晴久

*文字数の関係で要約しています。全体の内容は動画配信しています（「2023日本聖公会宣教協議会ブログ」と検索、またはQRコード）

みなさんこんにちは。この宣教協議会は、前回2012年の宣教協議会から10年後に実りを持ち寄ってもう1度協議会をしましょうという約束を受けて開かれます。実りを持ち寄るということですけれども、それだけではなく、その後、新型コロナウイルス、世界各地の争い、環境問題や災害で、多くの人々が本当に苦しんでいます。日本社会にも生きづらさを感じている人がたくさんいます。また教会もいろいろな課題を抱えております。私た

ちは岐路に立っていて、これから道をどう歩んでいくかと悩んでいるところがあると思います。よく聖公会は「神様の国に向かって歩む旅人である」と言われます。正に私たちは今、希望を持って神の国へ歩む旅人としてこの宣教協議会を目指しています。その旅は1年で終わるのではなく、からのための旅です。

先日、中村哲医師の本を読んでいてこんなことに気がつきました。彼は医者としてアフガニスタンに入りました。医療活動をやっておられたのです。でも彼は途中で気づくのです。この人たちに必要なのは水とパンだと。それから、彼は灌漑施設を作り、土地を耕し、地域の人と一緒に歩まれました。水とパン。実はとてもシンプルなことだったのです。

私たちは複雑な社会の中に生きていて、どうしたらいいかわからない状況もあります。本当に私たちが今行わなければならぬ事は何だろうか、関わらなければならぬ事は何だろうかということを発見したいと思います。私たちは神様からいろいろな賜物を与えられています。皆で知恵と力と想像力を出し合い、意見を出し合って新しい宣教のビジョンを発見する、そのような協議会にならと心から願っています。その根底には、主イエスが私たちのところに来てくださった、隣人愛の大切さを伝えるために私たちのところに来てくださった、ということを忘れてはいけません。そこを見つめながら、どうぞいろいろな形でこの宣教協議会にご参加下さいますようにお願いいたします。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑦」～宣教協議会清里への道～

今年の11月10日（金）～13日（月）に山梨県清里にある清泉寮で開催される「日本聖公会宣教協議会」には各教区から教区主教、宣教担当を含めて8名、そして日本聖公会総会で定められた各委員会などの諸部門の代表、そして実行委員が集まる予定です。そして、協議会のプログラムの多くはオンライン配信を予定しており、実際に清里に集まるメンバーだけではなく日本聖公会につながる皆さんと一緒に時間を共有し、今後の日本聖公会の歩みについて思いを深め、共に歩み出していきたいと願っています。

各教区からの参加者、各委員会などの諸部門からの参加者が決まりつつありますが、参加者を対象とした「宣教協議会参加者オリエンテーション」を4月23日（日）と4月27日（木）の2回に分けてオンラインで行う予定です。今年の秋に清里に集まるまでのまだ半年以上ありますが、すでに宣教協議会は始まっています。参加される方ができる限り情報を共有し、清里での宣教協議会までそれぞれの教区や諸部門で準備をして頂き、気持ちを醸成しながら「清里への道」を歩みながら準備をしていきたいと思っています。

参加される方の中には、まだ参加されない方も「宣教協議会って何を協議するのだろうか」「清里に集まって何をするの？」という思いを抱かれている方もいらっしゃると思います。

オリエンテーションではその疑問について丁寧に分かち合う予定です。前回のぶどうの枝だより⑥で実行委員長の磯主教様が「聖公会は神の国に向かって歩む旅人で

あり、正に私たちは今、希望を持って神の国へ歩む旅人としてこの宣教協議会を目指しています。その旅はからのための旅です。」と仰っておられます。宣教とは、神様が主体となってなされる神の国の完成を目指す絶え間ない働きであり、私たちはその働きに招かれています。そして、その招きに応えて神の国を目指す旅をしています。神の国のしるしはこの世界の中になります。それに気づき、発見することによって私たちの心が開かれ、育てられていくことを願って協議会が行われます。

日本聖公会の今後の歩みを考えるすべてのプロセスは神の国を目指す旅であり、祝福されていることを皆さんと分かち合いたいと思います。協議会が私たちにとって希望となり、神様からの祝福を感じられる機会となり、私たち一人ひとりが元気になりたいですね。そしてその「元気」を一人でも多くの方々と分かち合っていきたいと思っています。旅には喜びもたくさんありますが、苦難もたくさんあります。その苦難を乗り越えて旅を続けていくためには希望が必要です。宣教協議会の主題聖句は、「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、

その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ15：5）です。神の国を目指す旅は、イエス様を離れては続けられません。

どうぞ、私たちがイエス様から離れずに旅を続けていくことが出来ますようにお祈りします。「清里への道」が祝福されますように。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑧」 宣教協議会のための祈り／ぶどうの枝分科会（祈祷書改正委員会編）

宣教協議会のための祈り

11月10日（金）～13日（月）に開催される宣教協議会に向けて、実行委員会では「協議会のためのお祈りを作ろう」ということになり、実行委員長である磯晴久主教が次のようなお祈りとしてまとめてくださいました。

「信頼と和解、平和と正義の源である主よ、人間の愚かさと誤りにより、今なお戦争、弾圧、差別、分裂の絶えないわたしたちの世界を顧みてください。日本聖公会宣教協議会へと向かう歩みを祝福し、わたしたちがこれまでの歩みを振り返り、その実りを感謝することができますようにお導きください。そして、新たな歩みの出発点とすることができますように、わたしたちの足元を照らし、知恵と力をお与えください。

あなたは、み子イエス・キリストを通して、すべてのいのち、とくに小さくされている人々と共に生きることの大切さを示してくださいました。どうかぶどうの木である主につながり、生きとし生けるものの『となりびと』となる道を歩むことができますように、わたしたちをお導きください。主イエス・キリストによってお願ひいたします。アーメン」

また、子どもたちとも一緒に祈ることができますように、「祈り（子どもの祈り）」も実行委員会により作成されました。次のような祈りです。

「すべてのもののつくりぬしなるかみさま、あなたのめには、わたしたちはみな、おなじようにとうといものです。どうかわたしたちが、あなたのであわせてくださっ

たひとすべてを、イエスさまがなさったように、たいせつにすることができますように。また、あなたがおつくりになったものすべてを、かけがえのないものとして、だいじにしてゆくことができますように。そしてわたしたちを、ほんとうのへいわがやってくるために、はたらくものとしてください。イエスさまのみなによっておいのりいたします。アーメン」

この2つの祈りには、実行委員会が目指す宣教協議会の姿が示されています。このような協議会となるよう、どうか皆さんもお祈りください。

ぶどうの枝分科会（祈祷書改正委員会編）

標記の分科会が、3月16日に開催されました。分科会としては第4回目です。参加者は、祈祷書改正委員会のメンバーと実行委員でした。祈祷書改正委員会担当主教の吉田雅人主教と専従者の市原信太郎司祭から「祈祷書改正のプロセスと現在の課題、宣教協議会に期待していること」と題してお話をされました。「私たちは共同体としてともに歩んでいく。その歩みを支えるのが祈祷書なのです」。吉田主教のこのような言葉が印象に残りました。また市原司祭からは、現在行われている多岐にわたる祈祷書改正作業についての説明をお聞きしました。その後、分かち合いの時を持ちました。この働きが、神様の祝福とみ守りのうちに終えることができますように。

宣教協議会ブログではこの他さまざまな情報を提供しています。ぜひご覧ください。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑨」 宣教協議会プログラム

一昨年、全国の教会、関連施設・団体、教区、管区諸委員会にアンケートを配布し、2012年以降にそれぞれの場で取り組んでこられた働きについてお聞きしました。

「み言葉に聴き、伝えること」「世界、社会の必要に応ええること」「生活の中で福音を具体的に証しすること」「祈り、礼拝すること」「主にある交わり、共同体となること」（「教会の5要素」から）

事柄の大小にかかわらず、それぞれの置かれた地域、生活の場で、キリストのぶどうの枝となる働きが回答に寄せられました。それらを見る形で宣教協議会に持ち寄ってみよう、そのような意図から、各教区・教会等による「実り持ち寄りブース」が計画され、11月に清里に集まる参加者の皆さんを通じて準備をお願いしていま

す。ローカルに立つ教会の、今あるものを集合させることによって見えてくるものは何でしょうか。今回の宣教協議会はそこから出発となります。

信徒数の少ない教会の話を聴くプログラム「私たちのあゆみ～物語を聴く」も予定されています。沖縄県名護市にある屋我地聖ルカ教会、長崎県対馬市にある厳原聖ヨハネ教会、秋田県大館市にある大館聖パウロ教会がご協力くださることになりました。過疎や高齢化が進む地域や少ない信徒の群れであっても、神様がなされている宣教のみ業に参与し、福音を体現することができることを、証するものになるのではないかと期待します。

昨年開催された「ぶどうの枝協議会」では、宣教協議会で、地域や社会で出会う人と共に歩み、共に生きる働きに焦点を当てることが提案されました。プログラムとしてどのように考えられるか検討を重ねた結果、「命の現場から聴く」パネルディスカッションと分科会が計画されています。こどもと生きる現場、多様性に生きること、カルトの問題、ホスピタルケア、貧困の問題について向き合い働かれている方々をゲストとしてお招きします。パネリストの紹介は宣教協議会ブログの「管区事務所だより4月号」から見ることができます。

3月～5月には、祈祷書改正委員会、女性デスク・ジェンダープロジェクト、主教会と「ぶどうの枝分科会」を開きました。日本聖公会の取り組みや課題に目を向け、

変革への展望と未来を見据えるためのプログラムは宣教協議会のもう一つの柱となります。これらは現在、実行委員会で詰められています。

私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。(ヨハネによる福音書15:5 宣教協議会主題聖句)

いつも私たちの真ん中に「ぶどうの木」であるイエス様がおられることを見つめながら、11月に向けての準備の過程が、皆さんと共に歩む宣教協議会、清里への道のりであるようにと願っています。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑩」 宣教協議会プログラムについて（前号からの続き）

ぶどうの枝だよりも第10号となりました。清里での宣教協議会開催も近づいて参りました。今回は前回第9号の続きとして、宣教協議会のプログラムの中からいくつか紹介いたします。

「宣教協働区アワー」

このプログラムは、東日本宣教協働区、中日本宣教協働区、西日本宣教協働区ごとに分かれて時間を過ごします。内容については各宣教協働区の協働委員の皆さんに考えて頂きますが、この時間の前に、主日聖餐式を祝げ、主教会からのメッセージをお聞きする予定ですので日本聖公会総会で宣教協働区制への道を歩むことをご提案された主教会からのメッセージを思い巡らせたり、これまでなかなかお目にかかることの出来なかった協働区のメンバーと一緒に昼食を食べながら、出会いと交わりが豊かになることを願っています。

「清里コール」（仮称）

今回の宣教協議会の集大成でもあります。何か「宣言」というような形式ではなく、「呼びかけ」のような形式でまとめていきたいと考えていて、私たち実行委員会では仮に「清里コール」と呼称しています。2022年に開催されたランベス会議でも「ランベスコール」という呼びかけがなされておりそれからヒントを得ました。宣教とは、神様が主体となって進められている、神の国の成就を目指す絶え間ない働きです。私たちはこの働きに招かれています。

そしてその招き（コール）は今の時代、そしてそれぞれの状況においてどのように変化してきているのか、私たちはそれを机の上で考ええるのではなく、10年の実りを持ち寄り、私たちのあゆみ～物語を聴き、いのちの現場で働かれている5人の講師の皆さんからお話を伺い、そしてグループに分かれて思いを分かちあうことによって神様からの呼びかけ（コール）に応えていきたいと思います。11月の宣教協議会に至るすべてのプロセスが「清里コール」へつながっています。

コールについてのイメージですが「難しい言葉を使わない」

「強制されるものではなく、非難の対象とされるものではなく、教会の宣教を主体的に担っていくきっかけとなるもの」、そして何よりも大切にしたいことは清里コールによって皆が励まされ、元気になる内容にしたいと思っています。皆さんお一人お一人の心に響くものが出来ますようにと願っています。

「礼拝について」

宣教協議会を支える礼拝について最後に紹介します。礼拝はセーフチャーチワーキンググループ、祈祷書改正委員、青年の皆さんに協力を頂き豊かな祈りの時間を持つ予定です。神様の御声に耳を傾け、となりびとのために代祷を祝げ、聖歌を賛美する事も神様からの呼びかけに応える大切な時間です。

コロナ禍を経て開催されようとしている宣教協議会です。

清里に実際に集まる参加者のみならず主を信じる信仰の仲間とご一緒に神の国への呼びかけに応えて参りたいと思います。いくつかのプログラムは配信も予定されています。

どうぞ皆様、お祈りください。
そして、宣教協議会に関心を寄せて頂きますようにお願ひいたします。

教区報掲載「ぶどうの枝だより⑪」 宣教協議会 速報

11月10日（金）～13日（月）までの日程で、清泉寮にて、2023年日本聖公会宣教協議会が開催されました。各教区から、また管区諸委員会から信徒と聖職132名が集まり、「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマとして、日本聖公会のこれまでとこれからについて分かち合い、話し合いました。ここでは速報としてその概略を記します。

「実り持ち寄りブースの紹介」。このプログラムでは、前回の宣教協議会から現在までの各教区や管区諸委員会の働きにおいてどのような実りがあったのか、また現在の課題は何かをブースの展示を通して分かち合いました。各ブースから多くの実りの報告がありました。中には、解決していない課題もまた実りの一つとして大切に扱おうとするブースもありました。

「私たちのあゆみ～物語を聞く」。3つの教会の信徒の皆さんのお話をお聴きしました（録画映像を視聴しました）。3つの教会は信徒数の少ない教会ですが、それぞれの教会で豊かな信仰生活が営まれていることが分かち合われました。

「いのちの現場から聞く」。5人の語り手の皆さんから、「となりびと」と出会い（あるいは当事者として仲間とともに歩み始め）、今も一緒に歩み続けている物語をお聴きました。お一人おひとりのお話が、それぞれに心に深く残るものでした。その後語り手ごとに5つの分科会に分かれ、さらに分かち合いの時を持ちました。

「主教会からのメッセージ」「宣教協働区アワー」。武藤謙一首席主教から、宣教協働区・伝道教区制導入の経緯についてお話をありました。また他の主教からは、「この世界の中で『となりびと』となるために大切にしたいこと」、「この世界における宣教・牧会で大切にしたいこと」、「宣教協働・教区再編において大切にしたいこと」という3つのテーマでお話をありました。その後、各宣教協働区グループに分かれて交わりの時を過ごしました。

2回にわたる「グループシェアリング」では、小グループに分かれ、前半は、それまでのプログラムの感想を述べ合い、後半は、最終日の「2023年宣教協議会からの呼びかけ」作成に向け、「私たちが、神様の招きに対して応答できなかったことは何か」「私たちは、招きにどう応えていくか」が話し合われました。その後、グループごとの発表を全体で分かち合いました。

最終日に、ドラフトコミッティメンバーによる「呼びかけ」案をもとに意見交換が行われましたが、時間内では収まらず、その場で最終的ななかたちにまとめるることは難しいとの結論となりました。「呼びかけ」はドラフトコミッティのメンバーが改めて案を作り、参加者の合意のもとに正式なものとして出される予定です。

宣教協議会の録画映像は、「日本聖公会宣教協議会ブログ」から現在でも視聴可能です。ぜひご覧いただき、日本聖公会のこれからについて、皆さんとご一緒に考えていくべきだと思います。

2023年日本聖公会宣教協議会を前にして くいのち 尊厳限りないもの一となりびととなるために> in 清里 実行委員長 主教 アンデレ 磯晴久 (大阪教区)

主の平和

いつも宣教協議会のことを憶え、お祈りくださいますことを心から感謝申し上げます。いよいよ宣教協議会が近づいて参りました。宣教協議会は、2023年11月10日(金)～13日(月)に清里で開催されますが、私たち実行委員は、この期間だけが宣教協議会だとは考えておりません。準備が開始された時から宣教協議会は始まっており、そして宣教協議会後も、宣教協議会は続いていくということを肝に銘じて歩んでいます。皆さまもそのことを共有してくださると大変うれしく思います。宣教協議会の実りが日本聖公会の宣教・伝道活動に寄与し、神さまの御心にかなう活動が展開されますようにお祈り致します。

<清里>

清里と聞いて、私の心にまず浮かびます聖歌は、444番です。

「山辺に向かいて われ目を上ぐ
助けは いづかたより来たるか
天地の み神より
助けぞ われに来たる」

また、清里と聞いて、私の心に浮かびます聖書箇所は、詩編121篇1～2節です。「目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る 天地を造られた主のもとから。」

清里は、宣教協議会を開催するにふさわしい場所です。お集まりくださる皆様と一緒に、清里の山々を見つめつつ、素晴らしい自然を創造された神さまに思いを向け、神さまの御心を祈り求めたいと願っております。

さて、私は今2つのことを念頭において、宣教協議会のことを思い巡らしています。それは「清里の風」「清里の星」です。

1. 清里の風

私は清里で、どのような「風」が吹くか、とても楽しみにしています。聖霊の働きは、神さまからの「息吹き」であり、また「風」にたとえられます。主イエスは、ニコデモに言われました。「『あなたがたは新たに生まれなければならない』とあなたに言ったことに、驚いてはな

らない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。…」(ヨハネによる福音書3:7) 風はすべての人々に区別なく、平等に吹きます。神さまからの「風」はすべての人々に区別なく、平等に吹きます。清里での私たちの話合いや交流、行動の中に、神さまからの私たちの思いを超えた「風」が吹き、私たちの背中を押してくれるでしょう。

清里で、どのような神さまからの「風」が吹くでしょうか。参加者の皆さんと共に楽しみにしたいと思います。そして、その「風」を多くの皆様と分かち合いたいと願っております。

2. 清里の星

先日、星の写真家の方のインタビュー記事を読みました。「撮影するのにいい場所はどこですか。」という問いに、「今は、八ヶ岳、清里です。」と答えておられました。

清里で私たちは、どのような「星」に出会うでしょうか。「そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』」(マタイによる福音書2:1) 主イエスがお生まれになった時、東方の博士たちは星に導かれてやってきました。私は、清里で私たちが、世界を覆う暗闇に輝く星に出会い、導かれることを期待しています。

宣教協議会の大きなテーマは「いのち 尊厳限りないもの一となりびととなるために」です。「いのち」、それは最も大切なのですが、今地球上でこれほどないがしろにされているものはありません。人間の欲望が、ささやかな命を傷つけ、時に奪ってしまいます。戦争、弾圧、差別、自然破壊の道(ヘロデの道)ではなく、東方の博士たちが「別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」(マタイによる福音書2:12) ように、神さまの「風」に乗り、また主イエスを指し示す「星」に導かれて、私たちは、「隣人と共に歩むいのちの道」を歩み出したいと願っております。

宣教協議会のため、さらなるお祈りをよろしくお願い致します。

2023年日本聖公会宣教協議会で実感したこと 日本聖公会首座主教 主教 ルカ 武藤謙一

2023年に開催された日本聖公会宣教協議会での提言に基づいて、宣教・牧会の10年の実りを持ち寄る宣教協議会が、11月10日～13日、「いのち尊厳限りないもの～となりびととなるために～」をテーマに、各教区、管区委員会、諸団体から約130名が参加して、山梨県清里で開催されました。

「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」（詩篇133：1）この宣教協議会で何よりも実感したことは、この詩編の言葉です。普段はなかなか会うことができないわたしたちですが、全国各地から集まった仲間たちが、互いの存在を尊重しあう雰囲気を大切にしながら、共に祈り、聴きあい、語り合い、食事を共にする。もうそれだけで十分に平安、感謝、喜び、励ましなどたくさんの恵みをいただきました。さらにこれまでにはなかったことですが、今回は主なプログラムはユーチューブ配信されました。全国各地の多くの皆さんのが視聴してくださいました。正確なことは分かりませんが、毎日300人ほどが視聴くださったと聞いています。その方々をも含めてわたしたちが主の家族として一つであることを実感できたことは何よりも大きな恵みでした。

今回の宣教協議会では「主教会からのメッセージ」という時間があり、宣教協働区と伝道教区制を踏まえての各教区主教の想いが語られ、また宣教協働区ごとに集まる時間が設けられました。このようなプログラムが準備されたように、宣教協働区内の他教区との宣教協働なしには、各教区、教会の宣教・牧会はないということです。各教区の主体性や独自性は尊重されながら、同時に他教区との協働なくしては自教区の宣教・牧会もなされないということを強く意識させられました。その意味では今回の宣教協議会に長年の宣教協働のパートナーである大韓聖公会などアジアの聖公会からの参加が全くなかったことは残念なことでした。

最終日には「清里からのよびかけ」について協議しましたが、ドラフト作成チームからの原案が示されました。それについて協議し、参加者一同の同意を得ることはできませんでした。しかし、そのことは参加者一人ひとりが、他人任せにするのではなく、積極的に協議会に参加したことも証しであると理解しています。また清里

での3泊4日で宣教協議会が終わったのではなく、これからも参加者一人ひとりが自分の課題として受け止めていこうとしているのです。

上述のような少し混乱した状況のなかで閉会聖餐式が献げられました。もっと議論を続けるべきとの意見もあり、わたし自身もそのように考えてもいましたが、こんな時だからこそ、聖餐式、サクラメントに預かることが大切であると、今改めて思っています。礼拝すること、主を仰ぎ見て主にすべてを差し出し、靈の恵みによって整えらえて、この世へと遣わされていくこと、これこそが、わたしたちの原点なのです。

宣教協議会に参加してくださった皆さんに感謝いたします。特に宣教協議会実行委員会の皆さんには心から感謝いたします。またオンラインで視聴くださった皆さん、祈りをもって支えてくださった全国各地の皆さん、便宜を図ってくださった清泉寮のスタッフの皆さんにも感謝いたします。

各教区、教会、管区の委員会などで、この協議会から出される「清里からのよびかけ」を浸透させていくか、どのように実践していくか、参加者の皆さんを中心にして、各教区で、日本聖公会全体として取り組みが始まるこことでしょう。わたしたちが、一つひとつの命を尊び「となりびと」として神と人びとによりよく仕えていくことができますように、聖靈の導きを祈りつつ、歩んでまいりたいと願っています。

2023年日本聖公会宣教協議会で感じたこと 宣教協議会実行委員長 主教 アンデレ 磯晴久 (大阪教区)

去る2023年11月10日～13日清里・清泉寮を会場に、日本聖公会宣教協議会が開催されました。後日、宣教協議会からの提言や報告書も発行されますが、協議会の簡単な報告と感じたことをお伝え致します。

前回2012年と同じ「いのち 尊厳限りないもの」という大テーマのもと、そこに「一となりびととなるために一」という副題をつけて、すべての教区から実行委員、管区の諸委員含め約130名の参加者が集いました。

実行委員会では、宣教協議会は清里・清泉寮での協議会開催だけではなく、準備に入りました3年前から、宣教協議会は始まっている、そして協議会後も続くと認識しております。まず管区諸委員・教区・教会関係諸団体にアンケートを取り、この10年大切にしてこられたことなどをお聞きしました。また「ぶどうの枝分科会」と称して、日本聖公会に関係するできるだけ多くの方々のお話を「聴く」ということ、「お互いに聴き合い、語り合う」ということを大切に準備を進めて参りました。

宣教協議会の前半は、準備と同様、しっかり耳を傾ける、「聴く」ことを大事にするプログラムがありました。雨と深い霧の中、全国各地から皆様が集まって来てくださいました。1日目は各教区に実り持ち寄りブースを用意して頂き、2012年からの各教区・委員会・諸団体の歩みを聴き、分かち合いました。それぞれが個性ある歩みをしておられることがわかり、ミニバザーもあり、大変盛り上りました。

続いてリモート配信や録画によって、「私たちのあゆみ～物語を聴く」というプログラムに入りました。3つの教会から、物語を聴きました。教会は、沖縄教区屋我地聖ルカ教会、九州教区厳原聖ヨハネ教会（対馬）、東北教区大館聖パウロ教会でした。とても暖かな空気が流れる心豊かな時間でした。たとえば、秋田の大館の教会、幼稚園があるのですが、幼稚園のこと、子どもたちのことを大切に祈っておられること、東京教区聖マーガレット教会と繋がっておられます。教区を越えて、大きな教会と小さな教会がよき交流をしておられる姿が印象的でした。（東日本大震災被災者支援 この大小2つの教会で2000枚のお座布団を作製し、届けたそうです。）

2日目、前日の霧がうそのように晴れました。気温は1度。冷たくさわやかな空気に、心が洗われる朝でした。朝の礼拝に先立って、現在改訂中の日本聖公会祈祷書に

ついて、笹森田鶴主教から、その理念・ビジョンについて伺いました。

「いのちの現場から聴く」では、5人の方からお話を伺いました。「保育園の現場から、こどもたちとのかかわりを通して、神さまが語っておられること、神さまからのこどもたちへ豊かな祝福の報告」、「チャプレンと言う立場から臨床の現場で寄り添うこと（英國での第2次世界大戦中、日本の捕虜となったイギリス人元兵士の方々との和解の経験）」「ホームレス支援活動から 貧困問題について」、「性的マイノリティの相談業務の現場から性的多様性・多彩性について」、「カルト問題 旧統一教会をはじめとするカルト問題の現場から」など貴重なお話を聴く機会となりました。徐々に協議会は「傾くこと」から、「参加者相互が語り合い、聴き合う」ステージへと移っていました。20のグループに分かれてのグループシェアリング、バイブルシェアリング、青年による分かち合いの礼拝が持たされました。

3日目は主日聖餐式をもってスタート。礼拝後、主教会からのメッセージ、宣教協働区アワーと続き、東日本・中日本・西日本と分かれて、現状の共有と今後の展望を話し合う交流の時が持たれ、まとめに入っていました。宣教協議会の提言「（仮称）清里コール」を出したかったのですが、皆様からの意見・提案が大変多く、多岐に及んでいたため、ドラフト・コミッティでは、まとめきれませんでした。持ち帰りまして、コミッティの皆さんと実行委員会は協働して話し合いを始めております。年内には提言が出され、皆さんと分かち合いたいと願っております。

最後に閉会聖餐式をささげて、全日程を終了しました。神さまの導きと、参加者の皆様の積極的な参加と協力、主教をはじめ、全国の皆様のお祈りとご支援、そして今も心を込めて、作業を続けている実行委員と関係者の皆さんに感謝致します。

2023年日本聖公会宣教協議会を終えて

宣教協議会実行委員会副委員長 司祭 ステパノ

越山哲也（東北教区）

日本聖公会史上初めてのオンラインによる日本聖公会第65（定期）総会が2020年10月に開催され、日本聖公会宣教協議会開催および実行委員会設置の件が決議されて準備が始まりました。当時はコロナ禍のただ中にあり、最初の実行委員会は総会後の2020年12月8日にオンライン（ZOOM）で開催され、実行委員はパソコンのモニター越しで初顔合わせでした。そこでまず確認したことは「宣教協議会が日本聖公会に連なる一人でも多くの人に関心を持って頂くように丁寧に情報発信をし、キャッチボールをして準備を進めていく」ことでした。

コロナ禍になって従来のように対面で集まることは出来ない日々が続きましたが、オンラインミーティングを利用しての実行委員会会議、そして日本聖公会の各諸委員会の皆さんとのぶどうの枝分科会（オンライン）を重ねて参りました。2012年に浜松で開催された宣教協議会の提言の中に「十年後に『2022年日本聖公会宣教協議会』を開催し、十年間どのように〈宣教・牧会〉に取りくむことができたのかを分かち合うことを合わせて提案します。それは同時に、わたしたちの〈宣教・牧会〉の果実を刈り取る収穫感謝の祭りとなるでしょう」とあります。

オンラインによるミーティングによって実行委員会は日本聖公会の各委員会の皆さんと相互に意見を交わしながらこの10年のあゆみを分かち合って参りました。それぞれの働きには恵みと課題がありそれらと一緒に担っていく主にある仲間であることを確認出来たことは嬉しいことでした。

宣教協議会はコロナ禍が収まらず開催を1年延期することになりましたが、その1年をさらに宣教協議会へ続いていくプロセスと位置づけて可能な限り丁寧に情報を管区事務所だより、各教区報の紙面をお借りして「ぶどうの枝だより」として発信し、また参加者の皆さんともオンラインによる顔合わせを行い、各教区でそれぞれ十年間の実りを持ち寄って頂くために準備をお願いしました。

宣教協議会当日は、それらの実りを持ち寄る「みのり持ち寄りブース」の紹介から始まりました。各教区、各諸委員会がそれぞれ工夫を凝らして収穫の恵みを発表し、またミニバザー（販売）の時間も設けられました。私はその場面が今でも大変印象的に残っています。まだ初対面で緊張感があった参加者同士がお互いのブースを回りながら語り合っている様子を見て「宣教協議会をこうし

て皆で集まって開催出来て良かった」と心から思いました。オンラインの利点もありますが、やはり対面で会える恵みは大きいと強く感じました。「私たちのあゆみ～物語を聴く」では3つの教会が紡いできた物語を伺いました。

どの教会も一人一人が出来ることを神様にささげてそれぞれの地で神様の宣教のみ業に参与されており大きな励ましを頂きました。「いのちの現場から聴く」ではいのちの現場に立たれている5人の語り手の皆さんから話しを伺いました。

主教会からのメッセージでは一人一人の主教様から熱い心の込もったメッセージを拝聴いたしました。グループに分かれての分かち合いでも参加者同士が互いに思いを分かちあうとても良い時間が持てたと思います。それらを経て協議会最終日に「清里からの呼びかけ」を参加者一同でまとめる予定だったのですがたくさんの方から貴重なご意見を頂戴し、その実りをドラフトコミッティと実行委員会でさらに話合って参加者の皆さんと共有してまとめていくことになりましたのもう少しお待ち頂ければと思います。

協議会の最後に閉会聖餐式で読まれた福音書の箇所がマタイ28章16節～20節だったのですが、主と山に登った弟子たちがそこで主に出会い、宣教命令を受け、そして世の終わりまでいつまでも共にいると言われた主の言葉を武藤首座主教が取り上げて説教をしてくださいました。呼びかけをまとめきれずにモヤモヤとしていた私の心に主が触れてくださり、礼拝中に涙が溢れてしまいました。

宣教協議会は終わりましたが、これからが本当に大切な時だと思います。宣教協議会での恵みと課題をまとめて皆さんに呼びかけさせて頂き、ご一緒に協働して参りたいと思います。世の終わり（御國の完成）まで私たちと共におられると約束された主が絶えず私たちを宣教へ招いてくださっていることを常に心に抱きながら。

2023年日本聖公会宣教協議会で感じたこと ～終わっても終わらない 神の民の歩む道～ 宣教協議会実行委員 福澤真紀子（東京教区）

宣教協議会の間、様々な現場から語られる言葉「物語」を聴き、正に働いておられる神様の業とそこに参与しようとする教会の姿について、思い巡らし、話し合いました。今回の宣教協議会を大きな流れで見ると、1日目は10年を携え皆が集い、今ある賜物を祝い、2日目には、教会の広い宣教の現場について聴き、考えました。3日目は、これから歩みを見出すために、そして4日目、恵みを携えてそれぞれの場へと再び散らされた、となるでしょうか。一部のプログラムは配信されました。今回、清泉寮の会場に集まれなかった方々にも、協議会のプログラムや様子をお伝えできることは画期的でした。関心を寄せて、皆様がそれぞれの場で宣教協議会に参加くださいましたことに感謝いたします。

準備されたプログラムは一つ一つが今までにない、身近で具体的な内容だったと感じています。

「私たちのあゆみ～物語を聴く」では、規模が小さくても神様を信頼しそれぞれの賜物によって生きる教会の姿が、聴く人の心に希望を与えました。「いのちの現場から聴く」では5人の語り手が自らの体験から「となりびと」について語るのを聴き、聴こうとしなければ聞こえない声に私たちはどうやって耳を開いていけるのか、神様によって顕される恵みや癒しの業について、分科会で更に分かち合いの時をもちました。

祈祷書改正やセイフ・チャーチについて、また、宣教協働区・伝道区制も大事なトピックでした。この10年間に始まり、日本聖公会全体として現在進行形で取り組まれていることを、参加者が自分たちのこととして共有できた貴重な時間となりました。10人の教区主教によるリレートークでは「この世界にある教会」の目指す方向が示されたのではないかと思います。各プログラムの中身は録画で見ることができます。

実行委員会としては、「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」のテーマが協議会の設定そのものにいきわたるよう工夫しました。協議会全体でみんなが安心して気持ちよく過ごすために「大切にしたいただきたいこと」の共有を参加者にお願いし、話し合いのプログラムの度に確認しました。また、環境への配慮として、マイボトルの持参が呼びかけられました。いのちを大切にすること、となりびととして生きるために、具体的なお願いであり、必要な前提でした。

至らなかったところもあります。多様な方達が集まれるようになると、2022年の夏に開かれた「ぶどうの枝協議会」の際に意見が交わされましたが、障がいのある方や小さい子どものいる母親の参加ができるようなケアはできず、仕事を持つ人には参加が困難な日程でした。各地からの必要はあったにもかかわらず、主日礼拝の配信をすることは叶いませんでした。多様性を抱く神の群れとなるためには、根本的な設定を整えていく必要を感じます。

参加者の方々はタイトスケジュールにくたくたになりながらも、協議会中、真剣に聴き合い話しあってくださいました。現在、宣教協議会参加者によるドラフト・コミッティがまとめの作成に力を注いでくださっています。この協議会で目指すまとめは一方的なものでなく、「呼びかけ」として出されると理解しています。「呼びかけ」ですから、それを見た皆さんからの応答を必要とします。

神様の恵みの業は具体的だと感じます。事柄の一つ一つは違っても本質は、必ず普遍へ繋がっています。生きた枝が「ぶどうの木」に繋がっているように。それぞれの教会、また私たちはイエス様に繋がる枝として、個別で具体的な働きに招かれていることを、宣教協議会を通して感じました。現代に生きる教会の、私たちのACTS（=使徒言行録）を始めましょう。終わらない宣教協議会の道のりで。

SNS・オンライン配信

今回の宣教協議会では広報媒体のひとつとしてSNSを活用しました。

会期中のプログラムや礼拝は、一部を除きリアルタイムでオンライン配信しました。配信を通して、会場にいなくとも多くの方が同じ話を聴き、会場の熱気を少しでも共有できたのではないかと感じます。各教区や教会にて振り返りや分かち合いを行う際にも、保存された配信映像を役立てていただけたら幸いです。P25のQRコードから映像をご覧いただけます。

ブログ

<https://2023-missionconference-nskk.blogspot.com/>

Facebook

2023年日本聖公会宣教協議会

Instagram

@2023m.c_nskk

YouTube

@2023M.C_nskk



2023年日本聖公会宣教協議会にあたって

日本聖公会 首座主教
む とうけんいち
主教 ルカ 武藤謙一

はじめに

日本聖公会宣教協議会に参加してくださる各教区代表の皆さん、管区諸委員、関係団体の皆さん、そして実行委員会の皆様に感謝申しあげます。また今回はオンラインでの参加者もおられます。4日間の短い期間ではありますが「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」のテーマのもと、2012年に開催された日本聖公会宣教協議会以降の各教区の実りを分かち合い、またこれから日本聖公会の在り方や歩むべき方向性をご一緒に協議してまいりましょう。清里の豊かな自然のなかで、ともに主を賛美し、ともに聴き・語り合い、食事を共にし、主にある交わりを深めながら、それぞれの体験と賜物を出し合って実り多い宣教協議会になることを信じています。皆さまのご参加を心から歓迎いたします。

1995年宣教協議会

1995年、「歴史への責任と21世紀への展望」をテーマに宣教協議会を開催しました。敗戦後50年という時でもあり、協議の中心は日本聖公会の戦争責任を巡ってでした。日本聖公会が、戦前の天皇制軍国主義に抵抗することができず、結果として侵略戦争に加担してしまったことを認め、日本聖公会の戦争責任を告白し、アジアの兄弟姉妹の皆さんに謝罪することを宣言しました。この宣言に基づき、翌1996年の日本聖公会第49（定期）総会において、「日本聖公会の戦争責任に関する宣言」が決議されました。アジア諸国の聖公会に対して公式に謝罪したことを契機に、フィリピン聖公会、大韓聖公会との交流・宣教協働へつながりました。また1998年ランベス会議でも高く評価されました。他方、日本聖公会内では必ずしも各教会の信徒・教役者に広く受け止められることができませんでした。またこの時の宣教協議会においては1988年ランベス会議で決議されたアングリカン・コミュニケーションの宣教目標である「福音伝道の十年」に基づき、日本聖公会の宣教課題が明確にされました。

2012年宣教協議会

1995年宣教協議会から10年を経たころから、次の宣教協議会開催の必要性が語られるようになりました、2008年5月に開催された第57（定期）総会で「日本聖公会宣教協議会及びプレ宣教協議会開催の件」が決議されました。信徒の減少と高齢化、聖職数の減少、財政の逼迫という日本聖公会の現状、格差社会といわれ様々な問題が起こっている日本社会の現状、世界各地で戦争や暴力が止まないなかで、日本聖公会が平和の器としてどのように歩むかを協議するためでした。

この決議に基づき準備を進めているなかで、東日本大震災と津波、また原子力発電所事故が起こります。日本聖公会は「いっしょに歩こう！プロジェクト」を立ち上げて被災者支援活動を始めましたが、東日本大震災と原子力発電所事故によってもたらされた状況は、わたしたちの在り方を根本的に問いかけるものであると気づかされました。そして2012年9月に「いのち尊厳限りないもの～宣教する共同体のありようを求めて～」をテーマに日本聖公会宣教

協議会が開催されました。この協議会では「日本聖公会<宣教・牧会の十年>提言」がまとめられ、教会の5つの要素に基づいて、丁寧な宣教・牧会を行っていくという指針が示されました。また、10年後にその実りを持ち寄って収穫感謝の時を持つことも提案されました。

2023年宣教協議会

本来ならば2022年に開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大により本年の開催となりました。実行委員会では参加者だけでなく、より広く各教会の信徒・聖職に関心をもってもらい、情報を分かち合い、ともに宣教協議会に参与することを願って、「ぶどうの枝だより」を出し、且つ各教区報に掲載してもらっています。また「ぶどうの枝分科会」と称して、主教会や管区諸委員会、諸団体とのon-lineによる情報交換も精力的に行い、準備を進めてくださいました。

日本聖公会の各教区・教会の現状はある意味ではより深刻になっています。2020年に開催された第65（定期）総会で決議された「宣教協働区・伝道教区制の設置」により、教区再編をも視野に入れた教区間宣教協働が始まりました。また日本や世界を取り巻く状況は、ウクライナ、ミャンマー、スーダンなど戦争・紛争、暴力が各地に起こり、また地球温暖化による豪雨災害や干ばつはますます顕著になってきています。経済格差の拡大、偏見や差別による人権侵害は一向になくななりません。こうした教会や社会の状況のなかで、地方の教会の取り組みや、信徒の日常の体験や信仰の喜びを聴くことを通して、わたしたちは何を大切にし、だれと、どこに向かって歩んでいくのか、どのように神の栄光を顕していくのか、聖霊のお導きのなかで見いだしてまいりましょう。



ようこそ、宣教協議会へ

実行委員長
主教 アンデレ 磯晴久

主の平和

皆様が宣教協議会をつくり上げていく仲間として加わってくださったことを、神さまに感謝します。そして皆様を心より歓迎申し上げます。

宣教協議会は、2023年11月10日（金）～13日（月）に清里で開催されますが、私たち実行委員は、この期間だけが宣教協議会だとは理解していません。

準備が開始された時から宣教協議会は始まっており、そして宣教協議会後も、宣教協議会は続していくということを肝に銘じて歩んでいます。皆さまもそのことを共有してくださると、大変うれしく思います。

さて、今、私は2つのことを念頭において、宣教協議会のことを思い巡らしています。それは「清里の風」「清里の星」です。

1. 清里の風

私は清里で、どのような「風」が吹くか、とても楽しみにしています。聖霊の働きは、神さまからの息吹きであり、また風にたとえられます。主イエスは、ニコデモに言われました。「『あなたがたは新たに生まれなければならない。』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。

風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。…」（ヨハネによる福音書3:7）風はすべての人々に区別なく、平等に吹きます。神さまからの風もすべての人々に区別なく、平等に吹きます。清里での私たちの話合いや交流、行動の中に、神さまからの私たちの思いを超えた風が吹きます。

清里で、どのような神さまからの「風」が吹くでしょうか。皆さんと共に楽しみにしたいと思います。

2. 清里の星

先日、星の写真家の方のインタビュー記事を読みました。「撮影されるのにいい場所はどこですか。」という問いに、「今は、八ヶ岳、清里です。」と答えておられました。

清里で私たちとは、どのような「星」に出会うでしょうか。「その時、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。『ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。』」（マタイ2:1）主イエスがお生まれになった時、東方の博士たちは星に導かれてやってきました。私は、清里で私たちが輝く星に出会い、導かれることを期待しています。

宣教協議会の大テーマは「いのち、尊厳限りないもの～となりびととなるために～」です。「いのち」、それは最も大切なものです。今地球上でこれほどないがしろにされているものもありません。戦争、弾圧、差別、自然破壊の道（ヘロデの道）ではなく、東方の博士たちが「別の道を通って帰って行った。」（マタイ2:12）ように、神さまの「風」に乗り、また主イエスを指し示す「星」に導かれて、私たちは、「隣人と共に歩むいのちの道」を歩み出しましょう。

主の導きを祈りつつ。



イエス様とつながって

副実行委員長
司祭 ステパノ 越山哲也

主のみ名を賛美いたします。

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」（ヨハネ15:5）

私の愛唱聖句の一つであるのですが、数年前にぶどうの世話をさせて頂く機会を経てますますこのみ言葉を大切に日々生きてています。

私が以前に定住していた教会幼稚園の園庭にぶどうの木が1本あります。この1本から毎年豊かな実りをつけたぶどうを秋の収穫時に園児と一緒においしく頂いていました。おいしいぶどうを実らせるための作業はいくつかあるのですが、まずはまだ春が到来する前の2月下旬ぐらいの寒いうちに枝の剪定をすることです。新芽がついている部分を残して思い切って枝を剪定していくのですが、こんなに切って大丈夫なのだろうかと心配になるぐらい切ります。しかし、1本の木からいくつにも枝分かれしている枝の新芽部分を切り離さなければ大丈夫なのです。やがて、春が到来し、夏には緑の葉っぱが生い茂り、短かった枝もぐんぐ

ん成長して実をつけ、そして秋にはおいしいぶどうが実るのです。

まさに聖書のみ言葉どおりなのです。いくつにも枝分かれしているぶどうの枝はぶどうの木としっかりとつながっていれば実を結ぶのです。ぶどうのお世話をする経験が与えられたからこそ実感があります。

宣教とは神様が主体となってなされる神の国の実現に向けて決して止まることのない働きで、その働きに私たち一人一人は、招かれつづけています。わたしたちはみんなぶどうの木であるイエス様につながっている仲間です。言葉だけでなく本当にそうだよねと思えるような宣教協議会となりますように。一人一人がイエス様から祝福を頂いているという実感こそが神の国への招きの働きに参与していこうという力になる事を私は信じています。



新しい「神の国への招き」のかたち（方向性） を発見していく場

副実行委員長
司祭 サムエル 北澤 洋

主の平和がありますように。

記録によりますと、今回の宣教協議会の第1回実行委員会は2020年12月8日に行われています。それから3年弱の準備期間を経て、いよいよ宣教協議会本番を迎えることになるかと思うと、感慨深いものがあります。

この間私たちは、皆さんからアンケートを取り、テーマを考え、プログラムを立て、そのプログラムを具体化するための検討を重ねてきました。このような準備を進めることを通して、あまり知識や経験が豊かではなかった私たちは、「宣教協議会とは何か」ということについての理解を少しづつ深めていったように思います。

宣教協議会とは何か。私たちの理解は次のようなものです。

「宣教」 = 神様が主体となってなされる「神の国への招き」のこと。また、神の国へ招かれた私たちが、今度は神様に派遣され、他の人びとを神の国へ招くこと（=ミッション）。

「協議会」 = 参加者がプログラムを通して、ともに学び、気づき、語り合い、新しい「神の国への招き」のかたち（方向性）を発見していく場。

発見していく場ですから、そこで皆さんがどういう発見をされるのか、前もって言うことはできません。ただ私が願うのは、そこで発見されるものが、これから私たちの歩みを支えてくれるもの、私たちの背中を押してくれるもの、私たちを元気にしてくれるもの、そういうものであってほしいということです。

信徒の高齢化、財政の逼迫、教役者不足。私たち日本聖公会が抱える問題を数え上げればきりがありません。しかし私たちは、そのような問題を抱えつつも、なお前に進みたい。となりびととともに、笑顔で信仰生活を送りたい。そのための何かをこの宣教協議会で発見することができれば、きっと素晴らしい協議会になるのではないかでしょうか。

皆さんにこの協議会でさまざまなものを発見し、それを最終日に話し合われる「清里コール」（仮）に結実することができれば、と願っています。

大切にしたいたいこと ～みんなが安心して気持ちよく過ごすため～

1. 話しやすい雰囲気を作る

- ・他の人が話しているときは、さえぎらずに最後まで聴きましょう。
- ・他の人に対して敬意を払い、お互いの考え方の違いを尊重しましょう。
- ・開始・終了時間に留意し、時間内になるべく多くの人が話せるよう、
互いに配慮しましょう。

2. 安心な雰囲気を作る

- ・多様な人がいることを意識し、ジェンダー、年齢、立場、地域性などの
違いに敏感になりましょう。
- ・自分の言動が不快感を与えたと誰かを傷つけたと気付いたら、速やかに
謝罪しましょう。
- ・信徒も教役者も対等な関係の場としましょう。

3. 写真・画像等について

- ・他の人の写真を撮影する時は、事前に承諾を得ましょう。
- ・撮影した写真をSNSなどにアップロードする際は、写っている全員の
許可を求めましょう。

*その他、お困りのことがありましたら、実行委員へお声かけ下さい。

5. 収支報告

2023年 日本聖公会宣教協議会 会計報告

収 入

(円)

1 積立金① (大斎克己献金より・2018~2023年分)	3,600,000
2 積立金② (管区一般会計より・2018~2023年分)	3,000,000
3 参加費	5,520,000
各教区より	5,280,000
関係団体より	240,000
4 交通費繰入 (管区委員会費より)	282,850
5 礼拝信施	342,556
6 寄附金 (カンパ)	30,000
7 個室利用料金	147,000
8 その他収入	0
11 収入合計	12,922,406

支 出

21 会議費	3,049,926
準備会 (実行委員会組織前)	301,980
実行委員会	1,108,318
ぶどうの枝協議会	1,212,020
会場下見	248,679
最終実行委員会 (予定)	178,929
22 事務費	87,061
23 印刷費	82,120
24 通信費	148,820
25 報告書作成 (予定)	750,000
26 当日映像配信	550,000
27 会場費 (清泉寮)	6,268,850
28 交通費	1,461,397
貸切バス	410,000
各教区・団体参加者へ交通費補助	461,391
実行委員	213,756
スチュワード	33,800
講師	59,600
管区諸委員	282,850
29 講師謝礼 (5名分: 内部2万、外部3万)	120,000
30 イベント・旅行保険	43,989
31 その他支出 (礼拝用ウエハース、茶菓子)	6,580
32 献金	353,663
献金先: マイノリティ宣教センター、カルト問題キリスト教連絡会 清里聖ヨハネ保育園、聖公会生野センター、アングリカンアライアンス	
41 支出合計	12,922,406

2023年日本聖公会宣教協議会 報告書

2024年11月1日発行（800部）

編 集：2023年日本聖公会宣教協議会実行委員会報告書作成チーム

発 行：2023年日本聖公会宣教協議会実行委員会

発行所：日本聖公会管区事務所

〒162-0805 東京都新宿区矢来町65番地

TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175



どうかぶどうの木である主につながり
生きとし生けるものの「となりびと」となる道を
歩むことができますように

〔2023年日本聖公会宣教協議会のための祈り〕より